宮城県文化財調査報告書第173集

舟場遺跡ほか

平成９年３月

宮城県教育委員会

序　　文

宮城県には遠く旧石器時代に遡るものから、新しくは近世にいたる各時代の遺跡が数多く知られています。これらはいずれも私達の祖先が築き上げた歴史を明らかにしてゆく上で不可欠な資料を包含しております。このようなかけがえのない文化遺産を後世に伝えることは、私達にとって大きな責務であると考えております。

近年においては、従来の開発優先に対する反省から自然や文化財を大切にしようとする気運が高まりつつあります。こうした流れのなかにあって、重要な遺跡やそれを取り巻く環境を保存し、地域づくりの一環として積極的に整備活用してゆこうとする動きが各地に広がってきていることは、文化財保護思想の一層の普及・啓蒙につながるものであり、まさに歓迎すべきことといえましょう。

しかし、一方では頻発する開発行為により、遺跡のいくつかは破壊され、消滅する危機にさらされているのも否めない実情です。こうしたなかにあって、宮城県教育委員会では、常に遺跡の所在や範囲等について関係者への周知を図るとともに、開発工事とのかかわりが生じた際には、十分な協議・調整を重ね、可能な限りの保存に努めているところです。

本書は、開発関係機関等との保存協議に基づき、平成8年度に国庫補助を得て実施した発掘調査および、その他の公共事業に伴う確認調査等の報告書を収録したものです。これらの成果が広く活用され、地域の歴史の解明の一助となれば幸いです。

最後に、遺跡の保存にご理解を示され、調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成9年3月

宮城県教育委員会教育長

鈴　鴨　清　美

目　　次

平成 8 年度発掘調査の概要…… 1
舟場遺跡 …… 3
上代遺跡 …… 89
下草古城跡 …… 125
壇の越遺跡他 …… 143
彦右エ門橋窯跡 …… 151

例　　言

1. 本書は宮城県が平成 8 年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査等の調査報告書である。
2. 各遺跡の発掘調査から報告書作成に至る一連の作業は、調査原因となった開発行為に関わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
3. 各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、各開発担当部局や地元教育委員会から多大な協力を頂いた。また、報告書の作成に際しては、次の方々から指導、助言を賜った（五十音順、敬称路）。

   石黒伸一郎（村田町教育委員会）、渋谷勝麿（三本木町文化財保護審議会委員）、高橋誠明（古川市教育委員会）、田中則和・荒井格（仙台市教育委員会）、千葉孝弥（多賀城市教育委員会）、藤沼邦彦（東北歴史資料館）、藤原二郎、松本秀明（東北大学理学部）、三宅宗議

4. 本書に使用した土色については、「新版標準土色帳（1973）」を参照した。
5. 本書に各遺跡の位置図として掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を複製して使用した。また、舟場遺跡および上代遺跡の写真図版に掲載した空中写真は、国土地理院発行（平成 5 年撮影）の「ＣＴＯ－93－1Ｘ Ｃ5 №10」「ＣＴＯ－93－1Ｘ Ｃ5 №6」をそれぞれ使用した。
6. 本書は調査員全員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。

   発掘調査の概要…真山悟、舟場遺跡…佐久間光平、上代遺跡…菅原弘樹、
   下草古城跡…天野順陽、壇の越遺跡ほか…三好秀樹、彦右エ門橋窯跡…佐藤憲幸

7. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

平成 8 年度発掘調査の概要

宮城県教育委員会が平成 8 年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金（総事業費 8,000 千円、補助率 50%）を得て実施した発掘調査は 3 ケ所、分布調査地域は 3 市 10 町 2 村である（表 1)。

舟場遺跡は志田郡三本木町新沼字舟場にあり、鳴瀬川左岸の自然堤防上に立地する。平成 6 年度に県営ほ場整備事業とのかかわりが生じたため、平成 7 年度に確認調査を行った。その結果、出土遺物から古代や中世の遺構の存在が予想された。今年度は工事掘削の及ぶ排水路部分を主な対象に事前調査を行い、古代の竪穴遺構や井戸跡、中世の建物跡や井戸跡などが発見された。

上代遺跡は古川市大崎伏見字上代の台地上にある。平成 6 年度に県営ほ場整備事業とかかわりが生じたため、平成 7 年度に確認調査を行い、古代の遺構を検出している。今年度は排水路部分を主な対象に事前調査を行い、古代の基礎地業や水田跡・水路跡を発見している。

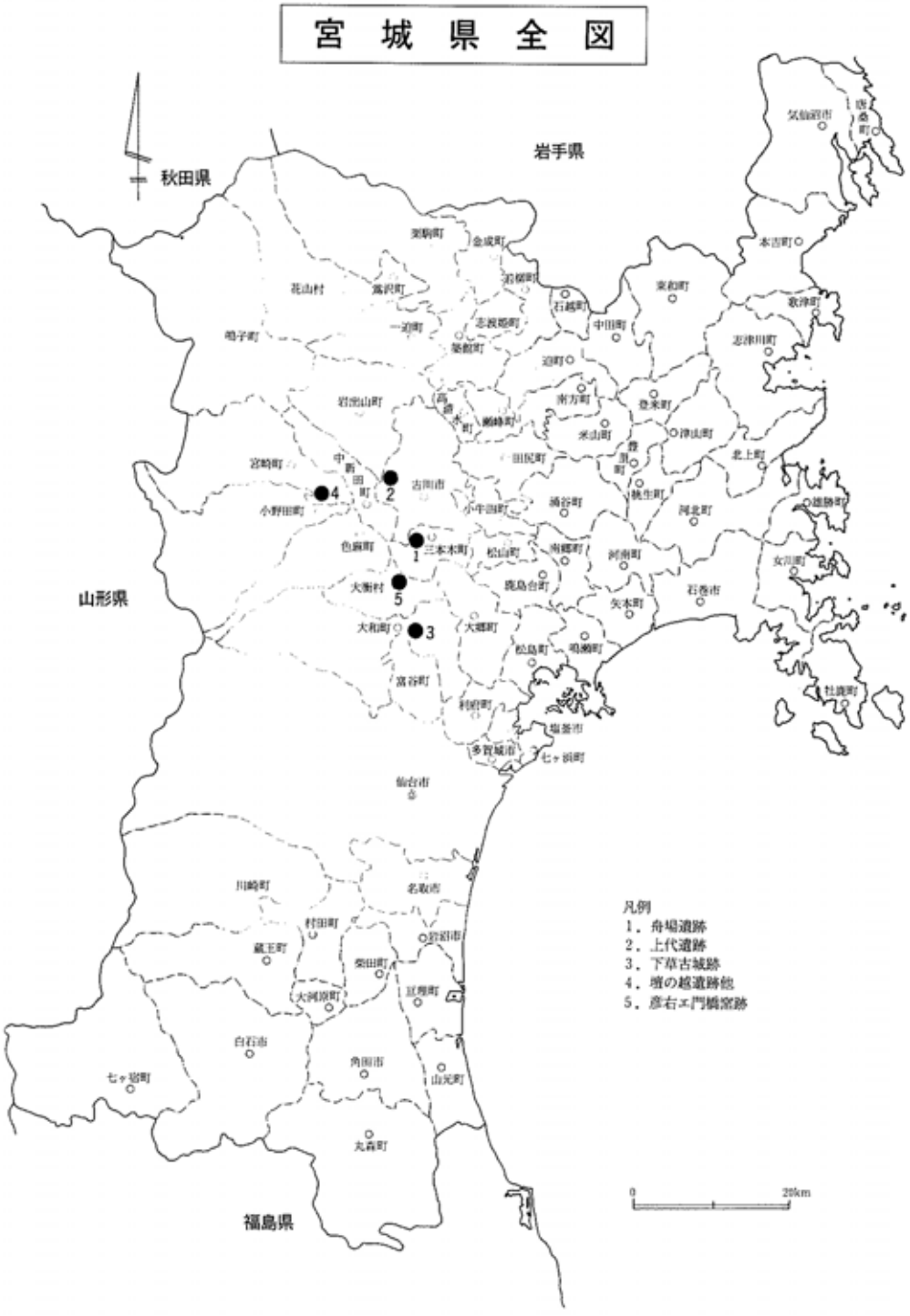
下草古城跡は黒川郡大和町鶴巣にある城跡で、昭和 63 年に県営は場整備事業とかかわりをもったが、協議の結果、重要部分である本丸および二ノ丸が計画から除外され、現状保存されることになった。このことを受け、宮城県教育委員会はその周囲の平坦地を対象に平成 3 年度から発掘調査を開始している。そしてこれまで 17 世紀初頭頃の町並みを中心に、古代や古墳時代の遺構も併せて検出している。今回の調査は第 6 次目にあたり、ほ場整備の道路・水路および面工事によって削平を受ける部分を対象に実施した。

このほか国庫補助事業以外のもので、県営ほ場整備事業に関連して実施した壇の越遺跡や、集落道建設事業に伴った彦右エ門橋窯跡の調査成果も併せて収録している。壇の越遺跡は加美郡宮崎町鳥嶋にあって、加美郡家推定地である東山遺跡に南面する河岸段丘に立地する。確認調査の結果、約 100ha と、それまでの登録範囲をはるに超える奈良～平安時代の広大な遺跡であることが明らかになった。

彦右エ門橋窯跡は黒川郡大衡村大衡の丘陵斜面にある遺跡で、奈良時代の須恵器の窖窯跡が 1 基検出された。

表1　平成 8 年度国庫補助事業一覧

No	遺跡名	所在地	調査種類	事業種類	開発担当者
1	舟場遺跡	志田郡三本木町新沼字舟場	事前調査	県営ほ場整備	古川農林振興事務所
2	上代遺跡	古川市大崎伏見字上代	事前調査	県営ほ場整備	古川農林振興事務所
3	下草古城跡	黒川郡大和町鶴巣字下草	事前調査	県営ほ場整備	仙台農林振興事務所
4	横川南遺跡	刈田郡七ヶ宿町横川	確認調査	県営ほ場整備	大河原農林振興事務所
5	ツナギの沢貝塚	遠田郡涌谷町小里字大平	確認調査	県道改良	古川土木事務所
6	宮沢遺跡他	古川市他 2 市10町 1 村	分布調査	県営ほ場整備他	宮城県農政部
7	荷坂遺跡他	玉造郡岩出山町他 1 町 1 村	分布調査	農道改良	宮城県農政部


宮城県全図
秋田県
岩手県
山形県
福島県
凡例
1．舟場遺跡
2．上代遺跡
3．下草古城跡
4．壇の越遺跡他
5．彦右エ門橋窯跡
0
20km

舟場遺跡（ふなばいせき）

目　　次

目次
調査要項
第Ⅰ章　遺跡の位置・環境および周辺の遺跡 5
第Ⅱ章　発掘調査 6
1. 調査の方法と経過 6
2. 基本層序 8
3. 遺構と遺物 10
1）古墳時代 10
2）古代 12
（1）A区　（2）B区　（3）C区
3）中世 26
（1）A区　（2）B区　（3）C区　出土遺物
第Ⅲ章　考察とまとめ 60
1. 古墳時代 60
2. 古代 60
3. 中世 61
4. まとめ 65
引用・参考文献 66
付章　舟場遺跡出土木質遺物の樹種同定 67
写　真　図　版 69

調　査　要　項

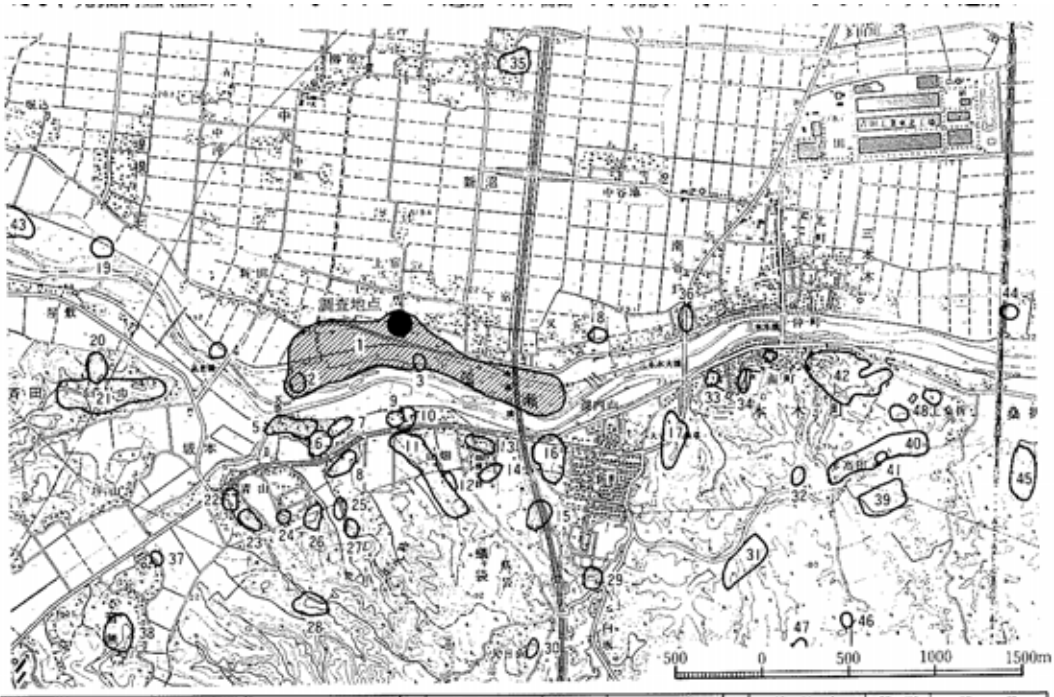
(1) 遺 跡 名　舟場（ふなば）遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：33023、遺跡記号ＡＹ）
(2) 所 在 地　宮城県志田郡三本木町新沼字舟場、若宮、諏訪ほか
(3) 調査原因　県営圃場整備事業
(4) 調査主体　宮城県教育委員会
(5) 調査担当　宮城県教育庁文化財保護課　真山　悟　後藤秀一
確認調査：天野順陽　佐藤貴志
事前調査：佐久間光平　菅原弘樹　佐藤貴志　高橋栄一　吉野武
(6) 調査期間　確認調査：1995.11.3～11.29　約 2,750 ㎡
面積　事前調査：1996.4.15～ 9.30　約 5,100 ㎡
(7) 調査協力　三本木町教育委員会　若宮八幡神社　宮城県古川農林振興事務所

第Ⅰ章　遺跡の位置・環境および周辺の遺跡

舟場遺跡は、県北部の志田郡三本木町新沼字舟場・若宮・諏訪ほかに所在する。三本木町中心部からは西へ約 2㎞ の地点の鳴瀬川北岸に位置する（第１図－1）。

三本木町の地形を概観すると、中央部を東西に貫流する鳴瀬川を境にして北部の平野地帯、南部の低丘陵地帯に分けることができる。北部一帯は、広大で肥沃な大崎平野の南端部にあたっており、一大田園地帯を形成する。一方、南部一円には陸前丘陵に連なる大松沢丘陵から派生した低丘陵が広がっている。

本遺跡は、この平野と丘陵部の間を流れる鳴瀬川北岸の自然堤防上に立地する。その範囲は、東西約 1.6㎞・南北約 300mにも及ぶ。標高は 19～21m、後背湿地との比高差は概ね1～2mである。遺跡の時期は、古墳時代、奈良・平安時代、中世にわたり、主体は平安時代および中世とみられている。ただし、発掘調査（註 1）は、これまでのところ遺跡の東端部で小規模に行われているだけであり、遺跡の



№	遺跡名	種別	時代	№	遺跡名	種別	時代	№	遺跡名	種別	時代
1	舟場遺跡	集落・屋敷跡	古墳・奈良・平安・中世	17	三本木B遺跡	包含地	縄文、古代	33	三本木遺跡	包含地	縄文前・中
2	天王河原遺跡	包含地	奈良	18	七塚塚	塚	安土・桃山	34	鹿の沢遺跡	包含地	縄文
3	数玉早御玉神社跡	神社跡	平安	19	堤根遺跡	包含地	古墳中	35	新沼館跡	城館	安土・桃山
4	中沢遺跡	包含地	古墳中	20	花見山遺跡	包含地	縄文、弥生、古代	36	西前遺跡	包含地	古代
5	坂本城跡	城館	鎌倉	21	花見山古墳群	古墳	古墳	37	勝不見塚遺跡	塚	
6	坂本経塚群	包含地・経塚	縄文・中世	22	青山A遺跡	包含地	縄文	38	青無城跡	城館	安土・桃山
7	坂本館山横穴古墳群	横穴古墳	古墳	23	青山B遺跡	包含地	古墳	39	多高田遺跡	包含地	縄文
8	青山横穴古墳A群	横穴古墳	古墳	24	坂本A遺跡	包含地	縄文	40	多高田横穴古墳群	横穴古墳	古墳後
9	寺下遺跡	包含地	縄文	25	坂本B遺跡	包含地	縄文	41	多高田B遺跡	包含地	古代
10	鳴ヶ発館跡	城館	中世	26	坂本C遺跡	包含地	縄文	42	桑折館跡	城館	中世
11	寺下横穴古墳群	横穴古墳	古墳後	27	青山横穴古墳B群	横穴古墳	古墳後	43	堤根西遺跡	包含地	古墳、奈良、平安
12	山畑遺跡	包含地	縄文	28	青山C遺跡	包含地	縄文後・晩	44	安藤前遺跡	集落跡	古代、中世
13	山畑横穴古墳群	横穴古墳	古墳後	29	御経森遺跡	円墳？	古墳後	45	塩ヶ森遺跡	包含地	縄文
14	裏内山横穴古墳群	横穴古墳	古墳後	30	伊賀一里塚	一里塚	江戸	46	多高田窯跡	窯跡	鎌倉後
15	裏内山遺跡	包含地	縄文早・前・晩、平安	31	多高田近世窯跡	窯跡	江戸	47	芦ノ口山窯跡	窯跡	中世
16	千貫森館跡	城館	中世	32	桑折遺跡	包含地	古代	48	蛇沼山遺跡	集落跡	古代

第１図　舟場遺跡の位置と周辺の遺跡

規模や性格などは明確ではない。なお、今回の調査地点は鳴瀬川の堤防に面した水田地帯であるが、一部は畑地となっている。

周辺の遺跡（第１図）を概観すると、南の丘陵北縁部や鳴瀬川沿岸部には古墳時代や中世の遺跡が比較的多く点在し、奈良・平安時代の遺跡はやや希薄である。丘陵部には、北限の装飾古墳として著名な山畑横穴古墳群（国指定史跡：13）、ほかに坂本館山横穴古墳群（7）、青山横穴古墳Ａ群（8）などの横穴古墳、花見山古墳群（21）などがみられる。平安時代の混内山遺跡（15）は、土師器・須恵器の出土があるものの、遺構は確認されていない。中世には桑折館跡（42）をはじめ、蟻ヶ袋館跡（10）、千貫森館跡（16）などの城館跡、また、陶器窯跡として知られる多高田窯跡（46）、芦ノ口山窯跡（47）などがみられる。鳴瀬川堤防沿いでは、丘陵部に較べて確認されている遺跡は少なく、古墳中期の遺物が散布する中沢遺跡（4）・堤根遺跡（19）、近年の調査で平安時代の住居跡、中世の井戸跡などが検出された安藤前遺跡（44：佐藤 1995）などが知られる程度である。

註 1. 東北自動車道建設に伴い、昭和 48 年度に約 144 ㎡の調査が実施されている（黒川 1980）。この調査では、時期不明の土壙１基と平安時代の土師器・須恵器、中世の陶器・銭貨などが発見されている。

第Ⅱ章　発掘調査

１．調査の方法と経過

本調査は、三本木町新沼地区県営圃場整備事業に伴い実施されたものである。事業計画では、整備範囲が周知の遺跡である舟場遺跡（古墳・古代・中世）の北側部分に及ぶため、関係機関と協議し、事前に遺跡の範囲や遺構・遺物の有無を確認することにした。平成 7 年 11 月の確認調査は、約 10,000 ㎡を対象として、道路・排水路設置予定区域にトレンチ（合計 60 本、約 2750 ㎡）を設定して行った。その結果、広範囲にわたって古代・中世の遺構・遺物、さらに一部区域では古墳時代の遺物も分布していることが明らかになった。

この調査結果を受けて再度協議を行い、工事着手前に本格的な事前調査を実施することになった。工事計画では面的に大きく土盛・削平を行うことはないので、発掘調査は排水路や道路を設置する区域を中心に行うことになった。

調査は平成 8 年 4 月 15 日から開始した。調査範囲は東西約 800m・南北約 250mに及ぶため、現地形を考慮して調査区を大きくＡ/Ｂ/Ｃと 3 分割し、約 4m（一部 10m）の幅で細長く続く調査区をさらに細分してそれぞれアラビア数字を付し、Ａ－1～4 区、Ｂ－1～3 区（整理時に 1～6 区に変更）、Ｃ－1～8 区を設定した（第 2 図）。調査総面積は約 5,100 ㎡である。

調査はＡ区から順次Ｂ区・Ｃ区へと進めた。Ａ区では中世期の溝跡が確認されたのみで、遺物も中世と古代の土器が若干数出土したにすぎなかった。Ｂ区では中世期の溝跡・建物跡･井戸跡などが多く検出され､屋敷跡が少なくとも 3 軒分は含まれていることが分かった。この中には幅 6mを越える大溝によって区画される屋敷跡があることも明らかになった。これらの中世遺構の精査が終了したのち､排水路工事予定区域ではさらに掘り下げて古代の遺構の確認を行ったところ、Ｂ－1・2 区には竪穴遺

W－400
W－300
W－200
W－100
W-0-E
E－100
E－200
E－300
E－400
N－400
N－300
N－200
N－100
N-0-S
S－100
A－1
A－2
A－3
A－4
B－1
B－2
B－3
B－4
B－5
B－6
C－1
C－2
C－3
C－4
C－5
C－6
C－7
C－8
0
100
200m
調査区

第２図　調査区の位置

構、溝跡、畑の耕作痕とみられる小溝状遺構群、Ｂ－6 区には井戸跡、溝跡などが分布することが明らかになった。Ｃ区でもやはり中世期の溝跡や建物跡・井戸跡などが確認され、こちらの区域にも屋敷跡があることが分かった。また、Ｂ－1・2 区と同様、古代の小溝状遺構群や土壙も検出された。このＣ区では前年度の確認調査時に古墳時代（中期）の土師器が出土しているので、Ｃ－1～3 区でさらに下層の調査を行ったところ、前期（塩釜式）と中期（南小泉式）の遺物の散布も確認された。

これらの検出遺構の記録に際しては、任意の点を原点（0.0）とし、国家座標軸を基準線にした。原点の座標値（第Ｘ系）は以下の通りである。

Ｘ＝－163857.451249　　Ｙ＝7787.716872

遺構平面図は遺構の種類・規模や密度に応じて、縮尺を 1/100、1/20 にした。断面図は基本的には 1/20 である。写真撮影は、35㎜ カラースライドと 6×7 白黒を使用した。

なお、調査の終了が間近い 9 月 14 日（土）には、三本木町教育委員会の協力を得て地元住民を対象にした現地説明会（参加者約 100 名）を開催した。調査終了は 9 月 30 日で、調査に要した期間は約 5 ヶ月半であった。

2．基本層序

調査区は、鳴瀬川の自然堤防上から後背湿地へと至る地点である。河川沿いであるため堆積層は一様ではないが､全体を通してみると基本的には以下のような堆積を示す(第 3 図)。

Ⅰ：現耕作土。水田あるいは畑地。

Ⅱ：灰黄褐色のシルト～砂層。調査区全域を覆う厚さ 30～50 ㎝の水成堆積層。鳴瀬川の氾濫によるものとみられる。中世以降。

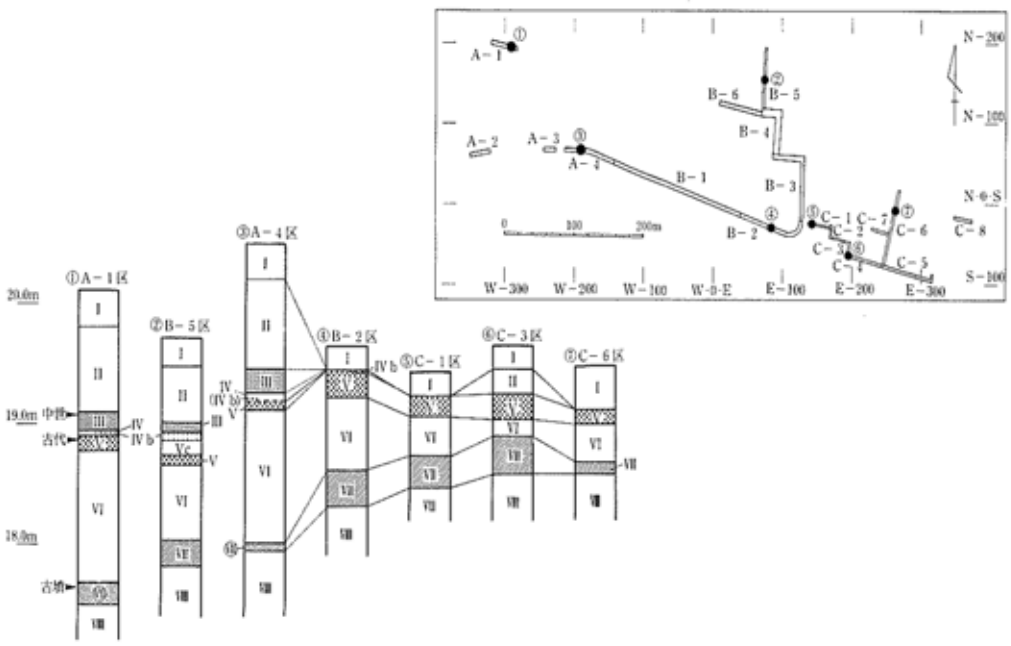
Ⅲ：中世期の層。ａ：灰褐色砂質シルト層とｂ：黒色粘質シルト層に細分。ａ層は掘立柱建物跡などの遺構が多いＢ区付近に分布し、人為的な撹拌によって形成された可能性が強いものである。ｂ層はほぼ全域に分布する。ただ、Ｂ－2 からＣ－1～3 区付近では、周辺より標高が若干高かったせいか、ａ・ｂ層とも後世の削平のため残っていない。

Ⅳ：黄褐色～暗灰黄色の粘質シルト・粘土層。A～ｃの 3 層に細分される。中位のｂ層は、灰白色火山灰（10 世紀前葉）が小ブロック状に含まれる。ただし、Ａ－1 区東側、Ｂ－5 区北側・6 区西側付近では層状に認められる区域もある。

Ⅴ：古代の層。暗灰黄色シルト質粘土層。肉眼的には若干灰色味を帯びており、粘性がある。ほぼ全域でその分布が認められる。Ｂ－1・2 区およびＣ－4・5 区付近では、層のレベルが周囲よりやや高い。

Ⅵ：灰色～暗黄色のシルト・砂・粘土の互層：水成堆積層。ところどころに植物遺体を含む黒色粘土層が介在する。Ｂ－2、Ｃ－1・2 区付近では厚さ約 60 ㎝～1mであるが、Ａ区付近ではさらに厚い。

Ⅶ：古墳期の層。ａ：黒色粘質シルトとｂ：黄灰色粘質シルト層に細分。遺物包含の主体はｂ層。Ａ区付近ではこれに対応する層がスクモ層（Ⅶb）になる。Ｃ－1～4 区付近では層のレベルが周囲よ



層序	土　色	土　性	備　考
I	―――	――	現耕作（水田・畑）土。層厚約20cm。
II	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	水成堆積、均質。下半部はややグライ化。鳴瀬川の氾濫か。層厚約30～50cm。
IIIa	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	中世面（前Ⅱ層）。白色粒少量含む。B-1区付近に分布。
IIIb	黒色(2.5Y2/1)	粘質シルト	中世面。均質な黒色土層。C区を除いた調査区のほぼ全域で認められる。
IVa	黄褐色(2.5Y5/3)	粘質シルト	酸化鉄若干沈着。均質な堆積層。
IVb	暗灰黄色(2.5Y4/2)	粘土	灰白色火山灰がブロック状あるいは薄層になってみられる。
IVc	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	粘土	酸化鉄、マンガン若干沈着。均質な堆積層。
V	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト質粘土	古代面。全体的にやや灰色味を帯びる。全調査区に認められ、層厚5～20cm。
VIa	暗灰黄色(2.5Y4/2)	粘土	水成堆積層。粘土層や砂層の互層。層厚1ｍ以上。
VIb	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト質粘土	所々にオリーブ黒色粘土の薄層が含まれる。
VIc	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土	
VId	灰オリーブ(5Y4/2)	砂	
VIe	灰色(5Y4/1)	粘土	
VIf	灰オリーブ(5Y4/2)	砂	
VIIa	黒色(2.5Y2/1)	粘質シルト	均質。炭化物(＜5mm)を若干含む。層厚10～15cm。
VIIb	黄灰色(2.5Y4/1)	粘質シルト	均質。古墳遺物包含層。遺物散布域では炭化物やや多い。層厚20cm。

第３図　各地点の層序模式図

り比較的高く、南側の現堤防にむかってさらに上がっていく。また、神社がある付近も周囲より若干レベルが高くなる傾向がある。

Ⅷ：灰黄色粘土・シルト・砂などの水成堆積層。以下、未確認。

全体の堆積状況を概観すると、周辺に比べてＢ－2～Ｃ－1～4 区付近（現堤防沿い）が地形的に最も高く、北および北西方向へ向かって徐々に傾斜しているようである。鳴瀬川の氾濫がたびたび繰り返されて堆積土の供給はあったものの、こうした地形は古墳時代以降とくに大きな変化はなかったものと考えられる。ただし、Ⅴ層面（古代）は、Ａ－3 区やＢ－6 区では西へ傾斜しているのに対してＡ－1･2 区では逆に東側へ傾斜しており、また、この付近の上位のⅣｂ層：灰白色火山灰は徐々に層状に堆積していく傾向もみられることから、少なくとも古代にはこの付近に湿地あるいは河川などが存在した可能性も考えられる。

3．遺構と遺物

前述したように、今回の調査では古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺構・遺物が発見されている。古墳時代は、3 地点で遺物の散布が認められただけで遺構は確認されていない。奈良・平安時代では南側の現堤防沿いの調査区（Ｂ－1・2 区、Ｃ－1～5 区）や八幡神社西側（Ｂ－6 区）付近に遺構・遺物が分布し、比較的広範囲にわたっている。遺構には、竪穴遺構・溝跡・土壙・小溝状遺構などがある。このほか、自然流路も確認されている。

一方、中世においては全域にわたって遺構が確認されており、多数の溝跡のほか、掘立柱建物跡・井戸跡・土壙などがみられる。遺構は、西側のＡ区では希薄であるが、中央のＢ区では幅 6mを越える大溝跡や掘立柱建物跡や井戸跡がまとまって分布する区域がある。東側のＣ区は、溝跡・掘立柱建物跡・井戸跡などが検出されたが、遺構の密度はＢ区に比べると低い。

遺物は、古代の土師器・須恵器が比較的多く出土している。これに対して、中世は陶磁器類や木製品（木簡・曲物）、金属製品（小刀・銭貨）、石製品（茶臼・板碑）など種類は豊富であるが、量的には少ない。

以下、時代ごとに説明を加えていく。

1）古墳時代

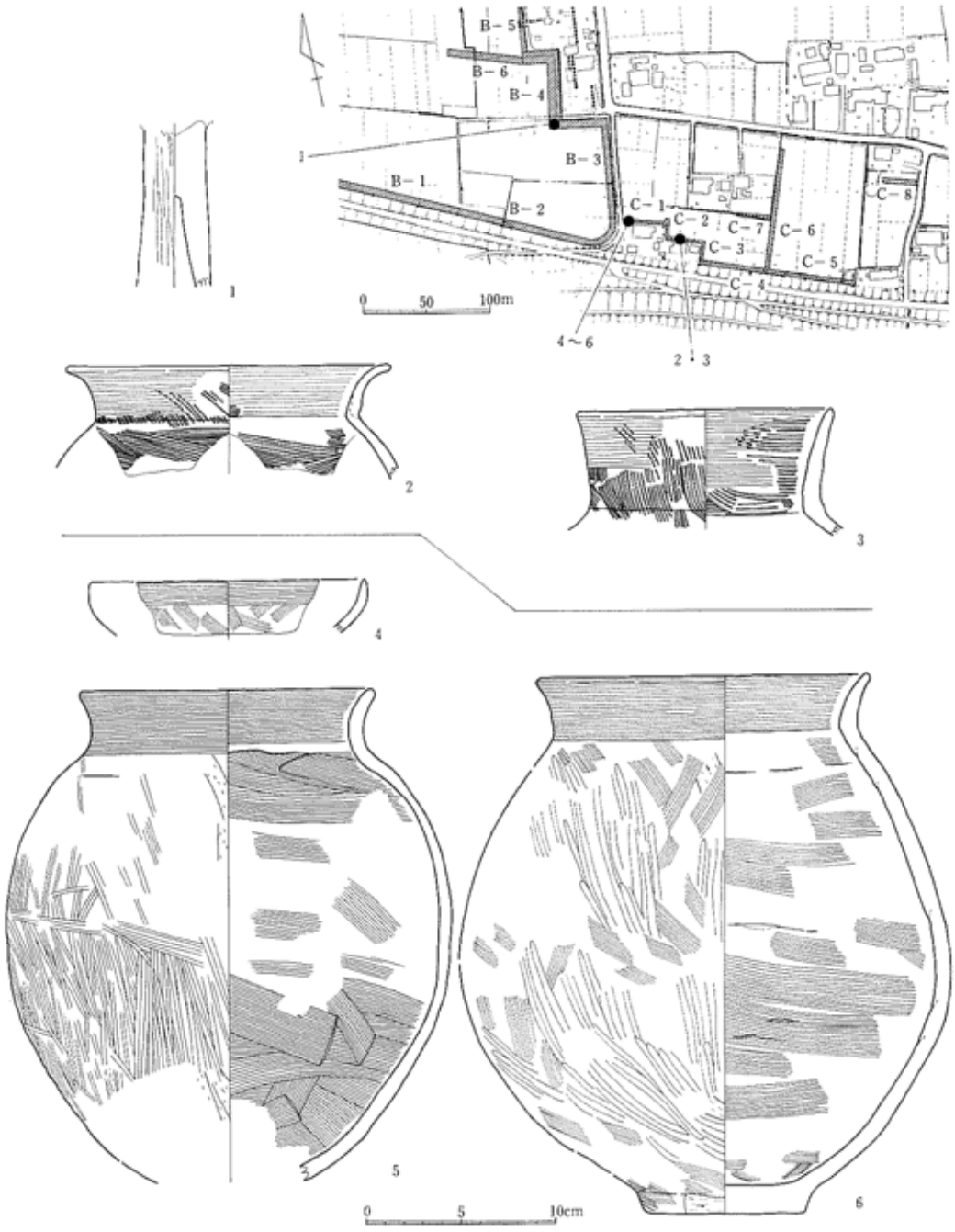
古墳時代の遺物包含層であるⅦ層の調査は、昨年の試掘調査の結果および今回の中世・古代遺構の調査時におけるⅦ層の堆積や遺物の出土状況から、Ｃ－1～3 区、Ｂ－2 区の一部区域に限定して行った。

調査の結果、遺物はＢ－3 区の中世遺構堆積土、Ｃ－1 区・2 区Ⅶ層の 3 地点から出土した。出土点数ほ、Ｂ－3 区のＳＸ67 池状遺構堆積土からは高坏の脚部破片が 1 点、Ｃ－1 区では西側区域から坏 3 点、甑1 点、甕 7 点、Ｃ－2 区では東西トレンチの中央付近から壷　　2 点、甕 2 点である。Ｃ区の 2 地点はいずれも狭い範囲からの出土である。また、遺構は確認されず、遺物の散布が認められただけであった。

出土遺物の一部を第 4 図に示した。1 は、Ｂ－2 区出土の高坏脚上部のみの資料である。棒状で、上位まで中空である。外面には縦方向のヘラミガキが施されている。2・3 は、Ｃ－2 区から出土した甕と壷の口縁部破片である。2 の甕口縁部は「く」字状に屈曲してひらき、上端はやや強く外反する形態で、全体的に薄手である。体部外面にはハケメ・内面にはナデ、口縁部は内外ともヨコナデ調整が施される。3 は、直線的にひらく壷口縁部で、調整は内外面ともハケメ→ヨコナデである。

4～6 は、Ｃ－1 区西端部から出土した。4 は口縁部が内湾気味に立ち上がる坏の破片で、調整は内外面とも体部がナデ、口縁部はヨコナデである。5・6 の甕は全体的にやや厚手である。口縁部は弱く外反し、体部は球形ではあるがやや胴長傾向にある。体部外面はヘラケズリ・ナデ→ヘラミガキ、内面はヘラナデ・ナデ、口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施されている。

これらの土器は、その特徴からＢ－3 区の高坏（1）、Ｃ－2 区の壷（3）・甕（2）は前期の塩釜式、Ｃ－1 区の坏（4）・甕（5・6）は中期の南小泉式に属するものと考えられる。



No	器種	出土区・層	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	備考	写真図版
1	高坏	B-3 SX67埋土	1/4	——	——	——	[脚]ヘラミガキ	[脚]ヘラケズリ		9-1
2	甕	C-2	Ⅷ層	1/10	17.2	——	——	[口]ハケメ→ヨコナデ	[口]ハケメ→ヨコナデ		9-2
3	壺	C-2	Ⅷ層	1/10	13.6	——	——	[口]ハケメ→ヨコナデ	[口]ハケメ→ヨコナデ		9-3
4	坏	C-1	Ⅷ層	1/10	(14.6)	——	——	[口]ヨコナデ [体]ナデ	[口]ヨコナデ [体]ナデ		9-4
5	甕	C-1	Ⅷ層	2/3	(15.6)	——	——	[口]ヨコナデ [体]ヘラケズリ→ヘラミガキ	[口]ヨコナデ [体]ヘラナデ	外面下半にスス付着	9-5
6	甕	C-1	Ⅷ層	3/4	17.6	8.5	28.0	[口]ヨコナデ [体～底]ナデ→ヘラミガキ	[口]ヨコナデ [体～底]ナデ		9-6

第4図　古墳時代の遺物

2）古代

古代を対象とした調査は、排水路工事が行われる予定区域のＡ－2～4 区、Ｂ－1～4･5 区、Ｃ－1～5・7 区と農作業用道路区域にあたるＢ－6・Ｃ－8 区の一部について行った。

遺構はＡ－4 区、Ｂ－1・2・6 区、Ｃ－1～5・7・8 区で検出されている。遺構には竪穴遺構 3 基、溝跡 7 条、井戸跡 1 基、土壙 12 基、小溝状遺構 220 条（＜）などがある。ほかに自然流路が 4 条確認されている。

遺物はＡ区からＣ区の広い範囲から出土しており、特にＢ－1～2 区付近で多い。

(1) Ａ区（第 5 図）

この調査区では東西方向の溝跡が 1 条（ＳＤ09）検出されたのみである。

遺物もＡ－1 区および 4 区のⅤ層や中世遺構堆積土から若干数の遺物が散発的に出土したにすぎない。遺物には、第 11 図に示したように、土師器甕（3)・鉢（2)、須恵器坏（1）などがみられる。

【ＳＤ09】Ａ－3 区～4 区Ⅴ層検出。東端は立ち上がって止まり、西側は徐々に北側へ曲がりながら調査区外へとのびている。中間部が未調査であるが、確認総長は約 40mほどになる。規模は、上幅が 50～60 ㎝・底幅 60 ㎝・深さは約 50 ㎝で、断面は逆台形状を呈する。堆積土は水成堆積で、中位には炭化物層（埋 3）が介在する。

遺物は出土しなかった。

(2) Ｂ区（第 5 図）

南側のＢ－1 区から 2 区にかけては遺構・遺物が多く、竪穴遺構 3 基、溝跡 3 条、小溝状遺構 84 条、土壙 10 基、自然流路 4 条などを検出している。一方、Ｂ－3 区から北側の調査区へむかうにつれて、遺構が認められなくなるとともに遺物の出土も少なくなるが、Ｂ－6 区になると平行する溝跡 3 条・井戸跡 1 基が確認された。

《**竪穴遺構**》

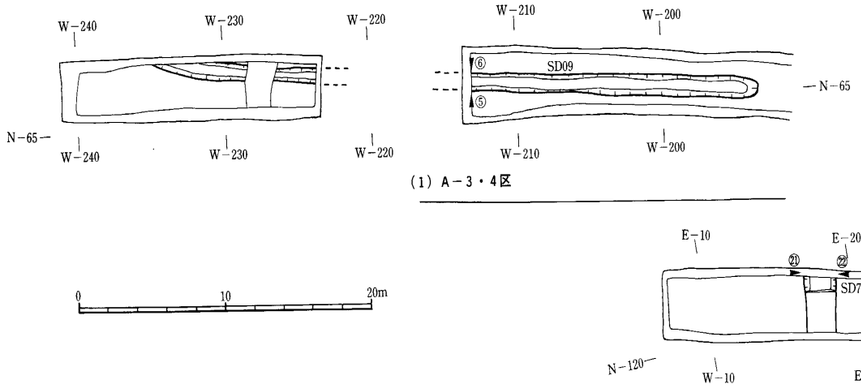
Ｂ－2 区中央付近で 3 基（ＳＩ551・552・554）が重複して確認された。カマドなどの痕跡が認められないことからここでは竪穴遺構として捉えておく。いずれも残りが悪く、掘り方埋土が残るのみという状態であった。

【ＳＩ551】Ⅴ層検出。ＳＩ552、ＳＩ554 より新しく、ＳＫ583 土壙や小溝状遺構群よりは古い。残りが悪く、掘り方が深さ約 10～20 ㎝ほど認められただけである。南西部が調査区外になるが、平面形は東西約 4.8m、南北約 4mほどの方形を呈するものとみられる。内部では北辺を除いて壁際に周溝が認められ、北西隅には長軸 1.5m・短軸 0.6m・深さ約 20 ㎝ほどの楕円形の土壙がある。ほかに柱穴などは検出されなかった。

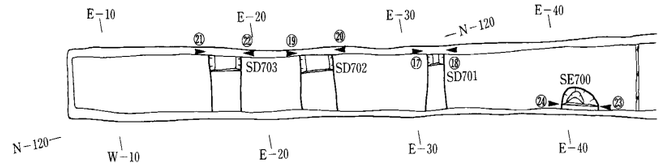
遺物は、掘り方埋土から土師器坏・甕、須恵器坏（第 7 図－1・2）・蓋・甕・長頸瓶などが少量出土している。

《**溝　跡**》

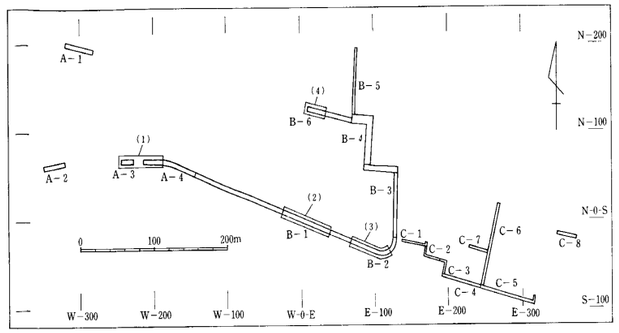
【ＳＤ501】Ｂ－1 区Ⅴ層検出。小溝状遺構群より古い。東西方向に延びるが、東側では屈曲して北方向へ折れ曲がるようである。規模は、上幅 60～70㎝・底幅 20～25 ㎝・深さ約 30～35 ㎝で、断面は底幅が

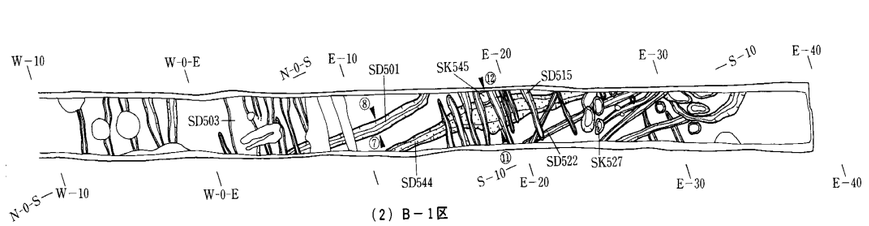


（1）A－3・4区

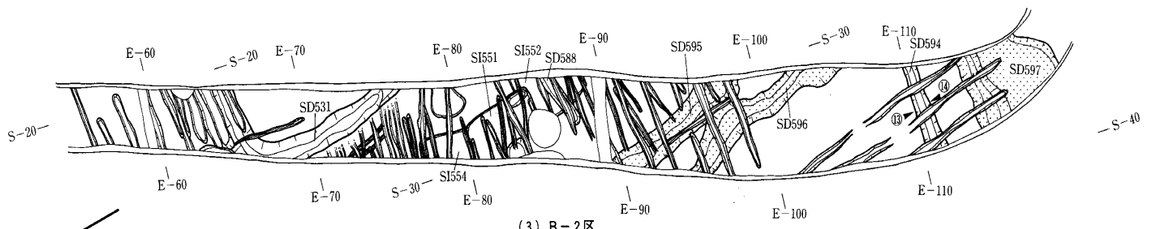


（4）B－6区

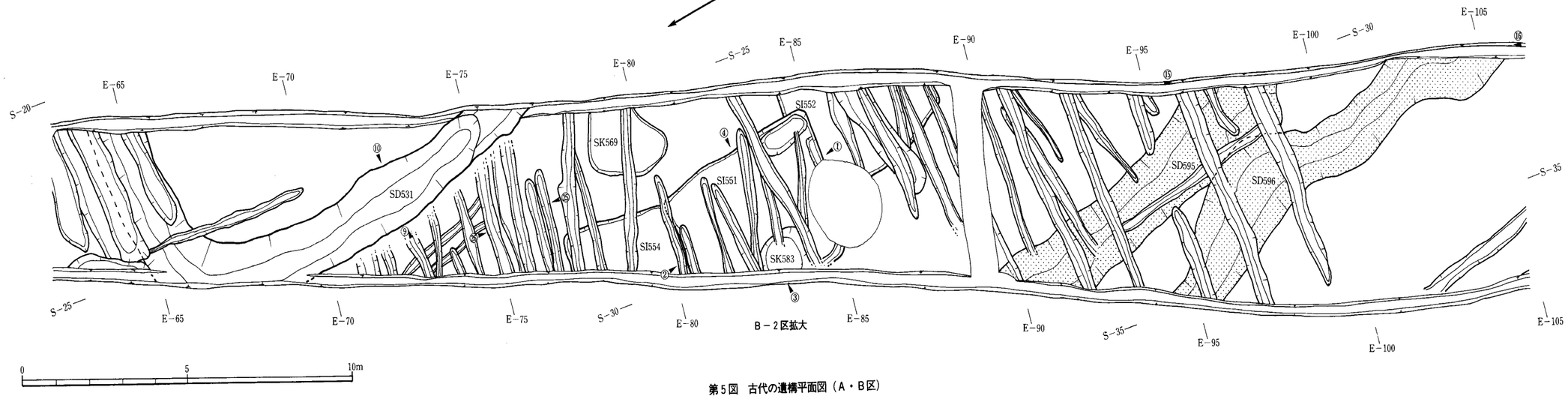




（2）B－1区

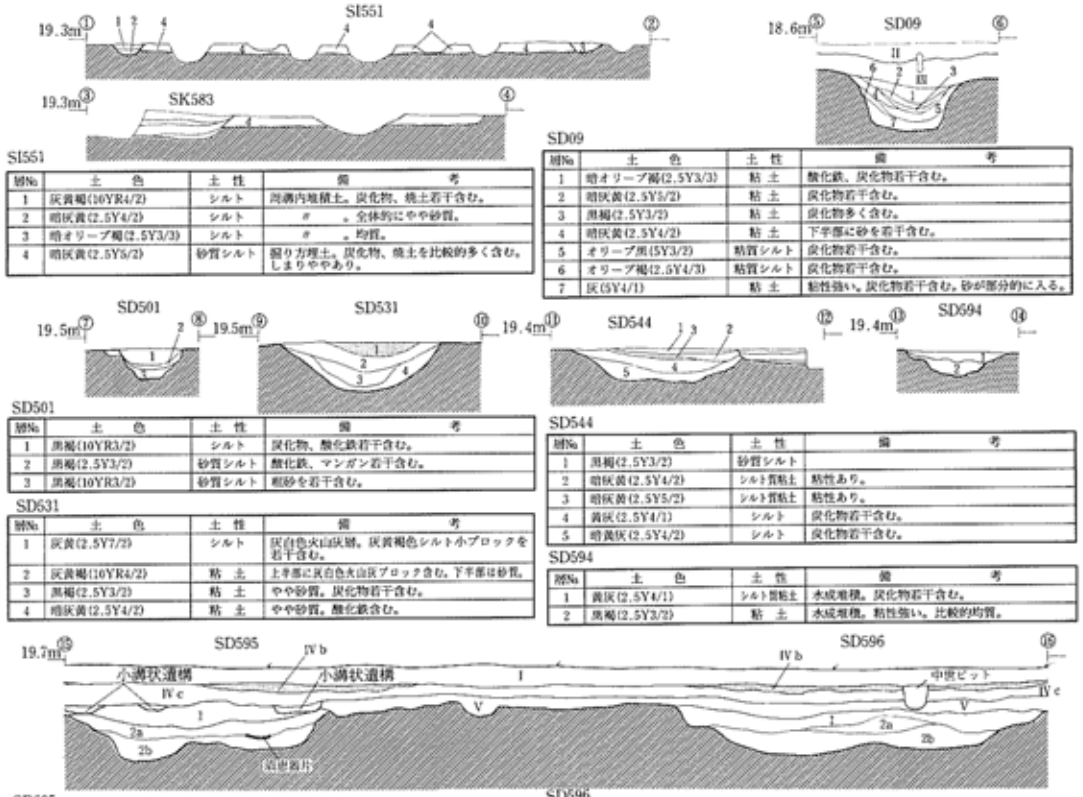


（3）B－2区



B－2区拡大

第5図　古代の遺構平面図（A・B区）



SI551

層No	土色	土性	備考
1	灰黄褐(10YR4/2)	シルト	周溝内堆積土。炭化物、焼土若干含む。
2	暗灰黄(2.5Y4/2)	シルト	〃 。全体的にやや砂質。
3	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	シルト	〃 。均質。
4	暗灰黄(2.5Y5/2)	砂質シルト	掘り方埋土。炭化物、焼土を比較的多く含む。しまりややあり。

SD09

層No	土色	土性	備考
1	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘土	酸化鉄、炭化物若干含む。
2	暗灰黄(2.5Y5/2)	粘土	炭化物若干含む。
3	黒褐(2.5Y3/2)	粘土	炭化物多く含む。
4	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	下半部に砂を若干含む。
5	オリーブ黒(5Y3/2)	粘質シルト	炭化物若干含む。
6	オリーブ褐(2.5Y4/3)	粘質シルト	炭化物若干含む。
7	灰(5Y4/1)	粘土	粘性強い。炭化物若干含む。砂が部分的に入る。

SD501

層No	土色	土性	備考
1	黒褐(10YR3/2)	シルト	炭化物、酸化鉄若干含む。
2	黒褐(2.5Y3/2)	砂質シルト	酸化鉄、マンガン若干含む。
3	黒褐(10YR3/2)	砂質シルト	粗砂を若干含む。

SD544

層No	土色	土性	備考
1	黒褐(2.5Y3/2)	砂質シルト	
2	暗灰黄(2.5Y4/2)	シルト質粘土	粘性あり。
3	暗灰黄(2.5Y5/2)	シルト質粘土	粘性あり。
4	黄灰(2.5Y4/1)	シルト	炭化物若干含む。
5	暗黄灰(2.5Y4/2)	シルト	炭化物若干含む。

SD631

層No	土色	土性	備考
1	灰黄(2.5Y7/2)	シルト	灰白色火山灰層。灰黄褐色シルト小ブロックを若干含む。
2	灰黄褐(10YR4/2)	粘土	上半部に灰白色火山灰ブロック含む。下半部は砂質。
3	黒褐(2.5Y3/2)	粘土	やや砂質。炭化物若干含む。
4	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	やや砂質。酸化鉄含む。

SD594

層No	土色	土性	備考
1	黄灰(2.5Y4/1)	シルト質粘土	水成堆積。炭化物若干含む。
2	黒褐(2.5Y3/2)	粘土	水成堆積。粘性強い。比較的均質。

SD695

層No	土色	土性	備考
1	暗灰黄(2.5Y4/2)	シルト質砂	V層起源。炭化物比較的多い。
2a	黄灰(2.5Y4/1)	シルト	グライ化。やや砂質。
2b	暗灰黄(2.5Y4/2)	シルト	グライ化。黄褐色粘質シルトが帯状に入る。

SD596

層No	土色	土性	備考
1	暗灰黄(2.5Y4/2)	砂質シルト	V層に似るが砂分少ない。
2a	黄灰(2.5Y4/1)	シルト質粘土	黄褐色シルトが帯状に入る。グライ化。
2b	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘質シルト	SD595の2b層に似る。グライ化。

SD701

層No	土色	土性	備考
1	灰(5Y5/1)	シルト	酸化鉄含む。粘性ややあり。
2	灰(5Y4/1)	粘質シルト	砂若干含む。粘性あり。
3	黄灰(2.5Y5/1)	シルト	酸化鉄含む。粘性ややあり。
4	黄灰(2.5Y4/1)	粘質シルト	砂若干含む。

SD702

層No	土色	土性	備考
1	灰白(5Y5/1)	粘土	粘性強い。グライ化。

SD703

層No	土色	土性	備考
1	灰(5Y5/1)	粘土	グライ化。酸化鉄若干含む。
2	灰(10Y4/1)	粘土	グライ化。均質。炭化物若干含む。

SE700

層No	土色	土性	備考
1	黒褐(10YR2/2)	粘質シルト	層起源。炭化物若干
2	暗灰黄(2.5Y5/2)	粘質シルト	灰色粘土ブロックを部分的に含む。酸化鉄、炭化物を不均質に含む。
3	——	——	灰白色火山灰層。
4	灰(5Y5/1)	粘土	IV層に類似。
5	灰(5Y5/1)	粘土	埋4層に類似。
6	黒褐(2.5Y3/2)	粘土	炭化物、黒褐色粘土ブロックを若干含む。

小溝状遺構

層No	土色	土性	備考
1	灰黄褐(10YR4/2)	シルト	暗オリーブ褐色粘土ブロック若干含む。
2	暗オリーブ(2.5Y3/3)	砂質シルト	黒褐色粘土ブロックを若干含む。
3	暗褐(10YR3/3)	シルト	灰白色火山灰ブロック部分的に含む。
4	灰黄褐(10YR4/2)	砂質シルト	埋1層に類似。
5	灰黄褐(10YR4/2)	砂質シルト	やや粘質。
6	暗灰黄(2.5Y4/2)	砂質シルト	

第6図　古代の遺構断面図（A・B区）

やや狭い逆台形状を呈する。壁面から底面にかけては若干凹凸が認められる。堆積土は黒褐色砂質シルト～シルトの水成堆積層である。

堆積土からは、土師器坏（第7図－6）・甕、須恵器坏・甕などが出土している。

【ＳＤ531】Ｂ－2 区Ⅴ層検出。小溝状遺構群より古い。ほぼ直角に屈曲するコーナー部分を確認した。規模は、上幅1.6m・底幅40～50㎝・深さ約50㎝で、断面は上幅がややひろいU字形を呈する。溝南辺の底部は、調査区北壁付近で一段やや浅くなる。堆積土は基本的には水成堆積であり、最上層には灰白色火山灰（10世紀前葉）の堆積が認められる。

この灰色火山灰層下の埋土 2～3 からは比較的多くの遺物が出土しており、土師器坏（第8図－1～3）・高台付坏（4）・甕、須恵器坏（5～12）・甕（13）・壷などがみられる。土師器坏・須恵器坏はともに回転糸切り無調整のものが主体である。

【ＳＤ701～703】Ｂ－6 区Ⅴ層検出。3条とも南北方向で、ほぼ平行する。調査区北壁でみると、規模はＳＤ701が上幅1.6m・底幅70㎝・深さ30㎝、ＳＤ702が上幅2.6m・底幅2.1m・深さ25～30㎝、ＳＤ703が上幅2.3m・底幅1.6m・深さ25～30㎝であり、いずれも浅い。3条とも堆積土の上部には灰白色火山灰が認められる。

遺物は、ＳＤ702から須恵器坏の破片が出土したのみである。

《小溝状遺構群》

Ｂ－1区から2区にかけて数多くの小溝状遺構が検出されている。方向は南北方向が多く、これと直交する東西方向のものも若干数検出されている。直交する場合は概して南北方向が東西方向の小溝状遺構を切っている。南北方向の場合、一部に重複も認められる。大きさをみると全般に幅は20～30㎝・深さは15～20㎝ほどで、断面はU字形を呈する。堆積土は自然堆積層であり、Ｂ－2 区の一部では上部に灰白色火山灰が確認されている。前述したＳＩ551竪穴遺構やＳＤ501・ＳＤ531溝跡などよりは時期的に新しい。

なお、これらの小溝状遺構はＢ区では現堤防沿いの調査区に限定されており、Ｂ－1区中央から以西、Ｂ－3区以北では確認されていない。

《井戸跡》

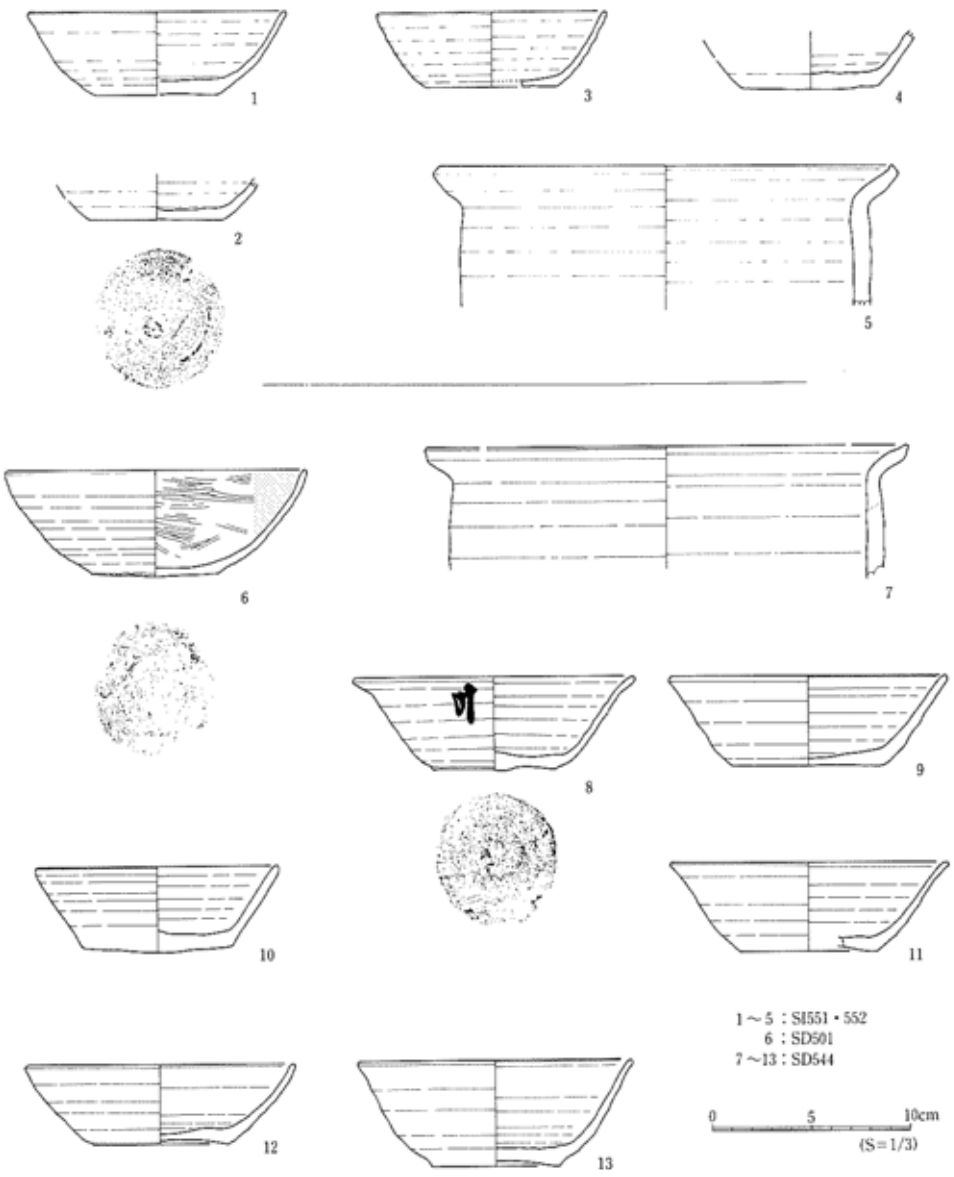
【ＳＥ700】Ｂ－6 区西側Ⅴ層検出。ＳＤ701～703の東側に位置する。北半部が調査区にかかっている。掘り下げは途中までであるが、素掘りの井戸跡とみられる。平面は円形で径2.8mを計る。深さは不明。間口が広くなっているのは、崩落によるものであろう。堆積土の上位には流入した灰白色火山灰（埋3）が観察される。

この灰白色火山灰下の黒褐色粘土層（埋6）からは、須恵器甕（第10図－7）が1点出土した。

《自然流路》

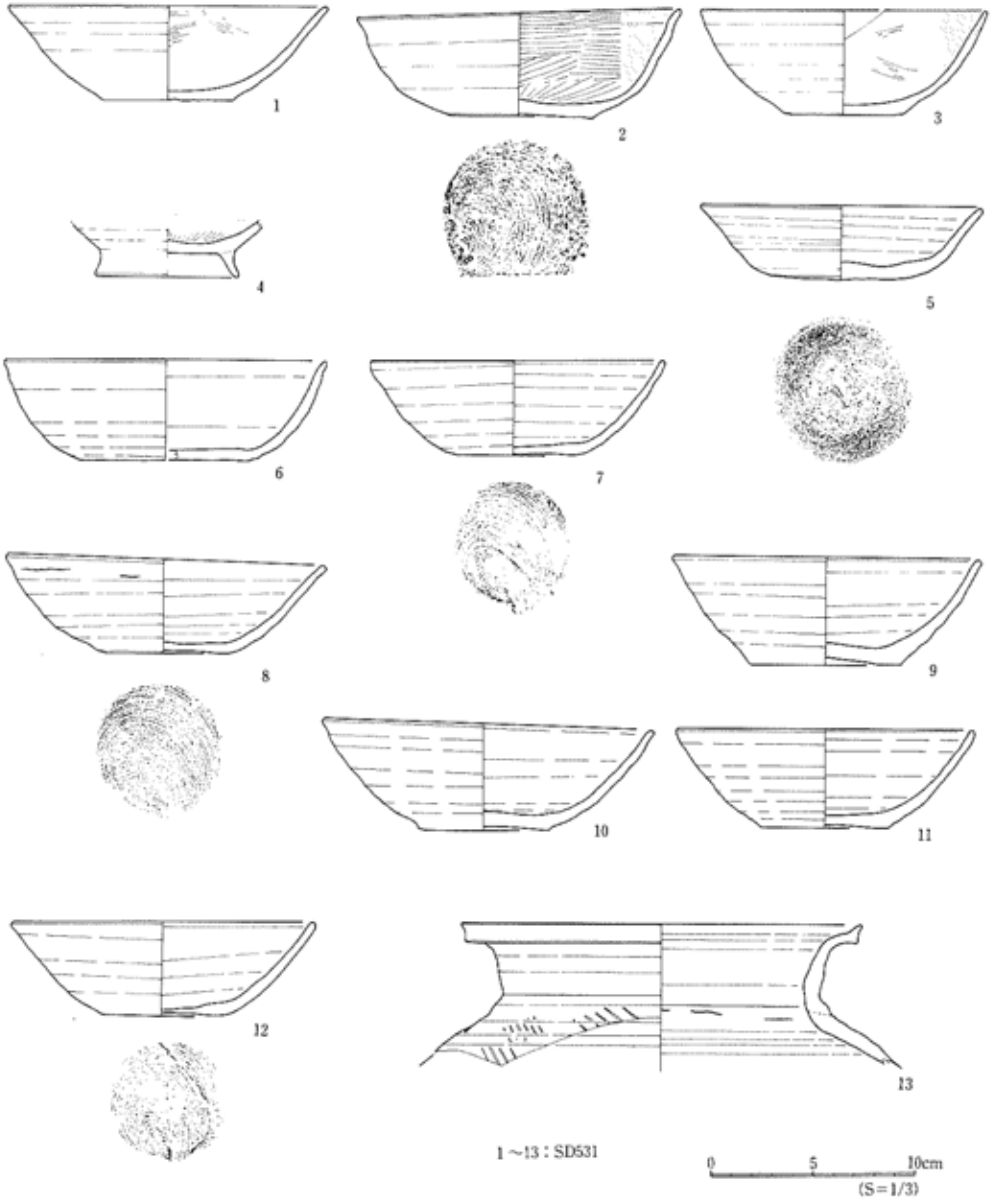
Ｂ－1区と2区で4条確認されている。その形状や堆積土などの特徴から、いずれも鳴瀬川のある南側から北方面へ流れこむ自然流路の一部と考えられる。

【ＳＤ544】Ｂ－1区Ⅵ層検出。ＳＤ501溝跡とほぼ平行する、東西方向の自然流路。小溝状遺構やＳＫ545土壙と重複し、これらよりも古い。西端は上幅約50㎝と狭いが、東側になると幅1.7～1.0mほどに広



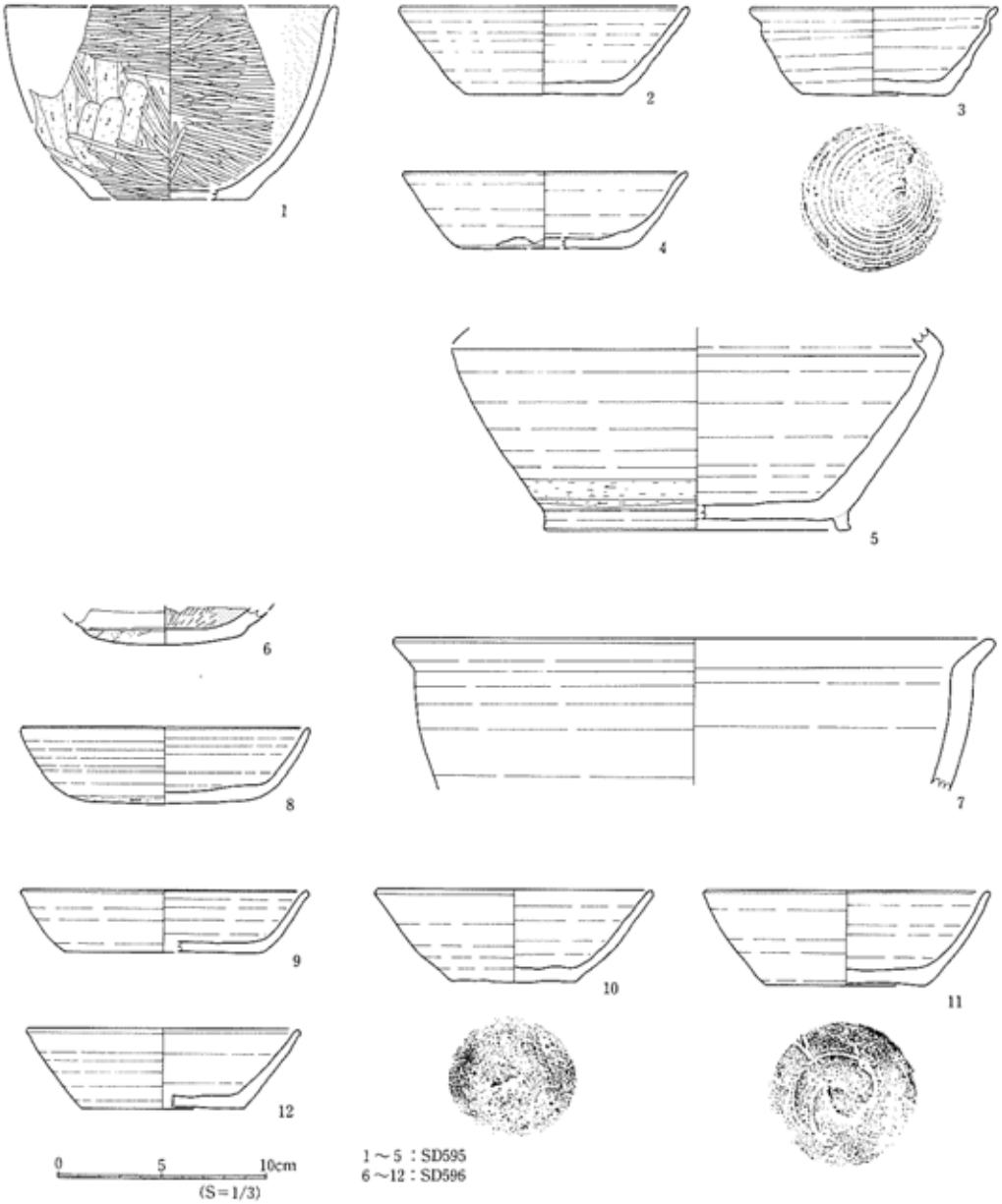
No.	器種	出土区・遺構・層	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	B-2 SI551 埋4	1/4	(12.8)	(6.0)	4.0	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	9-10	42
2	須恵器 坏	B-2 〃 〃	2/5	——	6.7	——	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	9-11	45
3	須恵器 坏	B-2 SI552 埋2	1/4	(12.2)	6.8	3.6	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	9-12	44
4	須恵器 坏	B-2 〃 〃	1/3	——	6.9	——	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	9-13	43
5	土師器 甕	B-2 〃 埋1	一部	(22.8)	——	——	内外面ロクロナデ	9-14	46
6	土師器 坏	B-1 SD501 埋4	2/5	(15.3)	6.4	5.1	外面ロクロナデ 内面しぼり→黒色処理 底面：切り離し不明→手持ちヘラケズリ	10-1	19
7	土師器 甕	B-1 SD544 埋4	一部	(24.5)	——	——	内外面ロクロナデ	10-2	9
8	須恵器 坏	B-1 〃 〃	2/5	(14.3)	6.3	4.5	外面体部に墨書（不鮮明） 内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	10-3	7
9	須恵器 坏	B-1 〃 埋2	1/4	(13.8)	(7.4)	4.3	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	10-4	4
10	須恵器 坏	B-1 〃 埋3	1/3	(12.3)	7.6	4.1	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	10-5	5
11	須恵器 坏	B-1 〃 〃	1/6	(14.0)	(7.0)	4.3	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	10-6	10
12	須恵器 坏	B-1 〃 埋2	2/5	(13.4)	(6.8)	3.8	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り	10-7	2
13	須恵器 坏	B-1 〃 〃	1/2	(13.8)	(6.4)	5.1	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り	10-8	3

第7図　古代の遺物（1）：B区



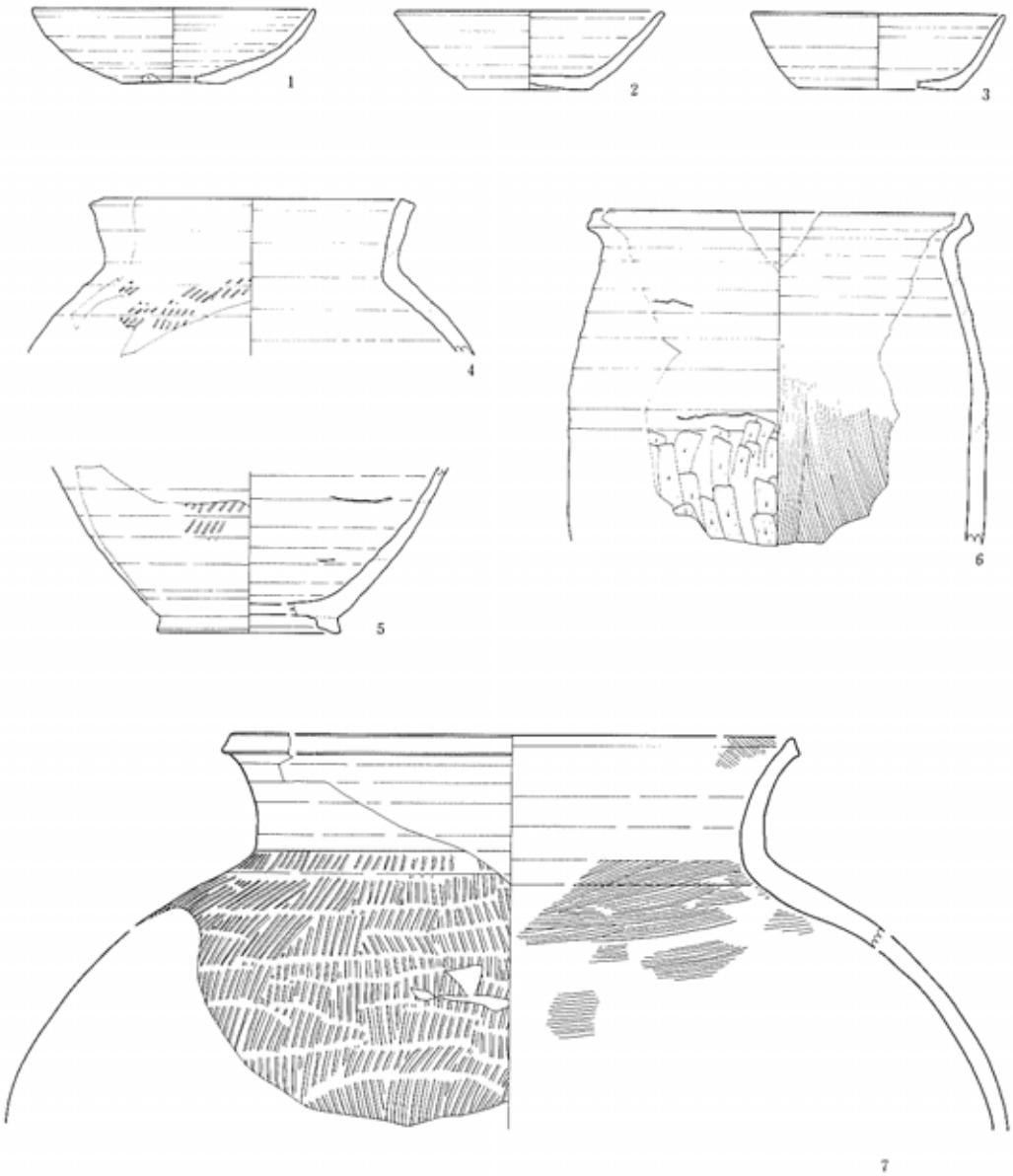
No.	器種	出土区・遺構・層	残存	法量（cm） 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 坏	B-2 SD531 埋2/3	1/4	(15.7)	6.4	4.6	外面ロクロナデ 内面ミガキ→黒色処理 底面：回転糸切りか 器面摩滅	10-9	26
2	土師器 坏	B-2 〃 〃	2/3	15.9	7.1	5.1	外面ロクロナデ 内面ミガキ→黒色処理 底面：回転糸切り	10-10	23
3	土師器 坏	B-2 〃 〃	1/5	(14.1)	6.0	5.1	外面ロクロナデ 内面ミガキ→黒色処理 底面：回転糸切り 器面摩滅	10-11	27
4	土師器 高台坏	B-2 〃 〃	一部	——	(7.1)	——	外面ロクロナデ 内面ミガキ→黒色処理 底面：回転糸切り 高台接合後ロクロナデ	10-12	28
5	須恵器 坏	B-2 〃 〃	4/5	13.8	6.8	3.6	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	10-13	20
6	須恵器 坏	B-2 〃 〃	1/4	(15.7)	8.4	4.8	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ→ナデ 底部切り離し不明→手持ちヘラケズリ	10-14	65
7	須恵器 坏	B-2 〃 〃	4/5	(14.6)	5.8	4.5	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り	10-15	21
8	須恵器 坏	B-2 〃 〃	3/5	(15.7)	6.4	4.5	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り	10-16	22
9	須恵器 坏	B-2 〃 〃	1/2	(15.0)	7.4	5.2	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り	10-17	25
10	須恵器 坏	B-2 〃 〃	1/3	(16.3)	6.4	5.2	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り	10-18	66
11	須恵器 坏	B-2 〃 〃	1/3	(14.6)	6.2	4.8	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り	10-19	64
12	須恵器 坏	B-2 〃 〃	4/5	14.8	6.0	4.5	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り	10-20	24
13	須恵器 甕	B-2 〃 〃	一部	(19.6)	——	——	外面平行タタキ→ロクロナデ 内面ロクロナデ	10-21	29

第8図　古代の遺物（2）：B区



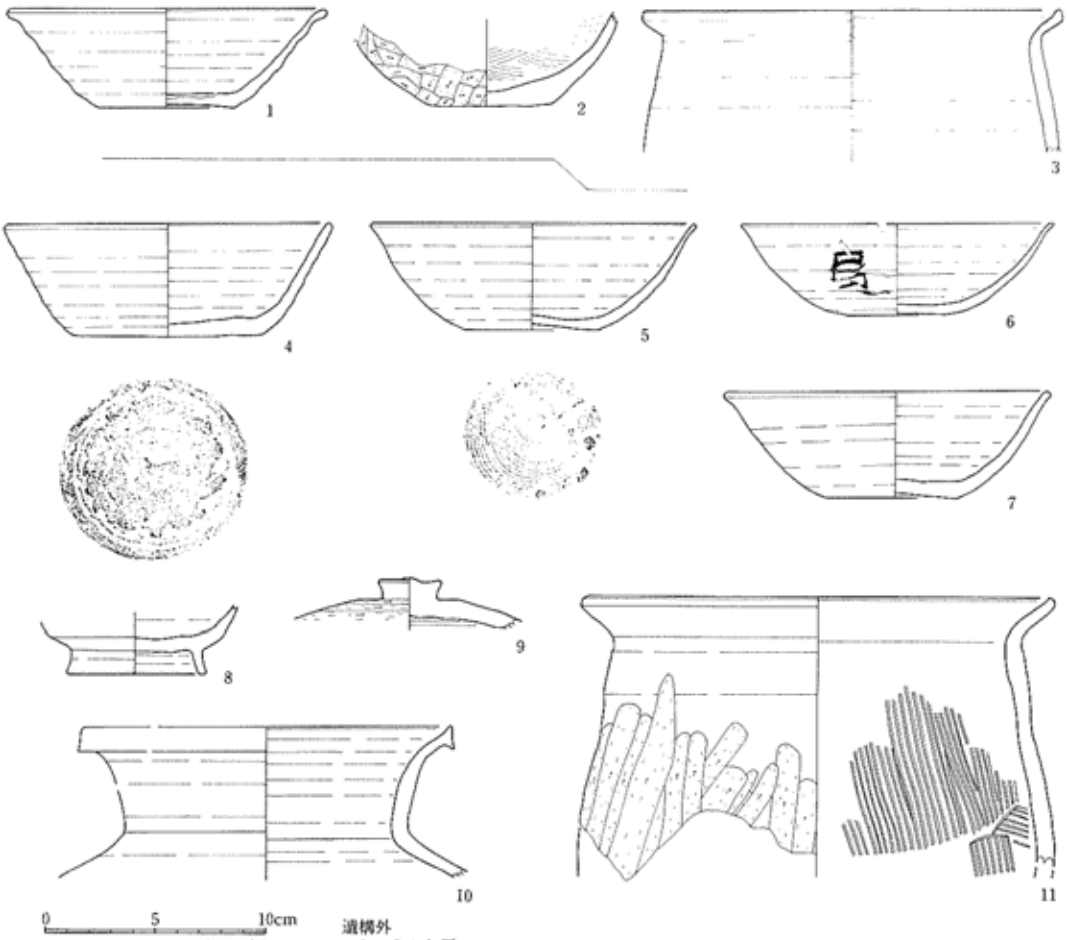
No.	器種	出土区・遺構・層	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 埦	B-2 SD595	1/5	(16.8)	7.4	9.4	外面手持ちヘラケズリ→ミガキ 内面ミガキ→黒色処理	10-22	33
2	須恵器 坏	B-2 〃 埋2	2/5	(13.8)	(7.4)	4.3	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	10-23	41
3	須恵器 坏	B-2 〃 〃	4/5	11.8	7.0	4.3	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り 歪みあり	10-24	30
4	須恵器 坏	B-2 〃 〃	1/3	(13.6)	(8.6)	(3.7)	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	10-25	34
5	須恵器 甕	B-2 〃 〃	1/3	——	(14.8)	——	外面ロクロナデ→回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ 高台接合後ロクロナデ	11-1	31
6	土師器 坏	B-2 SD596 埋2	1/4	——	(8.0)	——	外面横ナデ・ヘラケズリ 内面ミガキ→黒色処理 器面摩滅	11-2	36
7	土師器 甕	B-2 〃 〃	一部	(28.8)	——	——	内外面ロクロナデ	11-3	40
8	須恵器 坏	B-2 〃 〃	1/2	(15.8)	(9.4)	3.7	内外面ロクロナデ 底面：切り離し不明→回転ヘラケズリ	11-4	35
9	須恵器 坏	B-2 〃 〃	2/5	(13.6)	(5.6)	3.0	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	11-5	37
10	須恵器 坏	B-2 〃 〃	1/2	(13.2)	6.0	4.5	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	11-6	39
11	須恵器 坏	B-2 〃 〃	2/3	(13.6)	7.6	4.6	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	11-7	38
12	須恵器 坏	B-2 〃 〃	1/3	(13.0)	(7.8)	3.9	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	11-8	32

第9図 古代の遺物（3）：B区



No	器種	出土区・遺構・層	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	B-1 SK527 埋1	1/4	(14.0)	5.2	3.7	内外面ロクロナデ 底面：切り離し不明	11-9	6
2	土師器 坏	B-2 SD588	1/6	(13.2)	(6.0)	3.9	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	11-10	15
3	土師器 坏	B-2 〃	1/6	(12.4)	(7.8)	3.8	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	11-11	13
4	須恵器 甕	B-1 SD522	一部	(16.0)	——	——	外面平行タタキ→ロクロナデ 内面ロクロナデ	11-12	8
5	須恵器 甕or壺	B-1 SD515	一部	——	(9.0)	——	外面タタキ→ロクロナデ 内面ロクロナデ 高台接合後ロクロナデ	11-13	17
6	土師器 甕	B-1 SD503	一部	(19.0)	——	——	外面ロクロナデ→ヘラケズリ 内面ロクロナデ→ナデ	11-14	11
7	須恵器 甕	B-6 SE700 埋6	一部	(27.6)	——	——	外面平行タタキ→ロクロナデ 内面ロクロナデ→ナデ	11-15	48

第10図 古代の遺物（4）：B区



No.	器種	出土区・遺構・層	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	A-4 Ⅳ/Ⅴ層	1/2	(14.6)	(6.2)	4.6	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り	9-7	1
2	土師器 鉢	A-1 中世遺構(SD01)	一部	——	5.7	——	外面ヘラケズリ 内面ミガキ→黒色処理 器面摩滅	9-8	51
3	須恵器 甕	A-4 Ⅳ/Ⅴ層	一部	(18.8)	——	——	内外面ロクロナデ	9-9	50
4	須恵器 坏	B-2 Ⅴ層	2/3	(14.6)	(8.6)	5.3	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	12-3	56
5	須恵器 坏	B-1 Ⅴ層	3/5	(14.8)	(6.0)	5.0	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り		55
6	須恵器 坏	B-6 Ⅴ層	1/5	(14.2)	(4.4)	4.3	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り 体部外面に墨書(不鮮明)	12-2	58
7	須恵器 坏	B-4 Ⅴ層	4/5	(14.5)	5.7	4.9	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り		54
8	須恵器 高台坏	B-1 Ⅴ層	1/2	——	(6.2)	——	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り 高台接合後にロクロナデ	12-5	53
9	須恵器 蓋	B-2 Ⅴ層	一部	——	——	——	外面ロクロナデ→回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ	12-4	47
10	須恵器 甕	B-1 Ⅴ層	一部	(16.8)	——	——	内外面ロクロナデ	12-6	52
11	土師器 甕	B-2 Ⅴ層	一部	(21.6)	——	——	内面ロクロナデ→ハケメ 外面ロクロナデ→ヘラケズリ	12-1	57

第11図　古代の遺物（5）：A・B区

がり、両辺は平行していない。深さは 20～40 ㎝ほどで、西と東では約 10 ㎝程度のレベル差があり、東側のほうが深い。断面は上幅の広いU字形に近く、底面・壁面には凹凸がある。堆積土はシルト・砂などの水成堆積である。

遺物は比較的多く出土しており、土師器坏・甕（第 7 図－7）、須恵器坏（8～13）などがある。墨書土器（8）も 1 点含まれる。

【ＳＤ595～597】Ｂ－2 区Ⅵ層検出。3 条とも小溝状遺構と重複し、これらよりも古い。ＳＤ595・596 は

東西方向で、近接している。ＳＤ597 は南北方向である。前述したＳＤ544 と同様、いずれも両辺が平行せず、壁面～底面には凹凸があり、堆積土は黄灰色～暗灰黄色粘質シルト・砂などの水成堆積である。ＳＤ595・596 は幅 1.5m～2m・深さ 20～40 ㎝、ＳＤ597 は幅 6mと広いが、深さは 30～40 ㎝である。3 条とも北側と南側の底面では 25～30 ㎝ほどのレベル差があり、北側の方が深い。

ＳＤ595・596 の堆積土からは遺物がやや多く出土しており、ＳＤ595 では土師器坏・埦（第 9 図－1）・甕、須恵器坏（2～4）・瓶（5）・甕、ＳＤ596 では土師器坏（6：有段丸底）・鉢（7）・甕、須恵器坏（8～12）・壷・坏蓋などがある。両者とも土師器坏には有段丸底のものが目立ち、須恵器坏はヘラ切り無調整のものが大半を占めている。

（3）Ｃ区（第 12 図）

Ｂ－1・2 区と同様、調査した区域では多数の小溝状遺構が確認された。また、土器が入った土壙が 2 基検出された。

遺物は 1 区～8 区の全域で出土している。ただし、量的には少ない。現堤防沿いのＣ－1～5 区とＣ－8 区で比較的遺物が目立つ。遺物には、土師器坏（第 13 図－2）・高坏（3）・鉢（6）・甕、須恵器坏（4・5）・高台付坏・蓋・甕などがみられる。

《小溝状遺構群》

Ｃ－1～5・7・8 区Ⅴ層検出。Ｂ区に比べてやや広い範囲で確認されている。Ｃ－1～4 区では東西方向と南北方向の両者がみられるが、Ｃ－5・7・8 区では概ね南北方向にまとまっている。また、Ｃ－1～4 区はややまばらであるが、Ｃ－5 区付近は他に比べて南北方向のものが密に検出されている。一部には重複も認められる。

これらの小溝状遺構の大きさは、Ｂ区検出のものと同じようにそれぞれ類似しており、上幅は 30 ㎝・深さ 30 ㎝ほどである。断面も一様にU字形を呈している。堆積土はシルト～粘質シルトの自然堆積層である。

なお、これらの遺構に明確にともなうとみられる遺物は確認できなかった。

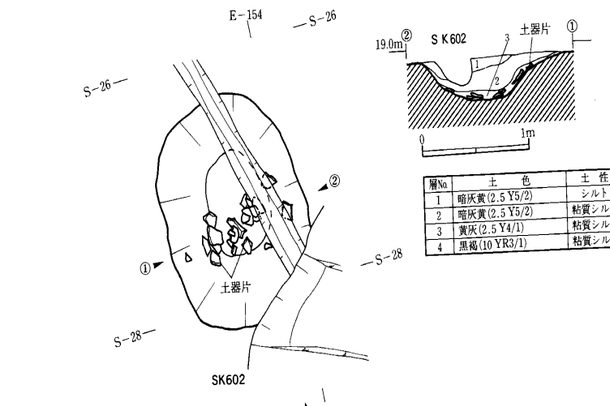
《土　壙》

【ＳＫ601】Ｃ－7 区Ⅴ層検出。調査区の南壁際に一部がかかっている。深さは約 40 ㎝。小溝状遺構の一部と重複し、これよりも新しい。堆積土は 4 層に区分されるが、いずれも自然堆積である。

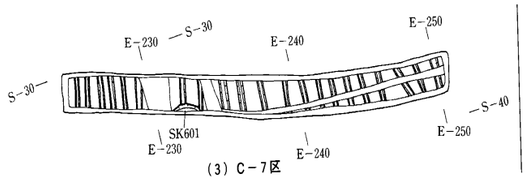
この土壙の底面近くからは、1 個体（？）分とみられる甕の破片がまとまって出土している（写真図版 4－3）。ただ、破片は摩滅が著しく、口縁部破片が欠落するだけでなく接合も一部にとどまったので、ここでは提示しなかった。

【ＳＫ602】Ｃ－1 区Ⅴ層検出。小溝状遺構と重複し、これよりも古い。平面形は長軸 1.7m・短軸 1.3mの楕円形、深さは約 30 ㎝ほどで、断面は浅いU字形を呈する。堆積土は 3 層に区分されるが、いずれも自然堆積層であり、最下部には炭化物層が認められる。

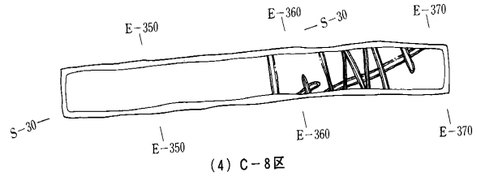
底面近くからは、第 12 図に示したように、1 個体分の須恵器甕（第 13 図－1）の破片が底面に張り付くような状態で出土した。



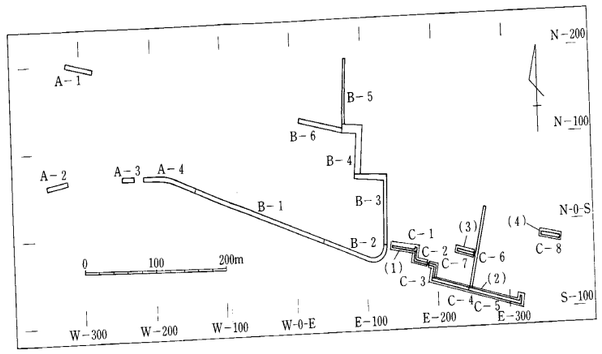
層No	土　色	土　性	備　考
1	暗灰黄(2.5 Y5/2)	シルト	均質。
2	暗灰黄(2.5 Y5/2)	粘質シルト	1層に類似。粘性あり。
3	黄灰(2.5 Y4/1)	粘質シルト	粘性あり。
4	黒褐(10 YR3/1)	粘質シルト	粘性強い。炭化物若干含む。

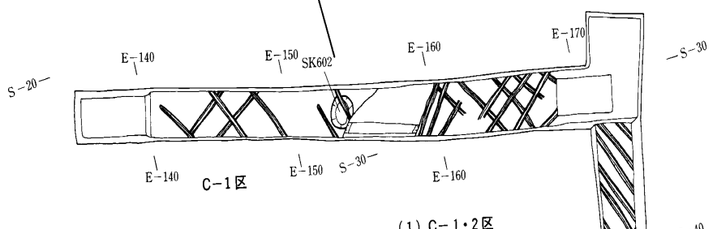


(3) C－7区



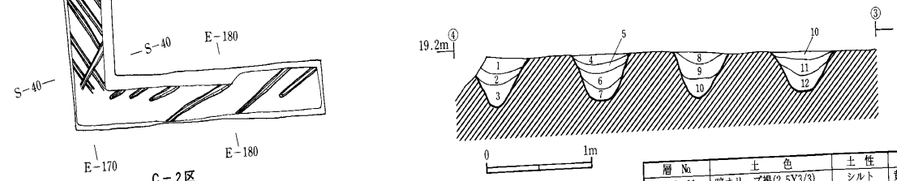
(4) C－8区



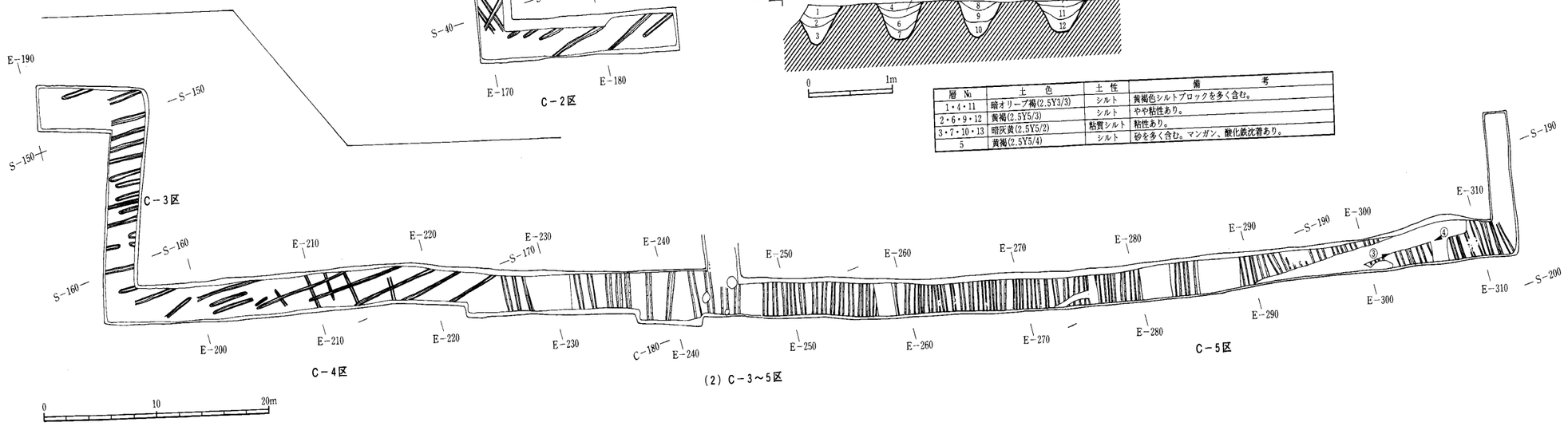


(1) C－1・2区

小溝状遺構（C－5区）

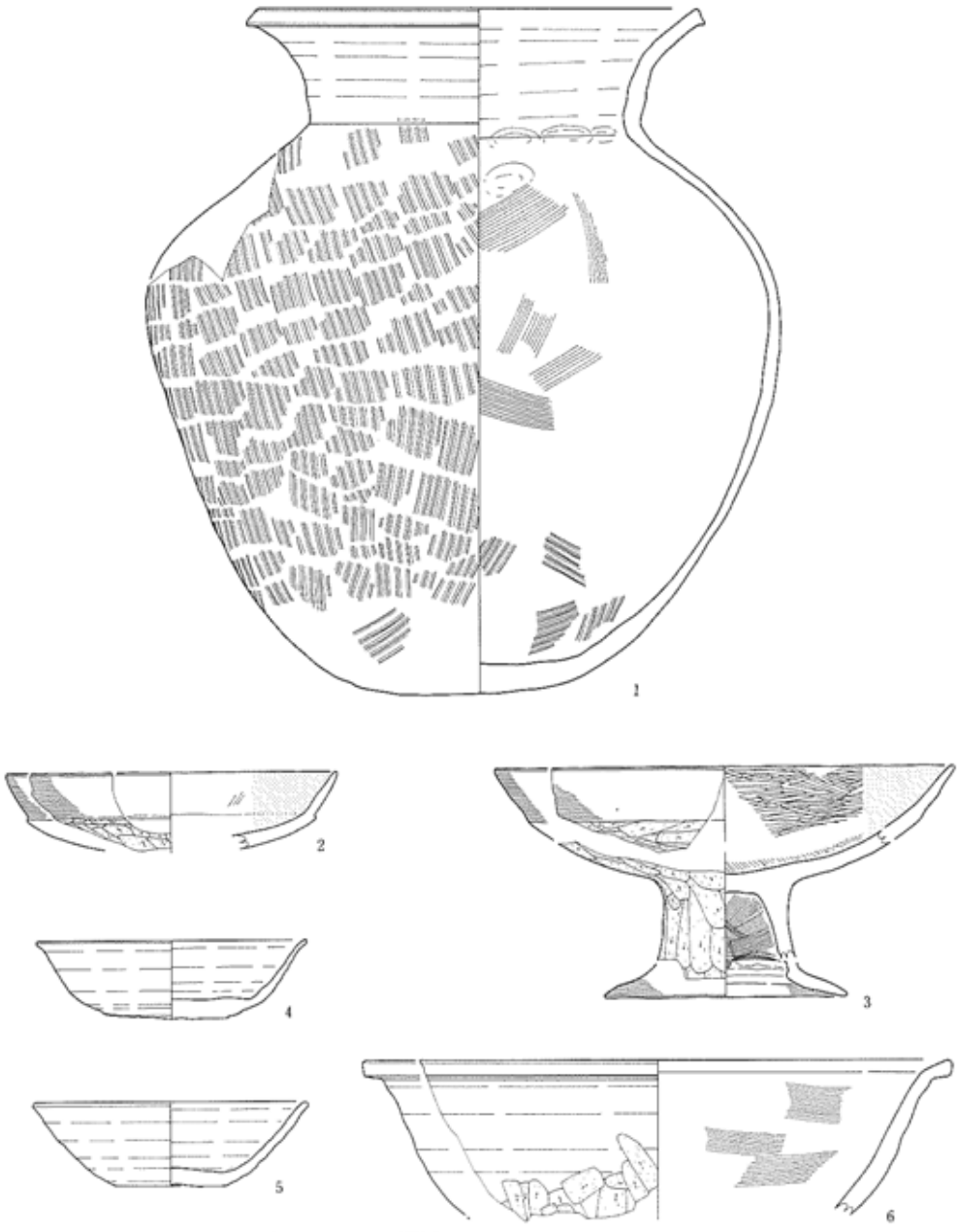


層 No	土　色	土　性	備　考
1・4・11	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	シルト	黄褐色シルトブロックを多く含む。
2・6・9・12	黄褐(2.5Y5/3)	シルト	やや粘性あり。
3・7・10・13	暗灰黄(2.5Y5/2)	粘質シルト	粘性あり。
5	黄褐(2.5Y5/4)	シルト	砂を多く含む。マンガン、酸化鉄沈着あり。



(2) C－3～5区

第12図　古代の遺構平面図（C区）



No.	器種	出土区・遺構・層	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 甕	C-1 SK602 埋3	3/5	22.9	——	33.7	外面平行タタキ（末調整）→ロクロナデ（口縁部） 内面平行アテ具、無文アテ具→ロクロナデ	12-12	49
2	土師器 坏	C-4 中世遺構	一部	(16.8)	——	——	外面ヘラケズリ・ヨコナデ 内面ミガキ→黒色処理	12-7	62
3	土師器 高坏	C-1 Ⅳ、Ⅴ層	1/5	(23.2)	(12.2)	(11.4)	外面ヘラケズリ・ヨコナデ 内面（坏部）ミガキ→黒色処理 （脚部）ヘラケズリ→ナデ	12-8	63
4	須恵器 坏	C-3 Ⅴ層	1/4	(13.6)	6.9	3.9	内外面ロクロナデ 底面：ヘラ切り	12-10	59
5	須恵器 坏	C-8 Ⅴ層	1/3	(13.9)	5.6	4.3	内外面ロクロナデ 底面：回転糸切り	12-11	61
6	土師器 鉢	C-8 Ⅴ層	一部	(29.8)	——	——	外面ロクロナデ→ヘラケズリ 内面ロクロナデ→ナデ	12-9	60

第13図 古代の遺物（6）：C区

3）中世

Ａ区～Ｃ区全域にわたって遺構が検出されている（第 14 図）。遺構には、縦横に走る多くの溝跡（84 条）をはじめ、掘立柱建物跡（19 棟）・柱穴列（2 列）・池状遺構（1 基）・井戸跡（29 基）などがある。溝跡は、幅 6mを越えるものや幅 2～4mほどのものもあり、規模は様々である。遺構の分布をみると、Ｂ区では特に数多く検出されており、掘立柱建物跡や井戸跡がまとまって確認されている区域がいくつかある。一方、Ａ区は遺構が希薄で、溝跡のみが検出されただけである。Ｃ区でも溝跡や掘立柱建物跡・井戸跡などが確認されたものの、Ｂ区に比べて密度は低い。

遺物は全般に少なく、溝跡・井戸跡などからそれぞれ若干数出土した程度である。遺物には、陶磁器類や木簡・曲物、小刀・銭貨、茶臼・砥石・石鉢・板碑などがある（表 1．ｐ53）。木簡の出土は 1 点のみであったが、これはこの区域の遺構群の性格を考える上で重要な手がかりとなった。

以下、これらの遺構・遺物について、区ごとに説明を加える。

（1）**Ａ区（第 15 図）**

Ａ－1～4 区では溝跡が計 20 条確認されたのみで、ほかの遺構は検出されていない。遺物も甕・壷類や鉢類の小破片が若干数出土したにすぎない。

【ＳＤ01～04】Ａ－1 区検出の南北方向の溝跡。それぞれ重複があり、ＳＤ01 はＳＤ03、ＳＤ02 はＳＤ04 より時期的に新しい。調査区北壁でみると、ＳＤ01 は上幅約 1.8m・底幅 40 ㎝・深さ約 80 ㎝を計り、4 条のうちでは規模が最も大きい。断面はＵ字形で、堆積土は灰色～黒褐色の粘土などの水成堆積層である。

ＳＤ01 は、堆積土から陶器甕あるいは壷の体部破片が 1 点出土した。

【ＳＤ10】Ａ－3 区検出の南北方向の溝跡。上幅約 1.5m・下幅 50～60 ㎝・深さ約 50 ㎝を計る。壁面は東側が緩やかに、東側がやや急に立ち上がる。壁面から底面にかけてはやや凹凸がある。堆積土上層は、Ⅱ層起源土である。

堆積土からは、在地産とみられる陶器甕あるいは壷の底部（第 29 図－1）が 1 点出土している。

【ＳＤ11～13】Ａ－4 区検出の南北方向の溝跡。それぞれ重複しており、ＳＤ13→ＳＤ12→ＳＤ11 の新旧関係がある。ＳＤ11 は、上幅約 1.7m・底幅 30 ㎝・深さ約 80 ㎝を計る。東側壁面は途中で段がつき、下半は徐々に幅が狭くなって深くなる。堆積土上層はⅡ層起源土である。

堆積土からは、陶器甕あるいは壷の小破片が出土した。

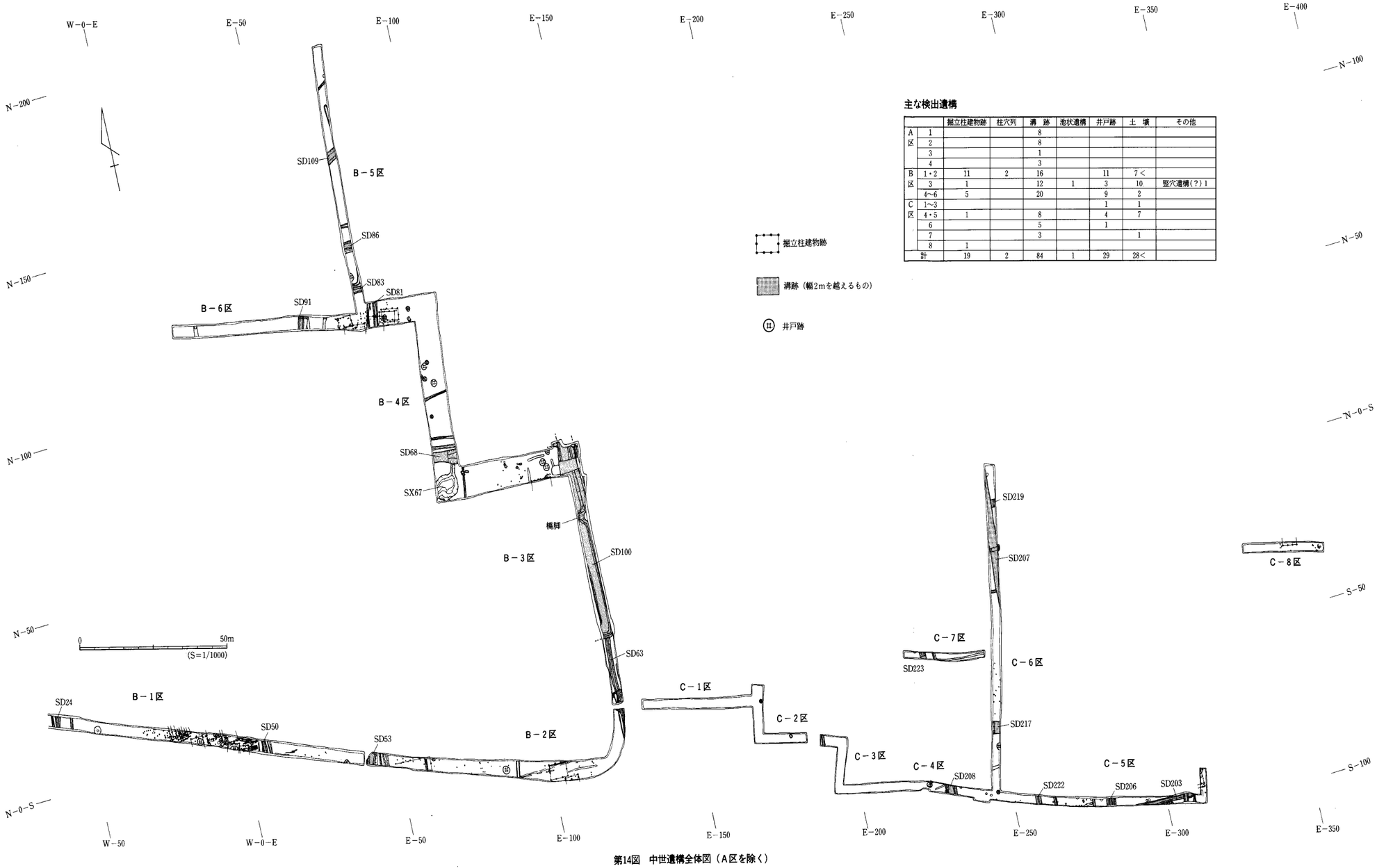
【ＳＤ14】Ａ－2 区検出の南北方向の溝跡。上幅 1.6m・底幅 20～30 ㎝・深さ 60～70 ㎝を計る。規模的には同じ調査区検出のＳＤ16 にほぼ近い。断面はＵ字形を呈する。

遺物は、陶器鉢 1 点、甕あるいは壷の体部破片が 2 点出土した。

【ＳＤ15～20】Ａ－2 区検出の南北方向の溝跡。それぞれ重複があり、ＳＤ16→ＳＤ17→ＳＤ18、ＳＤ19→ＳＤ18・ＳＤ20 の新旧関係がある。これらの中で規模が大きいのはＳＤ16 で、上幅約 1．6m・底幅 50 ㎝・深さ約 80 ㎝を計る。断面形は逆台形状。ＳＤ18 の堆積土上層はⅡ層起源土である。いずれの溝跡からも遺物の出土はない。

（2）**Ｂ区**

①**Ｂ－1・2 区**（第 16 図）



掘立柱建物跡

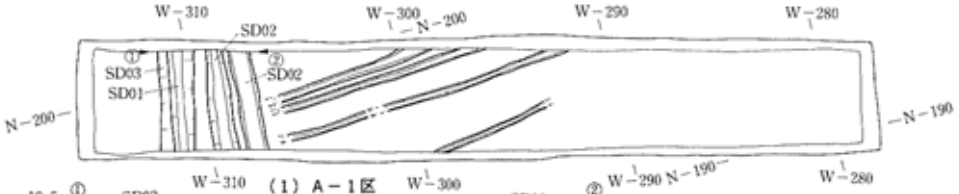
溝跡（幅2mを越えるもの）

井戸跡

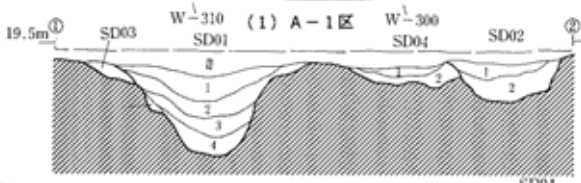
主な検出遺構

		掘立柱建物跡	柱穴列	溝　跡	池状遺構	井戸跡	土　壙	その他
A区	1			8				
	2			8				
	3			1				
	4			3				
B区	1・2	11	2	16		11	7＜	
	3	1		12	1	3	10	竪穴遺構(?) 1
	4〜6	5		20		9	2	
C区	1〜3					1	1	
	4・5	1		8		4	7	
	6			5		1		
	7			3			1	
	8	1						
計		19	2	84	1	29	28＜	

第14図　中世遺構全体図（A区を除く）



（1）A－1区



SD02

層No	土色	土性	備考
1	オリーブ黒(5Y3/2)	砂質シルト	酸化鉄少量含む。
2	黒褐(2.5Y3/1)	粘土	層起源土をやや多く含む。

SD03

層No	土色	土性	備考
1	黒褐(10YR3/1)	粘土	酸化鉄少量含む。

SD01

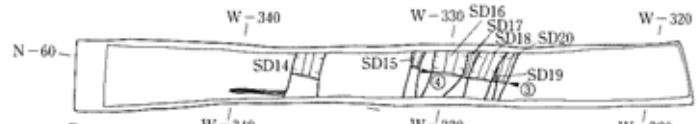
層No	土色	土性	備考
1	灰 (10Y4/1)	砂質粘土	III層起源土ブロック、酸化鉄少量含む。
2	灰 (10Y3/1)	粘土	III層起源土ブロック比較的多く含む。
3	黒 褐(2.5Y3/1)	粘土	植物を多く含む。灰白色火山灰ブロック少量含む。
4	オリーブ黒(5Y3/1)	砂質粘土	植物を少量含む。
5	黒 褐(2.5Y3/1)	粘土	V層起源土を多く含む。

SD04

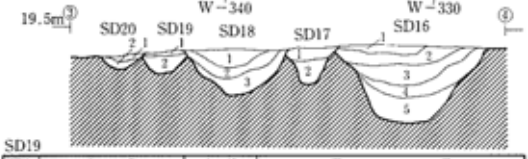
層No	土色	土性	備考
1	暗灰黄(2.5Y4/2)	砂質粘土	酸化鉄少量含む。
2	灰オリーブ(5Y4/2)	粘土	層起源土を多く含む。

SD20（A－2区）

層No	土色	土性	備考
1	黒褐(10YR3/1)	粘質シルト	細砂をブロック状に不均質に含む。
2	オリーブ褐(2.5Y4/3)	粘質シルト	全体的に灰色を帯び、均質。



（2）A－2区



SD16

層No	土色	土性	備考
1	にぶい黄(2.5Y6/3)	シルト	VI層に似た土でしまりあり、硬い。
2	灰(5Y5/1)	シルト	均質でしまりあり。
3	にぶい黄(2.5Y6/3)	粘質シルト	粘土ブロック(2.5Y4/1)を多く含む。
4	黄灰(2.5Y4/1)	粘質シルト	VI層起源土、炭化物を若干含む。
5	灰(5Y4/1)	粘土	粘性強く、グライ化。

SD19

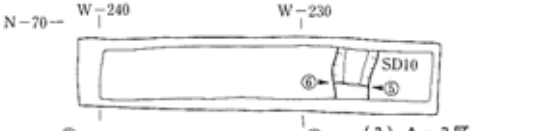
層No	土色	土性	備考
1	黒褐(10YR3/1)	粘質シルト	砂を多く含む。
2	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘質シルト	グライ化した粘土と II層起源の粘土などがブロック状に混じる。

SD17

層No	土色	土性	備考
1	暗灰黄(2.5Y5/2)	砂質シルト	II層起源の砂が入る。
2	暗灰黄(2.5Y5/2)	砂質シルト	グライ化したVI層起源土を含む。

SD18

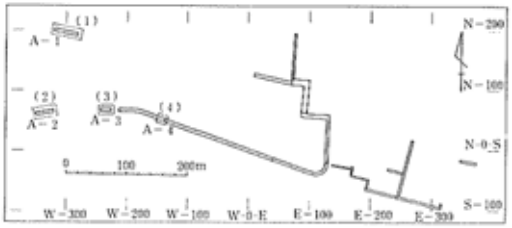
層No	土色	土性	備考
1	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘質シルト	II層起源土。
2	暗灰黄(2.5Y5/2)	砂質シルト	II層起源土。
3	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘質シルト	グライ化した埋2層がブロック状に入る。

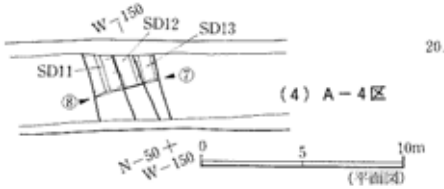


（3）A－3区

SD10

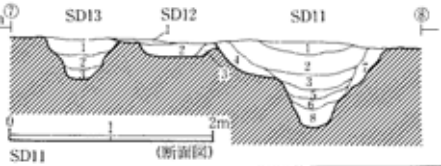
層No	土色	土性	備考
1	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	砂質シルト	酸化鉄・マンガン少量含む。粘性ややあり。II層起源土。
2	暗灰黄(2.5Y4/2)	砂質シルト	埋1より砂分多い。II層起源土若干含む。
3	オリーブ黒(5Y3/2)	粘土	灰白色火山灰ブロックを少量含む。部分的に細砂含む。





（4）A－4区

（平面図）



（断面図）

SD12

層No	土色	土性	備考
1	暗灰黄(2.5Y4/2)	砂質シルト	酸化鉄少量含む。
2	黒褐(10YR3/1)	粘質シルト	粘土ブロック(10YR2/3)、砂質シルト(2.5Y5/3)が不均質に混じる。
3	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	砂質シルト	粘土ブロック(5Y3/1)少量含む。

SD13

層No	土色	土性	備考
1	黒褐(2.5Y3/2)	シルト	酸化鉄少量含む。
2	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘質シルト	粘質シルトブロック(2.5Y5/2)少量含む。
3	オリーブ黒(5Y3/2)	粘土	粘土ブロック(2.5Y5/3)少量含む。

SD11

層No	土色	土性	備考
1	オリーブ褐(2.5Y4/3)	細砂	酸化鉄、炭化物少量含む。
2	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	砂質粘土との互層。炭化物少量含む。
3	オリーブ黒(5Y3/2)	粘土	部分的に極少量細砂を含む。
4	黒褐(2.5Y3/2)	粘質シルト	酸化鉄・マンガン少量含む。
5	灰(5Y4/1)	粘土	粗砂との互層。
6	オリーブ黒(7.5Y3/1)	粘土	粘土ブロック(5Y3/1)多量に含む。
7	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘質シルト	酸化鉄、粘土ブロック(5Y3/1)少量含む。
8	オリーブ黒(5Y3/2)	砂質粘土	粘土ブロック(5Y3/1)少量含む。

第15図　A区遺構平・断面図

Ｂ－1 区では掘立柱建物跡 9 棟、井戸跡 6 基、土堀 7 基などが密集する区域があり、Ｂ－2 区においても掘立柱建物跡 2 棟、井戸跡 2 基などが比較的限られた範囲内で検出されている。また、幅 2m・深さ 1m程の規模の南北方向の溝跡が、この区域からはやや離れた位置で確認されている。

《**掘立柱建物跡**》

【ＳＢ112～120】Ｂ－1 区東寄りで検出。何れも全体の規模は不明である。重複あるいは近接する建物跡があるので、同じ区域で何度か造り替えが行われたようである。建物跡には、廂？がつくもの（ＳＢ120)、張り出しが取り付くもの（ＳＢ113・115・1I7）などもある。柱穴掘り方は、ＳＢ118 を除いて全般に径 30 ㎝前後の円形もしくは一辺 30 ㎝の隅丸方形、柱痕跡も 10 ㎝前後の円形である。ＳＢ118 の柱穴掘り方は、他の建物跡とは異なり長軸 70～100 ㎝、短軸 40～50 ㎝の長楕円形を呈する。柱は抜き取られている。

【ＳＢ122】Ｂ－2 区中央からやや東側で検出。2 間×3 間の東西棟で、Ｂ－1・2 区では唯一規模が分かる建物跡である。ＳＡ124 と重複し、これより新しい。ＳＢ123 とは近接しており同時に存在したとは考えられないが、時期的な前後関係は不明である。建物規模は、桁行約 6.0m、梁行約 4.5m、柱間寸法は南桁行では西から 1.9m・2.2m・1.9m、西梁行では北から 2.4m・2.1mである。柱穴掘り方は径 30 ㎝、柱痕跡は径 10 ㎝前後の円形である。

《**溝　跡**》

【ＳＤ24】Ｂ－1 区西側で検出した南北方向の溝跡。調査区南壁面では、上幅 1.8m・底幅 50～60 ㎝･深さ約 1.0mを計る。断面はやや不整形な逆台形状である。この溝跡に近接して、西側にはＳＤ23（上幅 1.2m・深さ 60 ㎝)、東側にはＳＤ25（上幅 1.5m・深さ 70 ㎝）がある。遺物は出土していない。

【ＳＤ50】Ｂ－1 区東側で検出した南北方向の溝跡。新旧（ＳＤ50ａ・50ｂ）二時期ある。調査区南壁面での観察では、ＳＤ50ａは上幅約 1.8m・底幅 30～40 ㎝・深さ 70 ㎝、ＳＤ50ｂは推定上幅 1.8～2.0m・底幅 30 ㎝・深さ 1.0mで、古い段階のＳＤ50ｂの方が規模がやや大きい。ＳＤ50ｂは、底面のレベルからみると、第 16 図平面図中の波線で示したように途中で立ち上がり止まっていた可能性がある。断面は両者ともおおむね逆台形状である。堆積土は水成堆積で、ＳＤ50ｂは炭化物を多く含む。なお、ＳＤ50ａ・ｂは西側で検出したＳＤ24 とはほぼ同規模である。

遺物は、ＳＤ50ａでは磁石、ＳＤ50ｂでは小刀（第 29 図－3)、銭貨（天禧通寶）などが出土している。

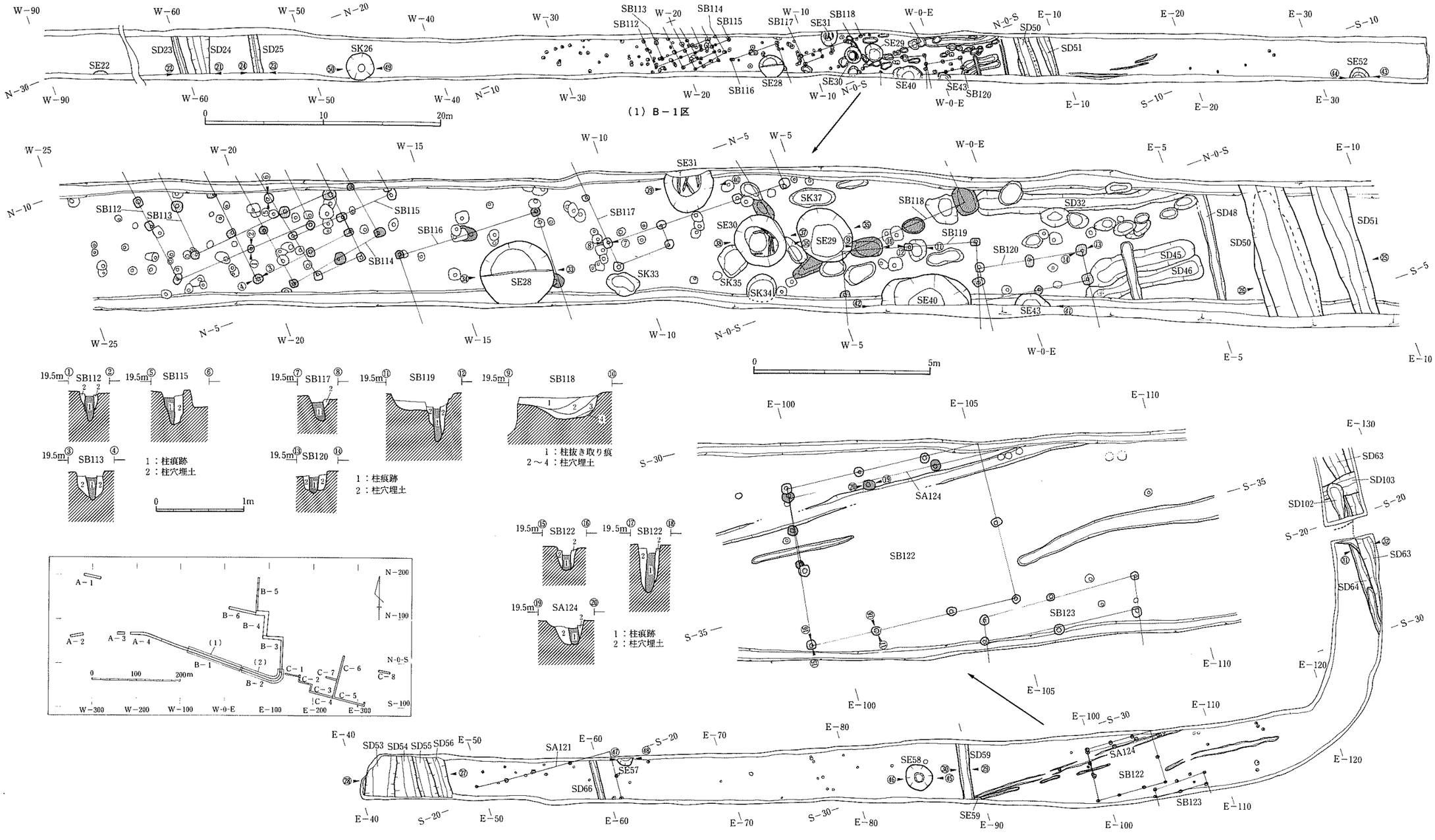
【ＳＤ51】Ｂ－2 区西側で検出した、ＳＤ50 と平行する南北方向の溝跡。調査区南壁では、上幅 1.1m・底幅 20 ㎝・深さ 70 ㎝を計る。断面はU字形に近い。堆積土下層には砂層が入る。

遺物には、陶器鉢、銭貨（熙寧冗寶：第 30 図－5）がある。

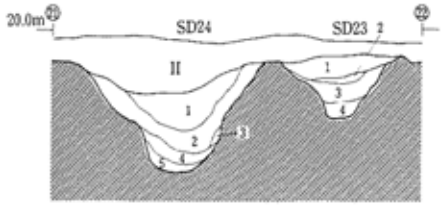
【ＳＤ53】Ｂ－2 区西端部で検出した南北方向の溝跡。ほかに 3 条の溝跡（ＳＤ54・55・56）が重複・平行して走っており、ＳＤ56→ＳＤ55→ＳＤ54→ＳＤ53 の新旧関係がある。ＳＤ53 は、確認面では上幅 2.5m・底幅 1.3m・深さ 60 ㎝程で、この付近では規模が最も大きい。断面は台形状を呈し、底面は比較的平坦である。堆積土の中位には炭化物層が介在する。遺物の出土はない。

【ＳＤ59】Ｂ－2 区中央付近で検出した南北方向の溝跡。確認面での規模は、上幅 0.8m・底幅 50 ㎝・深さ 30 ㎝、断面形は底幅の広い逆台形状である。堆積土の下層は粘土と砂の互層。遺物の出土はない。

《**井戸跡**》

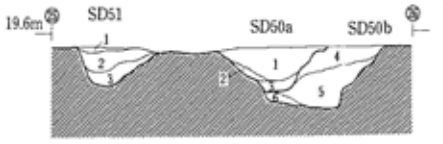


第16図　B－1・2区遺構平面図



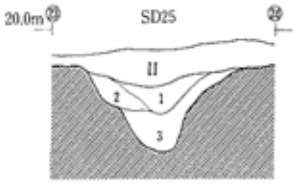
SD24

層No	土　色	土　性	備　考
1	暗褐(10YR3/3)	砂質シルト	下位に粗砂を多く含む。
2	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘質シルト	焼土若干含む。
3	黒褐(10YR3/2)	粘　土	オリーブ褐色粘土ブロックを多く含む。砂を含む。
4	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘　土	炭化物若干含む。
5	灰(5Y4/1)	粘　土	部分的に粗砂を含む。



SD51

層No	土　色	土　性	備　考
1	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	シルト	細砂を部分的に含む。
2	黒褐(10YR2/3)	粘質シルト	炭化物、焼土若干含む。
3	黒褐(10YR2/2)	粘質シルト	細砂やや多く含む。



SD23

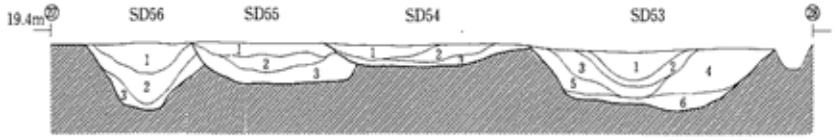
層No	土　色	土　性	備　考
1	暗褐(10YR3/4)	シルト	炭化物少量含む。
2	暗褐(10YR3/3)	粘質シルト	褐色粘質シルトブロック多く含む。
3	黒褐(10YR2/3)	粘質シルト	褐色粘質シルトブロック、焼土若干含む。
4	黒褐(10YR3/2)	粘　土	黄褐色シルトブロック若干含む。酸化鉄沈着あり。

SD25

層No	土　色	土　性	備　考
1	暗褐(10YR3/3)	粘質シルト	炭化物若干含む。
2	にぶい黄褐(10YR4/3)	粘質シルト	均質。
3	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘　土	黄褐色粘土ブロック若干含む。

SD50a・b

層No	土　色	土　性	備　考
1	黒褐(10YR3/2)	粘質シルト	均質。
2	黒褐(2.5Y3/2)	粘　土	部分的に細砂含む。
3	黒褐(2.5Y3/2)	粘　土	炭化物若干含む。
4	黒褐(10YR3/2)	粘質シルト	黄褐色シルトブロック部分的に含む。
5	黒褐(10YR3/1)	粘　土	炭化物多く含む。
6	黒褐(10YR2/2)	粘質シルト	黄褐色シルトブロック多く含む。

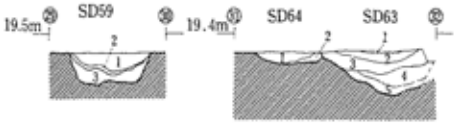


SD55

層No	土　色	土　性	備　考
1	暗灰黄(2.5Y4/2)	シルト	
2	暗灰黄(2.5Y5/2)	シルト	マンガンを多く含む
3	黒褐(2.5Y3/2)	シルト	黄褐色シルトブロック、炭化物多く含む。

SD56

層No	土　色	土　性	備　考
1	黒褐(10YR3/1)	シルト	
2	黒褐(10YR2/2)	粘質シルト	炭化物、焼土若干含む。
3	暗灰黄(2.5Y4/2)	シルト	黄褐色シルトブロックを多く含む。



SD59

層No	土　色	土　性	備　考
1	黒褐(2.5Y3/2)	粘質シルト	炭化物若干含む。
2	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘質シルト	細砂を若干含む。
3	灰黄褐(10YR4/2)	細　砂	粘土層との互層。

SE28

層No	土　色	土　性	備　考
1	黒褐(2.5Y3/1)	シルト	炭化物、焼土を若干含む。
2	オリーブ黒(5Y3/1)	粘質シルト	粘性強く、しまりない。炭化物多い。
3	灰(5Y4/1)	シルト	
4	灰(5Y4/1)	シルト	上面に炭化物層。
5	灰(5Y4/1)	粘質シルト	VI層起源粘土ブロック多い。
6	暗オリーブ灰(2.5GY4/1)	粘質シルト	炭化物若干含む。
7	黒(10YR2/1)	粘　土	炭化物若干含む。
8	暗緑灰(7.5GY4/1)	粘質シルト	
9	黒(10YR2/1)	粘　土	VI層起源ブロック、炭化物を含む。
10	暗緑灰(7.5GY4/1)	粘質シルト	
11	黒(5Y2/1)	粘　土	
12	黄褐(2.5Y5/3)	粘　土	VI層起源土。
13	暗緑灰(7.5GY4/1)	粘　土	VI層に類似。
14	黒(5Y2/1)	粘　土	VI層起源粘土ブロック含む。
15	暗オリーブ灰(5GY4/1)	シルト	VI層起源粘土ブロックを多く含む。

SD53

層No	土　色	土　性	備　考
1	灰黄褐(10YR4/2)	シルト	日猶起源土。
2	灰黄褐(2.5Y4/2)	シルト	炭化物多く含む。
3	灰黄褐(2.5Y4/2)	粘質シルト	2層に類似。黄褐色シルトブロックを若干含む。
4	黒褐(10YR3/2)	シルト	
5	黒(10YR2/1)	粘質シルト	炭化物を多く含む。
6	暗灰黄(2.5Y5/2)	粘質シルト	黄褐色シルトブロックを多く含む。炭化物若干。

SD54

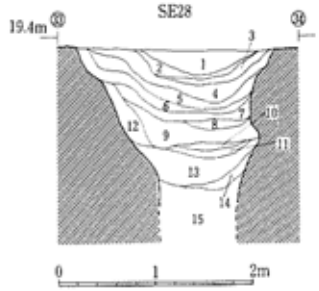
層No	土　色	土　性	備　考
1	黒褐(2.5Y3/2)	シルト	黄褐色シルトブロックを若干含む。
2	黒(10YR1.7/1)	粘質シルト	炭化物層。
3	暗灰黄(2.5Y5/2)	粘質シルト	黄褐色シルトブロックを多く含む。

SD63

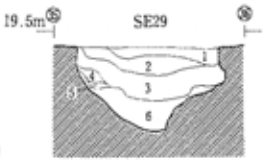
層No	土　色	土　性	備　考
1	暗灰黄(2.5Y5/2)	シルト	炭化物若干含む。
2	黄灰(2.5Y4/1)	粘　土	酸化鉄、マンガン沈着あり。
3	黒褐(2.5Y3/2)	粘　土	酸化鉄、マンガン沈着多い。
4	黒褐(2.5Y3/2)	粘　土	黄褐色シルトブロックを部分的に含む。
5	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘　土	黄褐色シルトブロックを多く含む。

SD64

層No	土　色	土　性	備　考
1	黒褐(10YR2/2)	粘質シルト	比較的均質。
2	黒褐(10YR4/2)	粘　土	砂質。黄褐色シルトブロック多く含む。



第17図　B－1・2区遺構断面図(1)

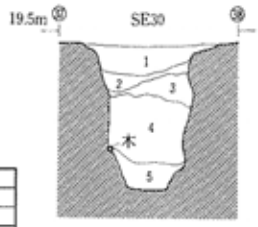


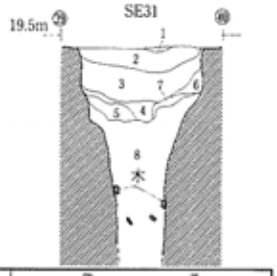
SE29

層No	土色	土性	備考
1	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘土	炭化物少量含む。砂含む。
2	黒褐(2.5Y3/2)	粘土	焼土を含む。1層よりも細砂を多く含む。
3	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘土	炭化物、焼土を少量含む。
4	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	砂含む。
5	黒褐(2.5Y3/1)	粘土	炭化物少量含む。
6	黒褐(10YR2/2)	粘土	炭化物多く含む。

SE30

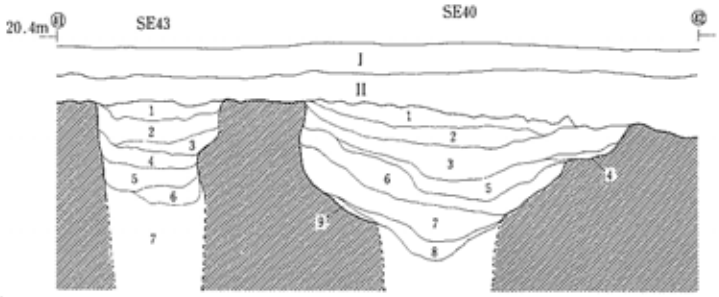
層No	土色	土性	備考
1	黒褐(2.5Y2/2)	砂質粘土	細砂を不均質に含む。炭化物少量含む。
2	黒褐(2/5Y3/1)	粘土	炭化物微量含む。
3	黄灰(2.5Y4/1)	粘土	炭化物多く含む。
4	灰(5Y4/1)	粘土	酸化鉄沈着。下半部はグライ化。
5	灰(5Y4/1)	粘土	グライ化。





SE31

層No	土色	土性	備考
1	オリーブ褐(2.5Y4/3)	シルト	酸化鉄沈着。
2	黒褐(10YR3/2)	粘質シルト	炭化物、焼土微量含む。
3	黒褐(2.5Y3/1)	シルト	5Aオリーブ色粘土ブロック、黒褐色土ブロック、細砂など不均質に混じる。
4	黒褐(10YR2/3)	粘質シルト	黒褐色土ブロック若干含む。
5	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	4層を部分的に含む。
6	黒褐(10YR3/2)	粘質シルト	炭化物少量含む。
7	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	VI層をブロック状に多く含む。
8	オリーブ黒(7.5Y3/1)	砂質粘土	黒色粘土ブロックを多く含む。植物遺体若干含む。

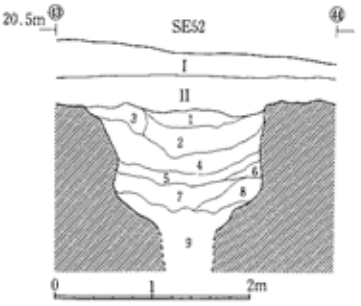


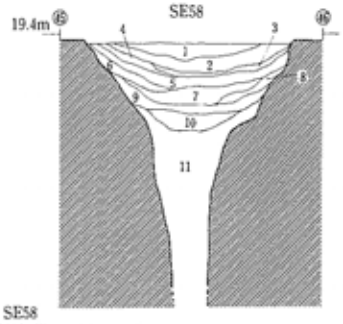
SE43

層No	土色	土性	備考
1	オリーブ褐(2.5Y4/3)	シルト	焼土微量含む。
2	暗褐(10YR3/3)	シルト	黄褐色砂質シルト部分的に含む。
3	暗褐(10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色砂質シルト多い。炭化物、焼土若干含む。
4	黒褐(2.5Y3/2)	砂質粘土	炭化物多く含む。
5	黒褐(2.5Y3/1)	砂質粘土	
6	黒褐(2.5Y3/2)	砂質粘土	炭化物若干含む。
7	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	砂質粘土	

SE40

層No	土色	土性	備考
1	暗灰黄(2.5Y4/2)	シルト	炭化物、焼土微量含む。
2	黒褐(2.5Y3/2)	シルト	黄褐色シルトブロックを少量含む。
3	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	砂質シルト	黄褐色粘土ブロック、炭化物少量含む。
4	黒褐(10YR3/2)	粘質シルト	黄褐色シルトブロックを多く含む。
5	オリーブ黒(5Y3/1)	粘土	炭化物少量含む。
6	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘質シルト	3層に類似。粘土ブロック、酸化鉄多い。
7	オリーブ黒(7.5Y3/1)	粘土	黄褐色粘土ブロック若干含む。
8	黒(5Y2/1)	粘土	炭化物の薄層含む。
9	暗灰黄(2.5Y4/2)	細砂	黒褐色粘土ブロックを若干含む。





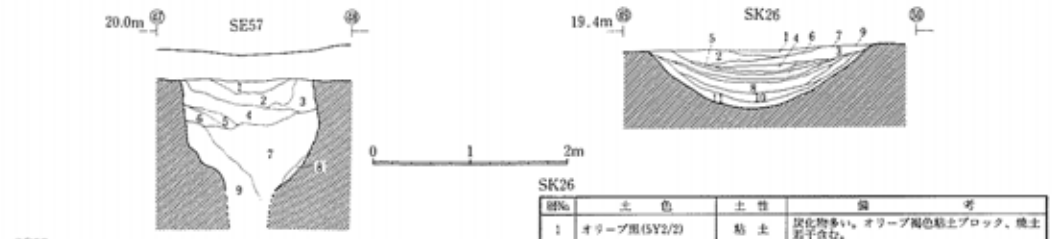
SE52

層No	土色	土性	備考
1	黒褐(10YR2/3)	シルト	炭化物少量含む。
2	黒褐(7.5YR3/1)	シルト	炭化物、焼土多く含む。
3	暗褐(10YR3/3)	シルト	比較的均質。炭化物若干含む。
4	黒褐(2.5Y3/1)	粘質シルト	部分的に細砂含む。
5	オリーブ褐(2.5Y4/3)	砂質粘土	上面に炭化物薄層あり。
6	黒褐(2.5Y3/2)	粘土	黒色粘土ブロック多く含む。
7	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘土	暗灰黄色粘土ブロック多く含む。酸化鉄沈着多い。砂含む。
8	暗褐(10YR3/3)	粘土	黒色粘土ブロックを多く含む。細砂含む。
9	黒褐(10YR2/2)	粘質シルト	黒色粘土ブロック多く含む。

SE58

層No	土色	土性	備考
1	黒褐(10YR2/2)	シルト	炭化物、焼土若干含む。
2	黒褐(10YR2/2)	粘質シルト	黄褐色シルトブロック含む。しまりあり。
3	黒褐(10YR3/2)	砂質粘土	黄褐色シルトブロック多く含む。
4	黒褐(10YR2/2)	粘土	均質。炭化物若干含む。
5	黒褐(10YR3/1)	砂質粘土	炭化物、焼土若干含む。粘性強い。
6	黒褐(2.5Y3/2)	砂質粘土	黄褐色シルトブロック多く含む。
7	黒褐(2.5Y3/2)	細砂	黒褐色シルトブロックを不均質に含む。
8	暗灰黄(2.5Y5/2)	シルト	黒褐色シルトブロック若干含む。
9	黒褐(2.5Y3/1)	砂質シルト	黒褐色粘質シルトブロック若干含む。
10	オリーブ黒(5Y3/1)	粘土	暗灰黄色粘土ブロックを多く含む。下半部はグライ化。
11	灰(5Y4/1)	粘土	グライ化。細砂を若干含む。

第18図　B－1・2区遺構断面図(2)



SE57

層No	土　色	土　性	備　考
1	黒褐(10YR2/2)	粘質シルト	炭化物若干含む。しまりあり。
2	黒褐(10YR2/2)	粘質シルト	黄褐色シルトブロックを多く含む。
3	黒褐(10YR2/3)	粘質シルト	均質。
4	黒褐(10YR3/2)	シルト	黄褐色シルトブロックを多く含む。
5	暗灰黄(2.5Y4/2)	細　砂	
6	黒褐(10YR2/2)	粘　土	均質。
7	黒褐(2.5Y3/1)	粘　土	黄褐色シルトブロックを部分的に含む。炭化物若干含む。
8	にぶい黄褐(10YR4/3)	砂質粘土	
9	黒褐(2.5Y3/2)	粘　土	均質。酸化鉄沈着。

SK26

層No	土　色	土　性	備　考
1	オリーブ黒(5Y2/2)	粘　土	炭化物多い。オリーブ褐色粘土ブロック、焼土若干含む。
2	黒褐(10YR3/1)	粘　土	炭化物多い。黄褐色粘土ブロック、焼土若干含む。
3	黒褐(2.5Y3/1)	粘　土	炭化物多い。
4	黒褐(2.5Y3/1)	粘　土	炭化物多い。粘性強い。
5	黒褐(10YR3/1)	粘　土	炭化物多い。灰オリーブ粘土ブロック若干含む。
6	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘　土	灰オリーブ粘土ブロック多く含む。炭化物若干含む。
7	黒褐(10YR3/1)	粘　土	炭化物多い。粘性強い。
8	オリーブ黒(5Y3/2)	粘　土	灰オリーブ粘土ブロック多く含む。
9	暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	粘　土	下半部に灰オリーブ粘土ブロック若干含む。
10	黒褐(2.5Y3/1)	粘　土	炭化物若干含む。
11	オリーブ褐(2.5Y4/3)	粘　土	上半部には細砂を含む。下半部グライ化。

第19図　Ｂ－１・２区遺構断面図（３）

【ＳＥ28】Ｂ－1 区検出。南側の一部が調査区外になる。円形（径約 2.0m）の素掘りの井戸跡。約 1.5mの深さまで掘り下げる。上部の壁面は、崩落のためかオーバーハング・凹凸が認められる。堆積土を観察すると、井戸跡は自然に埋没したようであり、中位には炭化物層の薄層も数枚みられる。

遺物には、在地産とみられる陶器鉢の底部（第 29 図－7）・甕あるいは壷の体部破片、擦り面のある自然の大型礫などがある。

【ＳＥ29】Ｂ－1 区検出。円形（径 1.5m）の素掘りの井戸跡。ＳＢ118・119 よりも新しい。深さは約 0.8m程で、他の井戸跡に比べて浅い。壁はオーバーハングしている部分もある。堆積土下部は黒褐色粘土であるが、上部は黄褐色土ブロック・砂を不均質に含む暗オリーブ褐色～黒褐色粘土で埋めもどされたような状況を示す。遺物の出土はない。

【ＳＥ30】Ｂ－1 区検出した円形（径約 1.3m）の井戸跡。深さは 1.4m。下部からは樹皮のついた径 4 ㎝前後の木杭の組合せが確認されており、これらは井戸枠の一部であった可能性もある。堆積土は人為的な埋め戻しによる。

堆積土からは、幅 28 ㎝・長さ 40 ㎝・厚さ 8 ㎜ほどの大きさの板が出土した。

【ＳＥ31】Ｂ－1 区北壁際で検出した円形（径 1.3m）の井戸跡。深さ 1.8mまで掘り下げる。下部には井戸枠の一部とみられる角材が残存していた。堆積土は下部（埋 8）と上部（埋 1～3）が人為的に埋め戻されたもの、中間層（埋 4～7）が自然堆積である。この堆積状況からすると、井戸枠の抜取り後にしばらく放置され、その後改めて埋め戻しがなされたものと考えられる。

堆積土中からは曲物の一部、小刀（第 30－4）などが出土している。

【ＳＥ58】Ｂ－2 区検出の円形（径 2.1m）の素掘り井戸跡。深さ 2.2mまで掘り下げる。断面はラッパ状に開く形態である。堆積土はいずれも自然堆積。遺物の出土はない。

《土　壙》

【ＳＫ26】Ｂ－1 区西側で検出。平面は径 2.3m～2.4mの円形、深さは 60 ㎝、断面は浅い皿状を呈する。堆積土は全て自然堆積であるが、炭化物の薄層が目立ち、特に上部（埋 1～5）はほとんど炭化物層によって形成されている。遺物は出土しなかった。

②Ｂ－3 区（第 21 図）

Ｂ－3 区は鈎型にまがる調査区である。南北方向のトレンチでは、調査区にほぼ一致して幅 6mをこえる南北方向の大溝跡 1 条とこれに付属する橋脚跡 1 ヶ所、およびこれに壊されている溝跡など、東西方向のトレンチでは、池状遺構 1 基、掘立柱建物跡 1 棟、竪穴遺構（？）1 基、井戸跡 3 基などを検出した。竪穴遺構（？）1 基と井戸跡 1 基については、農作業用道路区域のため、遺構の確認のみにとどめて掘り下げは行っていない。

《掘立柱建物跡》

【ＳＢ125】調査区の南壁に沿って柱穴列が 1 条確認されたのみであるが、南側に展開する建物跡の一部とみられる。柱穴は径 30 ㎝、柱痕跡は軽 10 ㎝前後の円形を呈する。柱痕跡は柱穴掘り方底面より地盤に 20 ㎝程度くいこんでいるものもある。柱間寸法は西から 2.25m・2.25m・1.90mである。

《溝　跡》

【ＳＤ63】Ｂ－2 区から続く南北方向の溝跡である。Ｂ－2 区と 3 区との境ではＴ字状につながるとみられる東西方向の溝跡のコーナー部分も確認されている。ＳＤ63 はＳＤ64 と重複し、これよりも新しい。また、次に説明するＳＤ100・ＳＤ103 と交差し、これらよりは古い。規模は上幅 1.8m・底幅 30～35 ㎝、深さ 0.6mで、断面は逆台形状を呈する。壁面から底面にかけては若干凹凸がある。堆積土は下層ほど粘質土になりグライ化している。

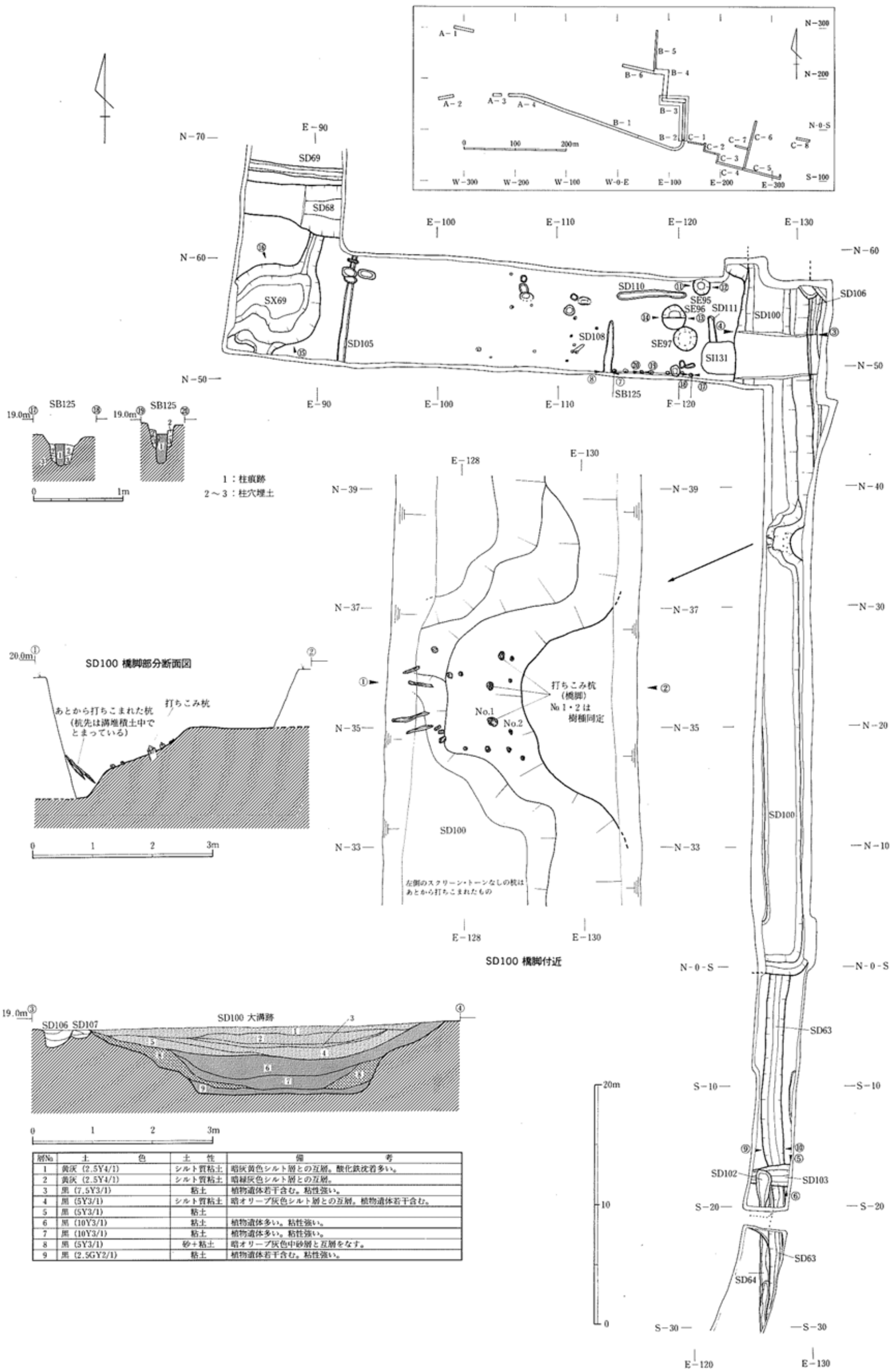
遺物には、陶器鉢・甕あるいは壷の体部破片、砥石などがある。

【ＳＤ100】南北トレンチに沿って検出された大溝跡。確認面では上幅約 6m・底幅 2.8m・深さ 1.2mであるが、調査区の壁面観察によれば、実際には上幅 7～8m・深さ 1.8m程度の規模であったものと考えられる。ＳＤ63・106・107、ＳＩ131 と重複し、これらよりも新しい。南側では西へ折れ曲がるコーナーが確認され、北側でもごく僅かながら調査区北壁近くで西へ曲がる溝のコーナーの内側部分が検出された。この西へ延びる溝は、おそらくこの地点から西延長線上にある東西方向ＳＤ68（後述）に連なるものと考えられるが、ＳＤ100 とＳＤ68 は規模や構造に明らかな違いがあるので、ＳＤ100 本体はさらに北側へ延びていく可能性が強い。

種類	出土区・遺構・層	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	備　考	写真図版
木簡	B-3 SD100 埋6/7	(8.1)	2.2	0.4	スギ	上部に穿孔。下端欠。	13－14

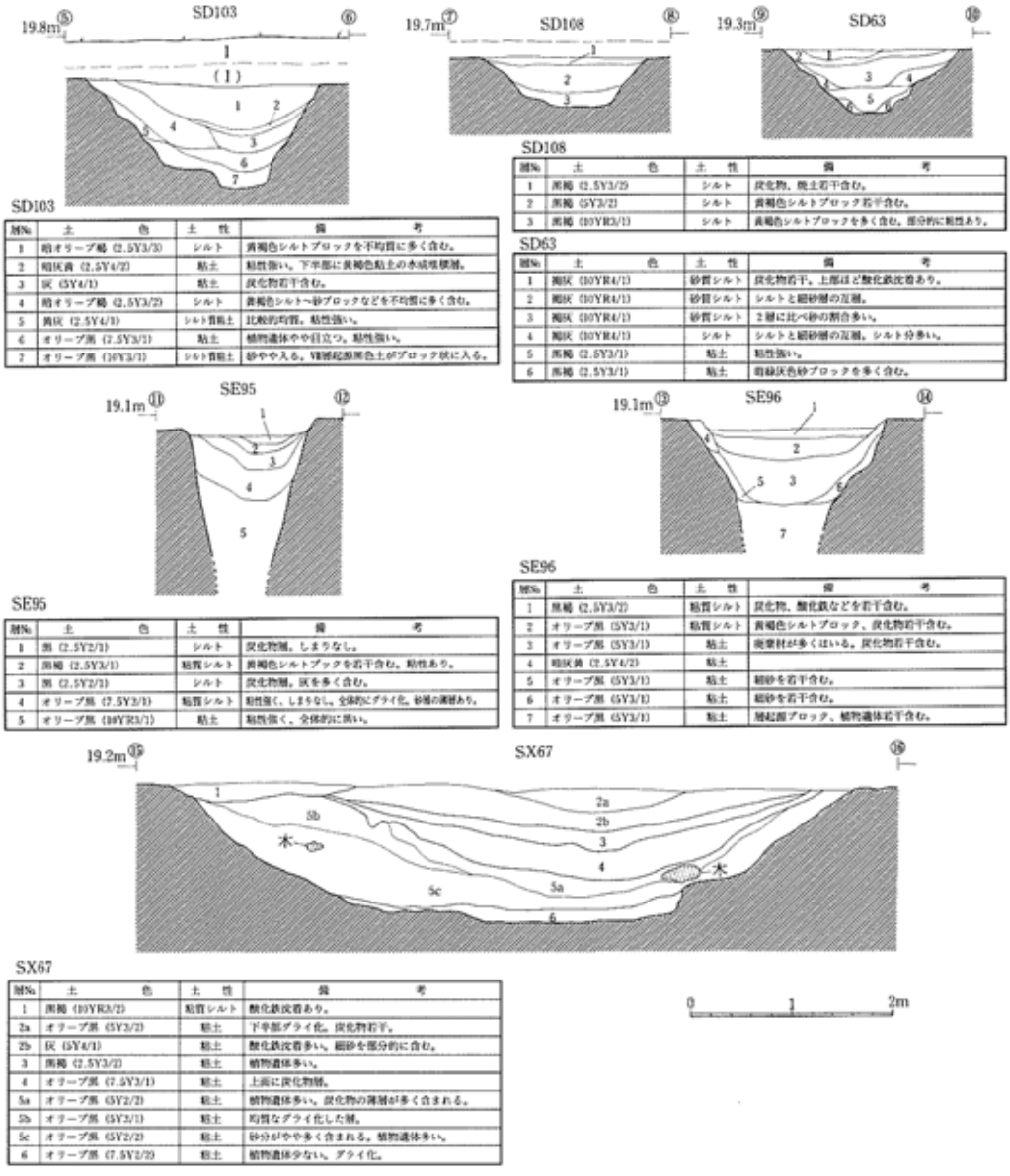
第20図　SD100 大溝跡出土木簡

南と北のコーナーの内側地点での長さは約 53m、溝の心々では推定 58m、中央からやや北に寄った地点では溝が狭まり、その斜面には径 10 ㎝前後の丸太杭が打ち込まれている（第 21 図）。これらの杭は橋脚の痕跡と考えられるが、平面図に示したように、左手側（調査区西壁）の細身の丸太材（径 4～5 ㎝：スクリーン・トーンなし）は杭先が堆積土中でとまっているので、これらは後から打ち込まれたものであることがわかる。丸太杭の一部について樹種を調べたところ、ニワトコ・ヤマウルシなどが用いられていた（付章参照）。



層No	土色	土性	備考
1	黄灰（2.5Y4/1）	シルト質粘土	暗灰黄色シルト層との互層。酸化鉄沈着多い。
2	黄灰（2.5Y4/1）	シルト質粘土	暗緑灰色シルト層との互層。
3	黒（7.5Y3/1）	粘土	植物遺体若干含む。粘性強い。
4	黒（5Y3/1）	シルト質粘土	暗オリーブ灰色シルト層との互層。植物遺体若干含む。
5	黒（5Y3/1）	粘土	
6	黒（10Y3/1）	粘土	植物遺体多い。粘性強い。
7	黒（10Y3/1）	粘土	植物遺体多い。粘性強い。
8	黒（5Y3/1）	砂＋粘土	暗オリーブ灰色中砂層と互層をなす。
9	黒（2.5GY2/1）	粘土	植物遺体若干含む。粘性強い。

第21図　B－3区遺構平面図



SD103

層No.	土色	土性	備考
1	暗オリーブ褐 (2.5Y3/3)	シルト	黄褐色シルトブロックを不均質に多く含む。
2	暗灰黄 (2.5Y4/2)	粘土	粘性強い。下半部に黄褐色粘土の水成堆積層。
3	灰 (5Y4/1)	粘土	炭化物若干含む。
4	暗オリーブ褐 (2.5Y3/2)	シルト	黄褐色シルト～砂ブロックなどを不均質に多く含む。
5	黄灰 (2.5Y4/1)	シルト質粘土	比較的均質。粘性強い。
6	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	粘土	植物遺体やや目立つ。粘性強い。
7	オリーブ黒 (10Y3/1)	シルト質粘土	砂やや入る。V層起源黒色土がブロック状に入る。

SD108

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐 (2.5Y3/2)	シルト	炭化物、焼土若干含む。
2	黒褐 (5Y3/2)	シルト	黄褐色シルトブロック若干含む。
3	黒褐 (10YR3/1)	シルト	黄褐色シルトブロックを多く含む。部分的に粘性あり。

SD63

層No.	土色	土性	備考
1	褐灰 (10YR4/1)	砂質シルト	炭化物若干。上部ほど酸化鉄沈着あり。
2	褐灰 (10YR4/1)	砂質シルト	シルトと細砂層の互層。
3	褐灰 (10YR4/1)	砂質シルト	2層に比べ砂の割合多い。
4	褐灰 (10YR4/1)	シルト	シルトと細砂層の互層。シルト分多い。
5	黒褐 (2.5Y3/1)	粘土	粘性強い。
6	黒褐 (2.5Y3/1)	粘土	明緑灰色砂ブロックを多く含む。

SE95

層No.	土色	土性	備考
1	黒 (2.5Y2/1)	シルト	炭化物層。しまりなし。
2	黒褐 (2.5Y3/1)	粘質シルト	黄褐色シルトブロックを若干含む。粘性あり。
3	黒 (2.5Y2/1)	シルト	炭化物層。灰を多く含む。
4	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	粘質シルト	粘性強く、しまりなし。全体的にグライ化。砂層の薄層あり。
5	オリーブ黒 (10YR3/1)	粘土	粘性強く、全体的に固い。

SE96

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐 (2.5Y3/2)	粘質シルト	炭化物、酸化鉄などを若干含む。
2	オリーブ黒 (5Y3/1)	粘質シルト	黄褐色シルトブロック、炭化物若干含む。
3	オリーブ黒 (5Y3/1)	粘土	廃棄材が多くはいる。炭化物若干含む。
4	暗灰黄 (2.5Y4/2)	粘土	
5	オリーブ黒 (5Y3/1)	粘土	細砂を若干含む。
6	オリーブ黒 (5Y3/1)	粘土	細砂を若干含む。
7	オリーブ黒 (5Y3/1)	粘土	基起源ブロック。植物遺体若干含む。

SX67

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR3/2)	粘質シルト	酸化鉄沈着あり。
2a	オリーブ黒 (5Y3/2)	粘土	下半部グライ化。炭化物若干。
2b	灰 (5Y4/1)	粘土	酸化鉄沈着多い。細砂を部分的に含む。
3	黒褐 (2.5Y3/2)	粘土	植物遺体多い。
4	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	粘土	上面に炭化物層。
5a	オリーブ黒 (5Y2/2)	粘土	植物遺体多い。炭化物の薄層が多く含まれる。
5b	オリーブ黒 (5Y3/1)	粘土	均質なグライ化した層。
5c	オリーブ黒 (5Y2/2)	粘土	砂分がやや多く含まれる。植物遺体多い。
6	オリーブ黒 (7.5Y3/2)	粘土	植物遺体少ない。グライ化。

第22図　B－3区遺構断面図

大溝跡の断面をみると、底面はほぼ平坦であり、壁は途中で明瞭な段がついて緩やかに立ち上がっている。堆積土は大別では 3 層に分けることができ、上位の埋 1～5 層は粘土とシルトの互層、中位の埋 6・7 層は比較的均質で植物遺体を多く含む粘土層、下位の埋 8・9 層がグライ化した砂を含む粘土層～均質な黒色粘土層である。中位の埋 6・7 層はある一定期間帯水状態が続いたことを示している。

遺物は、主としてこの埋 6～7 層から出土した。「法幢院」と墨書された木簡（第 20 図）のほか、中国産白磁皿（1 点：第 29 図－2）・古瀬戸瓶子（1 点：第 29 図－3）・陶器鉢（5 点：第 29 図－4～5）、銭貨（4 点：

開元通寶・熙寧元寶・景祐元寶・聖宋元寶、第 30 図－2～5)、茶臼（2 点：第 31 図－4・5）・石鉢（1 点：第 31 図－3)、板碑（11 点：第 32 図－1・2、第 33 図－1）など、今回検出された遺構の中では出土数が多い。

【ＳＤ103】南端部で検出した東西方向の溝跡。ＳＤ63 より新しく、ＳＤ102 より古い。調査区東壁際でみると、規模は上幅 2.3m・底幅 0.5m・深さ 1.0mである。南側壁はやや急に立ち上り、北側壁は底部近くで段がついて徐々に立ち上がる。堆積土は上層（埋 1）が人為的な埋土で、下半は水成堆積層である。ただし、中位には人為的な堆積が認められる。

遺物は、埋 2 層から開元通寶・熙寧元寶・元豊通寶・元祐通寶（第 30 図－10～13）など銭貨が 11 枚まとまって出土した。

【ＳＤ108・110・川】溝跡の規模や位置関係からみて、これら 3 条は方形状に巡る溝跡の一部と考えられる。コーナー部分はそれぞれ途切れているが、確認時には溝跡はかなり浅く、もともとは連結していた可能性もある。東側のＳＤ111 はＳＩ131 竪穴遺構（？）に切られている。調査区南壁際でみると、ＳＤ108 は上幅 1.5m・底幅 0.6m・深さ 50 ㎝で、断面は上幅の広いU字形を呈する。堆積土は黒褐色シルト層主体である。遺物の出土はない。

《池状遺構》

【ＳＸ67】西端部で検出した、池跡と推定される遺構である。南北幅は 6m前後、最深部は約 1.5m程ある。北側には取水口とみられる幅 1.2mの溝が取り付くが、ＳＤ68 に壊されている。西側は徐々に狭まりかつ浅くなりながら調査区外へと延びていく。南側には浅い溝状の張り出しがある。全体の壁の立ち上がりは比較的緩やかであるが、中位には段がつく。底面の中央付近はほぼ平坦である。堆積土はグライ化した粘土・シルトや植物遺体・丸太材などを含む黒色粘土などの互層こよって構成されている。帯水期と比較的短期間にシルト～粘土が供給される時期が交互にあったものと推定される。

堆積土からは押印のある陶器甕あるいは壷の体部破片(第 29 図－9)と曲物(第 30 図－1)、古墳時代の高坏（第 4 図－1)、種子（クルミ・モモ）などが出土している。

《井戸跡》

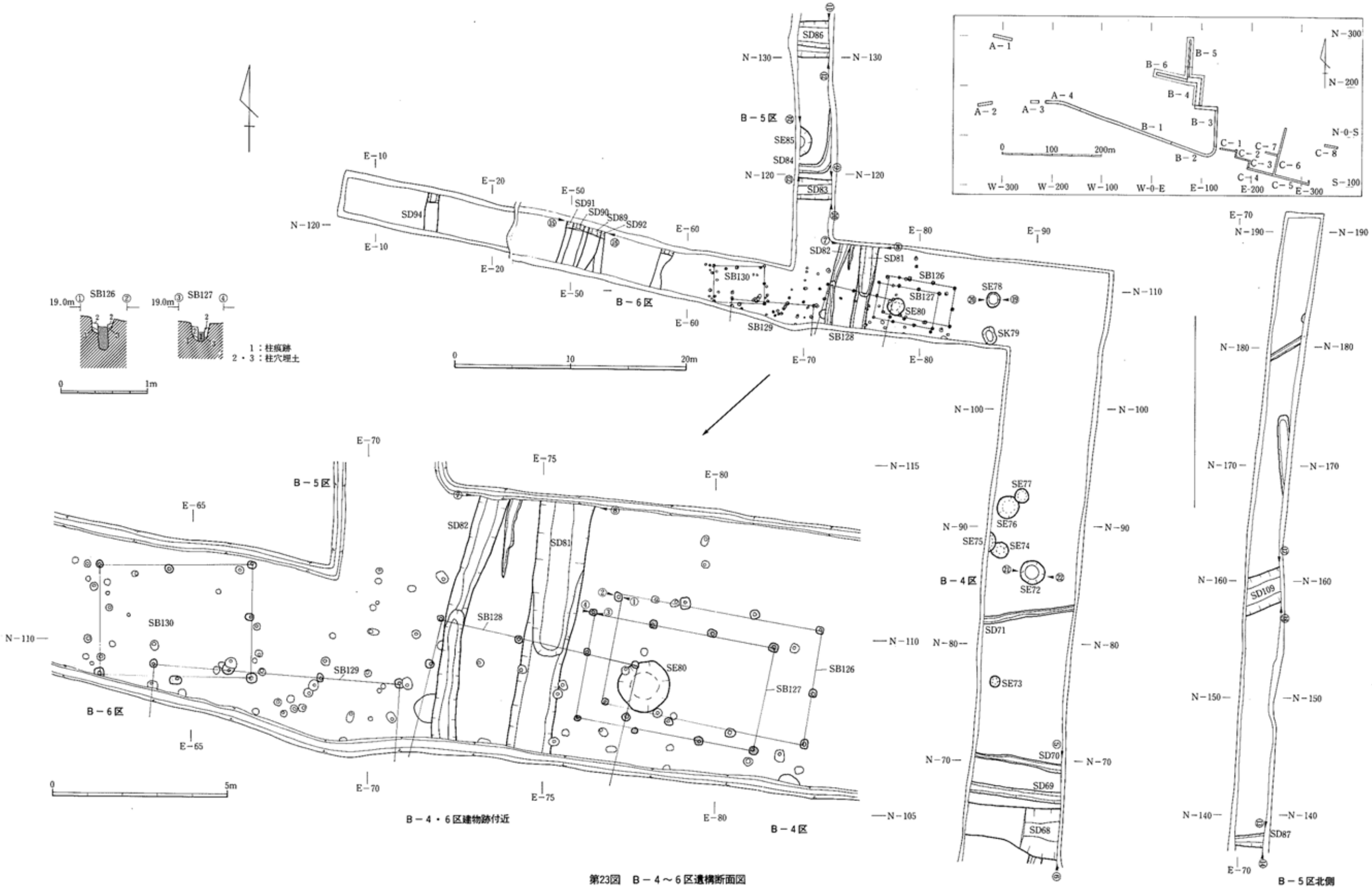
3 基近接して検出されたが、このうち排水路工事区域に入る 2 基を一部掘り下げた。

【ＳＥ95】北壁際で検出した円形（径 1.3m）の素掘り井戸。深さ 1.4mまで掘り下げる。堆積土は上部ほど炭化物層が目立ち、下部はシルト～粘土などである。遺物の出土はない。

【ＳＥ96】ＳＥ95 の南側で検出。円形（径 1.9m）の素掘り井戸。ＳＥ97 と重複し、これより新しい。深さ 1.2mまで掘り下げた。堆積土は粘質シルトや黒色粘土などである。堆積土上部には丸太材が多く含まれていた。ほかに遺物の出土はない。

③Ｂ－4～6 区（第 23 図）

Ｂ－4 区と 5 区・6 区の境付近に比較的遺構がまとまっており、掘立柱建物跡 5 棟、井戸跡 2 基、溝跡 2 条などが検出されている。また、4 区の南北方向の調査区には井戸跡が 6 基近接してあり、また、幅 5mをこえる東西方向の溝跡などもみられる。5 区・6 区は遺構がややまばらで、溝跡 13 条のほかは井戸跡 1 基などが検出されたのみである。なお、これらの調査区においても、農作業用道路区域にあたる 4 区の南北トレンチ西側と東西トレンチ南側半分および 6 区については遺構の掘り下げは一部にとどめている。

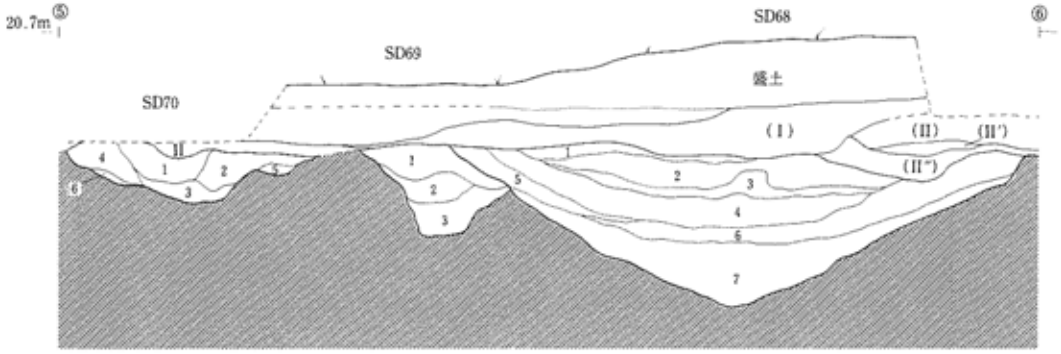


B－4・6区建物跡付近

B－4区

B－5区北側

第23図　B－4～6区遺構断面図



SD69

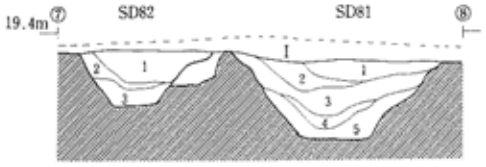
層No.	土色	土性	備考
1	暗オリーブ褐 (2.5Y3/3)	粘質シルト	炭化物、酸化鉄若干含む。
2	黒褐 (2.5Y3/2)	粘質シルト	黄褐色シルトブロック若干含む。やや粘性あり。
3	褐灰 (10YR4/1)	粘土	細砂を部分的に含む。ダライ化。

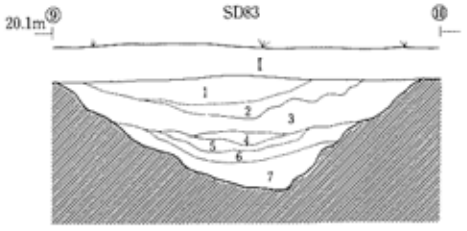
SD68

層No.	土色	土性	備考
1	オリーブ褐 (2.5Y4/3)	砂質シルト	酸化鉄、マンガン若干含む。
2	黒褐 (10YR3/1)	粘土	細砂を若干含む。
3	黒褐 (2.5Y3/1)	粘土	植物遺体、炭化物若干含む。
4	灰 (7.5Y4/1)	粘土	粘性強い。
5	オリーブ褐 (2.5Y4/3)	細砂	
6	オリーブ黒 (5Y3/2)	粘土	炭化物若干含む。部分的に細砂あり。
7	オリーブ黒 (5Y3/1)	粘土	植物遺体、炭化物若干含む。

SD70

層No.	土色	土性	備考
1	暗灰黄 (2.5Y4/2)	粘土	砂がやや入る。
2	灰黄褐 (10YR4/2)	粘質シルト	酸化鉄若干含む。
3	黒褐 (2.5Y3/2)	粘土	比較的均質。
4	黒褐 (2.5Y3/2)	粘質シルト	しまりあり。
5	オリーブ褐 (2.5Y4/3)	粘土	酸化鉄若干含む。
6	暗オリーブ褐 (2.5Y3/3)	粘土	砂がやや入る。





SD81

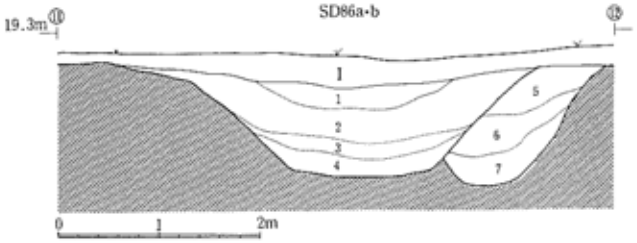
層No.	土色	土性	備考
1	褐灰 (2.5Y4/1)	シルト	酸化鉄若干含む。
2	黒褐 (10YR3/1)	シルト	部分的にダライ化。
3	緑黒 (5G2/1)	粘質シルト	粘性強い。炭化物若干含む。
4	緑黒 (5G1.7/1)	粘質シルト	粘性強い。
5	緑黒 (10GY2/1)	粘質シルト	一部砂層と互層をなす。

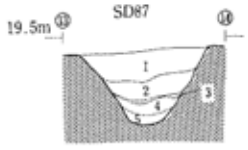
SD83

層No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐 (10YR4/3)	砂質シルト	酸化鉄、マンガン若干含む。
2	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	酸化鉄、マンガン若干含む。
3	黄灰 (2.5Y4/1)	粘質シルト	炭化物若干含む。
4	暗灰黄褐 (2.5Y4/2)	粘質シルト	粘性強い。炭化物若干含む。
5	黒褐 (2.5Y3/2)	粘質シルト	やや砂質。
6	黄灰 (2.5Y4/1)	シルト	炭化物若干含む。
7	黒褐 (2.5Y3/1)	粘質シルト	粘性強い。やや砂含む。

SD82

層No.	土色	土性	備考
1	褐灰 (10YR4/1)	シルト	黄褐色土をブロック状に含む。
2	明黄褐 (2.5Y6/6)	シルト	酸化鉄若干含む。
3	黒褐 (2.5Y3/1)	粘質シルト	やや砂質。





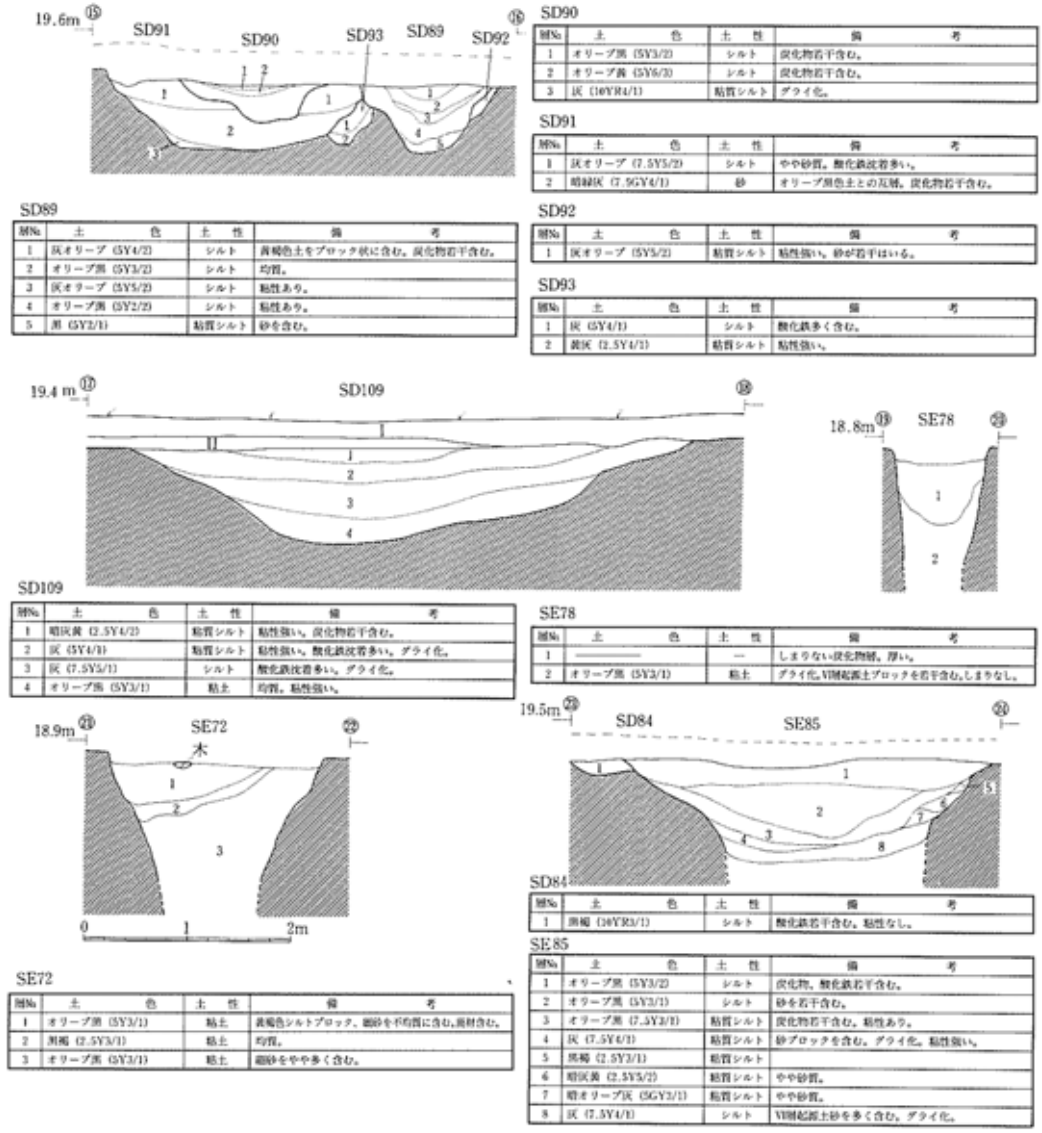
SD86a・b

層No.	土色	土性	備考
1	灰 (5Y4/1)	シルト	炭化物、酸化鉄若干含む。
2	オリーブ黒 (5Y3/2)	シルト	砂若干はいる。
3	オリーブ黒 (5Y3/1)	粘質シルト	粘性強い。
4	オリーブ黒 (5Y3/1)	砂質シルト	砂の薄層が入る。ダライ化。
5	黒 (7.5YR2/1)	シルト	酸化鉄若干含む。
6	黒 (7.5YR1.7/1)	シルト	酸化鉄若干含む。
7	黒 (10YR2/1)	粘質シルト	底面付近砂が入る。

SD87

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐 (7.5YR3/1)	シルト	炭化物若干含む。
2	暗灰 (N3/)	シルト	粘性あり。酸化鉄若干含む。
3	灰 (5Y4/1)	シルト	ややダライ化。
4	黒 (N2/)	粘質シルト	2層に細分。
5	黒褐 (2.5Y3/1)	粘質シルト	V層起源土をブロック状に含む。炭化物若干含む。

第24図　B－4～6区遺構断面図（1）



第25図　B－4～6区遺構断面図(2)

《掘立柱建物跡》

【ＳＢ126】Ｂ－4 区検出。2 間×3 間の東西棟（西梁行は 1 間)。規模は、桁行約 5.9m、梁行約 3.3mである。ＳＢ127 と重複するが、時期的な前後関係はは不明である。柱間寸法は、北桁行では西から 1.95m・2.0m・1.95m、東梁行では北から 1.85m・1.45mである。柱穴掘り方は径 25～30 ㎝程の円形状、柱痕跡は径 10 ㎝前後の円形である。柱痕跡は柱穴掘り方底面より地盤に 20 ㎝程度くいこむものもある。

【ＳＢ127】Ｂ－4 区検出。1 間×3 間の東西棟。規模はＳＢ126 よりやや小さく、桁行約 5.3m、梁行約 3.0mである。北桁行の柱間寸法は西から 1.75m・1.75m・1.8mとほぼ等間である。柱穴掘り方は径25㎝前後の円形～隅丸方形状、柱痕跡は径10㎝の円形である。

【ＳＢ130】Ｂ－6 区検出。2 間×2 間の東西棟（西梁行は 1 間）。規模は、桁行約 4.3m、梁行約 3.3mである。柱間寸法は、北桁行では西から 2.0m・2.3m、東梁行では北から 1.6m・1.7mである。柱穴掘り方は径 25 ㎝の円形、柱痕跡は径 10 ㎝前後の円形である。

《**溝　跡**》

【ＳＤ68】Ｂ－4 区と 3 区の境で検出された東西方向の溝跡。Ｂ－3 区ＳＤ100 大溝跡で述べたように、東へ延びてＳＤ100 とＴ字状につながるとみられる。ＳＸ67 池状遺構より新しい。排水路工事予定区域にかかる一部区域のみ掘り下げた。規模は、調査区東壁でみると上幅 5.7m・底幅 40～50 ㎝・深さ 1.4mであり、ＳＤ100 に次いで大きい。断面は上幅の広いＶ字状を呈し、壁は比較的緩やかに立ち上がる。堆積土は全体的にグライ化した粘土層主体。

堆積土からは、砥石（第 31－2）が 1 点出土したのみである。

【ＳＤ81】Ｂ－4 区で検出した南北方向の溝跡。調査区北壁際でみると、上幅が 2.1m・底幅 0.6～0.7m・深さ 0.7mの規模である。ただし、中央から南側は北に比べて浅くなり、深さは 0.4m程になる。断面は逆台形状を呈する。

遺物には陶器鉢（第 29 図－8）が 1 点ある。

【ＳＤ83】Ｂ－5 区検出の東西方向の溝跡。調査区東壁際では、上幅 3.5m・底幅 0.6m～0.7m・深さ 1.0mである。断面は上幅のひろいＶ字状を呈する。壁は北側が緩やかに立ち上がり、南側はこれに比べて若干急である。遺物の出土はない。

【ＳＤ86】Ｂ－5 区検出の東西方向の溝跡。重複する溝があるが、これが古い段階のＳＤ86 か、全く別の溝であるかは不明。調査区東壁では、上幅 3.5～4.0m・底幅 1.3m・深さ 0.8mである。断面は逆台形状を呈する。堆積土はシルト～粘質シルト主体で、全体的にグライ化している。遺物の出土はない。

【ＳＤ91】Ｂ－6 区検出の南北方向の溝跡。ＳＤ89・90・93 と直接の切り合い関係があり、ＳＤ89・90 より古く、ＳＤ93 より新しい。調査区北壁でみると、上幅 2.6m・底幅 1.0～1.1m・深さ 0.6mほどで、断面は逆台形状を呈する。堆積土はシルト層主体で、最下層には灰色を帯びた砂層が認められる。遺物の出土はない。

【ＳＤ109】Ｂ－5 区中央付近で検出した東西方向の溝跡。ただ、方向はこれまでの溝跡に比べてやや異なり、南西－北東方向である。この溝跡は、調査区東壁側でみると上幅 3.5～4.0m・下幅 1.2～1.5m・深さ 0.8mと規模が大きいが、幅に比べてやや浅い。遺物の出土はなかった。

《**井戸跡**》

【ＳＥ72】Ｂ－4 区検出。円形（径 2.1m）の素掘り井戸。深さ 1.3mまで掘り下げた。堆積土は人為的に埋め戻されたとみられる不均質な粘土が主体で、上部には一緒に投棄されたとみられる加工材なども含まれる。ほかに遺物の出土はない。

【ＳＥ78】Ｂ－4 区検出。円形（径 1.3m）の素掘り井戸。ほかの井戸跡に比べ一回り小さい。深さ 1.5mまで掘り下げた。堆積土上部は炭化物層主体で、下部は砂層が薄く入る粘土層である。

堆積土からは平坦な擦面のある頭大の安山岩製礫（写真図版 14－3）、イノシシの下顎骨が出土した。

（3）**C区（第 26 図）**

Ｂ区に比べて遺構は希薄になるが、東西・南北方向の溝跡 16 条をはじめ、掘立柱建物跡 2 棟、井戸跡 6 基などを検出した。遺構の分布をみると、Ｃ－1～3 区にはほとんどなく、全体的に東側によっている。溝跡は、幅 2m・深さ 1mを越える比較的規模の大きいものがあり、これらは掘立柱建物跡や井戸跡がある区域を取り囲む、区画溝的な性格をもつ可能性が強いが、どのように展開しているかは不明である。

《掘立柱建物跡》

【ＳＢ224】Ｃ－5 区東端部で一部検出。廂付建物の南東部分にあたるとみられる。柱穴は一辺 30 ㎝ほどの隅丸方形、柱痕跡は 10 ㎝ほどの円形を呈する。地盤がやや軟質なためか、柱痕跡は 5～10 ㎝ほど掘り方底面から下へくいこんでいる。東側柱列の柱間寸法は、南から 0.85m・2.20mである。

【ＳＢ225】Ｃ－8 区で一部検出。調査区の北側にのびる建物跡とみられる。柱穴は一辺 30 ㎝ほどの隅丸方形、柱痕跡は 10 ㎝ほどの円形を呈する。柱間寸法は西から 1.75m・1.70m・1.35mである。

《溝　跡》

【ＳＤ202】Ｃ－5 区東側で検出した南北方向の溝跡。ＳＤ203 と重複し、これより新しい。調査区の南壁面側でみると、上幅 2.7m・底幅 0.9m・深さは 1.1mで、断面は逆台形状を呈する。底面は比較的平坦である。

堆積土からは地元多高田窯産の可能性がある陶器壷の口縁部破片（第 29－11）、鉢などが出土した。

【ＳＤ203】Ｃ－5 区東側で検出した東西方向の溝跡。西側は調査区外へと直線的に延びるが、東側は直角に折れ曲がって北へ延びている。ＳＤ202・ＳＫ205 と重複し、これより古い。規模は確認面では上幅が約 1.2m・底幅 40 ㎝・深さは 50～60 ㎝ほどで、断面はＵ字形を呈する。堆積土はシルト主体で、下半はグライ化している。

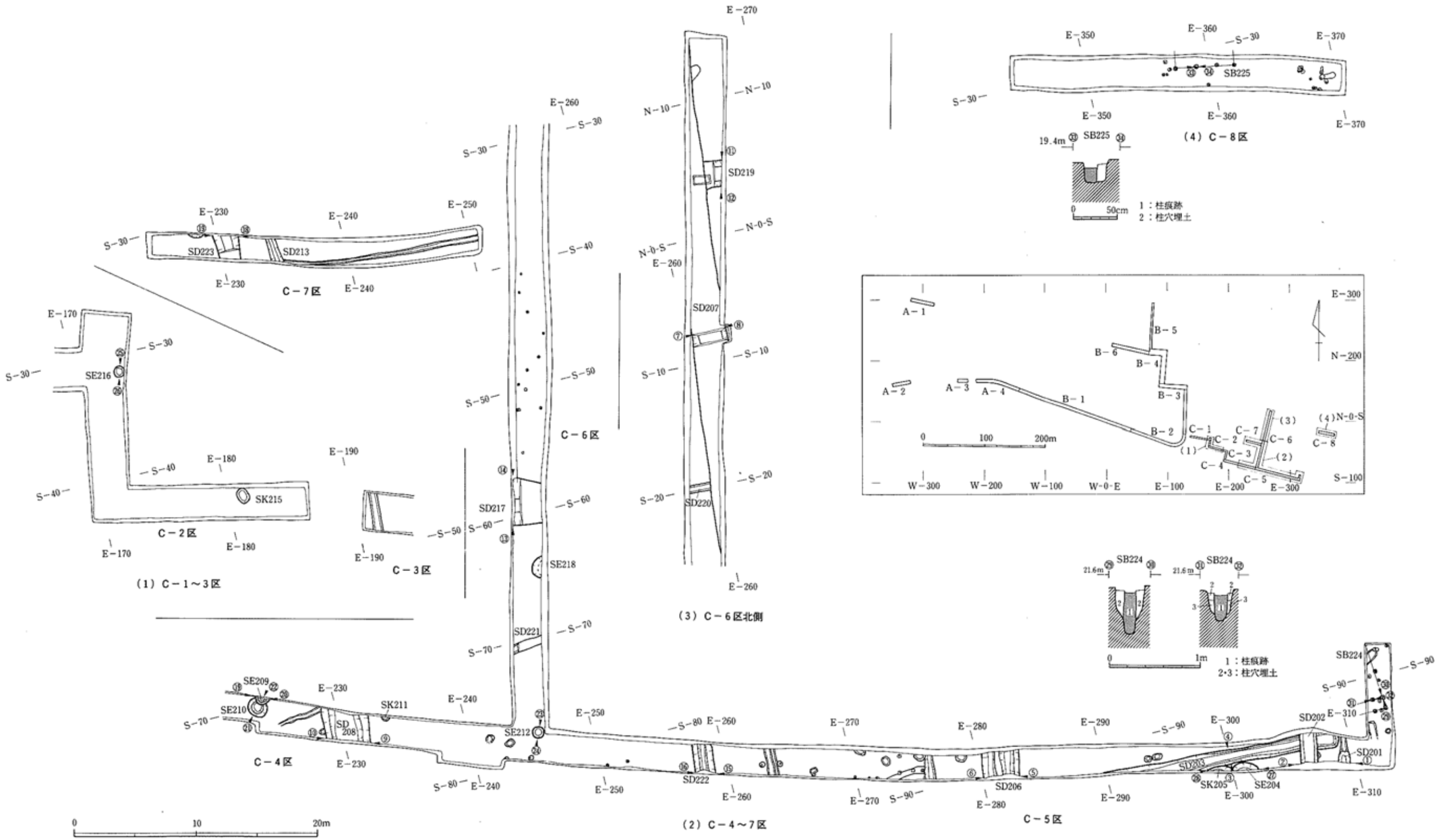
堆積土からは陶器甕あるいは壷の体部破片と銭貨（天聖元寶）などが出土した。

【ＳＤ206】Ｃ－5 区中央部で検出した南北方向の溝跡。溝の最深部は東辺側によっており、西辺側では途中で溝状の段がつく（複数の溝の重複の可能性もあったが、堆積土は不整合面をもたない）。調査区の南壁側でみると、規模は上幅 3.9m・最深部底幅 0.5m・深さ 1.5mである。堆積土の下半は褐灰～灰色粘土でグライ化している。遺物の出土はない。

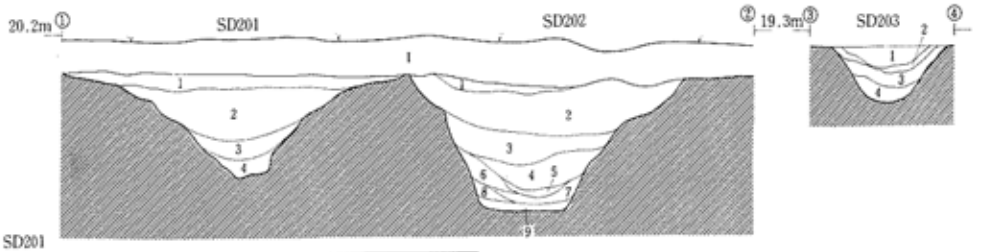
【ＳＤ207】Ｃ－6 区で検出した南北方向の溝跡。総長 38mまで確認した。南側延長線上にはＣ－5 区ＳＤ222 がみられるが、構造がやや異なり直接つながるとは考えられない。ＳＤ207 を検出したＣ－6 区は農作業用道路区域のため、この溝跡は一部の掘り下げにとどめている。ＳＤ219・ＳＤ220 と交差し、これらより新しい。規模は確認面での上幅は 2.8m・底幅 1.2m・深さは 0.9mで、断面形は逆台形状を呈す。底面は比較的平坦である。堆積土下半はグライ化。

遺物には、龍泉窯系青磁碗（第 29 図－10）が 1 点ある。

【ＳＤ208】Ｃ－4 区で検出した南北方向の溝跡。北側延長線上にＣ－7 区ＳＤ223 があるが、つながる溝跡かどうかは不明である。この溝跡は、北壁面でみると上幅約 4.8m・底幅 1.7m・深さ約 1.5mの規模である。断面は逆台形状で、中段でやや屈曲がつく。底面は比較的平坦である。堆積土はシルト～粘



第26図　C区遺構平面図



SD201

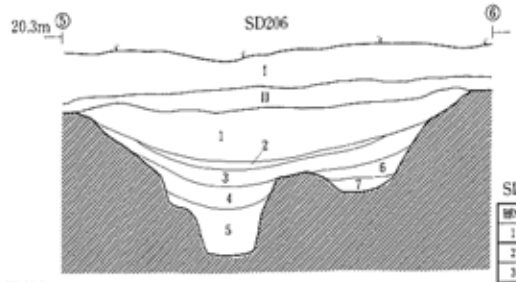
層No	土色	土性	備考
1	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	撹乱層。
2	灰黄褐 (10YR5/2)	シルト	炭化物若干含む。粘性ややあり。
3	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	炭化物若干含む。
4	褐灰 (10YR6/1)	シルト	黄褐色土ブロック多く含む。

SD202

層No	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐 (10YR4/3)	シルト	酸化鉄皮着あり。
2	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	炭化物含む。
3	褐灰 (10YR4/1)	シルト	黄褐色土ブロック、炭化物含む。
4	黒褐 (10YR3/2)	シルト	黄褐色土小ブロック、炭化物含む。
5	褐灰 (10YR4/1)	シルト	粘性ややあり。炭化物含む。
6	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	粘性ややあり。黄褐色土ブロック含む。
7	オリーブ黒 (5Y3/1)	シルト	粘性あり。炭化物含む。
8	にぶい黄 (2.5Y6/3)	砂質シルト	崩落土？
9	灰 (5Y4/1)	粘土	黄褐色土ブロック多く含む。

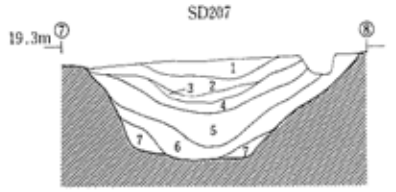
SD203

層No	土色	土性	備考
1	黒褐 (7.5YR3/1)	シルト	Ⅳ層起源土小ブロック、炭化物若干含む。
2	浅黄 (2.5Y7/4)	シルト	粘性ややあり。Ⅳ層起源土ブロック多く含む。
3	緑黒 (10GY2/1)	シルト	炭化物若干含む。グライ化。
4	緑灰 (10GY5/1)	シルト	やや砂質。グライ化。



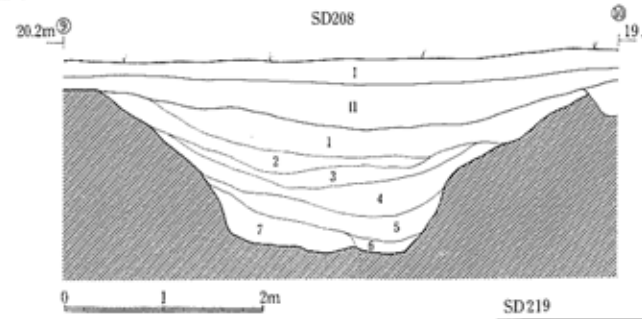
SD206

層No	土色	土性	備考
1	褐灰 (10YR4/1)	シルト	下部ほど粘性ある。炭化物含む。
2	褐灰 (10YR5/1)	粘質シルト	にぶい黄褐色土ブロックを多く含む。
3	褐灰 (10YR4/1)	粘土	にぶい黄褐色土の薄層を含む。
4	灰 (10YR4/1)	粘土	炭化物若干含む。ややグライ化。
5	灰 (7.5Y4/1)	粘土	炭化物含む。グライ化。
6	褐灰 (10YR4/1)	粘土	にぶい黄色土ブロック含む。
7	褐灰 (10YR4/1)	粘土	にぶい黄色土ブロック多く含む。



SD207

層No	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR3/2)	シルト	酸化鉄、マンガン多い。
2	明灰黄 (2.5Y4/2)	シルト	酸化鉄、マンガン多い。
3	灰 (10YR4/1)	粘質シルト	均質。グライ化。
4	オリーブ黒 (5Y3/1)	粘質シルト	均質。グライ化。
5	オリーブ黒 (10YR3/1)	シルト	3層程度の薄層が入る。下部はグライ化。
6	オリーブ黒 (5Y3/1)	シルト	炭化物若干含む。
7	黒褐 (2.5Y3/1)	粘質シルト	全体グライ化。黄褐色土小ブロック多く含む。



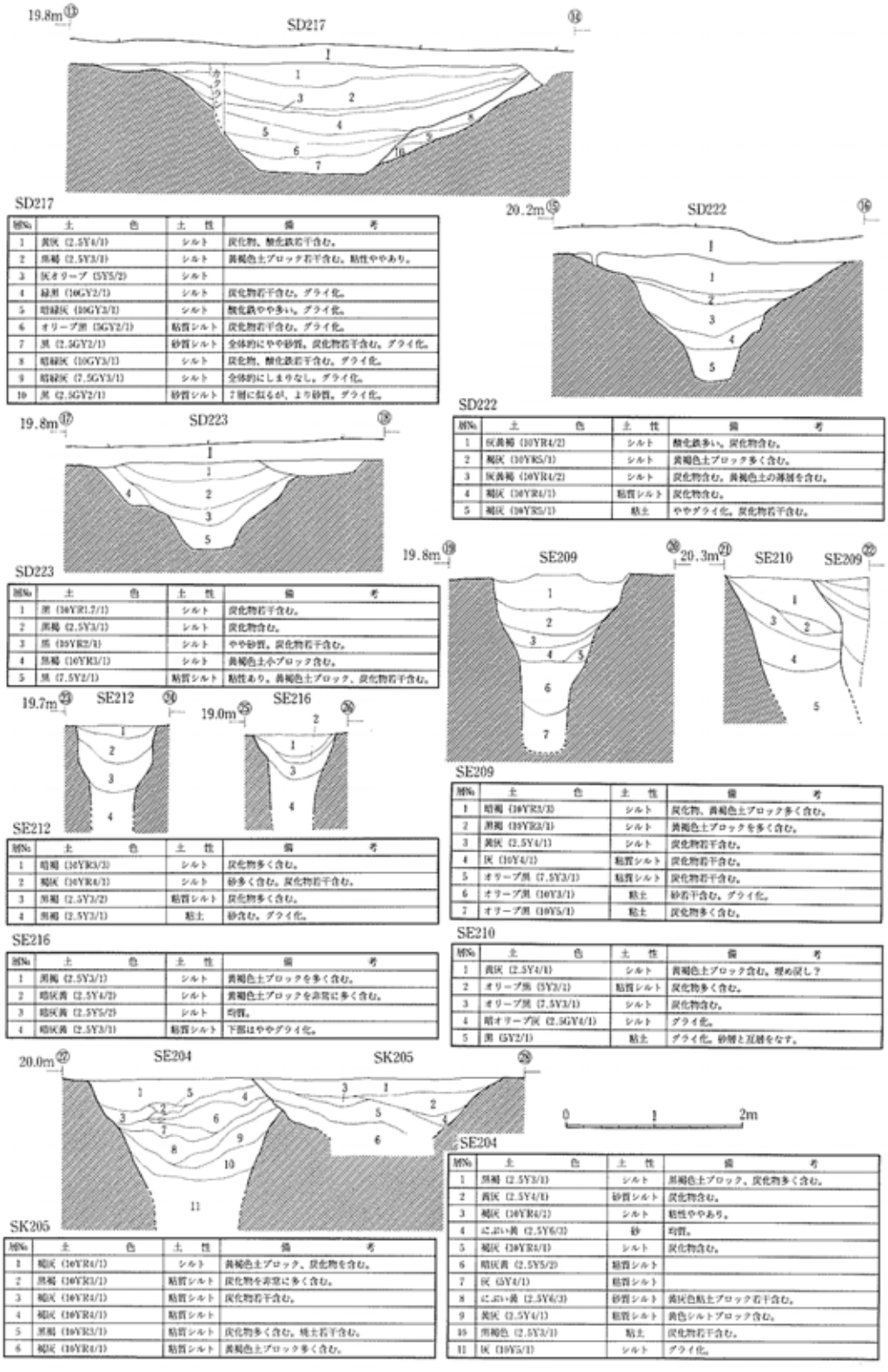
SD208

層No	土色	土性	備考
1	黒褐 (2.5Y3/1)	シルト	しまりない。炭化物若干含む。
2	黄灰 (2.5Y4/1)	シルト	下部ほど酸化鉄皮着あり。
3	黒 (10YR2/1)	シルト	グライ化した均質な堆積土。
4	オリーブ黒 (10YR3/1)	シルト	砂の薄層が若干入る。
5	黒 (10YR2/1)	粘質シルト	砂の薄層が若干入る。
6	黒 (5Y2/1)	粘質シルト	粘性あり。炭化物若干含む。
7	オリーブ黒 (10YR3/1)	粘質シルト	粘性あり。砂の薄層を多く含む。炭化物若干含む。

SD219

層No	土色	土性	備考
1	明灰黄 (2.5Y4/2)	粘質シルト	粘性あり。酸化鉄、マンガン含む。
2	黒褐 (10YR3/2)	シルト	炭化物若干含む。
3	黄褐 (2.5Y5/4)	シルト	
4	黄灰 (2.5Y1/5)	シルト	
5	黄灰 (2.5Y1/4)	シルト	黄褐色土ブロックをやや多く含む。
6	オリーブ灰 (10Y5/2)	シルト	酸化鉄やや多い。若干砂質。グライ化。
7	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	粘質シルト	砂の薄層を含む。グライ化。
8	オリーブ灰 (10Y5/2)	砂質シルト	砂をやや多く含む。グライ化。
9	オリーブ灰 (10Y5/2)	砂質シルト	炭化物若干含む。グライ化。
10	オリーブ黒 (10Y3/1)	シルト	7層に類似。グライ化。

第27図　C区遺構断面図（1）



SD217

層No.	土色	土性	備考
1	黄灰 (2.5Y4/1)	シルト	炭化物、酸化鉄若干含む。
2	黒褐 (2.5Y3/1)	シルト	黄褐色土ブロック若干含む。粘性ややあり。
3	灰オリーブ (5Y5/2)	シルト	
4	緑黒 (10GY2/1)	シルト	炭化物若干含む。グライ化。
5	暗緑灰 (10GY3/1)	シルト	酸化鉄やや多い。グライ化。
6	オリーブ黒 (5GY2/1)	粘質シルト	炭化物若干含む。グライ化。
7	黒 (2.5GY2/1)	砂質シルト	全体的にやや砂質。炭化物若干含む。グライ化。
8	暗緑灰 (10GY3/1)	シルト	炭化物、酸化鉄若干含む。グライ化。
9	暗緑灰 (7.5GY3/1)	シルト	全体的にしまりなし。グライ化。
10	黒 (2.5GY2/1)	砂質シルト	7層に似るが、より砂質。グライ化。

SD222

層No.	土色	土性	備考
1	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	酸化鉄多い。炭化物含む。
2	褐灰 (10YR5/1)	シルト	黄褐色土ブロック多く含む。
3	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	炭化物含む。黄褐色土の薄層を含む。
4	褐灰 (10YR4/1)	粘質シルト	炭化物含む。
5	褐灰 (10YR5/1)	粘土	ややグライ化。炭化物若干含む。

SD223

層No.	土色	土性	備考
1	黒 (10YR1.7/1)	シルト	炭化物若干含む。
2	黒褐 (2.5Y3/1)	シルト	炭化物含む。
3	黒 (10YR2/1)	シルト	やや砂質。炭化物若干含む。
4	黒褐 (10YR3/1)	シルト	黄褐色土小ブロック含む。
5	黒 (7.5Y2/1)	粘質シルト	粘性あり。黄褐色土ブロック、炭化物若干含む。

SE209

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐 (10YR3/3)	シルト	炭化物、黄褐色土ブロック多く含む。
2	黒褐 (10YR3/1)	シルト	黄褐色土ブロックを多く含む。
3	黄灰 (2.5Y4/1)	シルト	炭化物若干含む。
4	灰 (10Y4/1)	粘質シルト	炭化物若干含む。
5	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	粘質シルト	炭化物若干含む。
6	オリーブ黒 (10Y3/1)	粘土	砂若干含む。グライ化。
7	オリーブ黒 (10Y5/1)	粘土	炭化物多く含む。

SE212

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐 (10YR3/3)	シルト	炭化物多く含む。
2	褐灰 (10YR4/1)	シルト	砂多く含む。炭化物若干含む。
3	黒褐 (2.5Y3/2)	粘質シルト	炭化物多く含む。
4	黒褐 (2.5Y3/1)	粘土	砂含む。グライ化。

SE216

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐 (2.5Y3/1)	シルト	黄褐色土ブロックを多く含む。
2	暗灰黄 (2.5Y4/2)	シルト	黄褐色土ブロックを非常に多く含む。
3	暗灰黄 (2.5Y5/2)	シルト	均質。
4	暗灰黄 (2.5Y3/1)	粘質シルト	下部はややグライ化。

SE210

層No.	土色	土性	備考
1	黄灰 (2.5Y4/1)	シルト	黄褐色土ブロック含む。埋め戻し？
2	オリーブ黒 (5Y3/1)	粘質シルト	炭化物多く含む。
3	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	シルト	炭化物含む。
4	暗オリーブ灰 (2.5GY4/1)	シルト	グライ化。
5	黒 (5Y2/1)	粘土	グライ化。砂質と互層をなす。

SE204

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐 (2.5Y3/1)	シルト	黒褐色土ブロック、炭化物多く含む。
2	黄灰 (2.5Y4/1)	砂質シルト	炭化物含む。
3	褐灰 (10YR4/1)	シルト	粘性ややあり。
4	にぶい黄 (2.5Y6/3)	砂	均質。
5	褐灰 (10YR4/1)	シルト	炭化物含む。
6	暗灰黄 (2.5Y5/2)	粘質シルト	
7	灰 (5Y4/1)	粘質シルト	
8	にぶい黄 (2.5Y6/3)	砂質シルト	黄灰色粘土ブロック若干含む。
9	黄灰 (2.5Y4/1)	粘質シルト	黄色シルトブロック含む。
10	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	炭化物若干含む。
11	灰 (10Y5/1)	シルト	グライ化。

SK205

層No.	土色	土性	備考
1	褐灰 (10YR4/1)	シルト	黄褐色土ブロック、炭化物を含む。
2	黒褐 (10YR3/1)	粘質シルト	炭化物を非常に多く含む。
3	褐灰 (10YR4/1)	粘質シルト	炭化物若干含む。
4	褐灰 (10YR4/1)	粘質シルト	
5	黒褐 (10YR3/1)	粘質シルト	炭化物多く含む。焼土若干含む。
6	褐灰 (10YR4/1)	粘質シルト	黄褐色土ブロック多く含む。

第28図　C区遺構断面図（2）

質シルト層主体で、下半はグライ化している。

遺物には陶器鉢の口縁部（第 29 図－12）などがある。

【ＳＤ217】Ｃ－6 区で検出した東西方向の溝跡。調査区西壁際を一部掘り下げた。一度造りかえがなされており、北側に旧溝の痕跡が残っている。新期の溝は、西壁際でみると上幅が約 4.2m・底幅は 1.2m・深さは 1.2mで、断面は逆台形状を呈している。底面は平坦である。堆積土はシルト～粘質シルト層で、下半はグライ化している。

堆積土からは押印のある陶器甕あるいは壷の体部破片（第 29 図－15）や板碑（第 33 図－2・3：同一個体か）などが出土した。

【ＳＤ219】Ｃ－6 区北側で検出した東西方向の溝跡。ＳＤ207 と直行するが、これより古い。調査区東壁でみると、上幅 2.6m・底幅 0.7m・深さ 1.1mで、断面は上幅がややひろがる逆台形状を呈する。堆積土下半はグライ化している。

遺物には、押印のある陶器甕あるいは壷の体部破片（第 29 図－13）がある。

なお、ＳＤ207 と交差する区域を一部掘り下げたところ、ＳＤ219 はこの地点で立ち上がっているので（写真図版 8－6）、一旦ここで終わっている可能性もある。

【ＳＤ222】Ｃ－5 区で検出した南北方向の溝跡。調査区南壁でみると、上幅は 3.1m・底幅 0.4m・深さは 1.3mで、断面は下半が狭くなる逆台形状を呈する。

堆積土からは陶器壷あるいは甕の体部破片が出土している。

【ＳＤ223】Ｃ－7 区西側で検出した南北方向の溝跡。調査区南壁際では、上幅約 2.5m・底幅 0.5m・深さは 0.9mである。東側は中位で段がつく。遺物の出土はない。

《**井戸跡**》

【ＳＥ204】Ｃ－5 区の南壁際で一部検出。ＳＫ205（土壙にしているが井戸の可能性あり）より古い。径が 2m以上ある素掘りの井戸。約 1.2mまで掘り下げた（深さ不明）。堆積土は自然堆積である。陶器甕あるいは壷とみられる体部破片が 1 点出土した。

【ＳＥ209】Ｃ－区北壁際で一部検出。ＳＥ210 と重複し、これより新しい。径 1.8m程の円形を呈する素掘りの井戸跡とみられる。深さは約 2.1m。上部の堆積土（埋 3）は埋め戻しによるもの。

遺物は曲物の一部（？）とみられる木片が出土したのみである。

【ＳＥ210】Ｃ－4 区検出。ＳＥ209 と重複し、これより古い。径 1.7mの円形を呈する素掘りの井戸跡。堆積土は上部（埋 1）が人為的埋土で、それ以下は自然堆積層である。

遺物は曲物（第 30 図－2）が 1 点出土している。

【ＳＥ212】Ｃ－5 とＣ－6 区の境で検出。径約 90 ㎝円形を呈する素掘りの井戸。約 90 ㎝まで掘り下げた（深さ不明）。途中段がつき、狭くなる。堆積土の一部（埋 2）は人為的に埋め戻された可能性がある。下半（埋 4）は黒褐色粘土層でグライ化している。遺物の出土はない。

【ＳＥ216】Ｃ－2 区検出。径約 80 ㎝の円形を呈する素掘りの井戸。約 80 ㎝まで掘り下げた（深さ不明）。堆積土上部（埋 1～3）は人為的に埋め戻されたような状況を示す。下半部（埋 4）は自然堆積層である。遺物の出土はない。

《**土　壙**》

【ＳＫ211】Ｃ－4 区北壁際で一部検出した。全体の規模は不明であるが、確認した分では東西幅約 60～70 ㎝・南北幅 30 ㎝・深さは 50～60 ㎝である。堆積土は黒褐色シルト層主体で、黄褐色土シルトブロックを多く含み、埋め戻しによるものとみられる。

底面近くからは銭貨 6 枚（第 30 図－15～19：元豊通寶 1・紹聖元寶 2・元祐通寶 1・皇宋通寶 1・不明 1）がまとまって出土した（写真図版 7－6）。他に遺物の出土はない。

土壙の大きさや堆積土、銭貨の出土状況からすると、墓壙の可能性も考えられる。

[出土遺物]（第 29 図～第 33 図）

今回の調査で出土した中世の遺物は、表 1 に示したように、陶磁器類（51 点：破片数）、木簡（1 点）・曲物（3 点）、小刀（2 点）・銭貨（25 枚）、茶臼（3 点）・石鉢（1 点）・砥石（7 点）・板碑（16 点）などである。全般に数量は少なく、それぞれ散発的な出土状況である。ただし、Ｂ－3 区ＳＤ100 大溝跡からは比較的まとまって出土している。

陶磁器類

【磁器】2 点ある。第 29 図－2 はＢ－3 区ＳＤ100 大溝跡から出土した無高台の白磁皿である。体部～口縁部が欠損しているが、体部中位で内側に「く」字状に屈曲する器形とみられる。底部はやや厚みがある。全体に灰オリーブ色系の釉薬がかかるが、底部外面は釉がかきとられている。内面見込みには劃花文が配される。10 はＣ－6 区ＳＤ207 出土の青磁碗である。全体的に厚みのある丸碗で、オリーブ灰色系の釉薬がかかる。高台部の釉は畳付から高台内までまわるが、途中から露胎になっている。年代的には、前者は 12 世紀後半から 13 世紀（横田・森田 1978）、後者は 15 世紀頃の龍泉窯系の製品（上田 1982）であろう。

【陶器】施釉陶器は、印花文を施した 14 世紀頃の古瀬戸瓶子（瀬戸市教委ほか 1996）の破片（第 29 図－3）1 点のみである。これ以外は無釉陶器で、鉢口縁部（第 29 図－4・5・8・12）や底部（7）、壷口縁部（11）、甕もしくは壷の底部（1）、押印のある甕もしくは壷の体部破片（6・9・13～15）などがみられる。11 の壷口縁部破片は、地元多高田窯（藤沼ほか 1978）の製品の可能性がある。色調は赤褐色、口縁はいわゆる受け口状になり、口縁帯は幅が狭く約 1.6 ㎝、頸部には強くヨコナデが施されている。年代は 13 世紀後半から 14 世紀前半頃と推定される。5 の鉢や 6・9・13～15 の甕あるいは壷は東海系（常滑）の製品である。

木製品

【木簡】第 20 図に示したように、ＳＤ100 大溝跡から「法幢院」と墨書された木簡が 1 点出土した。下半が欠損しているが、残存長は 8.1 ㎝・幅 2.2 ㎝・厚さ 0.4 ㎝を計る。「法幢院」の墨書は両面にみられる。上部には径 1mmほどの穿孔がなされているので、付け札として使用されたものと考えられる。

樹種はスギ（付章参照）である。

【曲物】3 点あるが、形態が分かるのは図示した 2 点（第 30 図－1・2）である。1 は径 9.6～9.9 ㎝、高さ 8.2 ㎝と小型である。2 は側板が破損しているが、径 23.7 ㎝、高さ 7.4 ㎝ほどの大きさである。底板には 4 ヶ所穿孔があり、これに対応して側板にも穿孔が認められる。また、底板側面には釘穴が 3 ヶ

表1　中世遺物出土一覧

調査区	遺構		磁器		陶器					木製品			金属製品			石製品				その他
			皿	碗	瓶子	鉢類	壺類	甕or壺	不明	木錘	曲物	その他	小刀	銭貨	その他	茶臼	石鉢	砥石	板碑	
A区	溝跡	SD01					1													
		SD10						1												
		SD12						1	1											
		SD14				1		2												
B区	溝跡	SD50						1					1	1				1		
		SD61				1								1						
		SD63				1		1	1									1		
		SD68																1		
		SD81				1														
		SD100	1		1	5			2	1		1		4	1	2	1	1?	3(8)	種子（クルミ） ウマ橈骨
		SD103												11						
	池跡	SX67						1			2									種子(クルミ・モモ) 鉄さい2
	井戸跡	SE28				1		2										(1)		
		SE30										1								
		SE31									1	1	1							
		SE40							1											
		SE78										1						(1)		イノシシ下顎骨
		SE96										1								
	土壙	SK34													1					
	表土ほか					2		2	4					1					1	
C区	溝跡	SD202				1	1		1											鉄さい1
		SD203						1						1				1		
		SD207		1																
		SD208				1			1							1?				
		SD217					1	1											2	
		SD219						1												
		SD222						1												
	井戸跡	SE204						1												
		SE209										1								
		SE210						1												
	土壙	SK211												6						
	表土ほか					1		2	1										1	
計			1	1	1	15	3	18	12	1	3	6	2	25	2	3	1	5(2)	7(8)	

註1．陶磁器類の数値は破片数。
註2．砥石（　）は、頭大の自然礫に擦り面があるもの
註3．板碑（　）は、種子・銘文が刻み込まれていないが、材質や形状から板碑の破片と考えられるもの。他に出土位置不明が1点ある。

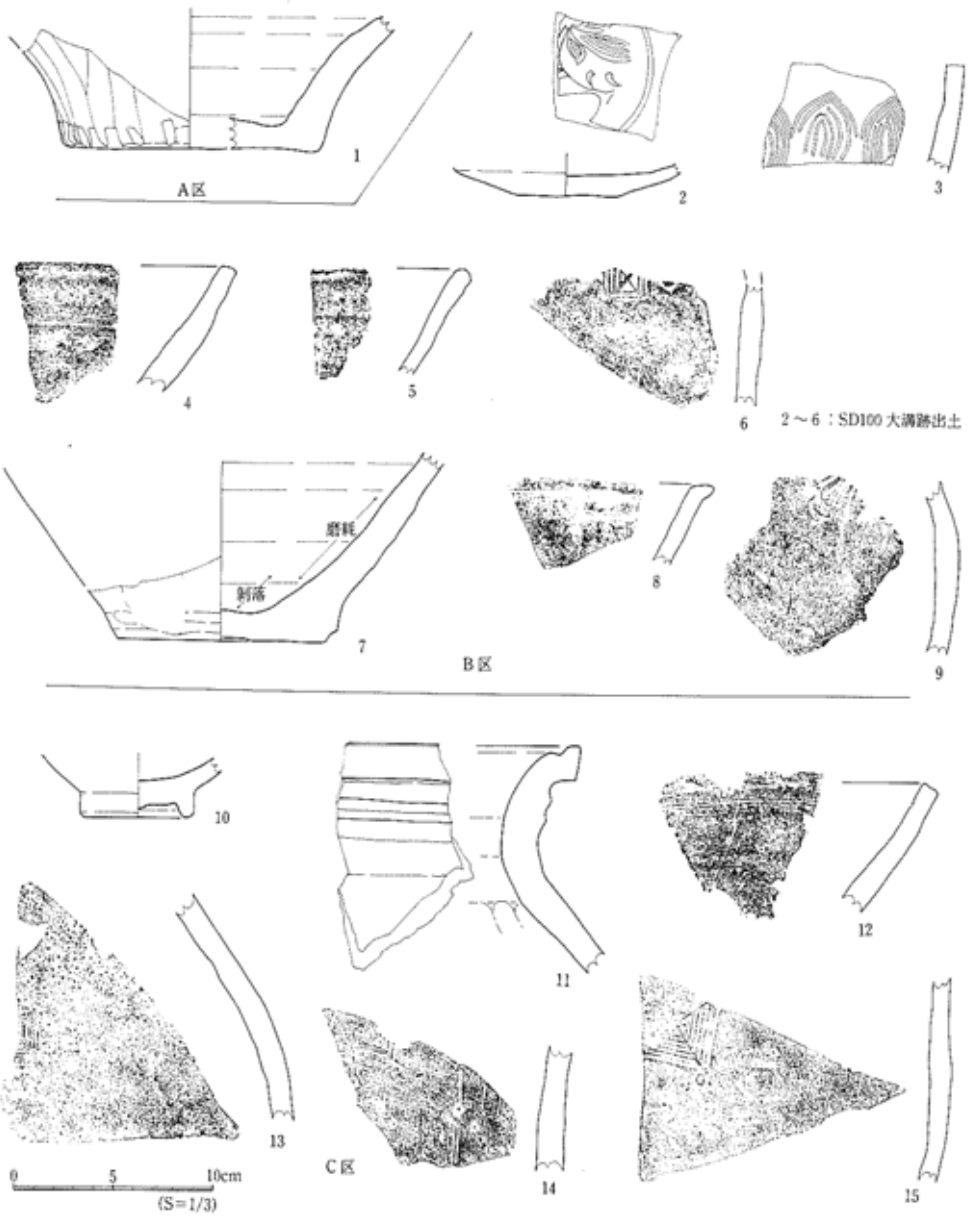
所あり、うち1ヶ所には木釘が残存している。

樹種は、1がアスナロ、2は底板・側板ともスギ（付章参照）である。

金属製品

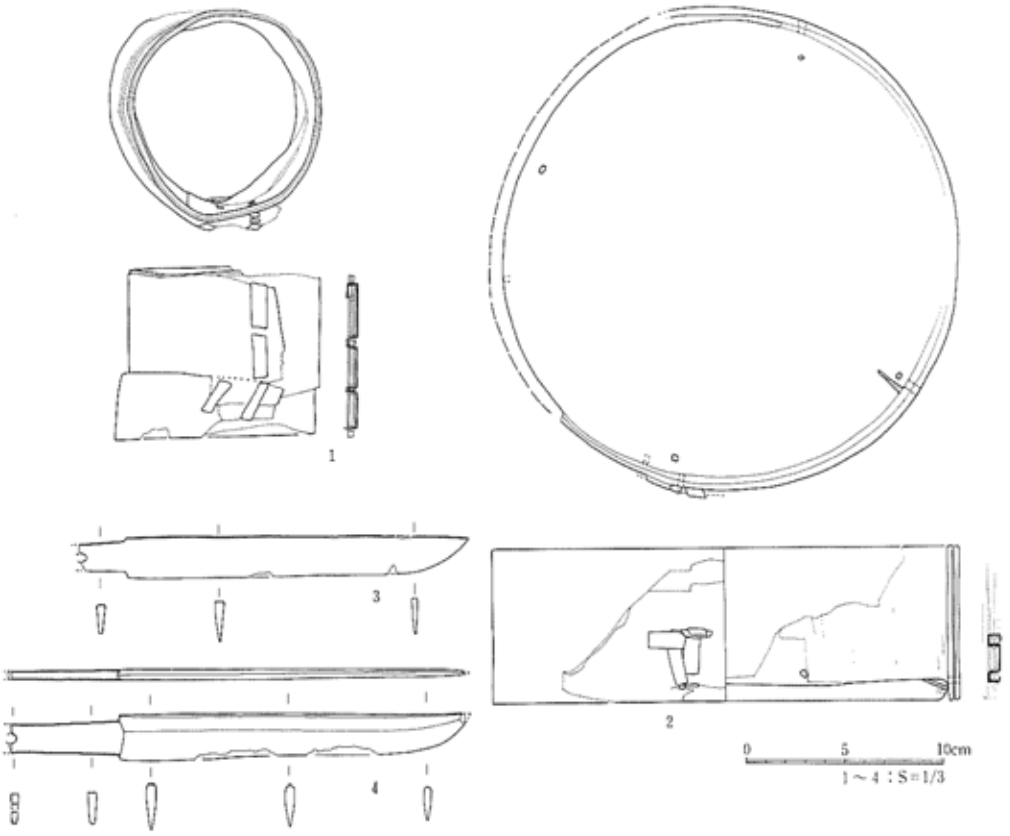
【小刀】2点（第30図－3・4）ある。刃身部は残存するが、茎の目釘穴から先が欠損している。3は平造りで、刃長17.3㎝。4は縞造りで、刃長推定17.7㎝（切先若干欠損）、2点ともサイズがほぼ同じである。

【銭貨】全部で25枚ある。内訳は、開元通寶（初鋳年960）2枚、天禧通寶（1017）2枚、天聖元寶（1023）1枚、景祐元寶（1034）1枚、皇宋通寶（1038）2枚、熙寧元寶（1068）4枚、元豊通寶（1078）2枚、元祐



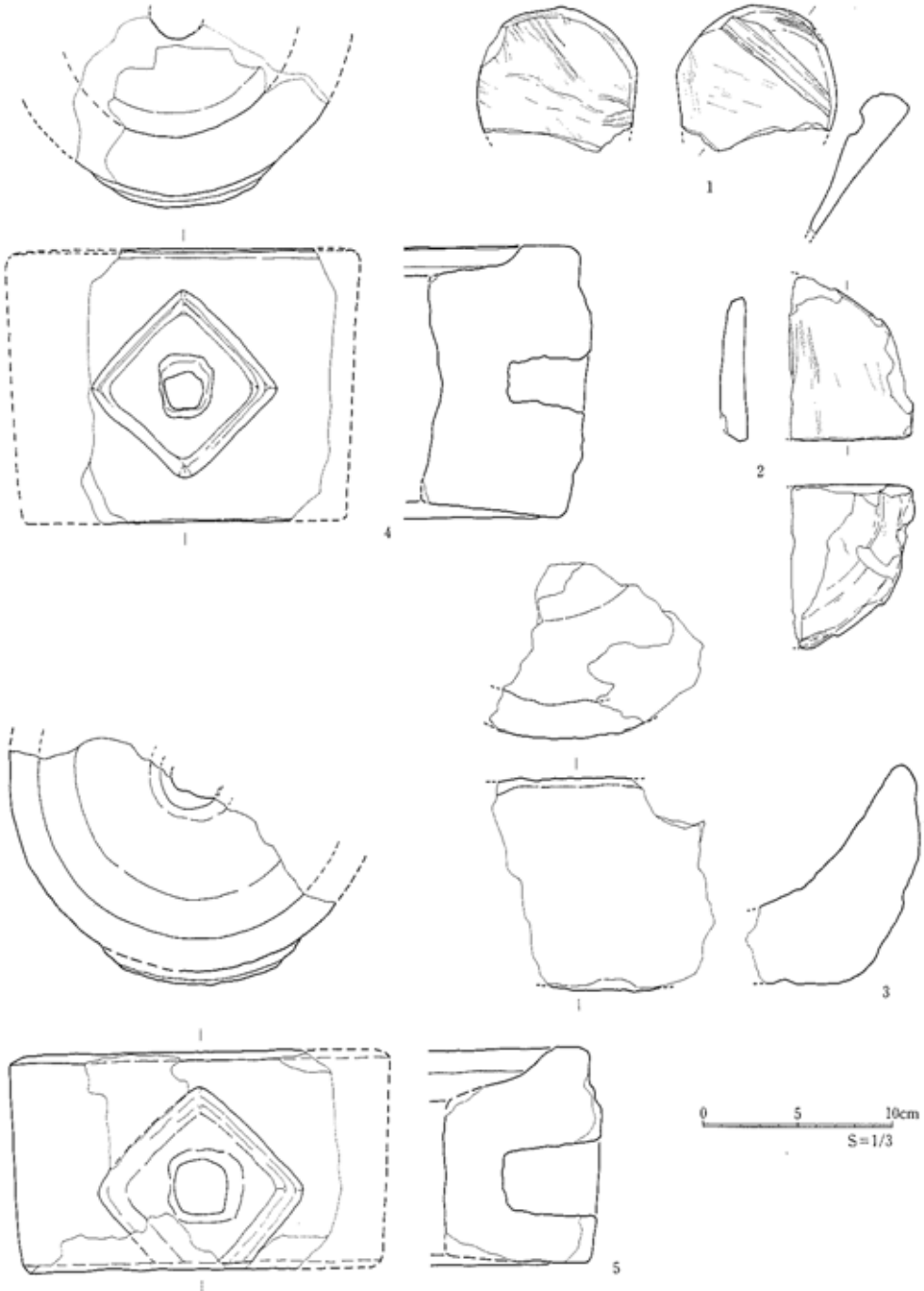
No.	器種	出土区・遺構・層	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	無釉陶器 壺or甕	A－3 SD10	一部	—	(12.4)	—	在地産 外面ケズリ→底部縁辺静止状工具による押し引き 内面ヨコナデ	13－13	陶磁4
2	白磁 皿	B－3 SD100 埋6/7	1/3	—	(5.0)	—	中国産 ?12世紀後半～13世紀 内面劃花文 底面外部釉かきとる。	1－3	陶磁1
3	施釉陶器 瓶子	B－3 〃 〃	一部	—	—	—	古瀬戸 14世紀 印花文 内面ナデ	1－2	陶磁2
4	無釉陶器 鉢	B－3 〃 〃	一部	—	—	—	在地産 内外面ナデ	13－12	陶磁12
5	〃 〃	B－3 〃 〃	一部	—	—	—	東海系 内外面ナデ 擂痕ざ痕あり	13－3	陶磁10
6	〃 壺or甕	B－3 〃 〃	一部	—	—	—	東海系 外面ナデ 押印あり 内面ヨコナデ	13－7	陶磁11
7	〃 鉢	B－1 SE28	1/3	—	10.4	—	在地産？ 内外面ナデ 内面摩滅 底部内面小孔(凹)多い。	13－12	陶磁5
8	〃 鉢	B－4 SD81	一部	—	—	—	在地産 内外面ナデ	13－4	陶磁9
9	〃 壺or甕	B－4 SX67 埋2	一部	—	—	—	東海系 外面ナデ 押印あり 内面ナデ	13－8	陶磁8
10	青磁 碗	C－6 SD207	1/3	—	5.0	—	龍泉窯系 無文	13－1	陶磁3
11	無釉陶器 壺	C－5 SD202	一部	—	—	—	在地産：多高田窯（?） 外面口頸部ヨコナデ	13－6	陶磁6
12	〃 鉢	C－4 SD208	一部	—	—	—	在地産 内外面ナデ	13－5	陶磁13
13	〃 壺or甕	C－6 SD219	一部	—	—	—	東海系 内外面ナデ 押印あり	13－9	陶磁15
14	〃 壺or甕	C－6 旧層?	一部	—	—	—	東海系 内外面ナデ 押印あり	13－11	陶磁16
15	〃 壺or甕	C－6 SD217	一部	—	—	—	東海系 内外面ナデ 押印あり	13－10	陶磁14

第29図 中世の遺物（1）陶磁器類



№	種　類	出土区・遺構・層			特　徴				写真図版	登録
1	曲　物	B－3	SX67	埋5	アスナロ。径9.6～9.9cm、高さ8.2cm、側板厚さ0.1～0.3cm。				13－15	木2
2	〃	C－4	SE210		スギ。径（23.7cm）、高さ7.4cm、底板厚さ0.8～1.0cm、側板厚0.25cm。				13－16	木3
3	小　刀	B－1	SD60b	埋5	平造り。残存長19.7cm、刃長17.3cm。				13－17	金2
4	〃	B－1	SE31	埋5	鎬造り。残存長23.1cm、刃長推定17.7cm。				13－18	金1
№	銭貨(銭名)	出土区・遺構・層			径(mm)	厚(mm)	重(g)	特　徴	写真図版	登録
5	熙寧元寶	B－1	SD51	埋1	24.9	1.1	1.40	北宋：1068（初鋳年）　篆書	13－19	銭2
6	開元通寶	B－3	SD100	埋6/7	23.8	1.1	2.84	唐　：960　真書	13－20	銭6
7	景祐元寶	B－3	〃	〃	25.1	1.3	2.82	北宋：1034　真書	13－21	銭4
8	熙寧元寶	B－3	〃	〃	23.5	1.3	3.50	北宋：1068　篆書	13－22	銭3
9	聖宋元寶	B－3	〃	〃	24.0	1.4	3.60	北宋：1101　行書	13－23	銭5
10	熙寧元寶	B－3	SD103	埋2	24.0	1.4	2.84	北宋：1068　篆書	13－24	銭8
11	熙寧元寶	B－3	〃	〃	24.0	1.3	3.08	北宋：1068　真書	13－25	銭9
12	元祐通寶	B－3	〃	〃	24.2	1.4	3.46	北宋：1086　行書	13－26	銭10
13	元豊通寶	B－3	〃	〃	25.0	1.4	2.20	北宋：1078　篆書	13－27	銭11
14	天聖元寶	C－5	SD203	埋1	24.8	1.6	3.18	北宋：1023　篆書	13－28	銭25
15	皇宋通寶	C－4	SK211		24.3	1.1	1.98	北宋：1038　篆書	13－29	銭24
16	元豊通寶	C－4	SK211		24.2	1.3	2.42	北宋：1078　篆書	13－30	銭20
17	元祐通寶	C－4	SK211		24.7	1.5	3.56	北宋：1086　篆書	13－31	銭22
18	紹聖元寶	C－4	SK211		23.8	1.3	2.32	北宋：1094　行書	13－32	銭21
19	紹聖元寶	C－4	SK211		23.8	1.1	2.62	北宋：1094　行書	13－33	銭23

第30図　中世の遺物（2）木・金属製品



No.	種類	出土区・遺構・層	石材	特徴	写真図版	登録
1	砥石	C－5 SD03 埋1	砂岩	下半欠損。両面、側面に擦痕。片面に溝状凹あり。	14－1	石9
2	砥石	B－4 SD68	凝灰岩	左側欠損。両面に擦痕。	14－2	石7
3	石鉢	B－3 SD100 埋6/7	安山岩	一部残存。口径20.6cm？ 器高10.8cm	14－4	石4
4	茶臼	B－3 〃 〃	安山岩	上臼。残存1/4。上径（18.6)cm、下径（17.0)cm、器高13.5cm。挽き木孔周辺部に◇形文の装飾	14－5	石1
5	茶臼	B－3 〃 〃	安山岩	上臼。残存1/2。上径（20.0)cm、下径（19.0)cm、器高10.8cm。挽き木孔周辺部に◇形文の装飾	14－6	石2

第31図　中世の遺物（3）石製品

通寶（1086）2 枚、紹聖元寶（1094）2 枚、聖宋元寶（1101）1 枚、不明 6 枚である。銭貨名が判読できた 19 枚のうち、開元通寶を除いてはすべて北宋銭である。

遺構別の出土をみると、Ｂ－3 区のＳＤ100 大溝跡 4 枚（第 30 図－6～9）、ＳＤ103 溝跡 11 枚（第 30 図－10～13）、Ｃ－4 区のＳＫ211 土壙 6 枚（第 30 図－15～19）などとなっている。ＳＫ211 の銭貨は、前述したように墓の副葬品の可能性がある。これら以外は 1 点ずつのみ。

石製品

【砥石】小型の破損品 5 点（第 31 図－1・2）と、大型の礫素材のものが 2 点（写真図版 14－3）ある。1・2 は、砂岩・凝灰岩製の板状の砥石で、両面と側面に擦痕が観察される。大型のものは、径 15～20 ㎝ほどの安山岩礫を利用しており、上面・下面・側面に平坦な擦面が形成されている。

【石鉢】破片資料が 1 点（第 31 図－3）ある。安山岩製。ＳＤ100 大溝跡出土。

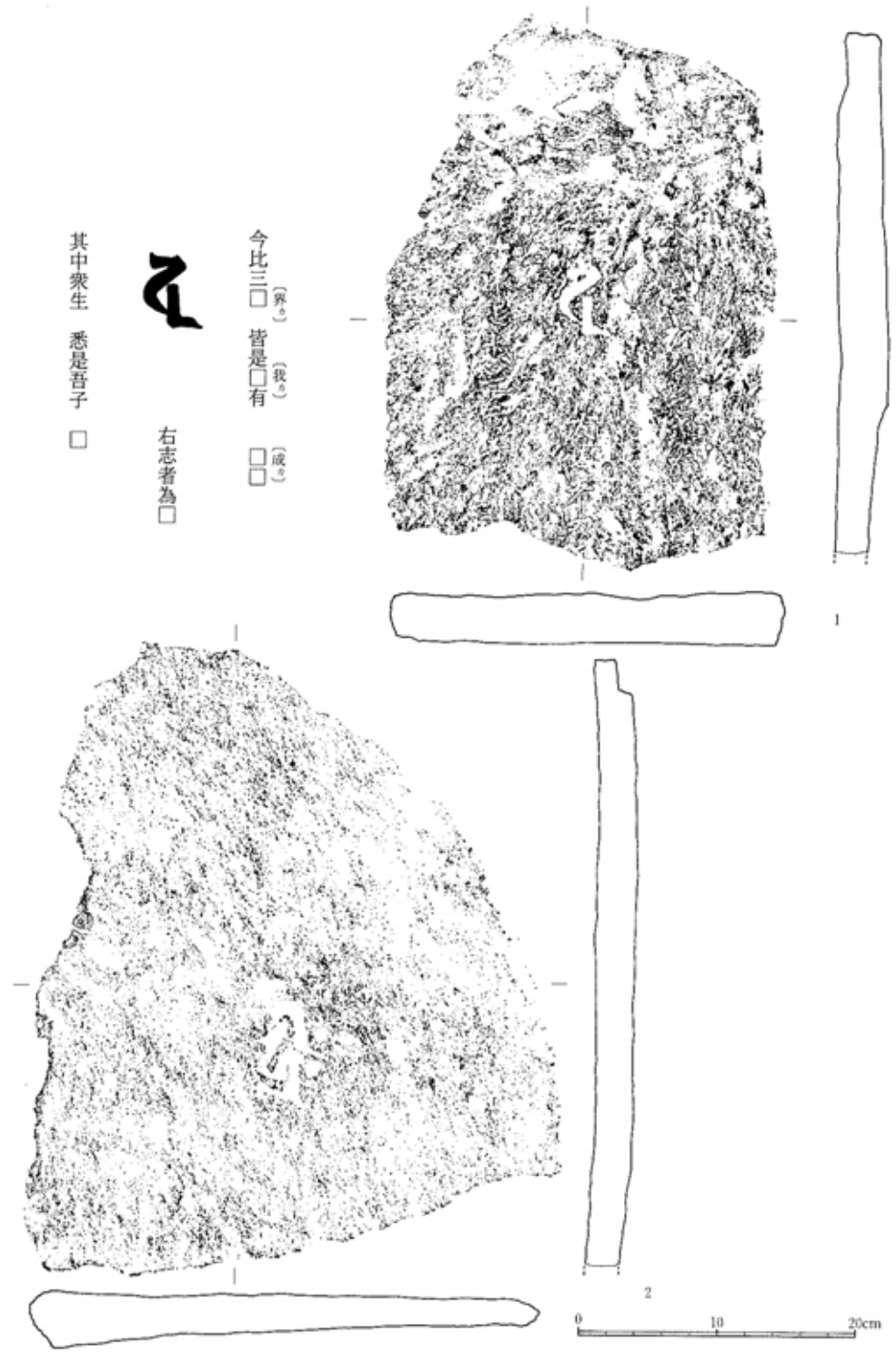
【茶臼】上臼 2 点（第 31 図－4・5）と小破片が 1 点ある。4・5 は何れも破損しており、1/3～1/4 ほどの残存である。安山岩製。いずれも側面の挽き木を差し込む孔の周辺には「菱形」（子持菱）模様の彫刻が施されている。2 点ともＳＤ100 大溝跡出土。

【板碑】種子・銘文が刻まれたものは図示した 7 点（第 32 図－1・2、第 33 図－1～5）のみである。このうち 2 点（第 33 図－2・3）は同一個体の可能性が高い。また、材質や形状から板碑の一部と考えられる破片資料が 9 点ある。これら 16 点の石材は、安山岩 10 点、粘板岩 6 点である。種子は、「バ」、「バン」、「キリーク」、「バイ」の四種が判読できる。

第 32 図－1 は安山岩製、下半部が欠損している。頭部・側面は粗く加工されている。中央に「バ」を配し、その下に願文、両側には種子よりやや上の位置から偈頌を刻む。年号は欠損している下半部とみられる。種子は箱彫り状を呈する。2 も安山岩製で、下半部が欠損している。頭部・側面は加工が施されている。種子は「キリーク」、箱彫り状である。

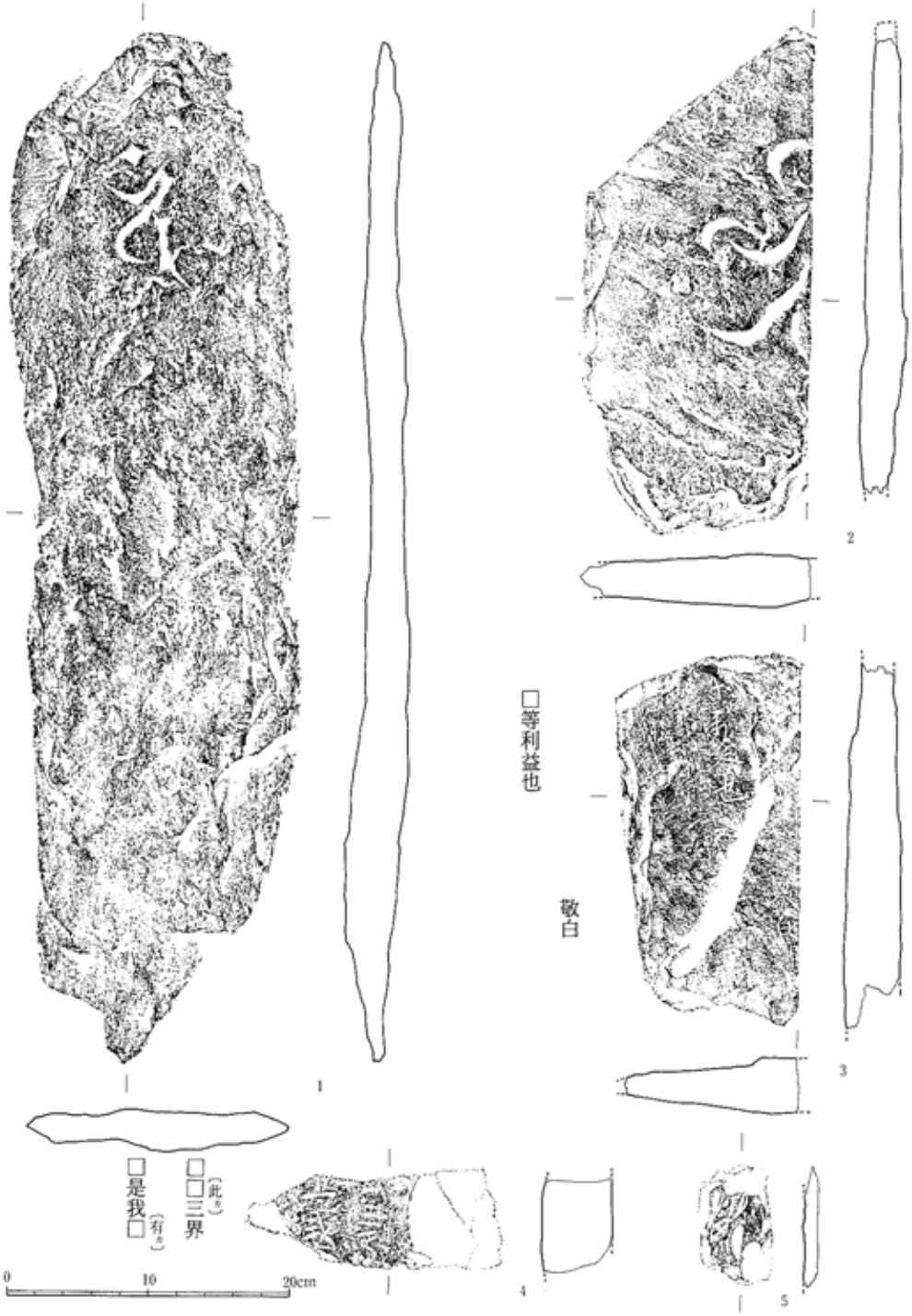
第 33 図－1 はほぼ完形品である。粘板岩製。頭部から基部側面は粗く加工が施されている。種予は「バン」、薬研彫り。2 は下半および右半部が欠損している。粘板岩製。頭部左側は直線的であるが、これは自然面（摂理面）である。また、右側破損部の直線的な割れは、意図的な裁断ではなく自然によるものとみられる。種子は「バイ」、薬研彫りである。3 は 2 と同一個体で、下半部左側の一部である可能性が高い。粘板岩製。願文の一部が刻み込まれている。4 は断片的な資料であるが、偈頌の一部が読み取れる。安山岩製。ほかのものに比べて厚みがある。5 も小破片であるが、種子の一部とみられる薬研彫りの刻みが認められる。粘板岩製。

出土地点をみると、16 点の大半がＳＤ100 大溝跡出土である（表 1）。ＳＤ100 には、第 32 図－1・2、第 33－1 の 3 点のほかに 8 点（安山岩 6 点、粘板岩 2 点：種子・銘文なし）の破片資料がある。これら 11 点はいずれも橋部分（第 21 図）の北側の埋土 6～7 層からまとまって出土しており、この状況をみる限り、同時期に廃棄された可能性が高いものである。第 33 図の 2・3 は両方ともＣ－6 区ＳＤ217 から出土している。ほかは表土（2 点）や出土位置不明（1 点）のものである。



No.	種別	出土区・遺構・層	石材	高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	種子	特徴	写真図版	登録
1	板碑	B－3　SD100　埋6/7	安山岩	(36.8)	28.6	3.5	バ	種子・脱文あり。下半部欠。	15－1	1
2	〃	B－3　〃　〃	〃	(42.5)	(36.7)	2.7	キリーク	下半部欠。頭部整形。	15－2	3

第32図　中世の遺物（4）板碑



No	種 別	出土区・遺構・層	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	輔 子	特 徴	写真図版	登録
1	板 碑	B－3 SD100 埋石?	結板岩	(69.8)	18.5	2.4	バン	ほぼ完品（上端やや欠）。	15－3	2
2	〃	C－6 SD217	〃	(29.3)	(16.2)	3.5	バイ	3と同一個体か。下半部・右半部欠。	14－7	14
3	〃	C－6 〃	〃	(25.2)	(12.2)	3.7	—	2と同一個体か。上下・右半部欠。	14－8	13
4	〃	B－4 表土	安山岩	(6.0)	(16.1)	(5.0)	—	額文あり。小破片。	14－9	12
5	〃	C－5 旧層?	結板岩	(8.2)	(4.7)	(1.2)	?	小破片。種子の一部あり	14－10	15

第33図　中世の遺物（5）板碑

第Ⅲ章　考察とまとめ

今回の調査では、古墳時代、奈良・平安時代、中世の各時代にわたって遺構・遺物が検出されている。ここでは、これらの調査結果を踏まえて、各時代ごとに遺構・遺物などについて検討を加える。

1．古墳時代

古墳時代は、若干数の遺物がＢ－3 区とＣ－1・2 区の一部区域で出土したのみである。これらのうち、Ｂ－3 区出土の高坏とＣ－2 区出土の壷・甕類は前期：塩釜式、Ｃ－2 区の坏・甕類は中期：南小泉式に属する。第 4 図に示したように、Ｂ－3 区では中世遺構堆積土からの単独出土、Ｃ－1・2 区ではやや傾斜するⅦ層面の狭い範囲からの出土であり、地点はそれぞれ離れている。

ところで、この時期の遺物を包含するⅦ層の堆積をみると、Ｂ－3 区付近では北側にある八幡神社や民家のあるほうに向かって、一方、Ｃ－1・2 区付近では南の堤防側へむかって徐々に高くなっていく。この状況から当時の地形を考えれば、現在の八幡神社や堤防以南が遺物の出土した地点に比べて地形的にはより高かったものと推測される。

したがって、今回は遺構が確認できなかったものの、この近辺に当時の集落が営まれていた可能性があり、今回出土した遺物は、おそらくこれらの集落から地形的にやや低かった調査地点にもたらされたものとみられる。

2．古代

（1）遺構の変遷と年代

古代の遺構には竪穴遺構・溝跡・小溝状遺構群・井戸跡・土壙などがあり、また、自然流路なども確認されているが、調査区が狭いためその全体的なあり方は捉えにくい。

主要な遺構や自然流路についてその重複関係をみると、

Ｂ－1 区　ＳＤ501 溝跡→小溝状遺構群　ＳＤ544 自然流路→小溝状遺構群

Ｂ－2 区　ＳＩ552/554→ＳＩ551 竪穴遺構→小溝状遺構群　ＳＤ531 溝跡→小溝状遺構群
ＳＤ595/596/597 自然流路→小溝状遺構群

Ｃ－1 区　ＳＫ602 土壙→小溝状遺構

という変遷がある。これは、どの区域においても小溝状遺構群が時期的に新しく、これ以前にＳＩ551・552・554 竪穴遺構やＳＤ501・531 溝跡、ＳＫ602 土壙、ＳＤ544・595・596・597 自然流路が位置づけられることを示している。

さて、遺物はＳＤ531 溝跡やＳＤ544・595・596 自然流路から比較的まとまって出土している（第 7 図～第 9 図）。ＳＤ531 は堆積土上部に灰白色火山灰（10 世紀前葉）が認められるが、この下位から出土した坏類をみると、ロクロ調整の内黒土師器坏や底部が回転糸切り無調整の須恵器坏が主体を占める。これに対して、ＳＤ544 やＳＤ595・596 から出土した坏類には非ロクロ調整の有段丸底土師器坏やヘラ切り無調整の須恵器坏が多い。年代的には、前者は 9 世紀後半、後者は 8 世紀前半や 8 世紀後半～9 世紀前半に位置づけられるものである。

したがって、遺構の重複関係と遺物の時期から遺構群の変遷を示せば、ＳＤ544・595・596自然流路→ＳＤ531 溝跡→小溝状遺構群となり、大まかにみて三期に捉えることができる。これを仮にＡ期→Ｂ期→Ｃ期とすると、ＳＩ551 竪穴遺構やＳＤ501 溝跡、ＳＫ602 土壙などは遺物からみてＢ期に属する可能性が高い。各期を年代的にみれば、Ａ期は 8 世紀～9 世紀前半、Ｂ期：9 世紀前半から 10 世紀前後、Ｃ期の小溝状遺構群は層位的には灰白色火山灰より古いものが主体で、堆積土に火山灰を含むものやこれを切り込むものも若干認められることから、Ｃ期：10 世紀前後～前半頃といった年代を推定できる。

（2）遺構の性格

ＳＩ551・552・554 竪穴遺構は、床面は残存しておらず、内部施設もＳＩ551 においてかろうじて周溝や土壙が確認できただけである。また、確実に竪穴遺構に伴うとみられる遺物もわずかであり、遺構の性格を示唆するものではない。

ＳＤ531 は形態や規模からみてなんらかの区画溝的なものと考えられるが、一部の検出に留まっておりその性格は不明である。

小溝状遺構群は、方向や密度にややまとまりが欠けているものの広範囲で検出されている。溝跡の規模や分布状況からみて、これらは仙台市下ノ内浦遺跡（佐藤 1993）・中田南遺跡（太田 1994）などで報告例があるような畑の畝間の耕作痕の可能性が高い。今後、土壙水洗による作物種子の抽出や花粉分析などによってその性格を限定していく必要があろう。

（3）遺構と集落

今回は竪穴住居跡は確認できなかった。検出された遺構の分布や地形をみると、集落はより南側の自然堤防上にあり、今回の調査区はいわばその背後地にあたると考えられる。

遺構は、現在の堤防沿いを中心に分布しており、自然流路が時期的に最も古く、その後、ＳＤ531・501、ＳＩ551 が造られ、小溝状遺構群（畑跡）へと変わる。つまり、調査地点は 9 世紀前後頃には自然流路が形成されている区域であり、その後、流路が埋没して地盤が安定してくると共に溝や竪穴遺構が構築され、10 世紀前後になると一帯は畑地へと転化し、まもなく消滅するといった変遷を示している。

このような変化は、自然堤防上の集落と密接に関連しているものと推測されるが、少なくとも 10 世紀前後に小溝状遺構群（畑跡）が広範囲に分布するということは、集落の安定・拡大とともに生産基盤の拡充が背景にあったものと考えられる。また、10 世紀半ばから次の中世に至る間の遺構や遺物が欠落する原因には、堆積層も示唆するように、鳴瀬川の氾濫という自然的条件が加わった可能性がある。

3．中世

（1）遺構の分布と性格

今回の調査区は幅約 4m（一部 10m）と狭く、細長く鉤型に続くものであった。したがって、遺構は広範囲で確認されているものの、それぞれごく一部の検出に留まっており、遺構の全体の構成が摑みにくい。しかし、検出された遺構の分布をみていくと、いくつかのまとまりを示すことが分かる。つまり、掘立柱建物跡・井戸跡が集中し、その近辺を溝跡が縦横に走る区域が何ヶ所か認められる。具体的に示すと、

①Ｂ－1 区：建物跡・井戸跡が密集し、西・東に幅約 2mの南北方向の溝跡（ＳＤ24・50）

②Ｂ－2 区：建物跡 2 棟・井戸跡 3 基、西・東に幅 2～3mの南北方向の溝跡（ＳＤ53・63）
③Ｂ－3 区：建物跡 1 棟・井戸跡 3 基、東・北に幅 5～6mの南北・東西方向の溝跡（ＳＤ68・100）
④Ｂ－4～6 区：建物跡 5 棟・井戸跡 9 基、南・北・西に幅 3～4mの東西・南北方向の溝跡（ＳＤ68・86・91）
⑤Ｃ－4～8 区：建物跡 2 棟、幅 2～4.5m程の東西・南北方向の溝跡（ＳＤ203・206・207・208・217 ほか）

の 5 区域がある。ただし、これらのうち⑤はいくつかのまとまりに分割される可能性が強い。

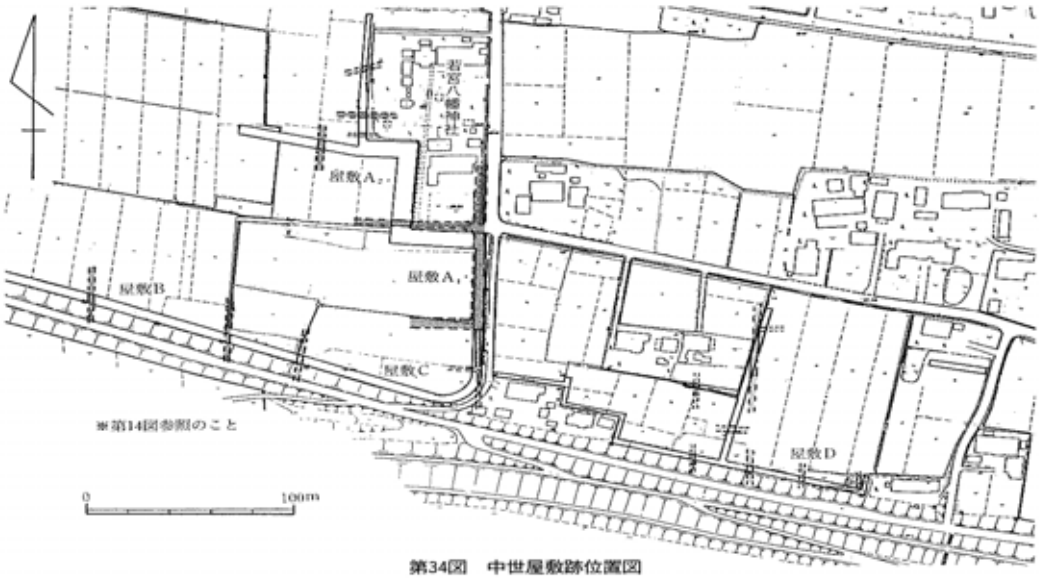
さて、これらの遺構のまとまりは、溝跡の規模や形状、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などの組合せから、仙台市鴻ノ巣遺跡（田中ほか 1995）や多賀城市新田遺跡（千葉 1990・入間田ほか 1992）などのように、区画溝を伴った中世期の屋敷跡と捉えてよいものと考えられる。この場合、③と④はＳＤ100 大溝跡がさらに北へ延びてさらに広い範囲を区画し、ＳＤ68 がＳＤ100 大溝跡にＴ字状に連結する可能性が高いことなどから、同一屋敷内での別区画であったものとみられる。そこで、これを屋敷A_1・A_2として、ほかを屋敷Ｂ、屋敷Ｃ、屋敷Ｄとすると、第 34 図に示したような屋敷配置になる。

（2）遺構群の構成と年代

ここでは、前述した遺構群（屋敷Ａ～Ｄ）単位でその構成や年代などについて検討する。

①**屋敷Ａ**：ＳＤ100 大溝跡に区画される屋敷跡。ＳＤ100 は東辺に当たる。ＳＤ100 の区画する範囲は、Ｂ－5 区およびＢ－6 区で検出されていないことからすると、東西 130m以上、南北 200m以上に及ぶものと推定される。この区画内には屋敷A_1と屋敷A_2が含まれる。

屋敷A_1は、東辺をＳＤ100、北辺をＳＤ68 に区画される。東辺の距離は溝の心々で約 58m（約半町）である。東辺には橋が取り付く。掘立柱建物跡と井戸跡が北東隅で確認されているが、厳密にはこれらはＳＤ100 と同時期かどうかは不明である。というのも、この区域内のＳＸ67 池状遺構・ＳＩ131 竪穴状



第34図　中世屋敷跡位置図

遺構などはそれぞれＳＤ68・ＳＤ100 に切られており、ＳＤ100 で区画される以前の遺構群も認められるからである。

屋敷A_2は、東辺ＳＤ100・南辺ＳＤ68・北辺ＳＤ86・西辺ＳＤ91 によって区画される、東西約 83m・南北約 69mの規模と考えられる。区画の中央からやや北西寄りで掘立柱建物跡・井戸跡が集中してみられる。建物跡や井戸跡には重複があり、建て替え・造り替えが認められる。

遺物は、ＳＤ100 大溝跡の中位～下位の堆積土から 12 世紀後半～13 世紀頃の中国産白磁皿、14 世紀頃の古瀬戸瓶子、中位からは 14 世紀半ば～後半頃製作と推定される板碑（註 1）などが出土している。したがって、屋敷Ａは 14 世紀頃のものと概ね考えられる。また、屋敷Ａの区画溝を切る新しい遺構は明確には認められず、遺物にも 15 世紀以降のものが認められないので、15 世紀頃には機能を失った可能性も考えられる。

②**屋敷Ｂ**：ＳＤ24・ＳＤ50 を区画溝とみてそれぞれ西辺・東辺と考えると、その幅は約 70m程になる。掘立柱建物跡や柱穴跡、井戸跡は東辺寄りの区域で密集して検出されている。建物跡には重複があり、何度かの建て替えがなされているが、区画溝を含めて屋敷全体が新たに造りなおされた形跡は認められない。出土遺物は少なく、直接年代の手がかりになるものはないが、屋敷Ａや屋敷Ｃからの出土遺物と比べると年代的な隔たりはないと思われる。

③**屋敷Ｃ**：ＳＤ53 あるいはＳＤ56・ＳＤ63 を区画溝とみてそれぞれ西辺・東辺と考えると、その幅は 82m～85mになる。掘立柱建物跡や井戸跡は中央からやや東寄りで検出されている。また、西よりにも柱穴列と井戸跡がある。2 棟の掘立柱建物跡は近接していて同時存在は考えにくいので、建てかえがあったものと考えられる。東辺区画溝とみられるＳＤ63 は、屋敷ＡのＳＤ100 大溝跡に切られている。

出土遺物は少ないが、屋敷Ａより古いとすれば 13 世紀頃の年代が考えられる。

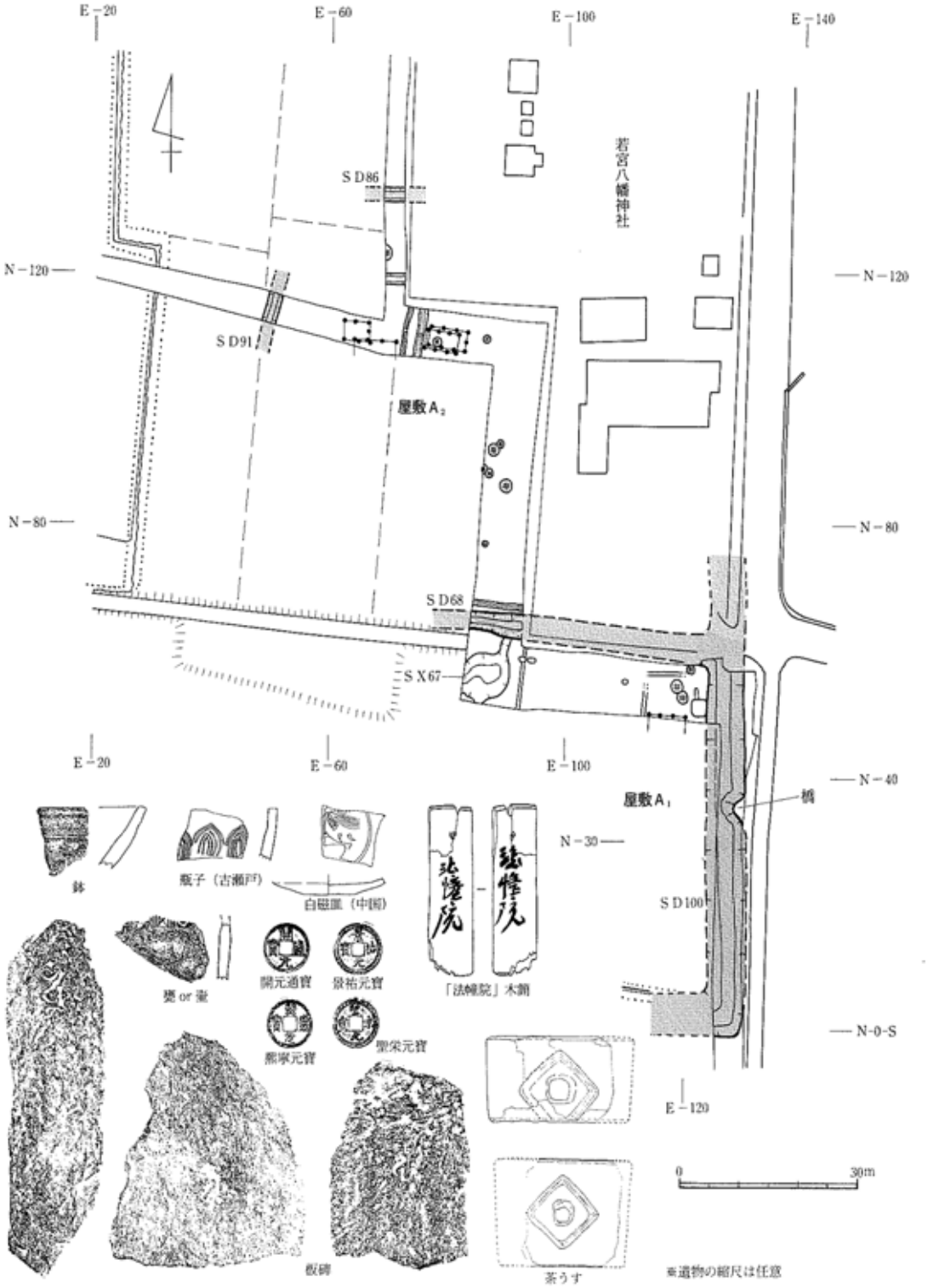
④**屋敷Ｄ**：調査区Ｃ－3 区～8 区では東西・南北方向の溝跡と掘立柱建物跡・井戸跡が散在して確認されている。規模の大きいＳＤ206・207・208・217 などは屋敷の区画溝とみられるが、どのような展開になるかは不明である。また、いくつの区画に捉えられるかも明確でないので、この区域一帯は屋敷Ｄとして一括しておく。ただし、区画溝とみられる溝跡の検出範囲は広く重複もあるので、数軒の屋敷跡に分割されることは確実である。

年代が推定できる遺物は、ＳＤ207 出土の龍泉窯系青磁碗（15 世紀頃）とＳＤ202 出土の無釉陶器壷（13 世紀後半～14 世紀前半）である。前者のように 15 世紀まで年代が下る資料は、屋敷Ａ～Ｃを含めても他には見あたらない。この屋敷跡は、年代的には概ね 14～15 世紀頃と推定される。

（3）遺構の性格―「法幢院」木簡との関係―

屋敷$A_{1\cdot 2}$を区画するとみられるＳＤ100 大溝跡からは、両面に「法幢院」と墨書された木簡（付札か）が出土した。この大溝跡からは、ほかに中国産白磁皿（12 世紀後半～13 世紀）、古瀬戸瓶子（14 世紀）、茶臼、板碑、銭貨などが出土している。これらの遺物、特に木簡の存在から、この屋敷跡の性格を限定できる可能性が強まった（第 35 図）。

「法幢院」は、現在の若宮八幡神社に深い関連がある。言い伝えによれば、この八幡神社は、源頼朝が奥州平泉からの帰路、新沼の地に勧請して建立し、また、家臣の渋谷四郎時国を剃髪せしめて宥



第35図　屋敷A模式図とSD100大溝跡出土遺物

全と改名、この地に亀谷山穏城寺を創建して世襲の別当としたという。また、これら歴代別当は代々若宝院あるいは法幢院･安養院など(註 2)と称したと言われる(三本木町誌 1966)。

若宮八幡神社や亀谷山穏城寺に関するこのような記載は、『安永風土記書出』(宮城懸史 25)、明治 20 年代調査の『宮城懸陸前国志田郡神社明細帳』・明治 40 年『社寺神社由緒調』(宮城県立図書館蔵)、明治年間作成の渋谷家(現若宮八幡神社々家)系図などに見られる。これらの史料をみる限りでは、木簡の「法幢院」はまさに亀谷山穏城寺にかかわる「法幢院」と考えてまちがいない。さらに、前述の史料からは「法幢院」を称する二十五代「永豊」の名も知ることができる。しかしながら、永豊の生存年代は伊達政宗が登場する戦国末期であるので、遺物から推定した遺構（屋敷Ａ）の年代（14 世紀頃）とは合致しない。

一方、この法幢院や亀谷山穏城寺の所在地については参考になる史料が残されていない。ただ、先の系図には、穏城寺は創建当時は鳴瀬川南岸の蟻ヶ袋付近にあり、その後八幡神社のある北岸に移動したという記述がみられる（註 3)。

ところで、現在の若宮八幡神社はもともとこの場所にあったわけではなく、以前は南側の鳴瀬川に近い地点にあった。今の社殿は大正三年の築堤の際に現在地に移動してきたものであり、この場所はもとは渋谷家の屋敷地であった。神社移転前のこの屋敷地に関して、明治 40 年作成の『社寺神社由緒調』に添付してある『若宮八幡神社由来記（謄本)』には「坊宇ハ三拾坊　本坊ノ地ハ今ノ住居ノ地也」とある。つまり、近世末においては「本坊」(院)は現在の若宮八幡神社の地にあったということがわかる。これが中世期まで遡れるかどうかは明かでないが、堤防側にあったもとの神社との位置関係からすれば、「本坊」の地が一貫してこの場所であった可能性は高い。

以上のように、「法幢院」と八幡神社や亀谷山穏城寺との関係、八幡神社のある現在地の変遷、さらに、木簡を出土したＳＤ100 大溝跡の規模や想定される区画範囲（註 4）などからみて、屋敷Ａは中世期の「法幢院」か「亀谷山穏城寺」の一角であると考えてよいと思われる。これは、木簡以外の出土遺物、例えば中国産白磁皿や古瀬戸瓶子などの高級品の所持や、茶臼が示すように喫茶の習慣があったことなどからも裏付けられる。

註 1. 鳴瀬川流域の造立時期（佐藤正人 1995）や種子などの特徴から、南北朝～室町期にかけてのものと推定される。

註 2. 天台宗、のちに羽黒派修験。『安永風土記書出』(宮城懸史 25)、明治 40 年『社寺神社由緒調』など。

註 3. 若宮八幡神社宮司渋谷勝麿氏の御教示による。実見。

註 4. ＳＤ100 大溝跡の位置と方向からみて、現在の若宮八幡神社の東側を南北に通る道路や水路は、屋敷Ａ東辺をなしていた道路・堀（大溝）とほぼ一致し、また、神社北側の農業用水路（旧志田江）や道路も北辺を区画していた可能性が高い。西辺はおそらく北西部の民家の西を南北に通る道路付近と推定される。この場合には、東辺約 200m・北辺約 250m程の規模になる。

4．まとめ

1)　舟場遺跡は、県北部大崎平野の南端部を東西に貫流する鳴潮川北岸の自然堤防上に立地する古墳時代、奈良・平安時代、中世の複合遺跡である。今回の調査は、県営ほ場整備に伴い実施されたものであり、調査の結果、古墳時代～中世にわたる遺構・遺物が検出された。

2)　古墳時代は、前期（塩釜式）と中期（南小泉式）の遺物が若干数出土した。遺構は確認されなかった。

地形からみると、当時の集落はより南の鳴瀬川寄りか現在の八幡神社付近にあると推定される。

3)　古代は、現堤防沿いの調査区を中心に、竪穴遺構（3）・井戸跡（1）・溝跡（3）・土壙（12）・小溝状遺構（220<）・自然流路（4）などを検出した。遺物の年代は、8 世紀前半から 10 世紀前後にわたる。当時の集落は、古墳時代と同様、鳴瀬川寄りや八幡神社近辺にあると推定される。

4)　中世は、広範囲で遺構・遺物が確認された。遺構には、掘立柱建物跡（19）・溝跡（84）・池状遺構（1）・井戸跡（29）・土壙（28）などがある。これらは当時の屋敷跡の一部をなすものであり、少なくとも 4 軒分は含まれると推定される。特に、現八幡神社前で確認された幅 6m以上の区画溝をもつ屋敷跡は、その規模や「法幢院」木簡から考えると、当時の亀谷山穏城寺か法幢院に関わるものである可能性が高い。

それぞれの屋敷跡の時期は、遺物からみて 13 世紀～15 世紀頃と推定されるが、存続年代には若干差があると考えられる。

遺物には、先に述べた木簡の他に、中国産白磁皿（1）・青磁碗（1）、古瀬戸瓶子（1）、無釉陶器鉢・壷・甕類、曲物（2）、小刀（2）・銭貨（25）、茶臼（2）・砥石（7）・石鉢（1）・板碑（16）などがある。

引用・参考文献

赤羽一郎 1984　『常滑焼－中世窯の様相－』　考古学ライブラリー23 ニュー・サイエンス社
入間田宣夫・大石直正編 1992　『みちのくの都　多賀城・松島』　よみがえる中世[7]　平凡社
上田秀夫 1982　「14～16 世紀の青磁碗の分類について」　『貿易陶磁研究』№2　pp.55～70
太田昭夫 1994　『仙台市　中田南遺跡―古代・中世の集落跡の調査―』　仙台市文化財調査報告書第 182 集
加藤道男 1989　「宮城県における土師器研究の現状」　『考古学論叢』Ⅱ　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
黒川利司 1980　「舟場遺跡」　『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅳ
佐藤甲二 1993　『下ノ内浦遺跡―第 4 次発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第 173 集
佐藤貴志 1995　『安藤前遺跡』　三本木町文化財調査報告書第 6 集
佐藤正人 1995　「鳴瀬川流域にみる板碑の造立形態」　『六軒丁中世史研究』第 3 号　pp.37～58
三本木町教育委員会 1991　『三本木町の石碑』
三本木町詩編纂委員会 1966　『三本木町誌』上巻・下巻
瀬戸市教育委員会・(財)瀬戸市埋蔵文化財センター1996　『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター設立 5 周年記念シンポジウム資料集
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター編 1993　『東海の中世窯―生産技術の交流と展開―』
田中則和ほか 1995　「中世」『仙台市史』特別編 2　考古資料　pp.450～502
千葉孝弥 1990　『新田遺跡（第 4・11 次調査報告）』　多賀城市文化財調査報告書第 23 集
東北歴史資料館編 1983　『東北の中世陶器』
長井久美男編 1994　『中世の出土銭―出土銭の調査と分類』
長谷部楽爾・今井　敦 1995　『日本出土の中国陶磁』　中国の陶磁 12　平凡社
藤沼邦彦　1976　「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」　『東北歴史資料館研究紀要』第 2 巻　pp.35～50
〃　1977　「宮城県出土の中世陶器について」　『東北歴史資料館研究紀要』第 3 巻　pp.21～45
〃　ほか　1978　『多高田窯跡調査報告書』　三本木町文化財調査報告書第 4 集
古川市教育委員会　1994　『古川の板碑』　古川の文化財第四集
宮城縣史編纂委員会 1954　『風土記』　宮城縣史 25
〃　1961　『学問・宗教』　宮城縣史 12
横田賢次郎・森田　勉 1978　「大宰府出土の輸入陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」『九州歴史資料館研究論集』4　pp.1～26

付章　舟場遺跡出土木質遺物の樹種同定

松葉礼子（パレオ・ラボ）

1．はじめに

宮城県三本木町に位置する舟場遺跡から出土した中世の木質遺物について樹種を同定した。今回同定した木製品は、橋脚、木簡、曲物の標本総数計７点である。これらの木製品の樹種を同定する事で、舟場遺跡での木製品の性格の一端を明らかにしたい。

2．方法と記載

同定には、木製品から直接片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版ａ）、接線断面（板目と同義・写真図版ｂ）、放射断面（柾目と同義・写真図版ｃ）の３方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠を後述する。結果は、表１．舟場遺跡の樹種同定結果に示す。なお、作成した木材組織プレパラートは、標本番号（ＭＩＧ94～100）を付し㈱パレオ・ラボで保管されている。

表１　舟場遺跡の樹種同定結果

標本番号	樹種	製品名	遺物番号	遺構	木取り・形状
MIG 94	ヤマウルシ	橋脚 No.2	15	SD100	丸木棒削り
MIG 95	ニワトコ	橋脚 No.1	16	SD100	丸木棒削り
MIG 96	ヤナギ属	橋脚	17	SD100	丸木棒削り
MIG 97	スギ	木簡 No.1	1	SD100	
MIG 98	アスナロ	曲物 No.2	2	SX67	柾目
MIG 99	スギ	曲物 側板	3	SE210	柾目
MIG 100	スギ	曲物 底板	3	SE210	板目

同定根拠

スギ　*Cryptomerica japonica*（L.ｆil.）D. Don　TAXODEACEAE　　写真図版16―1a～1c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、年輪界は明瞭である。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて散在する。放射組織は放射柔細胞からなり単列同性。分野壁孔は、大型のスギ型で、通常一分野あたり２個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは、常緑の針葉樹で、本州～屋久島の温帯から暖帯、主として太平洋側に多く存在している。

アスナロ　*Thujopsis dolabrata*　Sieb. et Zucc.　CUPRESSACEAE

写真図版16―2a～2c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行はやや急で、晩材部が比較的多い。樹脂細胞は早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は背の低い単列で、柔細胞のみからなる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、１分野あたり２～４個存在している。

以上の形質により、ヒノキ科のアスナロの材と同定した。アスナロは、本州～九州に分布する常緑高木の針葉樹である。

ヤナギ属　*Salix* sp.　SALICACEAE　　写真図版16―3a～3c

やや小型で丸い管孔が、単独あるいは2～3個放射方向の複合して多く散在する散孔材。道管の直

径は年輪界に向け徐々に減少。道管の穿孔は単一。放射組織は単列異性で、道管の壁孔は蜂の巣状を呈し密である。

以上の形質により、ヤナギ科のヤナギ属の材と同定した。日本に産するヤナギ属には、34 種あり、材の形質上これらをさらに分類できない。

ヤマウルシ　*Rhus trichocarpa* Miq.　ANACARDIACEAE　写真図版17―4a～4c

中型で丸い管孔が単独あるいは 2～3 個年輪界に沿って配列し、晩材部では小型の管孔が単独あるいは放射方向に数個複合して散在する環孔材。道管の直径は年輪界に向け緩やかに減少する。道管の穿孔は単一、小道管の内壁には螺旋肥厚がある。放射組織は異性で、1～2 列程度、道管との壁孔は大型の対列状。

以上の形質から、ウルシ科のヤマウルシの材と同定した。ヤマウルシは、北海道～九州の山地の林内に分布する落葉小高木である。

ニワトコ　*Sambucus sieboldiana*　Blume　CAPRIFOLIACEAE　写真図版17―5a～5c

早材部では小型の道管が単独もしくは数個複合して年輪界に並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が、斜め接線方向に配列する散孔材。年輪の終わりには、小道管が帯状に配列している。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で 1～5 細胞幅程度、鞘細胞を持つ。

以上の形質により、スイカズラ科のニワトコの材と同定した。ニワトコは、本州～九州の低地～低山帯に分布する落葉低木。

3．考察

まず、橋脚であるがいずれも丸木をそのまま利用した製品であり、樹種はヤマウルシ、ニワトコ、ヤナギ属であった。ニワトコ、ヤマウルシとも樹高は大きくて 8m程度の低木～小高木である。どの樹種も特に水湿に対して強い特徴はなく、身近な樹種の利用と考えられる。

曲物は、いずれもアスナロとスギであった。曲物には製作上の問題から道管の無い均質な材を持つ針葉樹が好まれ、特にスギ、ヒノキ科の樹種が好まれる。多賀城市の山王遺跡では、スギ、アスナロの曲物が確認されている（松葉・鈴木 1996）。アスナロは、東北地方では標高 250～1700mの奥羽山脈一帯にみられる。木簡に使用されていたスギは、東北地方で標高 100～1250mに存在し、現在では宮城県下の山地に普通に見られる樹種である（林 1969）。木簡にはヒノキが使用されることが多いが、スギ材の利用も少なくはない。マツ属のように樹脂分が多く墨のりの悪い材以外であれば、広葉樹材であっても使用されており、材の手に入り易さ、使用目的等に応じて使い分けたものと考えられる。

舟場遺跡内では、スギ、ヒノキ科のような山地の樹種の利用とニワトコのようなごく身近な樹種の利用が見られる。中世以降の関東等で確認されている針葉樹偏重の傾向が県内でも見られるのかどうか、類例が増える事を期待したい。

引用文献

林　弥栄 1969　『有用樹木図説（材木編）』472pp　誠文堂新光社

松葉礼子・鈴木三男 1996　「山王遺跡多賀前地区出土木製品の樹種同定」『山王遺跡III』
宮城県文化財調査報告書第 170 集　宮城県教育委員会

写　真　図　版

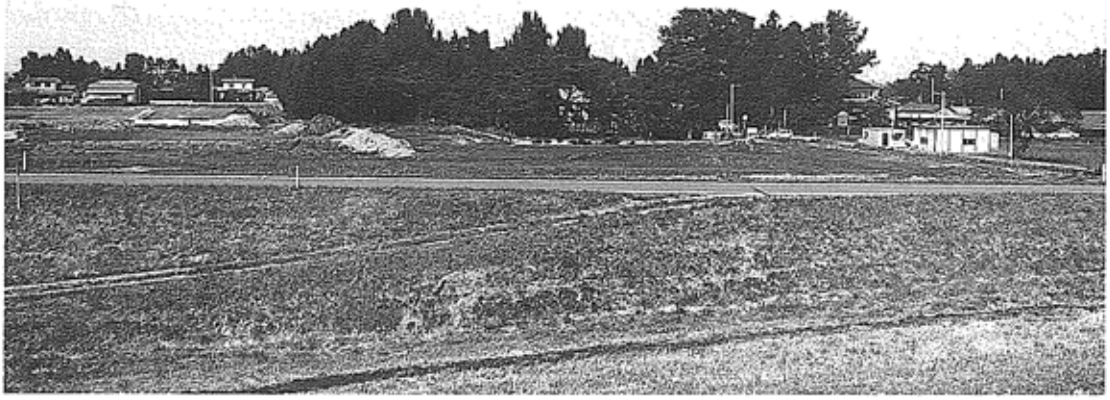
1．B-3区　SD100大溝跡（北から）
奥の左手の張り出しが橋部分

2．古瀬戸瓶子　　3．中国産白磁皿　　（S＝1/3）

4．「法輪院」木簡　　（S＝1/3）

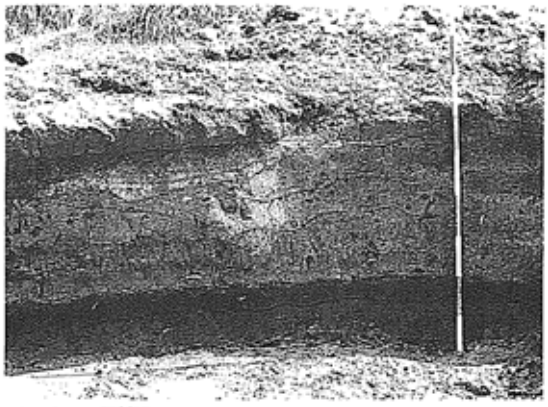
写真図版　1

1．舟場遺跡周辺の空中写真　　平成５年撮影　国土地理院
縮尺＝１／25,000

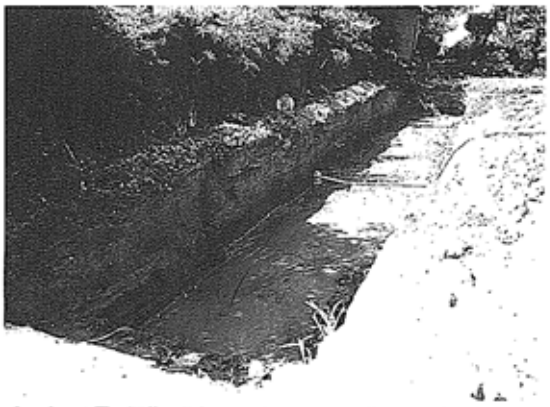


2．Ｂ－３～６区付近　　中央の木立ちのある区域が八幡神社
南の堤防上から北をのぞむ

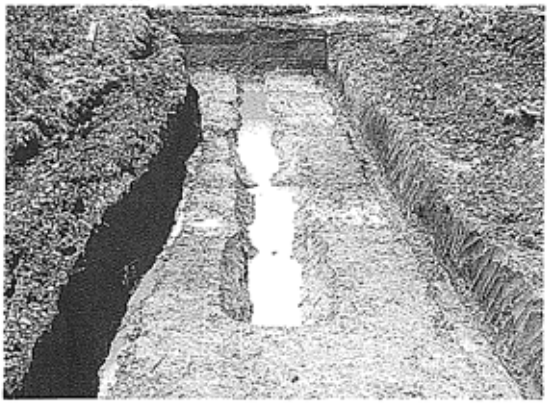
写真図版２



1．B－2区断面

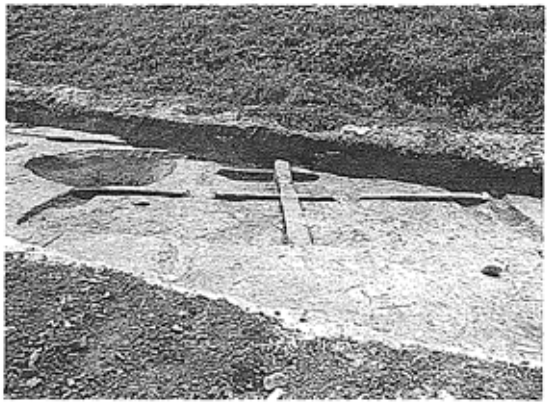


2．C－2区　下位の黒色土（Ⅶ）から古墳時代遺物出土



3．A－4区　SD09（東から）

4．B－1区　古代の遺構（東から）
小溝状遺構群　土壙



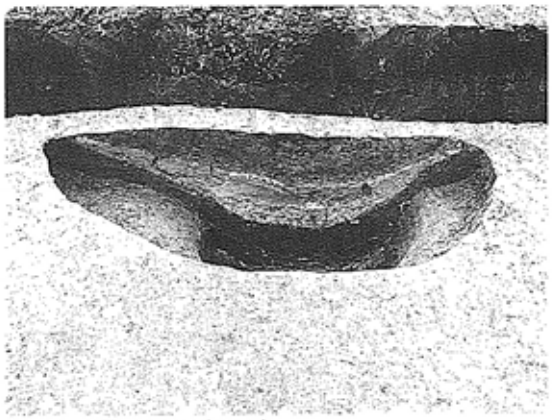
5．B－2区　SI551竪穴遺構（北西から）

6．B－2区　SD531（北東から）

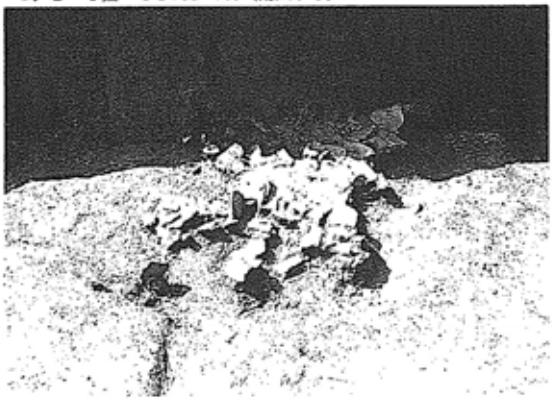
7．B－2区　小溝状遺構群（北から）

写真図版3　調査区断面と古代の遺構

1．B－6区　SD701～703（南西から）

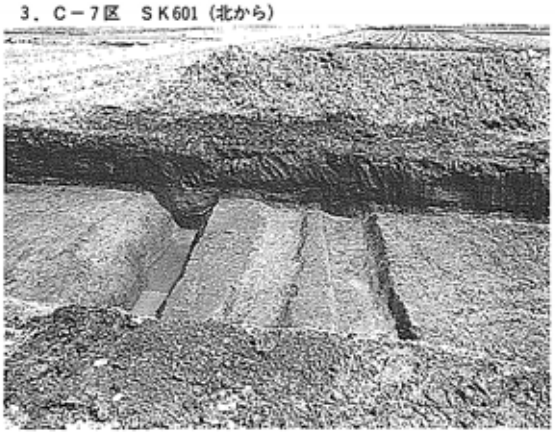


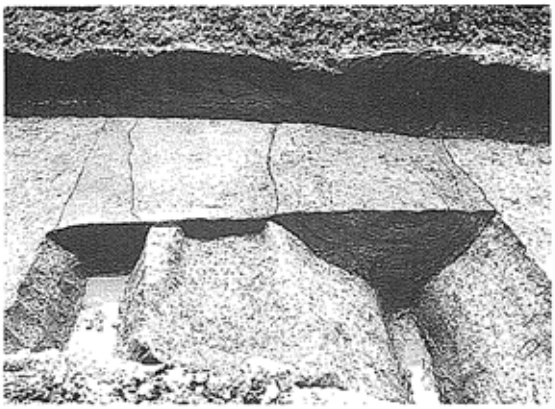
2．B－6区　SE700（北から）



3．C－7区　SK601（北から）

4．C－1区　SK602（北から）



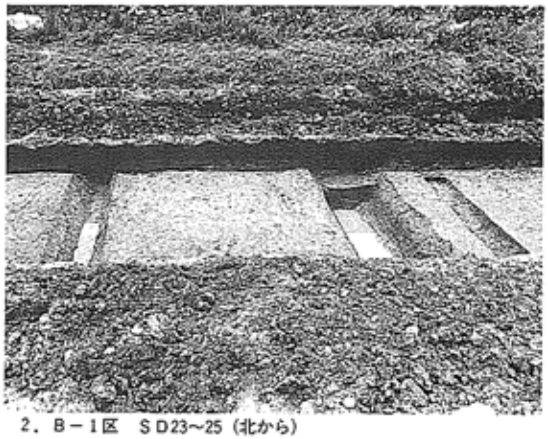


6．A－4区　SD11～13（北から）

7．B－1区　中世遺構群（東から）
手前がSD50・51
奥に掘立柱建物跡・井戸跡が密集する

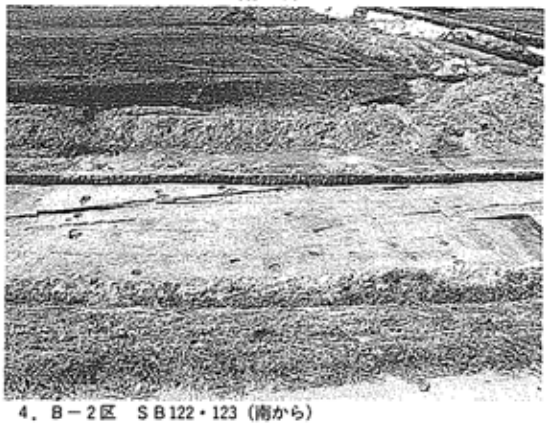
写真図版4　古代と中世の遺構

1．B－1区　中世遺構群（北東から）



2．B－1区　SD23～25（北から）

3．B－1区　SE31（南から）



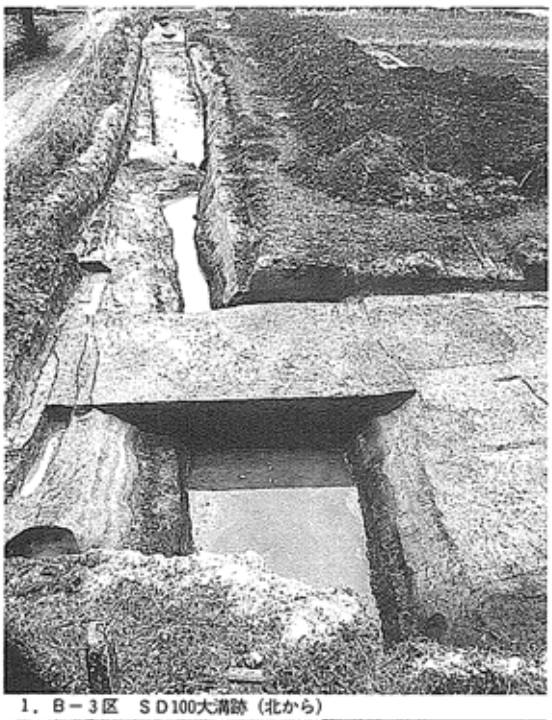
4．B－2区　SB122・123（南から）

5．B－2区　SD53～56（北から）

6．B－2区　SE58（北から）

7．B－2・3区　SD63・64（南から）
奥に見えるのがSD100大溝跡

写真図版5　中世の遺構（B－1～3区）



1．B－3区　SD100大溝跡（北から）

2．B－3区　SD100北側（南から）

3．B－3区　SD100橋脚部（西から）

4．B－3区　SD100、SI131、SB125ほか（東から）

5．B－3区　SX67池状遺構（南から）

7．B－4区　SD68断面

6．B－4区　SD68ほか（北から）

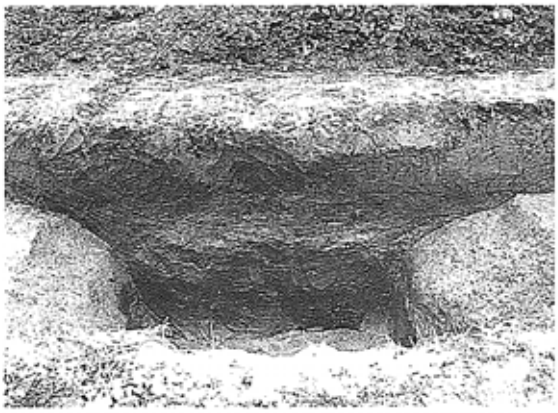
写真図版6　中世の遺構（B－3・4区）

1．B－4区　SE72・74～77（南から）

2．B－4～6区　SB126～130付近（東から）

3．B－5区全景　SD83・84、SE85ほか（南から）

4．B－6区全景（東から）

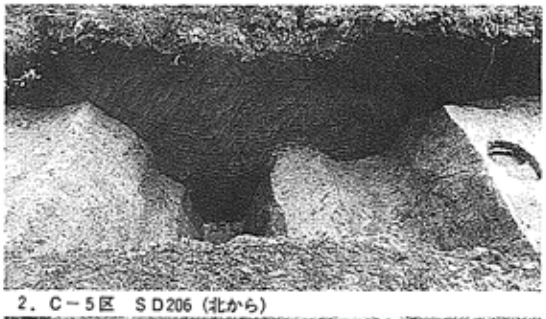


5．C－4区　SD208（南から）

6．C－4区　SK211銭貨出土状況

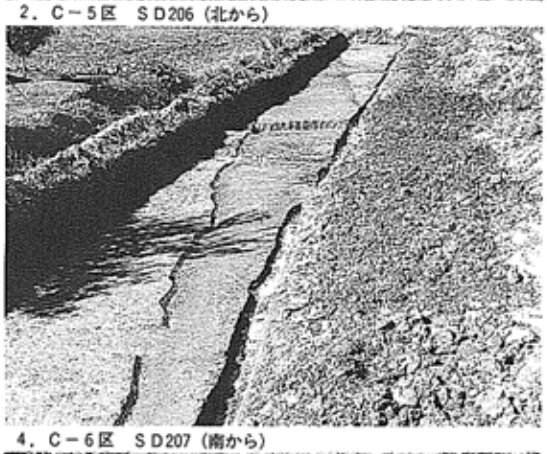
写真図版7　中世の遺構（B－4～6区、C－4区）

1．C－5区　SB224付近（南から）

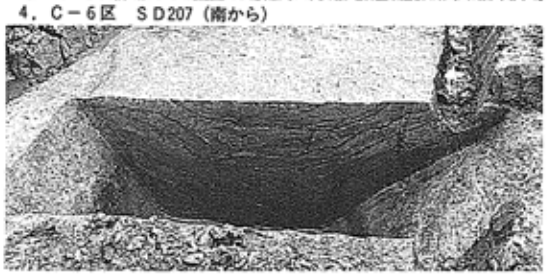


2．C－5区　SD206（北から）

3．C－5区　SD203（西から）



4．C－6区　SD207（南から）



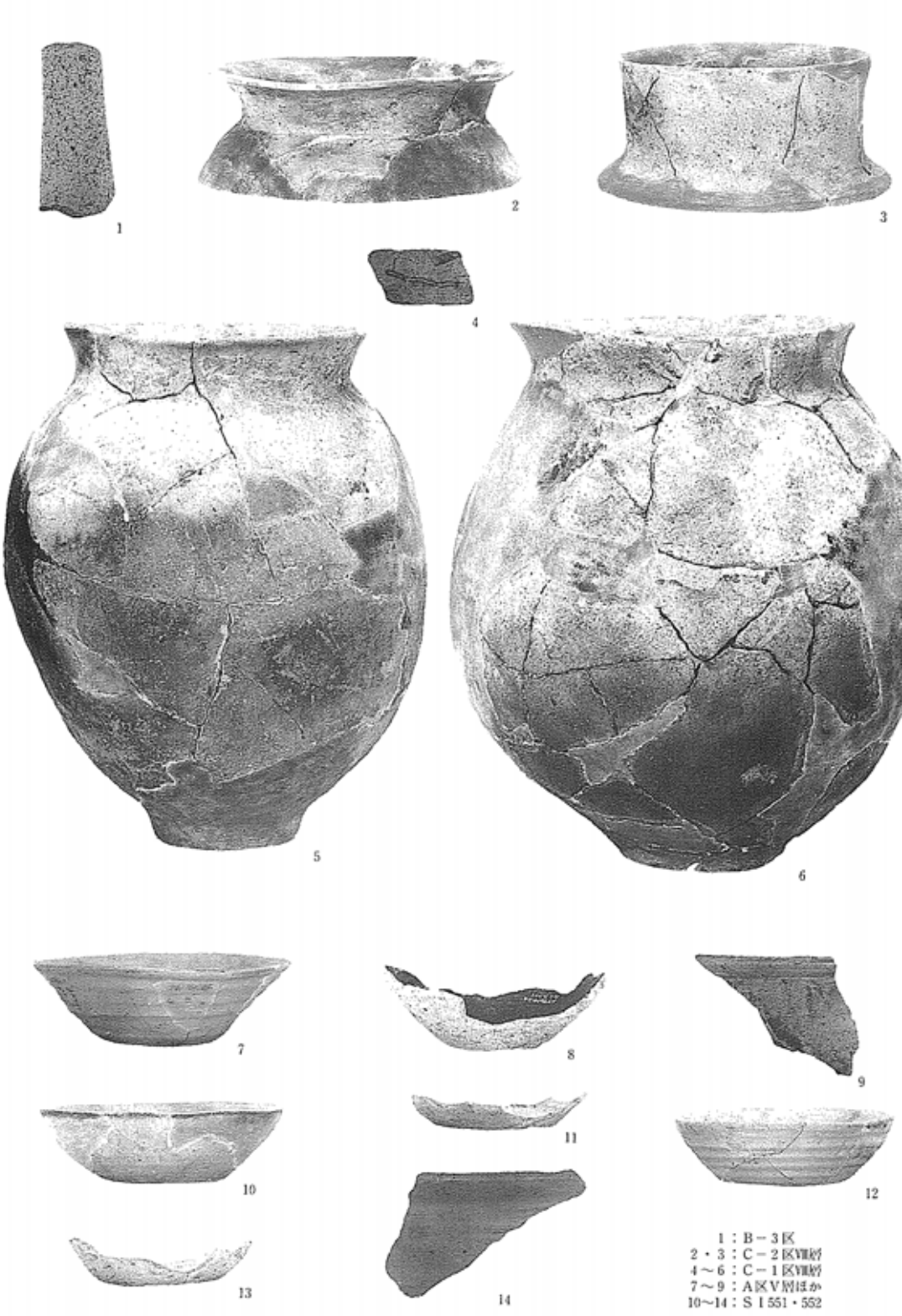
5．C－6区　SD207（南から）

6．C－6区　SD207とSD219の交差部分（南から）

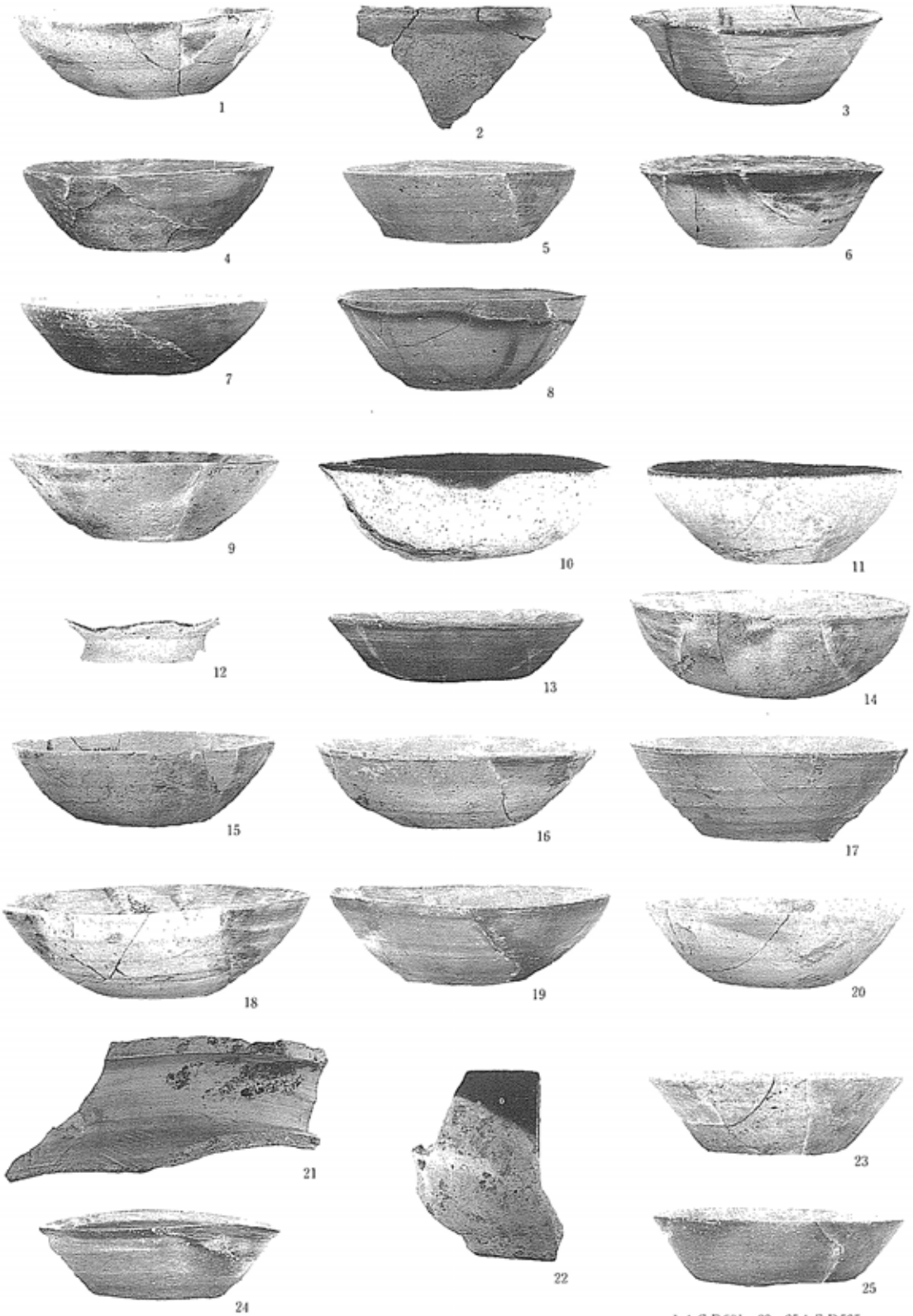
7．C－6区　SD217（東から）

8．C－8区　全景（東から）

写真図版8　中世の遺構（C－5～8区）



写真図版９　古墳時代と古代の遺物（１）

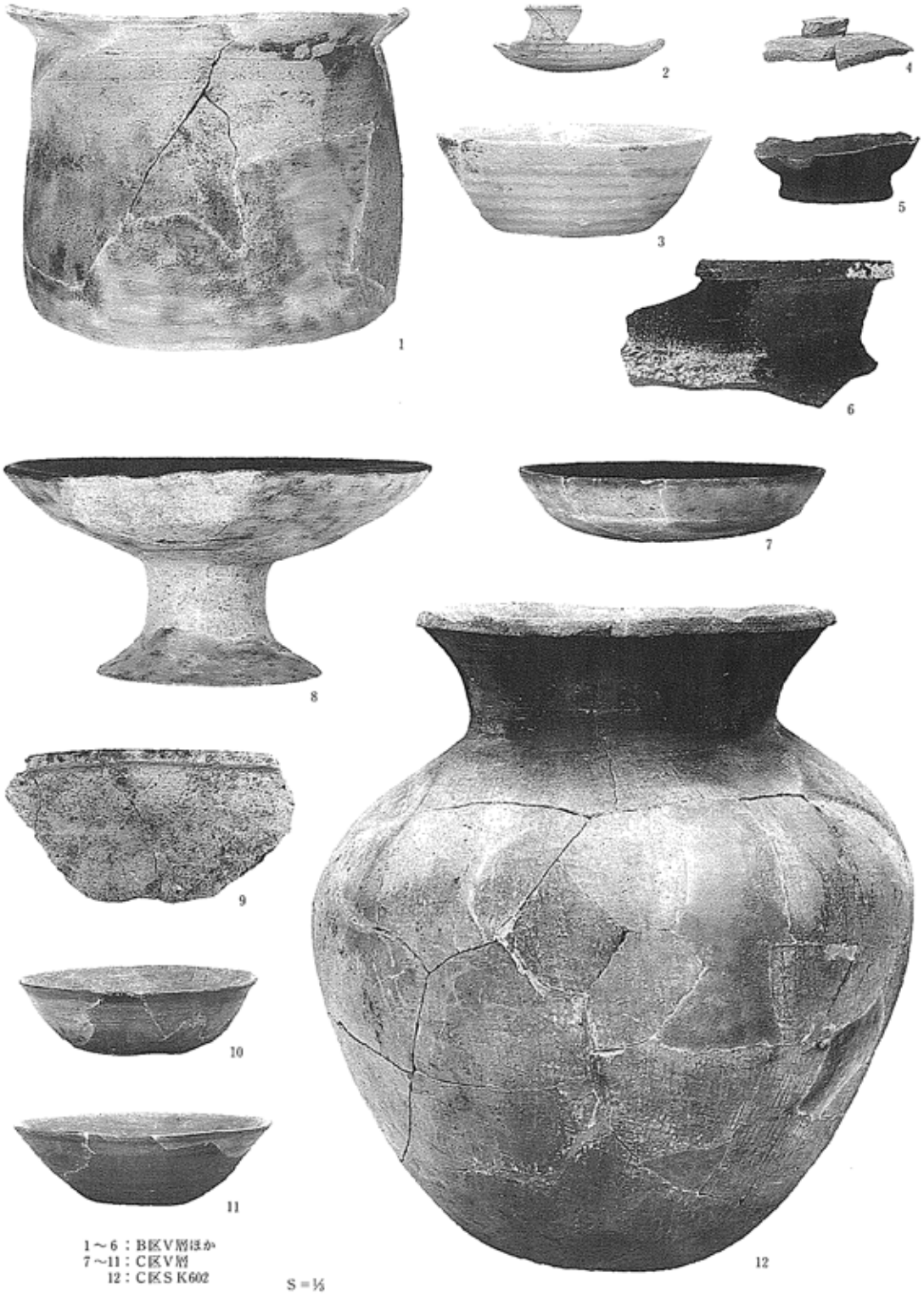


1：SD501　22～25：SD595
2～8：SD544
9～21：SD531　　S＝⅓

写真図版10　古代の遺物（2）

1：SD595　9～14：SK527ほか
2～8：SD596　15：SE700
S＝⅓

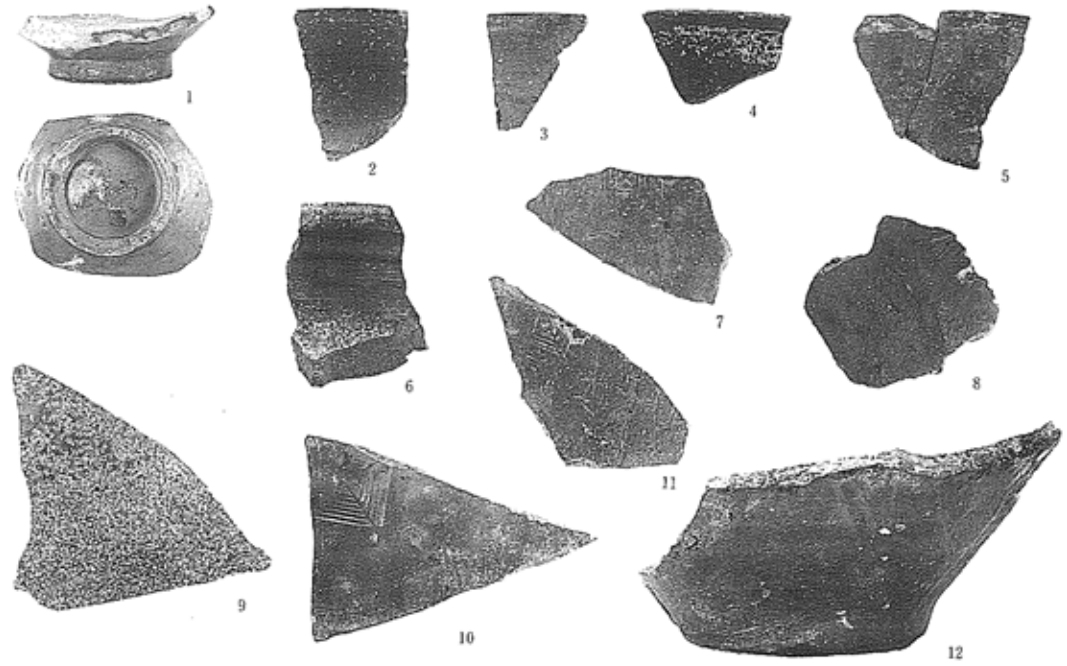
写真図版11　古代の遺物（3）



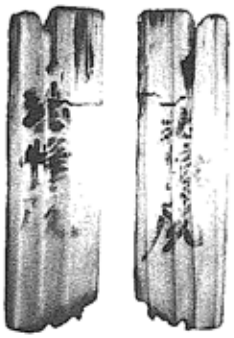
1～6：B区V層ほか
7～11：C区V層
12：C区S K602

S＝⅓

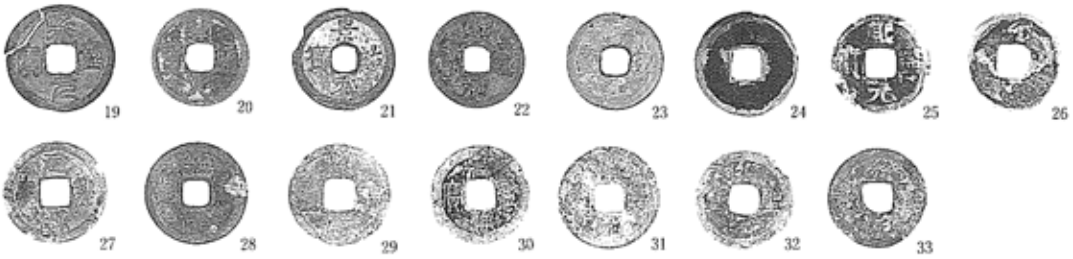
写真図版12　古代の遺物（4）



1：青磁碗　　6：陶器壺
2～5・12：陶器鉢　7～11・13：陶器甕 or 壺

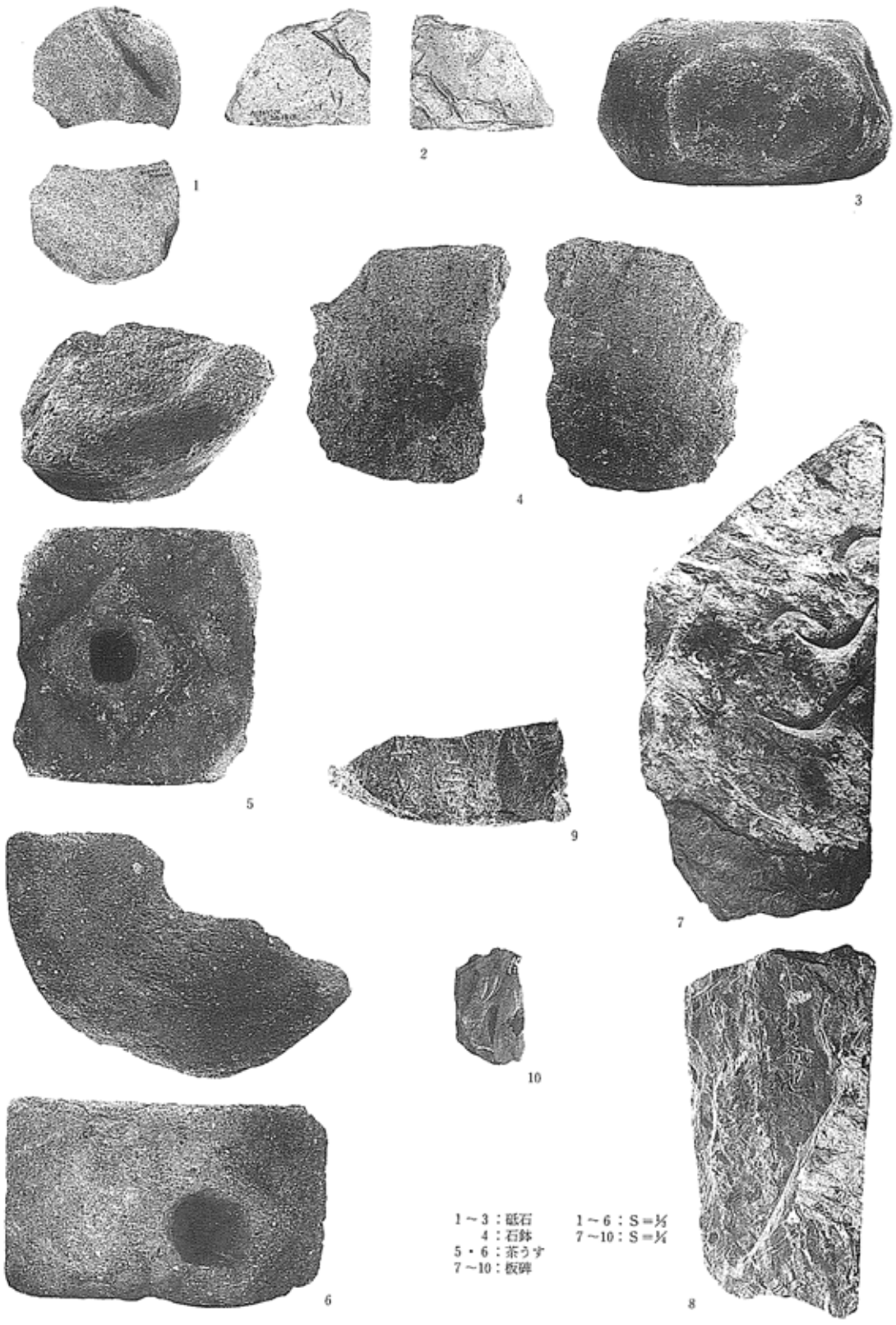


14　赤外線写真　S≒⅔



1～13・15～18：S＝⅓
19～33：S＝⅔

写真図版13　中世の遺物（1）

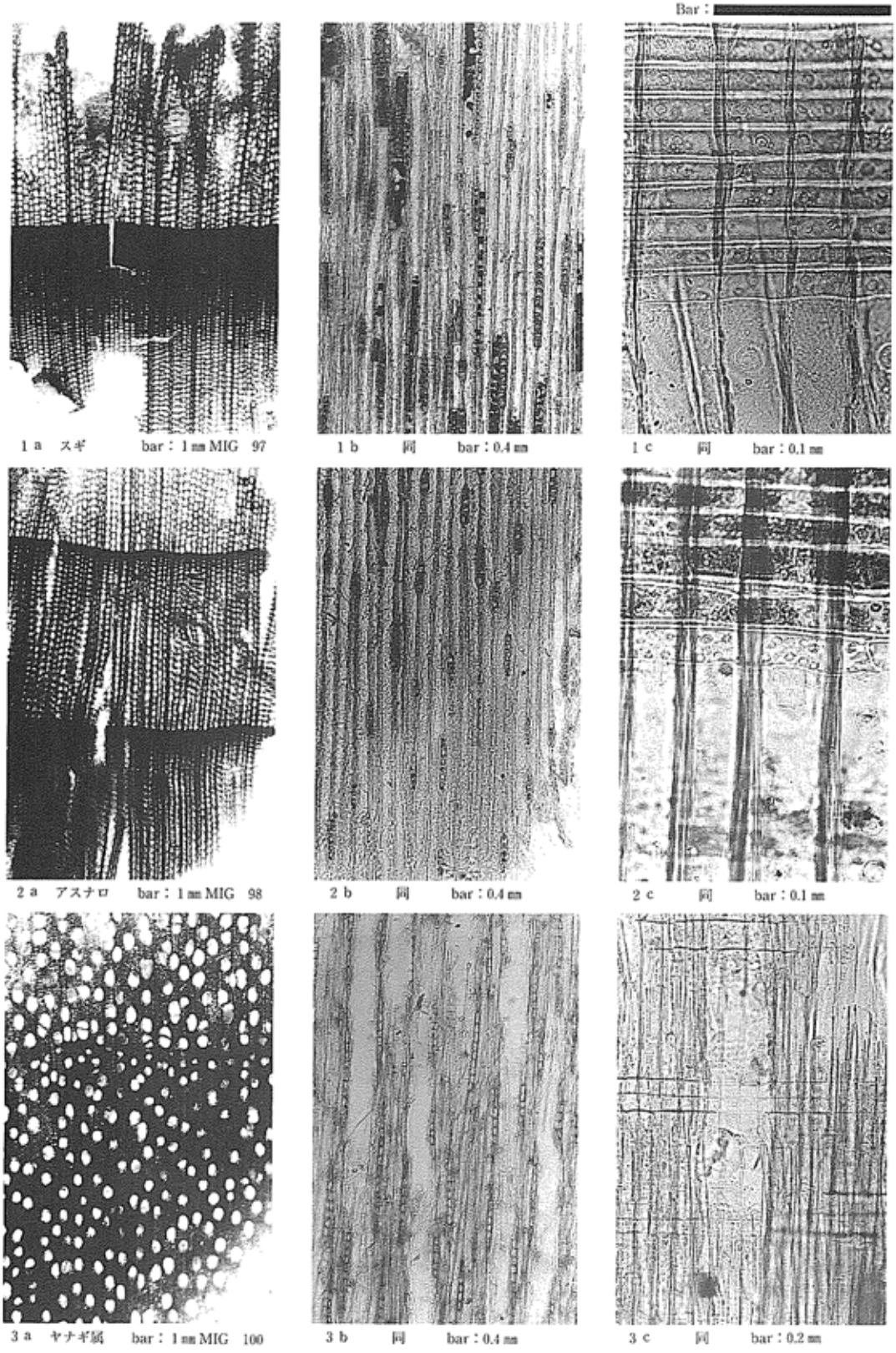


写真図版14　中世の遺物（2）

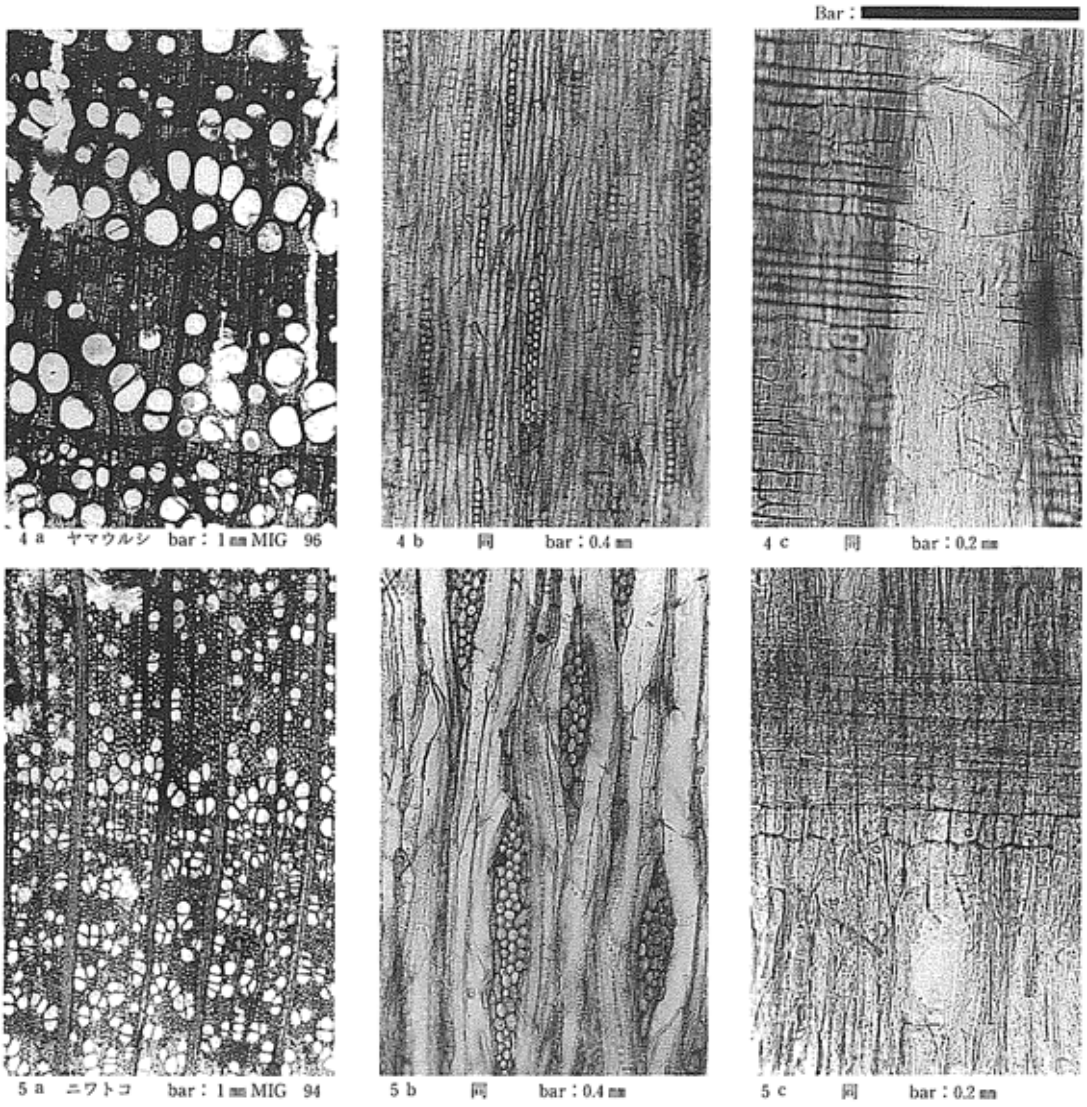
1～3：板碑

S＝1/4

写真図版15　中世の遺物（3）



写真図版16　舟場遺跡出土木材顕微鏡写真（1）



写真図版17　舟場遺跡出土木材顕微鏡写真（2）

上代遺跡（わだいいせき）

目　　次

第 1 章　遺跡の位置と環境 91
第 2 章　発掘調査の成果 92
　1　調査の方法と経過 92
　2　層序 92
　3　発見された遺構と遺物 94
第 3 章　考察とまとめ 108
引用・参考文献 112
付章　上代遺跡出土木製品の樹種同定 113
写真図版 115

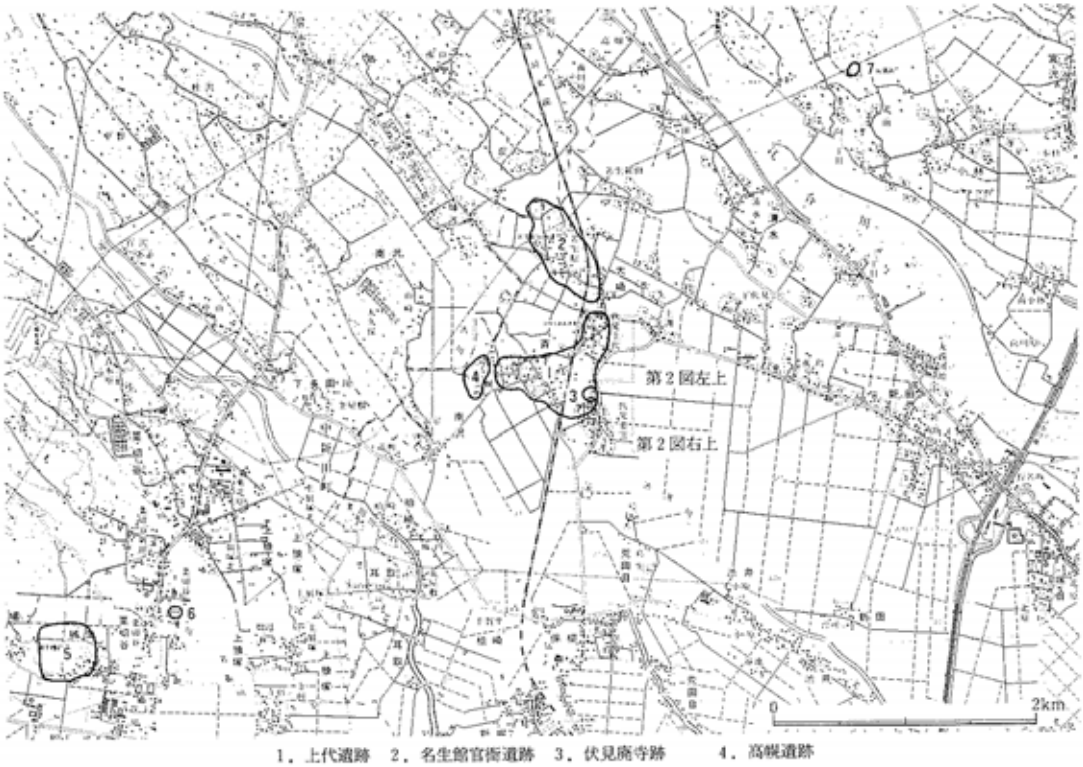
調　査　要　項

遺 跡 名：上代遺跡（わだいいせき）
　　宮城県遺跡地名表登載番号 27142
遺跡記号：ＰＩ
所 在 地：古川市大崎字伏見上代、伏見要害ほか
調査原因：県営ほ場整備事業
調査面積：約 900 ㎡（試掘調査約 400 ㎡）
調査期間：試掘調査　平成 7 年（1995 年）11 月 29 日～12 月 6 日
　　本調査　　平成 8 年（1996 年）10 月 22 日～12 月 6 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：試掘調査　佐久間光平、八嶋伸明
　　本調査　　佐久間光平、菅原弘樹
調査協力：宮城県古川市農林振興事務所、宮城県農業公社、古川市教育委員会

第１章　遺跡の位置と環境

上代遺跡は宮城県の北西部、大崎平野の西北端にあり、古川市大崎字状見上代、伏見要害、斉下に所在する。大崎平野は江合川と鳴瀬川の沖積作用によって形成され、北を築館丘陵、西を玉造丘陵、東を箆岳丘陵、南を大松沢丘陵に囲まれる。遺跡は江合川右岸で、玉造丘陵から派生して東南に延びる河岸段丘の東南端に立地し、その範囲は南北約 900m、東西約 1 ㎞ に及んでいる。標高は約 35mで、今回の調査対象地域となる東側の沖積地（水田）との比高は約 5mを測る。

本遺跡の周辺には多賀城と密接な関わりをもつ城柵官衙遺跡、寺院跡、生産遺跡などが数多く存在する。本遺跡の北約 1㎞ には多賀城創建以前の 7 世紀後葉に設置された名生館官衙遺跡がある。I～IV期の官衙遺構の変遷が確認され、城内地区と小館地区でⅡ期（7 世紀末～8 世紀初頭）およびIV期（8 世紀後半～10 世紀初頭）の政庁の存在が明らかになっている。Ⅱ期官衙は和銅 6 年（713）に建郡された丹取郡の前身の評家もしくは丹取郡家、IV期官衙は神亀 5 年（728）前後に成立した玉造郡家に比定され、官衙の成立にあたっては、多重の関東系土器の存在やⅡ期郡庁院における瓦の特徴などから関東地方からの移民が関与したと考えられている（進藤：1990、高橋・村田：1996）。また、本遺跡の南東端には伏見廃寺がある。金堂跡とみられる乱石積み基壇が検出され、周囲からは名生館官衙遺跡Ⅱ期郡庁院と同笵、同類の瓦や多賀城創建瓦が多数出土しており、名生館官衙遺跡の付属寺院と考えられている(佐々木：1971、進藤：1990)。本遺跡の南西約 1㎞ には高幌遺跡があり、掘立柱建物跡と竪穴住居跡によって構成される 9 世紀前半代を中心とした集落の存在が明らかになっている(註 1)。



1．上代遺跡　2．名生館官衙遺跡　3．伏見廃寺跡　4．高幌遺跡
5．城生遺跡　6．菜切谷廃寺跡　7．大吉山窯跡群

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

このほか、本遺跡の南西約 4㎞には玉造柵あるいは色麻柵の擬定地である城生遺跡とその付属寺院とみられる菜切谷廃寺が存在する。生産遺跡としては、江合川を挟んで東約 2㎞に大吉山窯跡群、南約 10㎞には日の出山窯跡群があり、多賀城創建期の瓦窯が集中的に営まれている。このように、多賀城が創建される以前の、少なくとも 7 世紀末～8 世紀初頭段階に、多賀城から北へ約 40㎞離れた大崎平野の西北地域に律令国家の支配拠点が築かれたことは明らかであり、とくに本遺跡周辺は多賀城以北への律令支配の成立過程を知る上で、きわめて重要な地域に位置している。

なお、本遺跡の北半部から名生館官衙遺跡にかけての広い範囲は、室町、戦国時代には奥州探題大崎氏の名生城としても知られている。館の規模や構造などの具体的な様相については明らかではないが、随所に土塁状の高まりや堀の痕跡が残存している。

第 2 章　発掘調査の成果

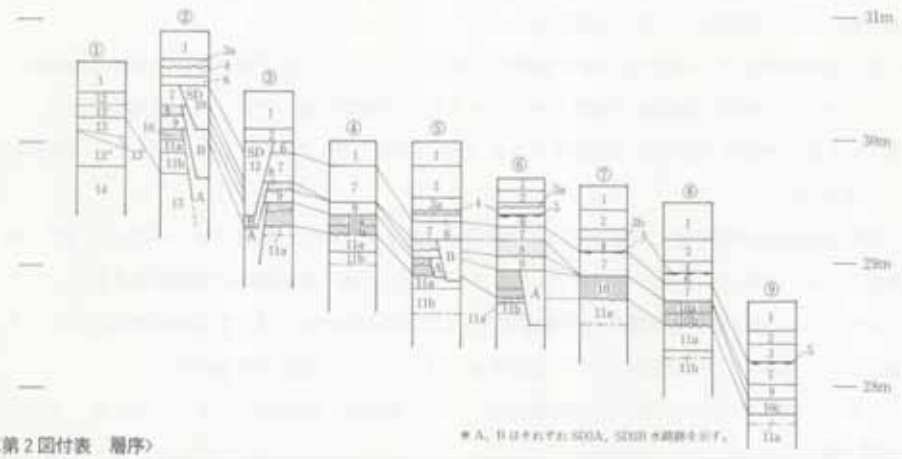
1　調査の方法と経過

今回の調査は、古川市東大崎地区県営ほ場整備事業に係るものである。ほ場整備の対象となる沖積地（水田）一帯は、周知の遺跡の範囲からは外れているが、本遺跡をはじめ名生館官衙遺跡や伏見廃寺などとも近接しており、これらに関わる遺構や遺物の存在が予想された。そこで、ほ場整備が実施される地域のうち工法上保存が困難な部分について、遺構の範囲確認と遺跡の記録保存を目的とした調査を行うこととした。発掘調査にあたっては、ほ場整備の対象地域が広大な範囲に及んでいるため、まず耕作道路および排水路の建設予定地内を対象とした幅約 2mのトレンチによる試掘調査を行い（平成 7 年度、1～11 区）、遺構・遺物の分布状況や遺構面までの深さなどを確認した上で、耕作道路および排水路部分（幅約 5m）の事前調査を実施した（平成 8 年度、1～6・12 区）。

調査の結果、遺構は整備対象地域の中でも 1ｄ区を除く北西部の区域（1～6 区）で検出され、遺物は段丘の縁辺に近い西側のトレンチで多く出土した。一方、12 区以南の区域については、12 区で若干の遺物が出土したものの、ほぼ全域が低湿地となっていることが明らかになった。検出した遺構には丸太材を用いた基礎地業 1、水田跡 3 面、水路跡 2 条、溝跡 5 条、河川跡 4 条などがあり、これらの遺構や堆積層からは土師器、須恵器、瓦片、木製品などの遺物が出土した。検出した遺構については、2ａ区西側の№4 杭（国家座標Ｘ＝－155,200.000、Ｙ＝6,080.000）を発掘調査の座標原点として、1/100・1/20 の縮尺で平面図、1/20 の縮尺で断面図を作成した。また、6×7 モノクロおよび 35 ㎜リバーサルフィルム写真による記録も併せて行った。

2　層序

今回の調査区付近は、段丘の縁辺から沖積地に移行する地点にあたる。地形的には後背湿地および低地（氾濫平野）上に位置しており、現在その全域が水田として利用されている。堆積層は、後背湿地を構成する湿地性堆積土（10ｃ・11ａｂ層）と氾濫平野を形成した自然堆積土（12 層）が基盤をなし、前者を耕起した水田耕作土（8・10ａｂ層）とこれらを覆う水成堆積層（4・7・9 層）との堆積の繰り返しな



＊A、Bはそれぞれ SD0A、SD0B 水銀錆を示す。

〈第２図付表　層序〉

層	土色	土質	層厚(cm)	層の特徴	層	土色	土質	層厚(cm)	層の特徴
1	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト	10～30	現水田耕作土	10a	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	5～20	水田耕作土
2	黒褐 10Y3/1	砂質シルト	10～25		10b	黒 5Y2/1	粘質シルト	5～20	水田耕作土。下層ブロック含。
3a	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	10～20	水田 or 畑の耕作土？	10c	黒褐 2.5Y3/1	ｼﾙﾄ質粘土	10	湿地性堆積層。
3b	黒 10YR2/1	粘質シルト	5～10	均質な白色堆積層	11a	黒 2.5Y2/1	粘質シルト～粘土	10～30	湿地性堆積層。植物遺体含。
4	褐灰 10YR4/1	シルト	5～15	均質な水成堆積層					
5	灰白 2.5Y7/1		5	灰白色火山灰（10世紀頃葉）	11b	黒褐 2.5Y3/1	ｼﾙﾄ質粘土	20<	湿地性堆積層。植物遺体多。
6	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	5～15	白色砂礫・粒石多	12	黒褐 10YR2/2	シルト	20～30	白色堆積層（旧表土？）
7	暗灰黄 2.5Y4/2 黄灰 2.5Y5/1	砂 シルト	5～25	水成堆積層（中砂） （均質）	12'	灰黄褐 10YR4/2			（廉移層）
					13	にぶい黄褐 10YR4/1	シルト	40	白色堆積層。網状遺構多。
8	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト	10～20	水田耕作土	13'	灰黄褐 10YR4/2	粘質シルト		（廉移層）
9	暗灰黄 2.5Y5/2 黒褐 2.5Y3/2	砂 粘質シルト	5～15	水成堆積層（中砂）	13'	暗褐 10YR3/4	シルト		網状遺構多
					14	褐灰 10YR4/1	砂礫	45<	段丘礫層？

第２図　調査区と層序模式図

どによって形成されている。大別で 14 層、細別で 19 層が確認された。このうち年代が明らかなのは 5 層と 6〜10 層で、5 層が灰白色火山灰層（10 世紀前葉）、6〜10 層が古代の堆積層である。11〜14 層では遺物は出土していない。なお、層の検出レベルは東南に向かって徐々に低くなっており、1 区と 12 区では基盤層（11・12 層）で約 2mの比高差が認められる。

1 層　現在の水田耕作土と床土。黒褐色の粘質シルトからなる。

2 層　黒褐色の砂質シルトで、旧水田耕作土とみられる。

3 層　水田もしくは畑の耕作土とみられる黒褐色の砂質シルト（ａ層）、均質な自然堆積層からなる黒色の粘質シルト（ｂ層）に細分される。

4 層　比較的均質な褐灰色のシルトからなる水成堆積層。3 区以南に分布し、部分的ににぶい黄褐色の粗砂層を介在する。

5 層　灰白色火山灰の一次堆積層で、5 区以南で痕跡的に認められる。

6 属　しまりのある黄灰色の砂質シルト。6 区以北のほぼ全域に分布し、段丘に近い 2ａ・5・6ａ区では軽石および白色砂礫（径 2〜3㎜）を多く含む。水田もしくは畑の耕作土の可能性もある。

7 層　暗灰黄色の中砂と黄灰色の砂質シルトからなるしまりのない水成堆積層。短期間に供給されたような堆積状況にあり、層厚が 5〜25 ㎝程で調査区のほぼ全域を覆っている。

8 層　古代の水田耕作土で・黒褐色の砂質シルトからなる。9 層の堆積後に鋤き込まれているためか、10ａｂ層に比べて全体的に砂っぽい。9 層が確認された 5 区以北に分布する。

9 層　暗灰黄色の中砂と黒褐色の粘質シルトからなるしまりのない水成堆積層。7 層と同様の堆積で、5 区以北に分布する。

10 層　古代の堆積層で、9 層に覆われる。黒褐色の粘質シルト（ａ層）、黒色の粘質シルト（ｂ層）、黒褐色のシルト質粘土（ｃ層）に細分される。

ａ・ｂ層：水田耕作土で、6 区以北のほぼ全域に分布する。いずれも上・下面には凹凸が顕著に認められる。ｂ層は下層起源の粘質土をブロック状に不均質に含んでおり、より黒味が強い。

ｃ層：ａ・ｂ層に対応する湿地性の堆積層である。12 区にのみ分布しており、10ａ・ｂ層との上下関係は不明である。

11 層　均質な湿地性の堆積層で、調査区のほぼ全域に分布する。黒色の粘質シルト〜粘土（ａ層）、黒褐色のシルト質粘土（ｂ層）に細分される。ｂ層には未分解の植物遺体が多量に含まれる。

12 層　1ｃ・ｄ区にのみ分布する均質な自然堆積層で、上部が黒褐色のシルト、下部が灰黄褐色のシルトからなる。他層との対応関係については明らかではないが、旧表土とみられる。

13 層　11 層および 12 層下にみられる自然堆積層で、にぶい黄褐色〜暗褐色のシルトからなる。1・2ｂ・2ｃ区で検出した。

14 層　褐灰色の砂礫層で、1ｃ・ｄ区の現水田下 80〜100 ㎝で検出した。段丘礫層の一部とみられる。

3　発見された遺構と遺物

検出された遺構には、10ａ・ｂ層水田跡と 8 層水田跡、11 層上面の丸太材を用いた基礎地業、10 層上面

の水路跡・溝跡、8 層上面の水路跡、7 層上面の溝跡、4 層上面の溝跡 1 条がある。また、12・10・7・3 層の各上面では河川跡が検出されている。以下、各遺構の概要を層ごとに古い順に述べていくが、ここでは年代の明らかな 7 層以下の遺構について説明を加える。

（1）11 層の遺構

【ＳＸ2 基礎地業】（第 4・5 図）

6ａ区西端部の 11 層上面に施された基礎地業である。斜面に沿って密接に敷き並べた丸太材とその上に積み上げた盛土によって平坦な面を造成している。現存する厚さは 30～40 ㎝程で、調査区の西端からＳＤ3 水路跡までの東西約 8mにわたって検出した。丸太は樹皮が付いたままのナラ材を用いており、概して下部には木の先端や枝の部分などの太さや長さの異なる材を、上部には長さ 2m強で、径 20～30 ㎝程の太さの揃った材を敷き並べている。とくにこれらの材を固定するような杭列等は認められない。丸太材の方向は斜面に平行しており、北で 15 度前後西に偏しているものが多い。盛土は白色粘土混じりのしまりある黒色粘土からなる。

遺物は、盛土中からは土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・甕、平瓦などが出土している。土師器坏には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがあり、後者には底部の切り離しが回転糸切りで体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリが施されるもの（第 8 図 7）と回転糸切り無調整のものとがある。須恵器坏には底部がヘラ切り無調整のものが 1 点ある。

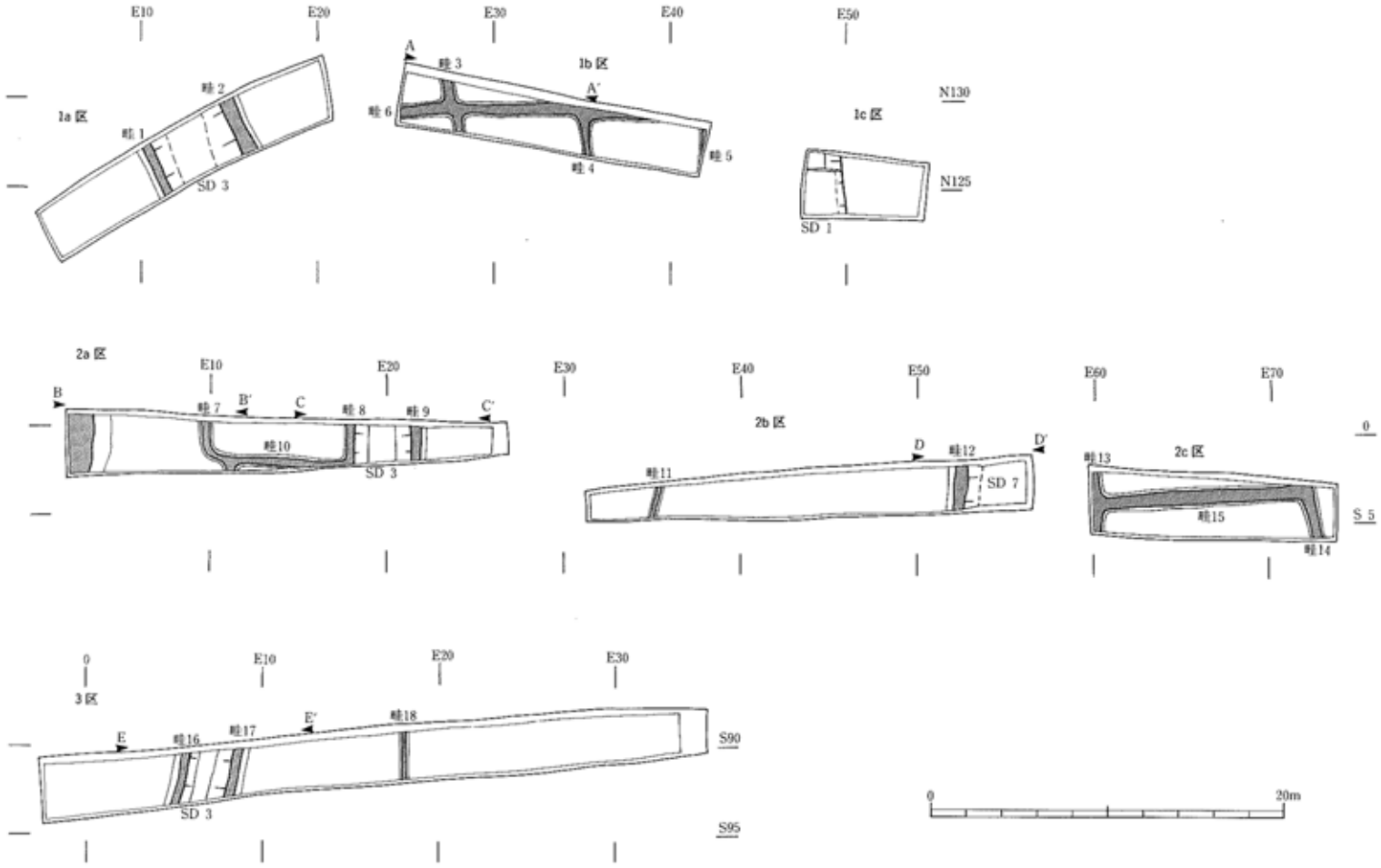
（2）10 層の遺構

【10ａ・ｂ層水田跡】（第 4・5 図）

畦畔によって区画された水田と水路（ＳＤ3Ａ）によって構成される水田跡で、9 層もしくは 7 層の水成堆積層に直接覆われる。後述する 8 層水田跡とは 9 層起源の砂質土を混在しないことで区別される。1ｃ・ｄ区を除く 6 区以北のほぼ全域で検出された。

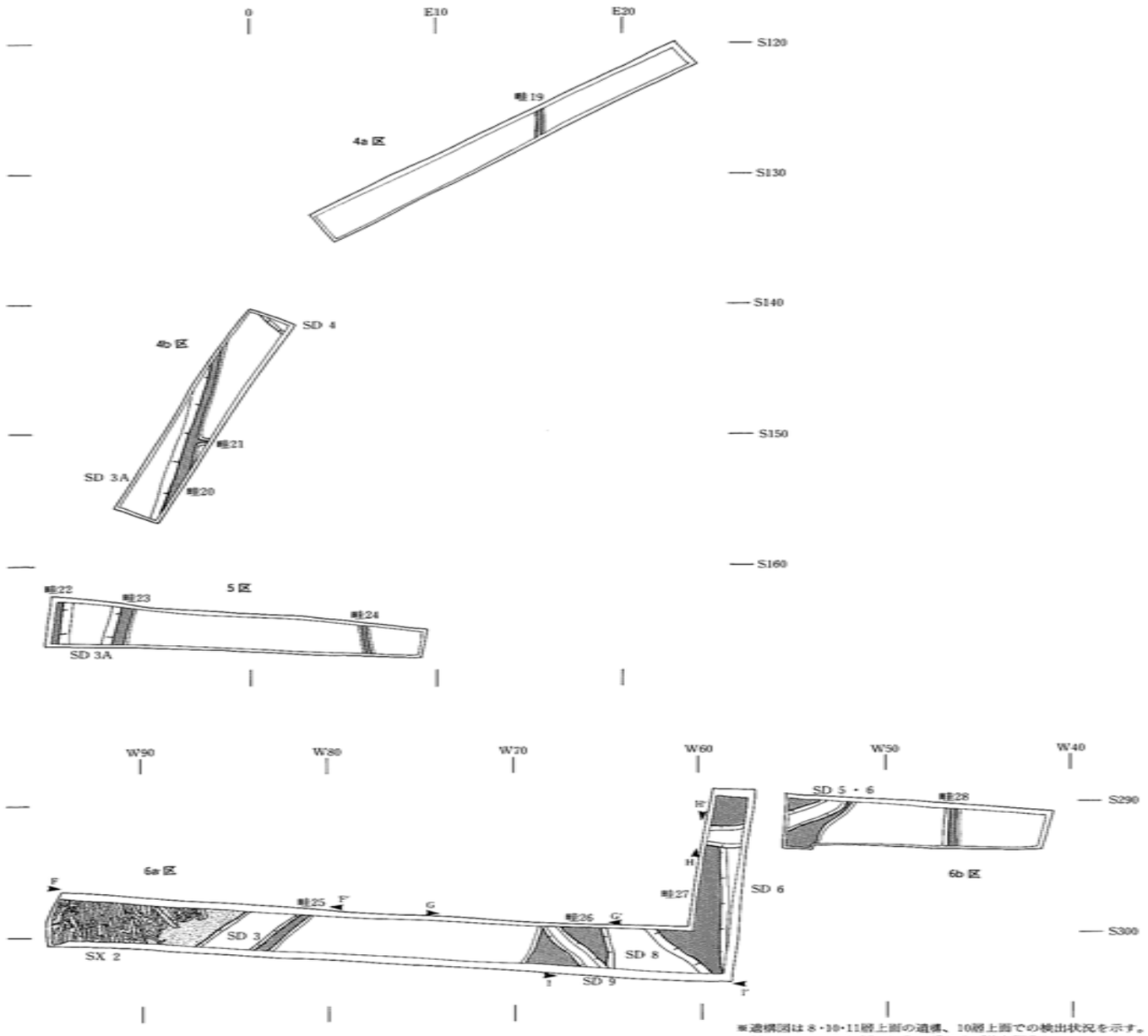
〈水田耕作土〉耕作土は 11 層上部を鋤き込んだ粘質土からなり、色調や母材となる粘質土の撹拌の程度の違いなどによって、ａ・ｂ2 時期に細分される。層厚はａ・ｂとも 5～20 ㎝で、いずれの上・下面にも凹凸が顕著に認められる。ただし、ａ層水田は間層を挟まずにｂ層水田を耕起し、また畦畔の位置や規模はもとより、水路も改修されることなくそのまま踏襲していることなどからみて、識別された 2 時期の水田は休耕することなく営まれたもので、耕作の深さや鋤き込み具合いの違いなどを反映したものとみられる。

〈畦畔〉畦畔は南北方向のものが 24 条と東西方向のものが 4 条確認された。これらは規模（畦の幅）の違いによって、以下の大・中・小の畦畔に分類される。大畦畔は 6ａ・ｂ区で検出された南北方向の畦畔で、ＳＤ8 河川跡の両岸に沿って構築されている。水田耕作土と同様の粘質土（大畦 2 層）と軽石および白色砂礫混じりの砂質土（大畦 1 層）からなり、水田面から約 40 ㎝の高さに盛り上げている。規模や方向については、調査面積が狭く詳細は明らかではないが、ＳＤ8 西岸（畦№26）では 3～5m程の幅で土堤が盛られている。中畦畔は上幅 1m前後の南北方向の畦畔で、9 条確認された。いずれもＳＤ3ＡやＳＤ1・7 河川跡の両岸に沿って検出されている。畦畔の構築にあたっては、そのほとんどのものが水田耕作土や水路掘削時の土で盛り上げているが、畦№12 のように河川の侵食によって削り残



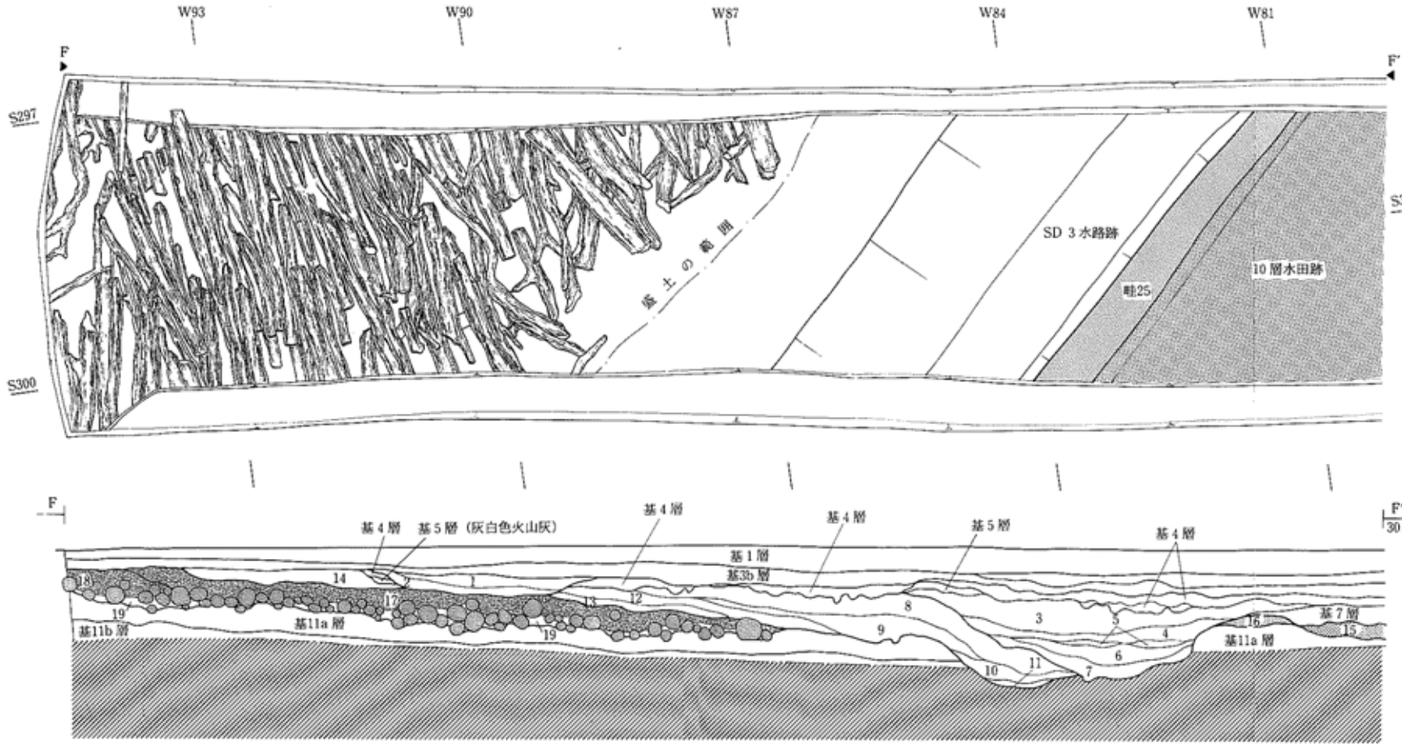
第３図　１・２・３区遺構全体図

※遺構図は８・10層上面の遺構、10層上面での検出状況を示す。
SD ３についてはSD3A・Bの掘り上げ後を図化している。



第４図　４・５・６区遺構全体図

※遺構図は８・10・11層上面の遺構、10層上面での検出状況を示す。
SD ３については SD3A・B の掘り上げ後を図化している。



第 1 表　水田跡畦畔計測表

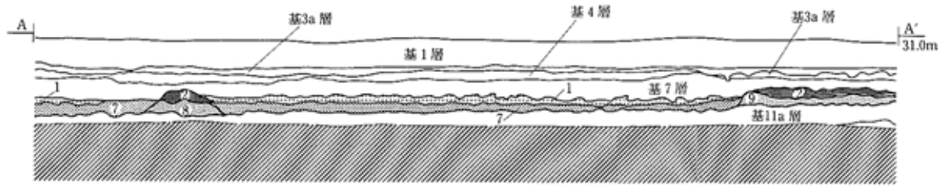
畦No.	調査区	畦畔の種類	方　向	10a b層水田跡		8層水田跡		備　考
				規模（m）	比高(cm)	規模(m)	比高(cm)	
1	1 a	中畦畔	南北(N25°W)	(0.8)	35～40	(0.9)	15	SD3 の西岸土堤
2		中畦畔	南北(N25°W)	1.0	10	(2.3)	2～3	SD3 の東岸土堤
3	1 b	小畦畔	南北(N10°W)	0.6	5	0.4～0.5	5～10	
4		小畦畔	南北(N10°W)	0.6	10～15	?	?	
5		中畦畔?	南北(0°)	?	?	?	?	SD1 の西岸土堤？
6		小畦畔	東西(0°)	0.6	5	?	?	
7	2 a	小畦畔	南北(0°)	a9.6 b1.2	a10 b5	–	–	
8		中畦畔	南北(0°)	?	?	?	?	SD3 の西岸土堤？
9		中畦畔	南北(0°)	1.2	a10 b25	2.0	30	SD3 の東岸土堤
10		小畦畔	東西(82°S)	0.5	?	–	–	
11	2 b	小畦畔	南北(N15°E)	(0.5)	?	–	–	
12		中畦畔	南北(0°)	2.0	a15 b25	→	10	SD7 の西岸土堤(段倉)
13	2 c	小畦畔	南北(0°)	0.2<	a15 b20	非耕作		SD7 の東岸土堤？
14		小畦畔	南北(N10°E)	0.6	5			
15		小畦畔	東西(E5°N)	0.8	5			
16	3	中畦畔	南北(N15°E)	a0.7 b(1.5)	a30 b15	→	30～15	SD3 の西岸土堤
17		中畦畔	南北(N15°E)	(0.8)	20	20	20～30	SD3 の東岸土堤
18		小畦畔	南北(N1°E)	0.8	2～3	–	–	
19	4 a	小畦畔	南北(0°)	(0.5)	?	–	–	
20	4 b	小畦畔	南北(N15°E)	?	?	–	–	SD3 の東岸土堤
21		小畦畔	東西(0°)	(0.5)	2～3	–	–	
22	5	中畦畔	南北(N15°E)	0.6	2～3	–	–	SD3 の西岸土堤
23		中畦畔	南北(N15°E)	0.8	a5 b15	–	–	SD3 の東岸土堤
24		小畦畔	南北(N10°E)	0.8	10	–	–	
25	6 a	中畦畔	南北(N45°E)	0.6	10	10層水田を踏襲？		SD3 の東岸土堤
26		大畦畔	南北(？)	(3.0～5.0？)	40			SD8 の西岸土堤
27	6ab	大畦畔	南北(？)	5.0<	40			SD8 の東岸土堤
28	6 b	小畦畔	南北(0°)	0.4	10			

＊→：10層水田の畦畔をそのまま踏襲　？：削平等により不明　－：畦畔未確認

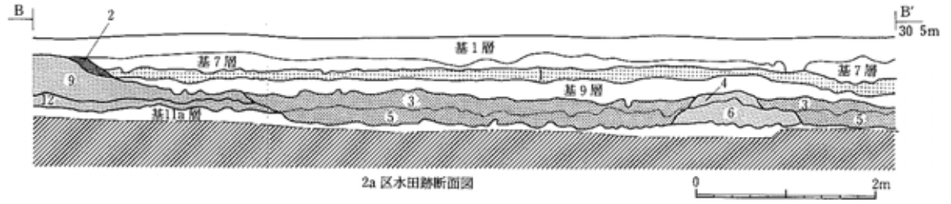
第 2 表　ＳＤ３水路跡計測表

調査区	方　向	SD3A（10層水田に伴う水路）				SD3B（8層水田に伴う水路）			
		上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	遺構レベル	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	遺構レベル
1 a	N25°W	(2.9)	1.3	1.0≦	29.3m≧	(2.2)	1.0	0.7	29.7m
2 a	9°(真北)	(3.1)	1.4	0.7	29.0	(3.0)	0.8	0.7	29.4
3	N15°E	?	?	0.5	28.9	3.0	1.6	0.7	28.8
4 b	N15°E	?	?	?	28.5	9層堆積前に埋没→西側に移動？			
5	N15°E	3.5	2.0	0.5	28.3				
6 a	N45°E	(2.0)	(1.0)	0.8	28.1	2.5	1.0	0.7	28.2

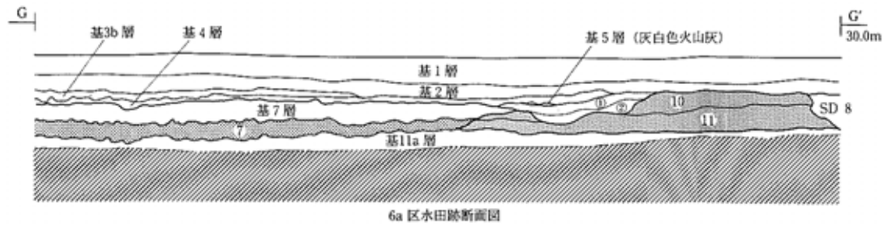
＊深さは畦畔上からの深さを示す。



1b 区水田跡断面図



2a 区水田跡断面図



6a 区水田跡断面図

No.	土　色	土　性	備　考	No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト	8層水田［耕作土］	8	黒 10YR2/1	粘質シルト	10層水田［a・b 畦畔］
2	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	［畦畔］シルトブロック	9	黒褐 10YR3/1	砂質シルト	［a・b 畦畔］白色砂礫多
3	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	10層水田［a 耕作土］	10	黒褐 10YR2/2	砂質シルト	［a・b 畦畔］白色砂礫多
4	黒褐 10YR3/1	砂質シルト	［a 畦畔］	11	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	［a・b 畦畔］自然堆積土
5	黒 2.5Y2/1	粘質シルト	［b 耕作土］	12	黒褐 2.5Y3/1	シルト質粘土	［a・b 畦畔］均質な水成堆積層
6	黒 2.5Y2/1	砂質シルト	［b 畦畔］粘土・砂ブロック含	①	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	SD9
7	黒 2.5Y2/1	粘質シルト	［a・b 耕作土］	②	暗灰黄 2.5Y5/2	砂	水成堆積層（粗砂）

SX2 基礎地業・SD3 水路跡

No.	土　色	土　性	備　考	No.	土　色	土　性	備　考	No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト	SD11　白色砂礫多	8	黒 2.5Y2/1	粘質シルト	SD3A　旧層な水成堆積層	15	黒 2.5Y2/1	粘質シルト	16層水田　［a・b 耕作土］砂粒含
2	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	水成堆積層（粗砂）	9	黒 10YR2/1	シルト	白色砂礫含	16	黒 10YR2/1	粘質シルト	［a・b 畦畔］
3	黒褐 10YR3/1	シルト	SD3B　白色砂礫含	10	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	炭化物・砂礫・遺物含	17	黒 10YR2/1	粘質シルト	SX2　白色粘土ブロック多
4	黒褐 2.5Y3/1	シルト	基7層対応	11	黒 2.5Y3/1	砂質粘土	粗砂多、遺物含	18	黒 10YR2/1	粘質シルト	ブロック含まない
5	にぶい黄 2.5Y6/3	砂質シルト	（粗砂＋粘土ブロック）	12	黒褐 10YR3/1	シルト	細砂多	19	黒 2.5Y2/1	粘質シルト	（基11a 層起源）
6	灰 10Y5/1	砂	（粗砂＋細砂）	13	黒 10YR2.7/1	粘質シルト	水成堆積層（均質）				
7	灰 10Y5/1	砂	（細砂＋スサモ）	14	黒 10YR2/1	シルト	白色砂礫・粗石多				

第 5 図　SX 2 基礎地業と水田跡

された高まりをそのまま畦畔として利用したものもみられる。小畦畔は上幅 50～60 ㎝の小規模な土盛り畦畔である。水田面との比高差も小さいため面的には検出できず、断面観察により確認されたものもある。方向は、真北方向を基準としたものが多くみられる。

〈水田区画〉調査区が狭く、区画全体の大きさが明らかなものはないが、畦畔の残りが良い 1・2 区でみると、方形を呈する水田区画のうち 1 辺の長さが明らかなものはそれぞれ 6、6.5、8、11.5mの規模を有する。

〈出土遺物〉土師器坏・埦・蓋・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・壺、平瓦、土製支脚などが出土している。土師器坏には非ロクロ調整のものとロクロ調整ものとがある。このうち全形が分かるのは後者の 1 点のみで、体下部から底部にかけて手持ちヘラケズリ調整が施されている（第 8 図 8）。前者には内面に黒色処理を施した有段坏（1・2）と内面にナデ調整を施した関東系土器があるが、いずれも小破片で、しかも 2・3・6 区に限って出土する傾向にある。須恵器坏には体下部から底部にかけて回転ヘラケズリ調整が施されるもの（10）、ヘラ切り無調整のもの（11）、回転糸切り無調整のもの（12）があり、底部に「□生」の墨書が認められるものもある（図版 5－11）。平瓦は凸面に格子叩き目を残す桶巻き作りのもの（第 8 図 27）が出土している。

【ＳＤ3Ａ水路跡】（第 3～6 図）

10ａ・ｂ層水田跡に伴う南北方向の水路跡である。1～6 区の西半部で検出しており、総長は少なくとも 430m以上におよんでいる。9 層堆積後に改修が行われている（ＳＤ3Ａ→Ｂ）。規模は、上幅が 3～3.5m程で、下幅が 1～2m、畦畔上からの深さが 0.5～1m程である。断面形は「Ｕ」字形を呈する。底面の標高は 2 区で約 29．0m，6 区で約 28．1m、勾配は 0.3%で、南に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は粗砂を多く含む砂と粘質土の水成堆積土からなる。

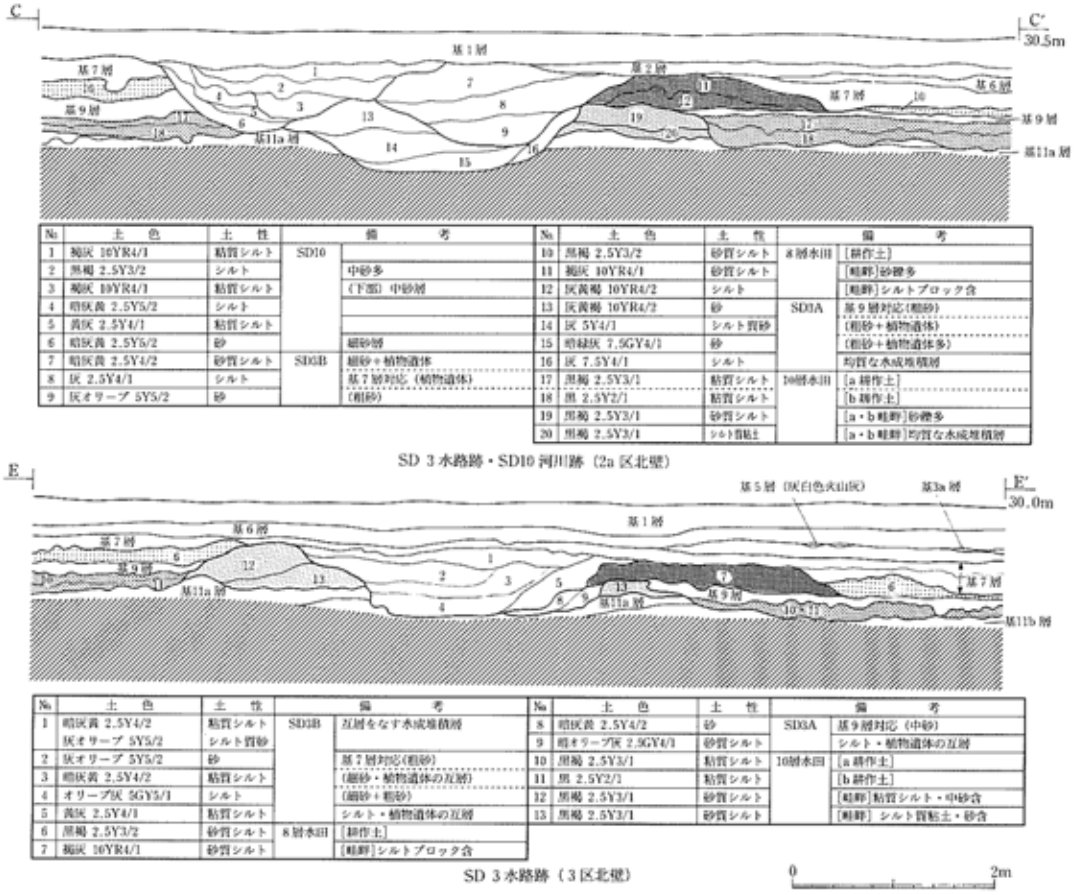
堆積土からは、土師器甕、須恵器坏・高坏・蓋、木製品の槽、弥生土器などが出土している。須恵器坏には底部がヘラ切り無調整のもの（第 8 図 13）と回転糸切り無調整（14）のものがあり、13 には「里」の墨書が認められる。土師器甕の中には漆の付着したものもある。槽は短辺中央に棒状の把手を有する大型のもので、2 点（第 9 図 2・3）出土している。弥生土器（第 8 図 29）は壺の口縁部付近に交互刺突文を施したもので、弥生後期（天王山式）のものとみられる。

【ＳＤ5 溝跡】（第 4・7 図）

6ａ・ｂ区の 10 層水田跡の大畦畔（畦№27）上で検出した東西方向の溝跡である。ほぼ同規模のＳＤ6 東西溝跡によって壊されている。堆積土は水成堆積による細砂と砂礫混じりの砂質土からなる。堆積土からは、非ロクロ調整の土師器坏（有段坏）の小破片や底部がヘラ切り無調整の須恵器坏（第 8 図 15）などが出土している。

【ＳＤ6 溝跡】（第 4・7 図）

6ａ・ｂ区の大畦畔（畦№27）上で検出した溝跡である。東西方向の溝と南北方向の溝が「Ｔ」字状に交差する。ＳＤ5 溝跡よりも新しく、7 層に覆われる。上幅 1.2m、下幅 0.3m、深さ 0.3mである。断面形は壁が緩やかに立ち上がる「Ｕ」字形を呈する。方向は南北溝がほぼ真北であるが、東西溝は東で北に 30 度程反れながら東西に延びている。堆積土は粗砂を多く含む水成堆積層からなる。



№	土色	土性	備考
1	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	SD10
2	黒褐 2.5Y3/2	シルト	中砂多
3	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	（下面）中砂層
4	暗灰黄 2.5Y5/2	シルト	
5	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	
6	暗灰黄 2.5Y5/2	砂	細砂層
7	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	SD3B　細砂＋植物遺体
8	灰 2.5Y4/1	シルト	基7層対応（植物遺体）
9	灰オリーブ 5Y5/2	砂	（粗砂）

№	土色	土性	備考
10	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト	8層水田　[耕作土]
11	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	[畦畔]砂礫多
12	灰黄褐 10YR4/2	シルト	[畦畔]シルトブロック含
13	灰黄褐 10YR4/2	砂	SD3A　基9層対応（粗砂）
14	灰 5Y4/1	シルト質砂	（粗砂＋植物遺体）
15	暗緑灰 7.5GY4/1	砂	（粗砂＋植物遺体多）
16	灰 7.5Y4/1	シルト	均質な水成堆積層
17	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	10層水田　[a耕作土]
18	黒 2.5Y2/1	粘質シルト	[b耕作土]
19	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	[a・b畦畔]砂礫多
20	黒褐 2.5Y3/1	シルト質粘土	[a・b畦畔]均質な水成堆積層

SD 3 水路跡・SD10 河川跡（2a 区北壁）

№	土色	土性	備考
1	暗灰黄 2.5Y4/2 灰オリーブ 5Y5/2	粘質シルト シルト質砂	SD3B　互層をなす水成堆積層
2	灰オリーブ 5Y5/2	砂	基7層対応（粗砂）
3	暗灰黄 2.5Y4/2	粘質シルト	（細砂・植物遺体の互層）
4	オリーブ灰 5GY5/1	シルト	（細砂＋粗砂）
5	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	シルト・植物遺体の互層
6	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト	8層水田　[耕作土]
7	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	[畦畔]シルトブロック含

№	土色	土性	備考
8	暗灰黄 2.5Y4/2	砂	SD3A　基9層対応（中砂）
9	暗オリーブ灰 2.5GY4/1	砂質シルト	シルト・植物遺体の互層
10	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	10層水田　[a耕作土]
11	黒 2.5Y2/1	粘質シルト	[b耕作土]
12	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	[畦畔]粘質シルト・中砂含
13	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	[畦畔] シルト質粘土・砂含

SD 3 水路跡（3 区北壁）

0　2m

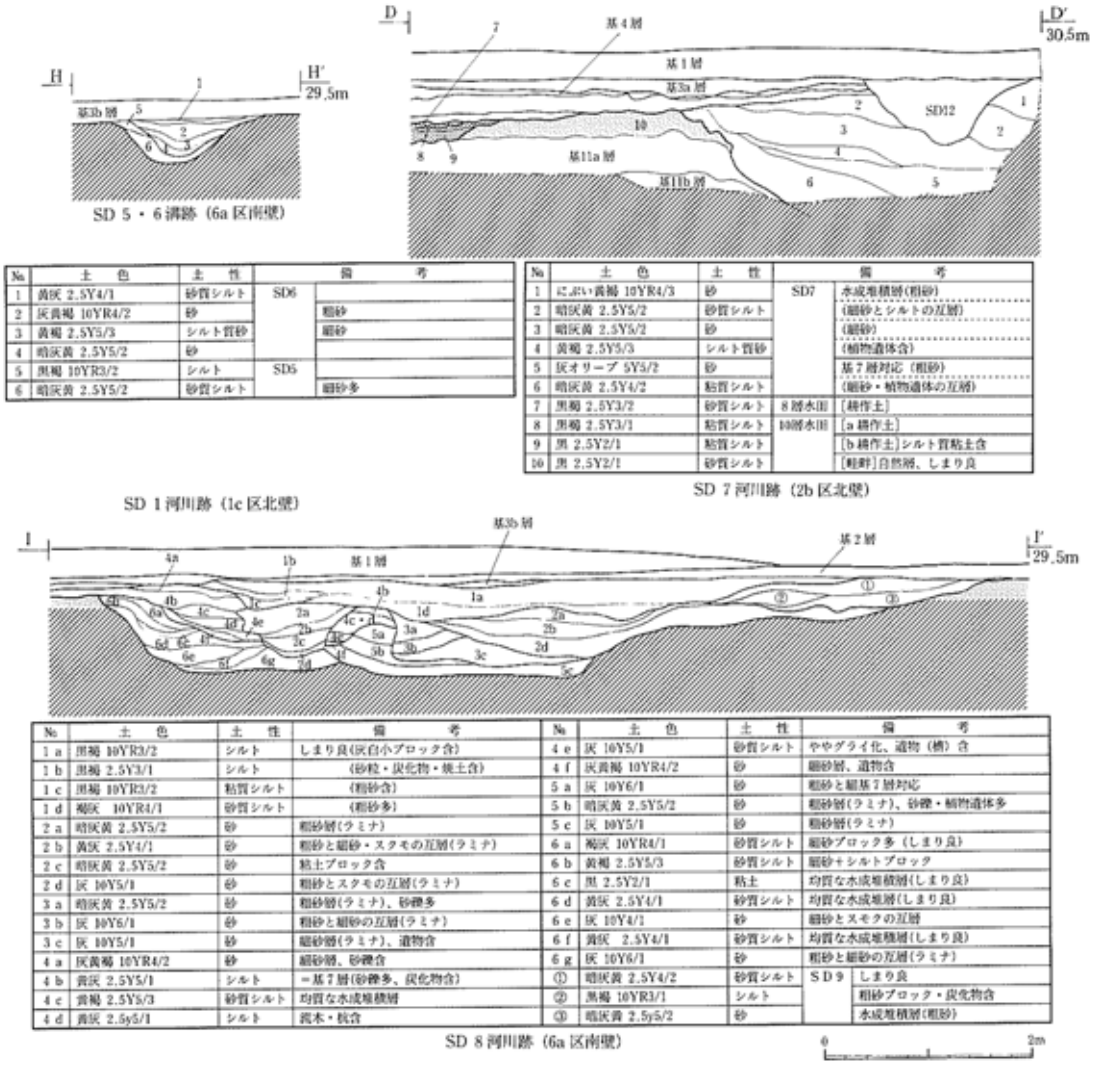
第 6 図　SD 3 水路跡断面図

【ＳＤ7 河川跡】（第 3・7 図）

2ｂ区の東端を南北に流れる河川跡で、その西岸部分を検出した。11 層を侵食して流れ、少なくとも 6 層堆積時には埋没している。深さは 1m以上で、底面は 12 層以下にまで達している。川幅については、少なくとも 2ｃ区では検出されていないことから、5～7m程とみられる。堆積土は粗砂と細砂が互層をなす水成堆積層からなる。検出面や深さ、方向、層の堆積状況等からみて、1ｃ区西端で検出されたＳＤ1 河川跡と同じ流路の可能性が考えられる。なお、ＳＤ7 の西岸には約 2mの幅で土堤が盛られており、10ａ・ｂおよび 8 層水田跡の畦畔（畦№12）となっている。

【ＳＤ8 河川跡】（第 4・7 図）

6ａ区東端の大畦畔上を南北に流れる河川跡である。前述のとおり両岸には土堤が盛られており、10ａ・ｂ層水田跡の畦畔（畦№26・27）となっている。堆積土は侵食と水成堆積を繰り返して形成されており、最終的には 4 層に覆われる。規模は上幅が 2.5～5m、下幅が 1.5～2m、深さが 0.6～0.8m程で推移しており、河川 3 層段階には東岸に径約 5 ㎝の杭による打ち込み護岸が 30～40 ㎝間隔で認められる。



№	土色	土性	備考	
1	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	SD6	
2	灰黄褐 10YR4/2	砂		粗砂
3	黄褐 2.5Y5/3	シルト質砂		細砂
4	暗灰黄 2.5Y5/2	砂		
5	黒褐 10YR3/2	シルト	SD5	
6	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト		細砂多

№	土色	土性	備考	
1	にぶい黄褐 10YR4/3	砂	SD7	水成堆積層(粗砂)
2	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト		(細砂とシルトの互層)
3	暗灰黄 2.5Y5/2	砂		(細砂)
4	黄褐 2.5Y5/3	シルト質砂		(植物遺体含)
5	灰オリーブ 5Y5/2	砂		基7層対応（粗砂）
6	暗灰黄 2.5Y4/2	粘質シルト		(細砂・植物遺体の互層)
7	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト	8層水田	[耕作土]
8	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	10層水田	[a 耕作土]
9	黒 2.5Y2/1	粘質シルト		[b 耕作土]シルト質粘土含
10	黒 2.5Y2/1	砂質シルト		[軽鉄]自然堤、しまり良

№	土色	土性	備考
1a	黒褐 10YR3/2	シルト	しまり良(灰白小ブロック含)
1b	黒褐 2.5Y3/1	シルト	(砂粒・炭化物・焼土含)
1c	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	(粗砂含)
1d	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	(粗砂多)
2a	暗灰黄 2.5Y5/2	砂	粗砂層(ラミナ)
2b	黄灰 2.5Y4/1	砂	粗砂と細砂・スクモの互層(ラミナ)
2c	暗灰黄 2.5Y5/2	砂	粘土ブロック含
2d	灰 10Y5/1	砂	粗砂とスクモの互層(ラミナ)
3a	暗灰黄 2.5Y5/2	砂	粗砂層(ラミナ)、砂礫多
3b	灰 10Y6/1	砂	粗砂と細砂の互層(ラミナ)
3c	灰 10Y5/1	砂	細砂層(ラミナ)、遺物含
4a	灰黄褐 10YR4/2	砂	細砂層、砂礫含
4b	黄灰 2.5Y5/1	シルト	=基7層(砂礫多、炭化物含)
4c	黄褐 2.5Y5/3	砂質シルト	均質な水成堆積層
4d	黄灰 2.5y5/1	シルト	流木・植含

№	土色	土性	備考	
4e	灰 10Y5/1	砂質シルト	ややグライ化、遺物（槽）含	
4f	灰黄褐 10YR4/2	砂	細砂層、遺物含	
5a	灰 10Y6/1	砂	粗砂と細基7層対応	
5b	暗灰黄 2.5Y5/2	砂	粗砂層(ラミナ)、砂礫・植物遺体多	
5c	灰 10Y5/1	砂	粗砂層(ラミナ)	
6a	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	細砂ブロック多（しまり良）	
6b	黄褐 2.5Y5/3	砂質シルト	細砂+シルトブロック	
6c	黒 2.5Y2/1	粘土	均質な水成堆積層(しまり良)	
6d	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	均質な水成堆積層(しまり良)	
6e	灰 10Y4/1	砂	細砂とスモクの互層	
6f	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	均質な水成堆積層(しまり良)	
6g	灰 10Y6/1	砂	粗砂と細砂の互層(ラミナ)	
①	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	SD9	しまり良
②	黒褐 10YR3/1	シルト		粗砂ブロック・炭化物含
③	暗灰黄 2.5y5/2	砂		水成堆積層(粗砂)

第 7 図　溝跡・河川跡断面図

堆積土はスクモと細砂の薄層が互層をなす砂質土と短期間に供給されたような粗砂および細砂の水成堆積層からなる。

遺物はおもに 3ｃ層と 4ｅ・ｆ層から出土している。土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・壷、平瓦、木製品の槽・横櫛、弥生土器、植物遺体（オニグルミ・ウメ核）などがある。土師器坏には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがあり、後者は回転ヘラケズリ調整のものと手持ちヘラケズリ調整のもので、前者は有段坏（第 8 図 3）と関東系土器（4・5）の小破片である。須恵器坏は底部がヘラ切り無調整のもの（17～20）と回転糸切り無調整のものが多くみられる。須恵器の壷には漆の付着が認められるものもある（図版 5－12）。平瓦はいずれも桶巻き作りで、凸面に花文状の叩き目を残すもの（23）や格子叩き目を残すもの（24）が出土している。槽（第 9 図 1）は両端に一対の把手を有するもので、長さ 90.5 ㎝、幅約 40 ㎝、高さ 11.5 ㎝の大型品である。

(3)　8 層の遺構

【8 層水田跡】（第 3〜6 図）

畦畔によって区画される水田と水路（ＳＤ3Ｂ）によって構成される水田跡である。9 層堆積後に改修され、7 層の水成堆積層に直接覆われる。5 区以北で確認された。9 層の堆積が認められない 6ａ・ｂ区では確認されなかったが、10 層水田跡を 7 層が直接覆っていることから、6ａ・ｂ区においては 10 層水田跡が 8 層段階まで継続して営まれていたものと思われる。

〈水田耕作土〉耕作土は 9 層上部を鋤き込んだ黒褐色の砂質土で、層厚は 5〜20 ㎝である。上面は 7 層の水成堆積土に覆われ凹凸が顕著であるが、下面は比較的平坦である。

〈畦畔・水田区画〉畦畔は概して残りが悪く、水路浴いで中畦畔を 5 条、1ａ・ｂ区で東西・南北方向の小畦畔を 4 条確認したにとどまる。いずれも 10 層水田の畦畔を踏襲している。中畦畔はＳＤ3Ｂの両岸に沿って検出されている。畦№1・2・16 は 9 層の堆積およびＳＤ3Ａの埋没によってできた高まりを利用し、畦№9・17 はその上にさらに土盛りして畦畔を構築している。このため中畦畔の規模は 10 層水田に比べて大きくなっており、畦№2・9・17 では上幅が 2m程に拡幅されている。小畦畔（畦№3〜6）は 10 層水田の小畦畔上に黒褐色の粘質土を 10〜15 ㎝程の高さで土盛りしたもので、9 層の堆積前後で畦畔の規模や水田面との比高差に違いは認められない。水田区画についても 10 層水田の区画をそのまま踏襲したとものと思われる。

〈水田面に残された痕跡〉1ｂ区東半部の水田面で、ウシのものとみられる足跡を多数検出した（図版 3)。かなり散在的に分布しており、歩行等の規則性は見いだせないが、足跡の窪みが 7 層によって埋没していることから､水田面に残された足跡は水田耕作と直接関わりをもったものである可能性が高いと思われる。

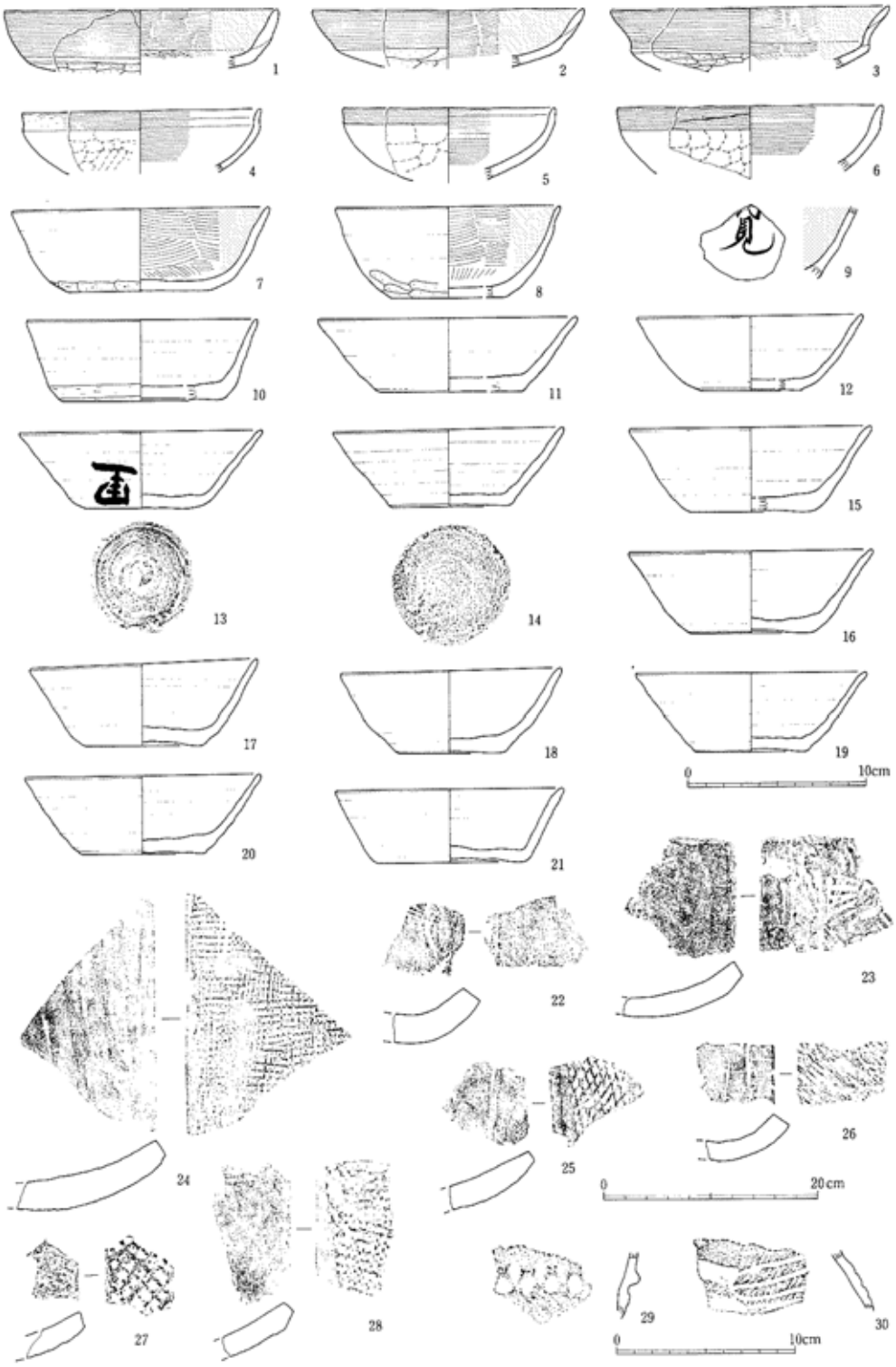
〈出土遺物〉土師器甕、須恵器坏・埦・甕・壷などがあるが、遺物量は少なく、小破片が多い。特徴の分かるものとしては、底部の調整がヘラ切り無調整のものと静止糸切りで切り離し後手持ちヘラケズリを施した須恵器坏がある。

【ＳＤ3Ｂ水路跡】（第 3〜6 図）

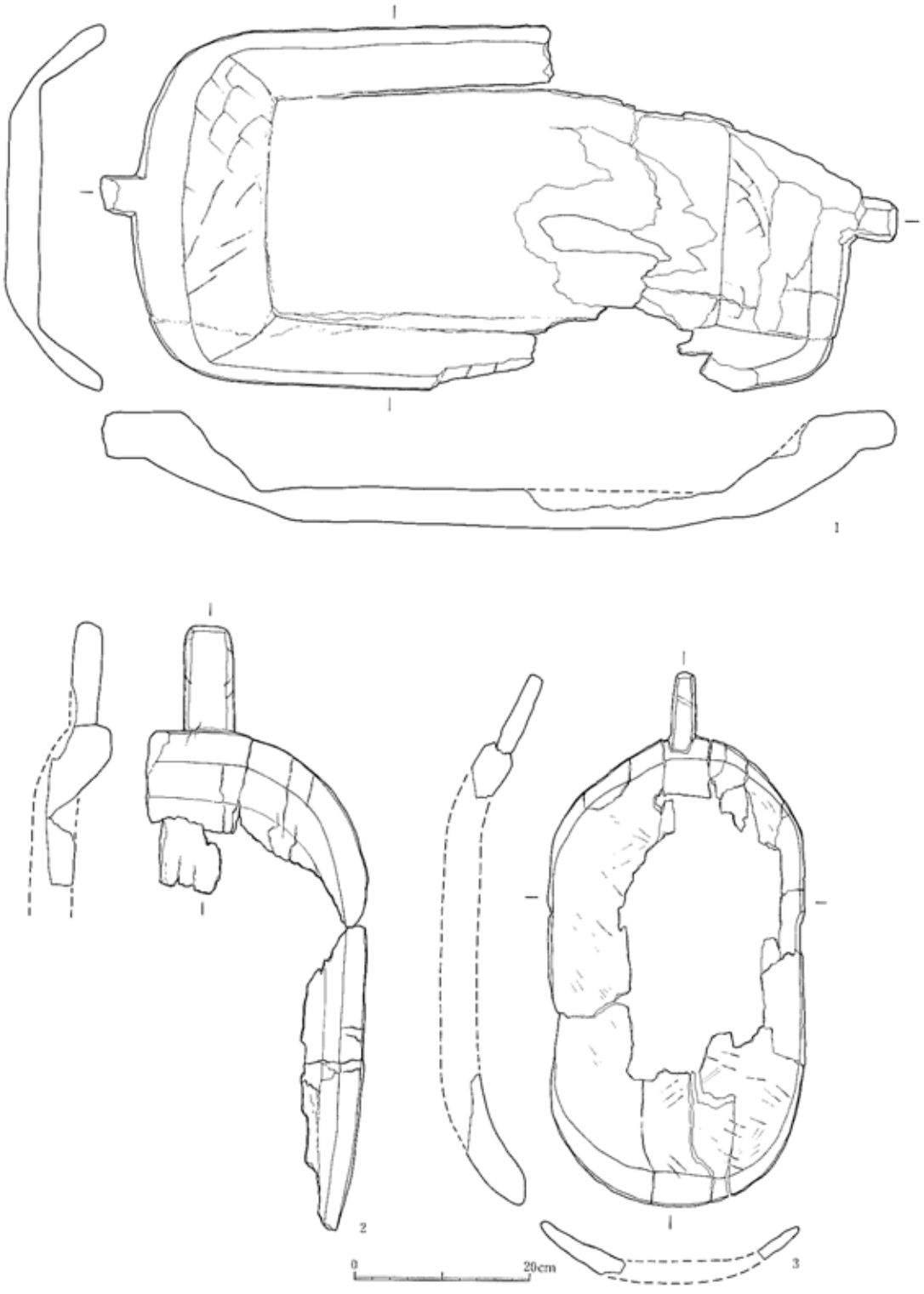
8 層水田跡に伴う南北方向の水路跡である。1〜3・6 区の西半部で検出しており、総長で少なくとも 430m以上におよんでいる。9 層の堆積後に改修され（ＳＤ3Ａ→Ｂ)、7 層の堆積によって埋没している。また、1・2 区ではＳＤ10 河川跡に侵食される。規模は上幅が 2.5〜3m程で、下幅が 1〜1.6m、畦畔上からの深さが 0.7m程である。断面形は、上部が緩やかに立ち上がる「U」字形を呈する。底面の標高は 1 区で約 29.7m、6 区で約 29.2m、勾配は 0.4%で、南に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は粗砂を多く含む砂と粘質土の水成堆積層からなる。

遺物には土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・蓋・壷などがある。ロクロ調整の土師器坏の中には、体部に「□見」と墨書したもの（第 8 図 9）がある。また、2・3 区からは非ロクロ調整の土師器の有段坏と関東系土器（6）の小破片が出土している。

なお、ＳＢ3Ｂは 4・5 区では確認されず、9 層の堆積後のＳＤ3Ａの上面は 8 層水田の畦畔もしくは水田面として利用されている。他の調査区では、ＳＤ3 の改修がほぼ同位置で行われているのに対



第8図　出土遺物（1）－土器・瓦－



第９図　出土遺物（２）－木製品－

出土遺物（第８図）観察表

（単位：cm）

No	種　類	区	遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	残存	分類	図版
1	土師器・坏	3区	10層水田跡	外面：（口縁部）ヨコナデ（体～底部）ヘラケズリ、内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.4)	–	–	一部	A①	5－13
2	土師器・坏	3区	10層水田跡	外面：（口縁部）ヨコナデ（体～底部）ヘラケズリ、内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.2)	–	–	一部	A①	5－14
3	土師器・坏	6a区	SD8・3層	底外？ 外面：（口縁部）ヨコナデ（体～底部）ヘラケズリ、内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.6)	–	–	一部	A①	5－15
4	土師器・坏	6a区	SD8・3層	外面：（口縁部）ヨコナデ（体～底部）ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ナデ	(13.4)	–	–	一部	A②	5－16
5	土師器・坏	6a区	SD8・3層	外面：（口縁部）ヨコナデ（体～底部）ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ナデ	(12.0)	–	–	一部	A②	5－17
6	土師器・坏	3区	SD3B	外面：（口縁部）ヨコナデ（体～底部）ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ナデ	(13.0)	–	–	一部	A②	5－18
7	土師器・坏	6a区	SX2	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、底部：回転糸切り、内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.6	8.0	4.4	1/2	B２	5－1
8	土師器・坏	3区	10層水田跡	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、内面：ヘラミガキ→黒色処理	12.6	6.4	4.9	1/3	B２	
9	土師器・坏	3区	SD3B	体部下半部破片、外面：ロクロナデ（墨書「口見」）、内面：ヘラミガキ→黒色処理	–	–	–	一部	B	5－10
10	須恵器・坏	3区	10層水田跡	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ、底部：ヘラ切り、内面：ロクロナデ	13.0	9.0	4.3	1/4	1	
11	須恵器・坏	2a区	10層水田跡	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り無調整	14.6	8.2	3.9	1/6	3	
12	須恵器・坏	6a区	10層水田跡	内外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り無調整（ヘラ書き？）	12.8	5.6	4.0	1/6	4	
13	須恵器・坏	1a区	SD3A	内外面：ロクロナデ（外面体部に墨書「皇」）、底部：ヘラ切り無調整	13.6	6.0	4.1	2/3	3	5－2
14	須恵器・坏	1a区	SD3A	内外面：ロクロナデ（全体的に歪み著しい）、底部：回転糸切り無調整	13.0	6.6	4.2	完形	4	5－3
15	須恵器・坏	6a区	SD5	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り無調整	13.6	7.0	4.6	1/4	3	
16	須恵器・坏	1a区	SD1	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り無調整、焼成不良（赤褐色）	13.8	7.2	4.4	完形	3	5－4
17	須恵器・坏	6a区	SD8・4層	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り無調整	12.8	6.6	4.4	ほぼ完	3	5－5
18	須恵器・坏	6a区	SD8・3層	内外面：ロクロナデ（ロクロ目顕著）、底部：ヘラ切り無調整	13.0	6.2	4.2	2/3	3	5－6
19	須恵器・坏	6a区	SD8・3層	内外面：ロクロナデ（内面ロクロ目不明瞭）、底部：ヘラ切り無調整、焼成不良（赤褐色）	12.3	6.0	4.4	完形	3	5－7
20	須恵器・坏	6a区	SD8・3層	内外面：ロクロナデ、底部：ヘラ切り無調整	13.4	7.0	4.2	1/3	3	5－8
21	須恵器・坏	12b区	16c層	内外面：ロクロナデ（外面ロクロ目不明瞭）、底部：ヘラ切り無調整	12.8	8.0	3.9	1/2	3	5－9
22	平瓦	12b区	2層	[伏見廃寺H類]桶巻き作り、凹面：模骨痕・布目痕、凸面：叩き→ナデ、焼成良好（青灰色）						5－23
23	平瓦	6a区	SD8・3層	[伏見廃寺A1類]桶巻き作り、凹面：模骨痕・布目痕→ヘラケズリ、凸面：花文状の叩き目、焼成不良（灰褐色）						5－21
24	平瓦	6a区	SD8・4層	[伏見廃寺D2類]桶巻き作り、凹面：布目痕→ナデ、凸面：格子叩き目、焼成良好（青灰色）						5－19
25	平瓦	6a区	SD9	[伏見廃寺E2類]桶巻き作り、凹面：模骨痕→ヘラケズリ、凸面：菱形格子叩き目、焼成良好（暗赤灰色）						5－22
26	平瓦	12b区	2層	[伏見廃寺G類]桶巻き作り、凹面：模骨痕・布目痕、凸面：縄叩き目、焼成やや良好（灰色）						5－24
27	平瓦	6b区	10層水田跡	[伏見廃寺D3類]桶巻き作り、凹面：布目痕→ナデ？（摩滅）、凸面：格子叩き目、焼成不良（灰色）						5－20
28	平瓦	6a区	表土	[伏見廃寺D2?類]桶巻き作り、凹面：模位および屈位ヘラケズリ、凸面：格子叩き目、焼成不良（灰色）						5－25
29	弥生土器・壺	2a区	SD3A	口縁部付近の破片、交互刺突文、ＲＬ縄文						5－26
30	弥生土器・壺？	6a区	SD8・4層	胴部破片、沈線による文様（変形工字分子）、ＲＬ縄文						5－27

＊１　土器の分類は、第３表の分類基準に対応する。＊２　伏見廃寺における平瓦の分類は、佐々木（1971）に従った。

出土遺物（第９図）観察表

（単位：cm）

No	種　類	区	遺構・層位	樹　種	残存長	最大幅	高さ	特　徴	図版
1	木製品・槽	6a区	SD8・4層	ハリギリ	99.5	40.0	11.5	平面形：隅丸方形、底：偏平、把手：両端2ヶ所(幅4～4.5cm、厚4～4.5cm)、	6－1
2	木製品・槽	4b区	SD3A	トチノキ	66.8	(38)	–	平面形、底：不明、把手：短辺1ヶ所残存（径２～３cm）	6－3
3	木製品・槽	5区	SD3A	ヤナギ属	58.0	29.0	–	平面形：長楕円形、底：偏平？、把手：短辺1ヶ所のみ（幅5.8、厚3.2cm程）	6－2

第３表　出土遺物集計表

遺構面	調査区		土師器 坏 A ①	土師器 坏 A ②	土師器 坏 B 1	土師器 坏 B 2	土師器 坏 B 4	土師器 坏 B ？	土師器 高台坏 口縁	土師器 高台坏 A	土師器 高台坏 B	土師器 高坏	土師器 鉢or鉢 A	土師器 鉢or鉢 B	土師器 甕	土師器 甕 A 口	土師器 甕 A 体	土師器 甕 A 底	土師器 甕 B 口	土師器 甕 B 体	土師器 甕 B 底	須恵器 坏 1	須恵器 坏 2	須恵器 坏 3	須恵器 坏 4	須恵器 高台坏 口縁	須恵器 高坏	須恵器 塊	須恵器 蓋	須恵器 甕	須恵器 壺	その他の遺物
10・11層	1区	水田跡											1			○	1								1				○	
		SD3A														○							①①	1					○		
		SD1	○																				④								
	2	水田跡	1					1	1					1	7	◎	2		○	1	2	2	⑥	1	7	2				1	○	
		SD3A	1	3																							1	1	1	1	漆土器
	3	水田跡	1	1		⑬	1		5				1		2	◎	4				⑬			1	1	1			1	3	1	
		SD3A																													
	4	水田跡	○										1		3	○	1						1		1					○	○	
		SD3A																													槽１
		SD4															1														縄／弥
	5	水田跡							1							○									1					○	○	
		SD3A														○														○	槽１
	6	水田跡	3	2					1					1	8	◎	3	2			2		1	①				2	1	○	支脚１、平瓦
		SD3A													1	○															
		SX2	○			①	1		2						1	○							1		1	1			2	○	平瓦４
		SD5	1													○	1						①						○		平瓦１
		SD8(4層)	○	2											3	◎	2						①		2			1	1	○	平瓦1,槽1,弥,縄/弥
		(3層)	11	5	1	1			1						8	◎	7		○		2		⑰	7	7	2			2	○	平瓦2,碧亜,縄/弥
	12	堆積層	1												1	○		1					①						○		
9層	1	堆積層							1			1													1				○	1	平瓦１、漆土器
	2	堆積層	1	2									1	1	2	○						2			3				1	○	
8層	1	水田跡							1						1							1							○		
		SD3B																													
	2	水田跡														○							1				1		○	○	
		SD3B	○							1																					
	3	水田跡							2						1	○									1				1		
		SD3B	○	2					1		1					○						2	2	1	1				○	○	
	4	水田跡																													
	5	水田跡																													
		SD3B																													
7層	2	堆積層	○										1		1			○			1				1			1	1		
	6	堆積層	○	1												◎	3						1						○		
		SD9	○						1							○	1	1											○		
1層	2	堆積層																							2				1	1	
	6	堆積層										1			1	○	1			1	1		1	1					○		平瓦
	12	堆積層							○							○													○		平瓦３

＊１　土師器…Ａ：非ロクロ、Ｂロクロ
坏…Ａ①：内黒有段坏、Ａ②：関東系土器（口縁部破片の数）
Ｂ１：回転ヘラケズリ調整、Ｂ２：手持ちヘラケズリ調整、Ｂ４：回転糸切り無調整、？：調整不明（底部破片の数）
甕…口：口縁部、体：体部、底：底部、○：破片あり、◎：破片多
＊２　須恵器坏…１：回転ヘラケズリ調整、２：手持ちヘラケズリ調整、３：ヘラ切り無調整、４：回転糸切り無調整
甕・壺…破片数は口縁もしくは底部の数。○：体部破片あり
＊３　○数字は、全形の分かる資料の点数を示している。
＊４　漆土器：漆付着土器、弥：弥生土器、縄/弥：縄文土器もしくは弥生土器

して、4・5 区では場所をずらして改修されている。検出状況からみて、少なくとも西に 4 m以上離れた調査区外に構築された可能性が高い。

(4)　7層上面

【ＳＤ9 溝跡】（第 4・5・7 図）

6ａ・ｂ区の大畦畔（畦№26）上で検出した南北方向の溝跡である。ＳＤ8 河川跡の 2 層堆積後に掘削され、少なくとも灰白色火山灰（5 層）降下以前には埋没し、調査区の南壁付近ではＳＤ8 の 1 層によって侵食されている。規模は上幅 1.5m、下幅 0.7m、深さ 0.3mで、断面形は壁が緩やかに立ち上がる「U」字形を呈する。方向は北で約 40 度西に偏している。堆積土はしまりのある炭化物混じりの黒褐色土と粗砂の水成堆積層からなる。堆積土からは、非ロクロ調整の土師器坏（有段坏）の小破片や平瓦片などが少量出土している。

(5)　その他の出土遺物

このほか、1ｃ区では 12 層上面で検出された河川跡（ＳＤ1）からヘラ切り無調整の須恵器坏（第 8 図 16）、また 12 区の 10ｃ層からはヘラ切り無調整の須恵器坏（21）、桶巻き作りの平瓦で、凸面に縄叩き目を残すもの（26）や叩き痕をナデ消したもの（22）などが出土している。

第 3 章　考察とまとめ

(1)　遺構の年代

今回の調査では、各層で以下のような遺構および河川跡を検出した。

11 層：基礎地業 1（ＳＸ2）

10 層：水田跡2面（10ａｂ）、水路跡1条（ＳＤ3A）、溝跡3条（ＳＤ4～6）、河川跡2条（ＳＤ7・8）

8 層：水田跡 1 面、水路跡 1 条（ＳＤ3Ｂ）

7 層：溝跡 1 条（ＳＤ9）、河川跡 1 条（ＳＤ10）

4 層：溝跡 1 条（ＳＤ11）

3 層：河川跡 1 条（ＳＤ12）

出土遺物には土師器、須恵器、瓦片、木製品（槽）、弥生土器、植物遺体（オニグルミ・ウメ核）などがあり、土師器や須恵器の中には墨書や漆の付着が認められるものもみられる（第 3 表）。ただし、調査区域の大部分が後背湿地に位置し、耕作域としてのみ利用されていたことを反映してか、全体的に遺物量は少ない。

以下、各層上面で検出された遺構の年代について、出土遺物や層の堆積状況などをもとに検討していく。ただし、灰白色火山灰（5 層）降下後の 3 層および 4 層上面の遺構については、10 世紀前葉以降であることは明らかであるが、遺物が出土していないため年代を特定することはできない。

①11 層の遺構

ＳＸ2 基礎地業の盛土中から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、平瓦片などが出土している。遺物量が少なく全体的な傾向は明らかではないが、土師器坏にはロクロ調整が施され、底部の切り離しが

回転糸切りで体部下端～底部周縁に手持ちヘラケズリしたものと回転糸切り無調整のものがみられ、須恵器坏ではヘラ切り無調整のものが出土している。後述する 10 層水田およびＳＤ3Ａ水路跡の出土土器と同様の特徴を有する。

②10 層の遺構

水田跡やＳＤ3Ａ水路跡、ＳＤ8 河川跡などから各種の遺物が出土している。このうち 10 層水田跡およびこれに伴うＳＤ3Ａからは土師器坏・鉢・蓋・甕、須恵器坏・高台坏・高坏・埦・蓋・甕・壷、木製品の槽などの遺物が比較的まとまって出土している。土師器には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものとがあり、坏では全形の分かるものを含め手持ちヘラケズリ調整のものが多く、回転糸切り無調整のものも若干みられる。甕には非ロクロ調整のものが多い。須恵器ではヘラ切り無調整の坏が主体をなし、回転ヘラケズリ調整のものと回転糸切り無調整のものも一定量出土している。坏では土師器に比して、須恵器の占める割合が高い傾向にある。このような土器群の特徴は多賀城跡出土のＣ群土器（白鳥：1980）に類似していることから、年代は概ね 9 世紀前半頃と推定される。

ＳＤ8 からは土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕・壷、木製品の槽などが出土している。土師器坏には回転ヘラケズリ調整のものと手持ちヘラケズリ調整のものがあり、須恵器坏ではヘラ切り無調整のものと回転糸切り無調整のものが多くみられるなど、10 層水田跡・ＳＤ3Ａ出土土器と類似した特徴を有する。このほかの遺構については、遺物量が少なく全体的な傾向は明らかではないが、上記の遺構と同様の特徴をもつ須恵器坏や土師器甕などが出土している。

これらのことから、10 層および 11 層の遺構の年代は、概ね 9 世紀前半頃と考えられる。

③8 層上面の遺構

8 層水田跡およびＳＤ3Ｂ水路跡については、遺物が少なく詳細な年代を求めることはできないが、10・11 層出土土器との間に大きな違いは認められない。また、9 層堆積後の復旧が間層を挟まずほぼ同位置・同規模で行われていることや、9 層の堆積が認められない 6 区では 10 層水田跡を直接 7 層が覆っていることなどからみて、両者の間に時間的な隔たりはほとんどないものと思われる。

④7 層上面の遺構

7 層上面で検出したＳＤ9 溝跡とＳＤ10 河川跡については、出土遺物がほとんどなく明らかではないが、7 層が短期間に供給された水成堆積層で、灰白色火山灰層（5 層）との間に水田もしくは畑耕作土の可能性のある堆積土（6 層）を 5～15 ㎝程の厚さで介在していることを考慮すれば、灰白色火山灰が降下する 10 世紀前葉よりもある程度の時間幅をもって古いと考えられる。概ね 9 世紀後半頃と推定される。

なお、今回出土した非ロクロ調整の土師器の中には、内面がヘラミガキののち黒色処理された有段坏と内面がナデ調整の関東系土器の坏の小破片がみられる（第 3 表）。これらは名生館官衙遺跡ＳＩ1255Ｂ住居跡出土の一括土器や色麻古墳群第 2 段階のものなどと類似し、7 世紀末～8 世紀初頭頃に年代付けられるものであるが（佐々木・古川他：1985、鈴木：1992）、段丘の縁辺に位置する 2ａ・3・6ａ区で多く出土するなど、二次的な混入によるものと考えられる。このほか名生館官衙遺跡および伏見廃寺と位置的に近い 1 区と 6・12 区に限って、平瓦片が出土している（第 3 表）。特徴の明らかなもの

はすべて桶巻き作りで、名生館官衙遺跡Ⅱ期郡庁院や伏見廃寺創建瓦と同類のものである。官衙および寺院の改修等に伴って廃棄された瓦が、上記の土師器と同様に混入したものとみられる。

(2) ＳＸ2 基礎地業について

ＳX2 は、段丘縁辺から沖積地に移行する斜面に沿って丸太材を密接して敷き並べ、その上に盛土整地を施し、平坦な面を造成した基礎地業である。丸太材はこの区域が軟弱な湿地性の堆積層（11ａ層）上面にあたるため、地盤沈下を防止するためのものと思われる。性格については、調査範囲が狭く規模等不明な点が多いが、①盛土がＳD3Aの西岸まで施されていること、②芯材となる丸太材の敷設範囲がＳD3A水路跡および 10 層水田跡の畦畔（畦№25）の方向と一致していること、③出土遺物の特徴からみて、ＳX2 と 10 層水田跡・ＳD3Aとの間に時間的な隔たりが認められないことなど、これらが一連で造成されたものと考えても矛盾せず、またＳX2 上には構築物が認められないことから、水田の水路沿いに設けられた道路の可能性が考えられる。

このような芯材を用いた盛土の類例としては、蔵王町台遺跡で検出された古墳時代中期の大畦畔（道路）(註 2) がある。廃材や自然木を密接にして敷き並べ、その上に盛土したもので、基底幅約 6m、高さ 0.7mの規模で、長さ 60m以上にわたって検出されている（斉藤：1989)。ＳX2 の性格については、なお確定的なものではないが、台遺跡と同様に低湿地上に道路等を造成する際の基礎地業の一例を示しているものとみられる。

(3)　水田遺構について

①水田跡の年代

今回の調査では、9 世紀前半から後半にかけての水田跡とこれに伴うＳD3 水路跡を検出した。これらは洪水等により供給された土砂（9 層）を挟み、10ａＢ層水田跡・ＳD3A→9 層→8 層水田跡・ＳD3Ｂの変遷が認められたが、前述のとおりこれらには時間的な隔たりはほとんどなく、継続して営まれたものとみられる。

②水路跡

ＳD3 は、段丘東側の縁辺に沿って、少なくとも 430m以上にわたって構築された上幅約 3m、深さ 0.5～1m程の素掘りの溝で、この周辺における基幹水路とみられる（第 10 図)。とくに護岸の

図中の等高線は明治24年測量の旧版地形図（1/20,000）「岩出山」「古川」にもとづいている。

第10図　周辺の地形と水路跡

痕跡は認められないが、水路の両岸には一貫して掘削した土を土堤状に盛って幅 1〜2m前後の畦畔を構築しており、水路の構築がＳＸ2 と同様に開田に伴う大規模な造成工事であったことが窺える。

③水田跡の特徴

畦畔の配列は、中畦畔が水路や自然の流路に沿って構築されているのに対して、その中を細分する幅 50〜60 ㎝程の小畦畔は多少のばらつきがあるものの、真北方向を基準にしたものが多い傾向にある。水田区画の規模については、全体が明らかなものはないが、ほぼ方形を呈する水田をみると 1 辺が 6、6.5、8、11.5mで、仙台市富沢遺跡（10 世紀代、太田他：1991）や仙台市藤田新田遺跡（10 世紀前半、岩見他：1994）、多賀城市山王遺跡多賀前地区（9 世紀前半、菅原地：1995）などとほぼ同程度の大きさのものとみられる。

水田面からは多数のウシの足跡が検出され、農耕にウシを利用していた可能性が考えられた。同様の足跡は、富沢遺跡（工藤・太田：1988）、泉崎浦遺跡（吉岡・篠原：1989）の 10 世紀前半頃の水田跡、山王遺跡多賀前地区の耕作域を流れる 9 世紀後半頃の小河川で検出されている。また、居住域と耕作域が明らかになった藤田新田遺跡では 10 世紀前半頃のウシの骨が出土しており、少なくとも 10 世紀前半頃には一般集落にも農耕用としてウシが普及していた可能性が考えられる。ただし、県内においては畜力利用の農耕具の存在は知られておらず、具体的な利用法等については今後の課題である。

ところで、ＳＤ3AおよびＳＤ8 河川跡から槽が 3 点出土している。形態や大きさ、材の選定などに違いがあるものの、いずれも台脚をもたず 1 短辺あるいは短辺の両端に棒状の把手を有している。これらの用途については、大型容器の可能性もあるが、本遺跡出土のものについては出土状況からみて田舟として使われた蓋然性が高いとみられる。

(4)　まとめ

1. 上代遺跡は、大崎平野の西北端に位置し、江合川右岸の河岸段丘に立地する奈良・平安時代の遺跡である。
2. 今回の調査区は、遺跡東側の段丘縁辺から沖積地に移行する地点にあたる。調査の結果、基礎地業、水田跡およびそれに伴う水路跡、溝跡、河川跡などが検出され、今回の調査区域がおもに耕作域として利用されていたことが明らかになった。
3. 水田跡は、9 世紀前半頃に段丘縁辺の基礎整地や 430m以上にわたる基幹水路の掘削などの大規模な造成工事を伴って、広大な範囲に新規開田されたもので、洪水等の 2 度にわたる大規模な自然災害を経て、9 世紀後半頃に廃絶されている。本遺跡周辺において、玉造郡家による在地支配がどの程度およんでいたかは明らかではないが、今回の調査区域における大規模な新田開発および災害後の復旧などは一集落単位で成し得る事業とは考え難く、律令支配の下で遂行された可能性が高いものと思われる。
4. 今回の調査では、水田耕作に関わった集団の居住域の存在を明らかにすることはできなかったが、本遺跡の名生館官衙遺跡の南側に隣接する地域の調査では、多数の掘立柱建物跡や竪穴住居跡が確認されている（天野・笠原：1997）。また、段丘の南西端に位置する高幌遺跡の調査では、掘立柱建物跡と竪穴住居跡によって構成される 9 世紀前半代を中心とした集落の存在が明らかになる

など、名生館官衙遺跡の南側の段丘上の広い範囲が居住域として利用されており、本地域で水田を営んだ集団の居住域の存在も推定される。

5. 今回出土した遺物の中には、関東系土器や名生館官衙遺跡および伏見廃寺の創建瓦などの、7 世紀末から 8 世紀初頭にかけての遺物が一定量認められた。段丘上にこれらの官衙や寺院に関わる施設や集団の居住域の存在も推定される。

6. 6ａ区の北西約 50m付近の段丘上では南東方向に延びる堀の痕跡が確認されている（第 10 図）。堀の位置や方向、規模などからみて、中世大崎氏の居城に関わる堀の可能性が高いとみられるが、少なくとも今回の調査区では堀の延長は確認されず、また該期の遺物も発見されなかった。地形的な傾斜を考えれば、堀は段丘上にのみ存在し、沖積地部分まで延びて途切れていたものと思われる。

（註 1）古川市教育委員会の高橋誠明氏の御教示による。

（註 2）台遺跡で検出された大畦畔は、水路を伴って古墳時代中期に造成されたものであるが、平安時代（9 世紀後半）までそのまま踏襲されている。一貫して 6m程の規模（畦畔の隔）が維持され、しかも 60m以上にわたって直線的に延びていることなど、道路（通路）として利用されていた可能性が高い。

《引用・参考文献》

天野順陽・笠原俊哉 1997 「名生館官衙遺跡の周辺」『第 23 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

岩見和泰他 1994 「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 163 集 宮城県教育委員会

太田昭夫他 1991 「富沢遺跡－第 30 次調査報告書Ⅰ（縄文～近世編）－」『仙台市文化財調査報告書』第 149 集 仙台市教育委員会

工藤哲司・太田昭夫 1988 「富沢遺跡－第 24 次富沢中学校地区発掘調査報告書－」『仙台市文化財調査報告書』第 113 集 仙台市教育委員会

斎藤吉弘 1989 「台遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 131 集 宮城県教育委員会

佐々木茂楨 1971 「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』56－3

白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

進藤秋輝 1986 「多賀城創建をめぐる問題」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編

進藤秋輝 1990 「多賀城創建以前の律令支配の様相」『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼 論文集刊行会

菅原弘樹他 1995 「山王遺跡Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第 167 集 宮城県教育委員会

高橋誠明・村田晃一 1996 「陸奥国における 7 世紀の様相」『飛鳥・白鳳時代の諸問題Ⅰ』国際古代史シンポジウム実行委員会

古川市 1986 『古川市土地分類調査（細部調査）報告書』

古川市教育委員会 1987～1995 「名生館官衙遺跡Ⅶ～ⅩⅥ」『古川市文化財調査報告書』第 6～13・19 集 古川市教育委員会

宮城県多賀城跡調査研究所 1981～1986「名生館遺跡Ⅰ～Ⅵ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第 6～11 冊 宮城県多賀城跡調査研究所

吉岡恭平・篠原信彦 1989 「富沢遺跡・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ－」『仙台市文化財調査報告書』第 126 集

付章　上代遺跡出土木製品の樹種同定

松葉礼子（パレオ・ラボ）

1．はじめに

宮城県古川市に位置する上代遺跡から出土した木製品計 5 点について樹種を調べた。これらの製品は、ＳＤ3Ａ水路跡およびＳＤ8 河川跡から出土した槽とＳＸ2 基礎地業に使用された丸太材で、年代はいずれも 9 世紀前半頃のものと考えられている。

2．方法と記載

同定には、木製品から直接片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版ａ）、接線断面（板目と同義・写真図版ｂ）、放射断面（柾目と同義・写真図版ｃ）の 3 方向作成しれこれらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらのうち、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠を後述する。結果は、表１　上代遺跡の樹種同定結果に示す。なお、作成した木材組織プレパラートは、標本番号（ＭＩＧ101～105）を付し㈱パレオ・ラボで保管されている。

表１　上代遺跡の樹種同定結果

標本番号	樹種	製品名	木取り・形状等
ＭＩＧ　１０１	ヤナギ属	槽№1	破片
ＭＩＧ　１０２	トチノキ	槽№3	破片
ＭＩＧ　１０３	ハリギリ	槽№2	破片
ＭＩＧ　１０４	コナラ節	丸太材№2	丸木樹皮付き
ＭＩＧ　１０５	コナラ節	丸太材№1	丸木

同定根拠

ヤナギ属　*Salix*　sp. SALICACEAE　　写真図版 1a～1c

やや小型で丸い管孔が、単独あるいは 2～3 個放射方向に複合して多数存在する散孔材。道管の直径は年輪界に向け徐々に減少する。道管の穿孔は単一。放射組織は単列の異性で、道管との壁孔は蜂の巣状を呈し密である。以上の形質により、ヤナギ科のヤナギ属の材と同定した。日本に産するヤナギ属には、34 種あり、材の形質上これらを細分できない。

コナラ属コナラ節　*Quercus*　Sect. *Prinus*　FAGACEAE　　写真図版 2a～2c

大型で丸い道管が単独、時に複合して年輪界に一列に並ぶ環孔材。晩材部では急激に径を減じた多角で薄壁の道管が散在し火炎状を呈し、木部柔組織は接線状に配列する。放射組織は単列と大型の複合放射組織からなり、同性。道管放射組織間壁孔は楕円形の対列状～柵状。以上の形質により、ブナ科のコナラ節の材と同定した。コナラ節には、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワ等が含まれ、いずれも落葉高木である。

トチノキ　*Aesculus turbinate*　Blume　HIPPOCASTANACEAE　写真図版 3a～3c

小形で丸い管孔が単独あるいは数個複合して均一に分布する散孔材。道管の穿孔は単一で、道管内壁に微細な螺旋肥厚が有る。放射組織は単列同性で、しばしば層階状に配列する。道管との壁孔は小形で密であるが、ヤナギ属のように蜂の巣状を呈す事はない。以上の形質より、トチノキ科のトチノキの材と同定した。トチノキは、北海道～九州の主に低山帯に分布する落葉高木である。種子は、タンニンを取り除く事により食用となる。

ハリギリ　*Kalopanax pictus*　(Thunb.)　Nakai　ARALIACEAE　写真図版 4a～4c

大型で丸い道管が年輪に沿って一列に並び、晩材部では小型で薄壁の管孔が斜め接線状～接線状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で 1～6 細胞幅、道管相互及び道管放射組織間壁孔は、大型で交互状にまばらに存在する。以上の形質により、ウコギ科のハリギリの材と同定した。ハリギリは、落葉高木で、北海道～九州の山地の林内に生える。

3．考察

今回調べた製品は、槽と道路造成に伴う基礎地業に用いられた丸太材の計 5 点であった。槽は、いずれも樹種が異なりヤナギ属、ハリギリ、トチノキであった。槽は、木材をはつり取る事により成形される刳物である為、柔らかい樹種の方が、成形し易く、その点ヤナギ属やトチノキは、材質が柔らかく加工容易である。ハリギリは、ケヤキに材の構造は近似するものの、材質はケヤキほど堅くなく成形容易であったと考えられる。一方、基礎地業に用いられたのはコナラ属コナラ節であった。コナラ節は二次林的要素として現在考えられている樹種であるが、宮城県多賀城市の山王遺跡多賀前地区で行われた 8 世紀後半～10 世紀半ばの樹種同定では、コナラ属の木材は全体に比べ少なく、モミ属とクリが多量に確認されている（松葉・鈴木：1996）。

《引用文献》

松葉礼子・鈴木三男 1996　「山王遺跡多賀前地区出土木製品の樹種同定」「山王遺跡Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第 170 集　宮城県教育委員会

写　真　図　版

遺跡周辺の空中写真　（平成５年建設省国土地理院撮影）

調査区南半部近景（北東から）

調査区北半部近景（南東から）

図版 1

SX2 基礎地業と SD3 水路跡

SX2・SD3 全景（東から）

SX2 丸太材検出状況（南東から）

SX2 丸太材拡大（南から）

SX2 断面（南から）

SX2・SD3 断面（南から）

図版 2

水田跡

2c 区10層水田跡全景（南西から）

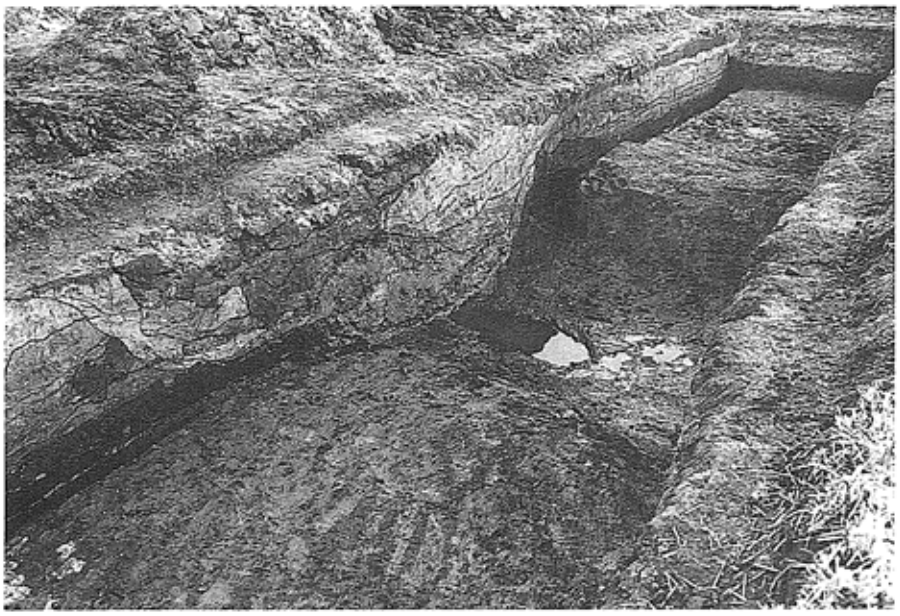
1b 区 8 層水田跡全景（西から）

1b 区 8 層水田跡ウシ足跡検出状況（東から）

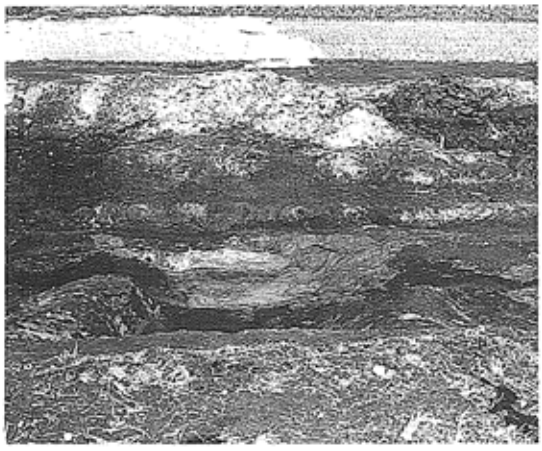
1b 区水田跡断面

ウシ足跡拡大

図版 3



2b 区 SD3 水路跡（南西から）



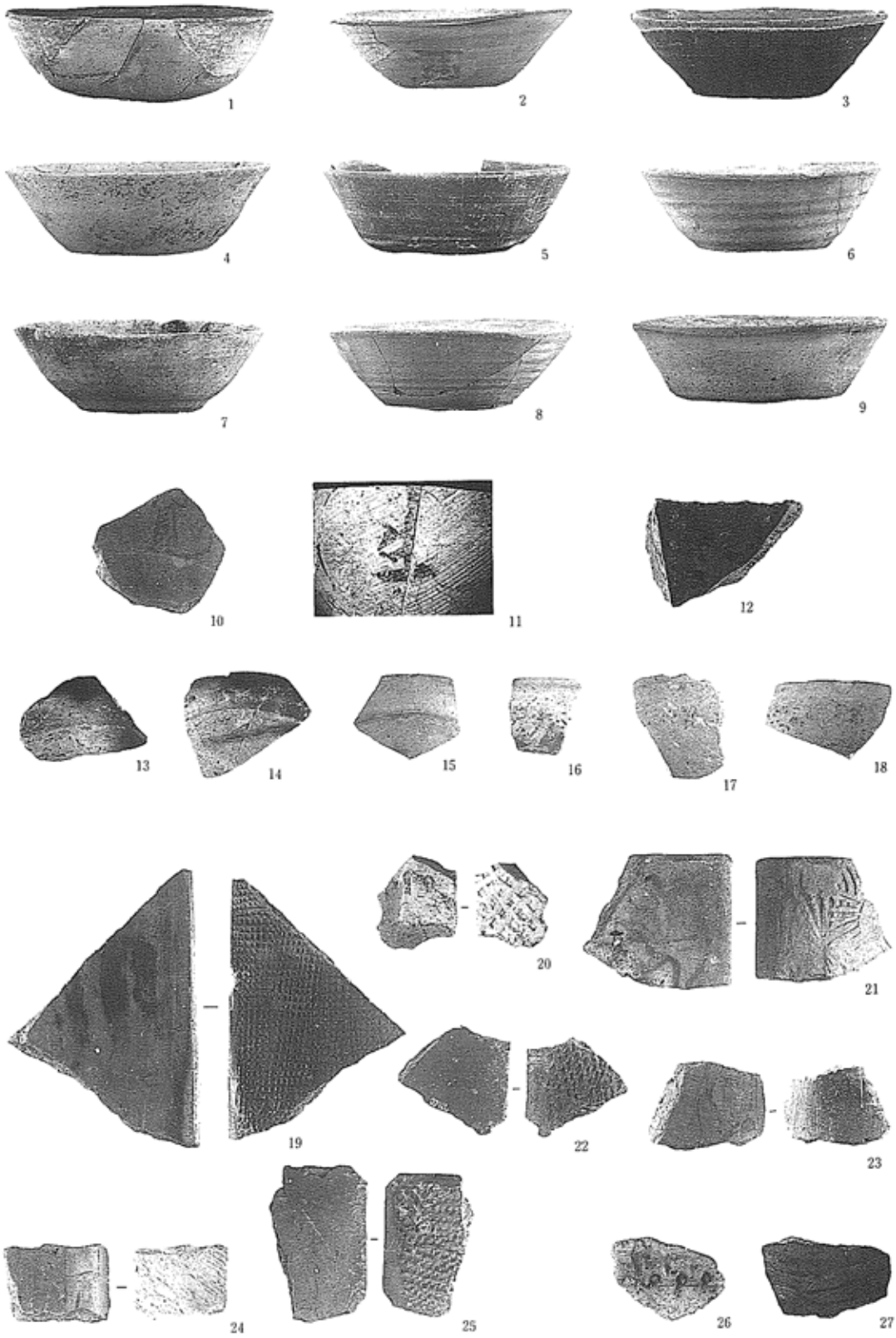
3 区 SD3 水路跡断面（南から）

2b 区 SD7 河川跡(南東から)

6a 区 SD8 河川跡断面（北から）

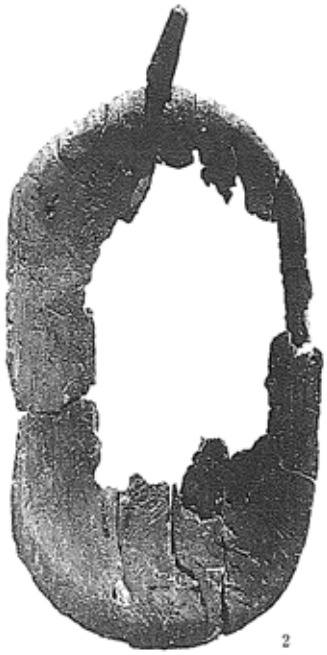
SD8 河川跡槽出土状況

図版 4



図版5　　出土遺物（1）―土器・瓦―

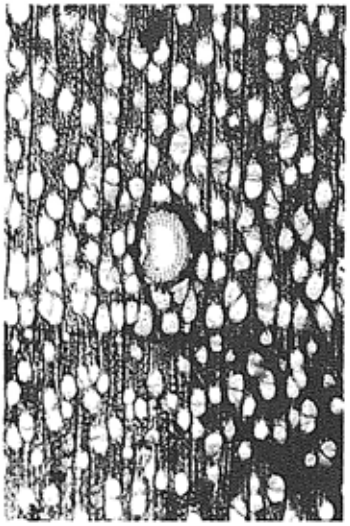
1



2

3

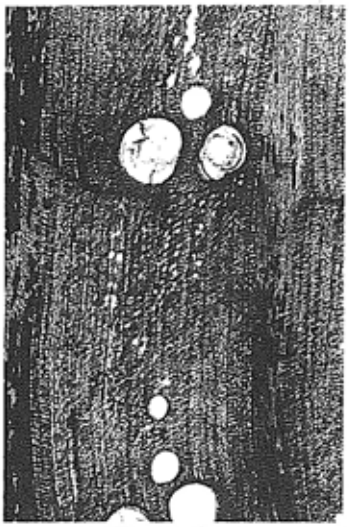
出土遺物（2）—木製品—　　図版 6



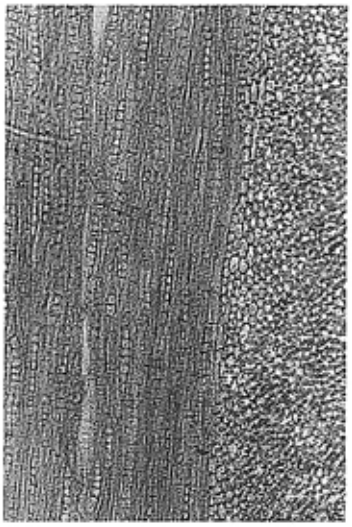
1 a ヤナギ属　bar：1 mm MIG 101

1 b　同　bar：0.4 mm

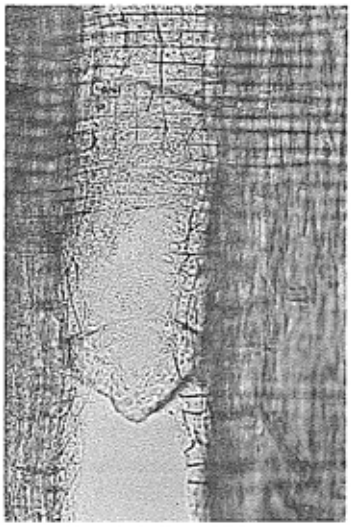
1 c　同　bar：0.2 mm



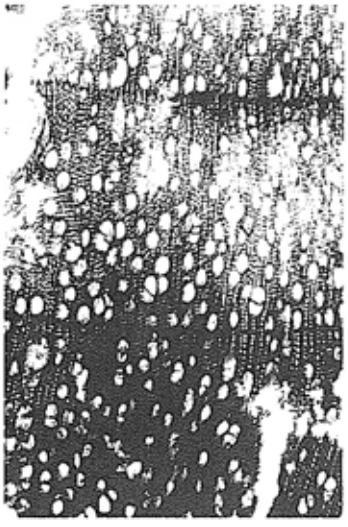
2 a コナラ属コナラ節　bar：1 mm MIG 104



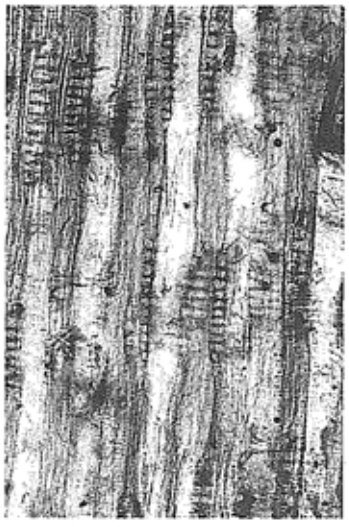
2 b　同　bar：0.4 mm



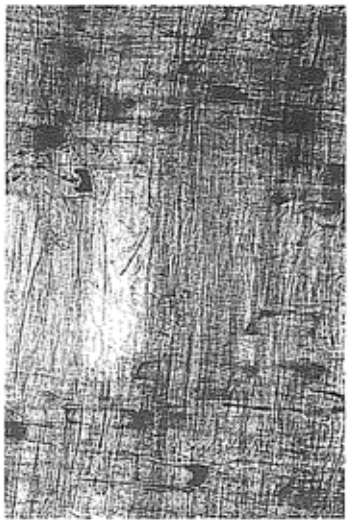
2 c　同　bar：0.2 mm



3 a トチノキ　bar：1 mm MIG 102



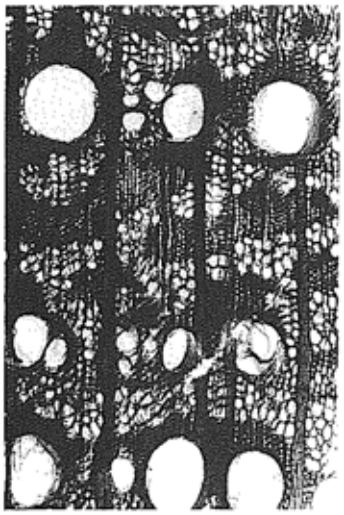
3 b　同　bar：0.4 mm



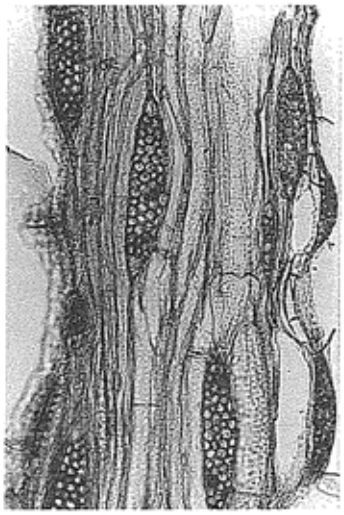
3 c　同　bar：0.2 mm

上代遺跡出土木材顕微鏡（1）

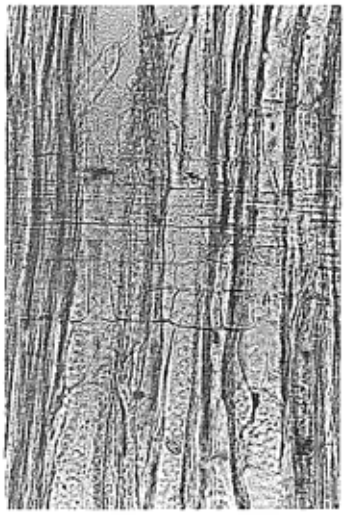
bar:



4 a ハリギリ　bar：1 mm MIG 103



4 b　同　bar：0.4 mm



4 c　同　bar：0.2 mm

上代遺跡出土木材顕微鏡（2）

bar:

下草古城跡（しもくさこじょうあと）

目　　次

第一章　遺跡の概要 127
　Ⅰ．遺跡の位置 127
　Ⅱ．遺跡の現状と推定される城郭構造 128
　Ⅲ．文献上の下草古城跡 128
第二章　調査に至る過程と方法 129
　Ⅰ．調査に至る過程 129
　Ⅱ．調査の方法 130
第三章　基本層序と発見された遺構・遺物 131
　Ⅰ．基本層序 131
　Ⅱ．発見された遺構・遺物 132
第四章　考察 138
　参考・引用文献、写真図版 140

調　査　要　項

遺　跡　名：下草古城跡（しもくさこじょうあと）
　　宮城県遺跡地名表記載番号 23068
遺 跡 記 号：ＯＧ
遺跡所在地：宮城県黒川郡大和町鶴巣下草字八幡他地内
調 査 原 因：県営圃場整備事業
面　　積：調査対象面積　1,900 ㎡。発掘調査面積　1,900 ㎡
調 査 期 間：平成 8 年（1996 年）4 月 15 日～6 月 2 旧
調 査 主 体：宮城県教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
　　天野順陽、笠原俊哉
　　大和町教育委員会社会教育課
　　藤井裕二、近藤　悟
調 査 協 力：宮城県農林振興事務所、大和東部土地改良区
調査参加者：大山　功、鎌田はじめ、斎藤永記、斎藤徹子、斎藤長男、斎藤柳子、佐藤邦子
　　佐藤裕子、高橋うめよ、高橋惣市、高橋つよ子、高橋良三、横田ヒデ子、中米
　　まつ子、横田梅代、横田栄子、横田ヒデ子、横田よし子、若生孝子（五十音順）

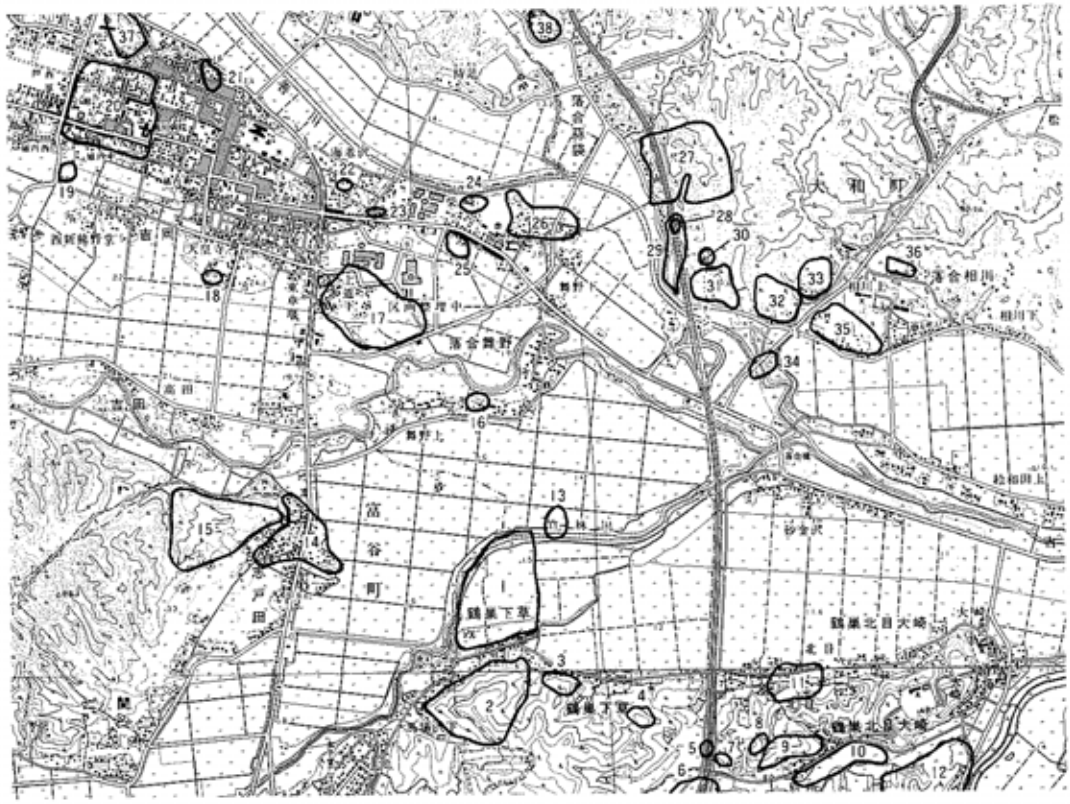
下　草　古　城　跡

第一章　遺跡の概要

Ⅰ　遺跡の位置

下草古城跡は、黒川郡大和町鶴巣下草に所在する。大和町の中心部、吉岡から南東に 3㎞のところに位置する。

奥羽山脈・船形連峰に端を発した吉田川とその支流である善川、竹林川は、徐々に高度を下げ周辺を開析しながら東流する。大和町の中心部、吉岡から舞野、下草付近では、吉田川に、北西から善川、南西から竹林川が合流しており、広く沖積地が広がっている。遺跡は竹林川が合流する地点から 1.5㎞程上流にあり、標高 13～15mの自然堤防とその周辺に位置する（第 1 図）。



№	遺跡名	種別	時代	№	遺跡名	種別	時代	№	遺跡名	種別	時代
1	下草古城跡	集落跡・城跡	古墳・古代・中近世	14	三ケ森遺跡	包含地	奈良・平安	27	御所館跡	包含地	中世
2	鶴巣館跡	城跡	中世	15	馳取遺跡	城跡	中世	28	新田古墳1・2号	古墳	古墳跡
3	道遺跡	包含地	古代	16	上舞野B遺跡	包含地	古代	29	八谷館跡	城跡	中世
4	観音堂小塚群	小塚	中世・近世	17	一里塚遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	30	新田古墳3号	古墳	古墳跡
5	日光山遺跡	墓・祭祀遺跡	奈良・平安・中世・近世	18	天皇寺遺跡	包含地	平安	31	八谷古城跡	城跡	中世
6	勝負沢遺跡	包含地	縄文中・平安	19	車遺跡	包含地	古代	32	大沢遺跡	包含地	古代
7	日光山西小塚	小塚		20	吉岡城跡	城跡	江戸	33	上ノ山遺跡	包含地	平安
8	日光山小塚群	小塚	中世	21	安養院遺跡	包含地	縄文中・後	34	相川堤防遺跡	包含地	縄文・古代
9	別所横穴古墳群	古墳	古墳	22	海老沢遺跡	包含地	縄文中	35	熊野遺跡	包含地	古代
10	別所遺跡	包含地	古代	23	糸繰遺跡	包含地	縄文・古代	36	堤越遺跡	包含地	古代
11	寺東遺跡	包含地	古代	24	西前田遺跡	包含地	平安	37	中尊寺遺跡	包含地	縄文・晩
12	天神館跡	包含地・城跡	縄文・中世	25	柴崎遺跡	包含地	奈良	38	岩下遺跡	包含地	
13	上舞野A遺跡	包含地	縄文・古代	26	吉川遺跡	包含地	古代				

第 1 図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ　遺跡の現状と推定される城郭構造

遺跡の範囲は東西 500m以上、南北約 600mで、北西隅のかけた長方形を呈する（第 2 図）。遺跡の北と西は竹林川に画され、竹林川に沿った部分は河川改修によって原形を失っている。南は鶴巣館が立地する丘陵に接している。一方、東側は沖積地が広がっている。圃場整備が行なわれているため現在の地形から遺跡の東端は明瞭ではないが、平成 4 年度の調査で東端は 8・10 区付近であることが確認された。遺跡の現状は水田や畑であり、標高の低い部分は水田、それよりも一段高い平坦な部分は畑として利用されている。

これらを詳細に見てみると、遺跡の南側は水田が広範囲に広がっているのに対して、北側は一段高い畑の部分が広がり、それらを二重に取り囲むように細長い水田部分が認められる。これは城跡の地割りを反映するものであり、高い部分は本丸や二の丸、低い部分は堀という北端中央の畑部分を中心とした城郭配置の様子が明瞭に残存している。

Ⅲ　文献上の下草古城跡

下草古城については、享保 13 年（1728 年）の『仙台領古城書立之覚』などに記載され、『大和町史』（遠藤・伊藤：1975）にまとめられている。

まず、城主、年代については、伊達政宗の三男で、伊達家の重臣であった飯坂家の後を継いだ宗清が宮城郡松森村から慶長十五年（1610 年）に下草に移り、元和二年（1616 年）に吉岡に移るまで数年間住んだとされている（遠藤・伊藤：1975）。また、飯坂家の牌所で、現在吉岡にある「天皇寺」の『書上』によると、この寺は飯坂家に従って福島県伊達郡飯坂村から宮城郡松森村に移り、さらに、宗清に一年遅れて、慶長十六年（1611 年）に下草に移り、そして元和二年（1616 年）に吉岡に移ったことが記され、前記述を裏付けている。

規模は、『仙台領古城書立之覚』によると、

「平　古城　東西四十六間、南北六十八間。但四方ニ土手形上口八間之堀アリ西北ハ川東南ハ幅四間長二百八十間ノ堀アリ」

とある。これは本丸部分が東西約 80m、南北約 120m、本丸の四方には幅約 14mの内堀が巡り、西・北側は竹林川が流れ、東・西側には幅約 7m、長さ約 500mの外堀があると解せ、現地形から推定できる城の構造・規模とほぼ一致する。

	年　度	調　査　区	調査対象	宮城県文化財調査報告書No.	備　考
1次	平成3年度	整地C区（31区）他	高まり部分	第146集（須田：1992）	確認調査
2次	平成4年度	1～12区	道水路部分	第154集（須田：1993）	
3次	平成5年度	5区西7・13～18区	道水路部分	第160集（天野：1994）	
4次	平成6年度	19～20区	道水路部分	第166集（天野：1995）	
		7区南・21～23区	高まり部分		
5次	平成7年度	24～29区	高まり部分	第169集（天野：1996）	
6次	平成8年度	30～31区	高まり部分	第173集（天野：1997）	

第1表　これまでの調査内容

第二章　調査に至る過程と方法

Ⅰ　調査に至る過程

下草古城跡の調査は鶴巣下草地区の圃場整備に先立つものである。調査は、まず、平成3年度の確認調査に始まり、平成4年度から道路・水路部分および面工事によって削平される高まり部分を対象に継続して事前調査を行なっている。今年度が第6次調査となる。なお、これまでの調査区・調査対象は第1表のようになっている。調査区は調査着手順に1区・2区・3区～31区というように数字を付してある（第2図）。

第2図　調査区

これまでの調査で多数の遺構が確認された。ほとんどが中近世のもので掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、道路跡等が認められ城下町の様子が次第に明らかになっている。また、遺構の重複状況から比較的長期に渡り遺構が存続していたことがわかった。遺物も 17 世紀初頭のものが中心となっているが、16 世紀、17 世紀以降のものも出土している。このことから、これらの遺構は宗清が居城した 1611 年～1616 年までに残されたものではなく、この期間を中心に時間幅をもつものであることは確定的となっている。しかし、遺物から具体的に各遺構の年代や存続期間は限定できない。

その他、少数ながら平安時代の竪穴住居跡・水田跡・遺物包含層、そして古墳時代前期塩釜式期の土器集中地点が確認されている。

Ⅱ　調査の方法

今回は本丸の東側で、2 区とほぼ平行する南北に細長い高まり（約 4000 ㎡）の北側半分（約 1900 ㎡）を対象に調査を行なった。ただし、来年度精査する予定である南側半分についても、表土剥ぎおよび粗ケズリを終了し、ほぼ全面に渡り多数の遺構が存在することが確認されている。

表土剥ぎの結果、この高まりは他の高まりと同様に現代の寄せ土で、近年まで畑として利用されていたことがわかった。遺構面は基本層位Ⅱ－2 層整地層上面で、現水田面（標高 13.90m）より 5～40 ㎝ほど高い。また、後世の削平により本来は一連だったと思われる遺構面が 4 つの島状の高まりに分断されていることもわかった。調査では便宜的にＮ－237～192 を 30 区、Ｎ－192～144 を 31 区とした。なお、31 区の南端部は平成 3 年度の確認調査の対象となっており（整地Ｃ区）、その内容がすでに報告されている（須田：1992）。

調査にあたり、17 区南東部の№8 杭を座標原点とし、3m×3mのグリッドを設定した。原点の国家座標は次の通りである。

座標原点（№8 杭）　国家座標Ｘ＝－175273.928　Ｙ＝＋6217.872

精査した遺構は、設定したグリッドをもとに簡易遣り方測量、平板測量による平面図を作成し、必要に応じて断面図を作成した。写真記録については 35 ㎜白黒・カラーリバーサル写真、6×7 白黒・カラー写真によって行なった。

ところで、下草古城跡の調査は平成 3 年度の 1 次調査以来、宮城県教育委員会が調査主体となっていたが、今年度は調査開始の 4 月 15 日から 6 月 21 日まで宮城県教育委員会が調査主体となり大和町教育委員会の協力を得ながら調査を進め、以後は大和町教育委員会が調査主体となって遺跡調査を継続することとなった。調査は仕事の引き継ぎを兼ね合同で行なっていたため、実質釣に調査途中で調査主体が変わる形となった。このため、本報告は宮城県教育委員会が係わった 30 区・31 区の遺構確認までの概要を記し、若干の考察を加えるに留める。詳細は今年度刊行予定の大和町文化財調査報告書を参照されたい。

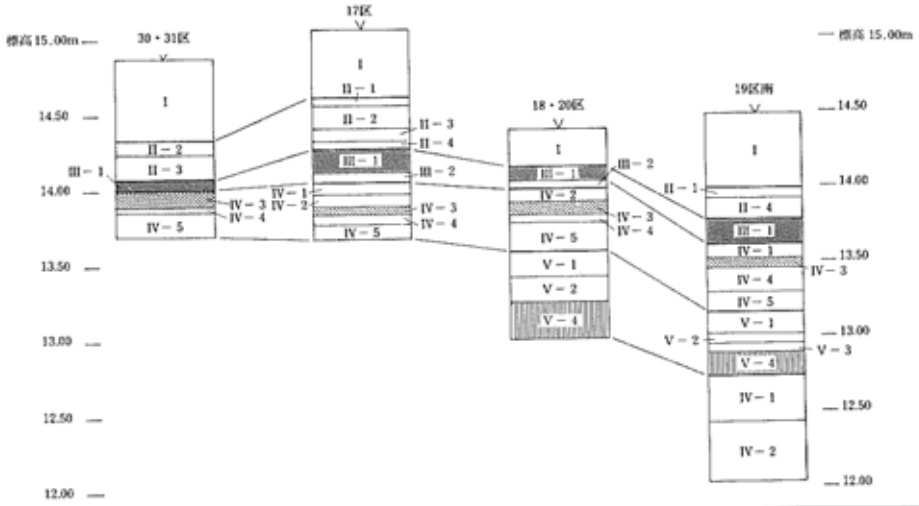
第三章　基本層序と発見された遺構・遺物

Ⅰ　基本層序

本遺跡は竹林川右岸に広がる沖積地に位置しているため、各区、各地点で堆積状況が異なる。しかし、堆積状況が良好な地点で層序を観察すると、多少の違いはあるものの、基準となる層を中心に各区でほぼ同じ層序を示す。

層はⅠ層～Ⅵ層に大別でき、さらに細分される（第 3 図）。出土遺物などから年代が分かっているものは、Ⅰ層：現代、Ⅱ層：近世、Ⅳ層：古代、Ⅴ層：古墳時代である。Ⅲ層、Ⅵ層は不明であるが、おおまかにⅢ層は灰白色火山灰降下以降～中近世、Ⅵ層は古墳時代塩釜式期以前に位置づけられる。

遺跡全体に広がり、視覚的に識別が可能な層は、Ⅲ－1 層の黒褐色粘土質シルト層、Ⅳ－3 層の灰白色火山灰層である。この 2 つの層を基準に柱状図をみてみると、17・18・20 区では両層はほぼ同じ標高である。一方、今年度の調査区 30・31 区は、Ⅲ－1 層は部分的にしか認められないが、Ⅳ－3 層の灰白色火山灰層が 17・18・20 区より 20 ㎝ほど標高が高いところで確認されている。逆に 19 区南部では、Ⅲ－1 層およびⅣ－3 層の灰白色火山灰層が 17・18・20 区より 30～40 ㎝ほど標高が低いところで確認されており、遺跡の西側、北側の方が南側より標高が高いことがわかる。これは本遺跡を取り囲むように流れている竹林川右岸の自然堤防の地形を反映したものと考えられ、また、本丸・二の丸は地形的に最も高い場所を選んで構築されたものと言える。



層No	時代	土	色	土　性	備　考
Ⅰ	現代				現代の水田床土、耕作土、盛土、表土。
Ⅱ－1	近世	10YR4/4	褐色	シ　ル　ト	同色の砂質シルトを少量含む。
－2		2.5Y4/3	オリーブ褐色	〃	整地層。炭化物を少量含む。
－3		10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	2.5Y5/3 オリーブ褐色砂質シルトを多量に含む。
－4		2.5Y4/4	オリーブ褐色	シ　ル　ト	
Ⅲ－1		10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	
－2		2.5Y5/3	黄褐色	シ　ル　ト	漸移層。
Ⅳ－1		2.5Y5/2	暗灰黄色	〃	灰白粒をごく少量含む。
－2		2.5Y5/1	黄灰色	〃	灰白色火山灰層との漸移層。
－3	古代	灰白色火山灰			10C 前半。
－4		2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	17区　SX455 遺物包含層。(9C 前半)
－5		2.5Y4/1	黄灰色	〃	
Ⅴ－1		2.5Y4/3	オリーブ褐色	〃	炭化物を少量含む。
－2		2.5Y5/3	黄褐色	〃	同色の砂質シルトを含む。
－3	古墳	5Y4/2	灰オリーブ色	砂質シルト	炭化物をごく少量含む。
－4		〃	〃	粘土質シルト	18・24区塩釜式土器出土層。炭化物をごく少量含む。しまりあり。4C。
Ⅵ－1		〃	〃	砂質シルト	同色の粘土質シルトをごく少量含む。
－2		2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	しまりあり。

第 3 図　基本層序模式図

Ⅱ　発見された遺構・遺物

前述したように、本報告では 30・31 区の遺構確認までの内容を記すに留める。また、本来は区ごとに説明するところだが、連続する調査区であることから合わせて報告する。なお、31 区南側については平成 3 年度の確認調査の内容（須田：1992）を基本的に踏襲することとするが、一部修正してある。

以下、30・31 区の概要を説明するが、遺構については各遺構の属性表（第 3 表～第 6 表）を作成したため、重要な遺構の特徴のみを記述する。遺物については種類を記述するに留める。

1．発見された遺構

調査区は 2 区の東側の南北に長い高まり部分である（第 2 図）。調査の結果、この高まりは現水田面（標高 13.90m）から約 70～80 ㎝高い最近の寄せ土であった。遺構確認面は基本層位Ⅱ－2 層の整地層上面で、現水田面より 5～40 ㎝高い。遺構面は本来は一連のものであったと思われるが、後世の削平により 4 つの島状の高まりに分割されていた。ここでは北側から、高まり①、高まり②、高まり③、高まり④とする。高まり④が平成 3 年度に行なった確認調査の整地Ｃ区（須田：1992）となる。

整地層 2 枚、掘立柱建物跡 55 棟、塀跡 3 列、道路跡 2 条、溝跡 39 条、井戸跡 32 基、土壙 31 基、焼け面跡 17 基が確認された（第 2 表）。

整地層

今回の調査区の 30 区・31 区付近には、平成 3 年度の確認調査によって、整地層が新旧二時期あることが知られており、古いほうの整地層をＳＸ19Ａ整地層（基本層位Ⅱ－3 層）、新しいほうをＳＸ19Ｂ整地層（基本層位Ⅱ－2 層）としている（須田：1992）。今回も断面観察により、新旧二時期の整地層を確認している。高まり①・④ではＳＸ19ＡとＳＸ19Ｂの二時期の整地層が確認されたが、高まり②・③ではＳＸ19Ａ整地層だけが確認された。

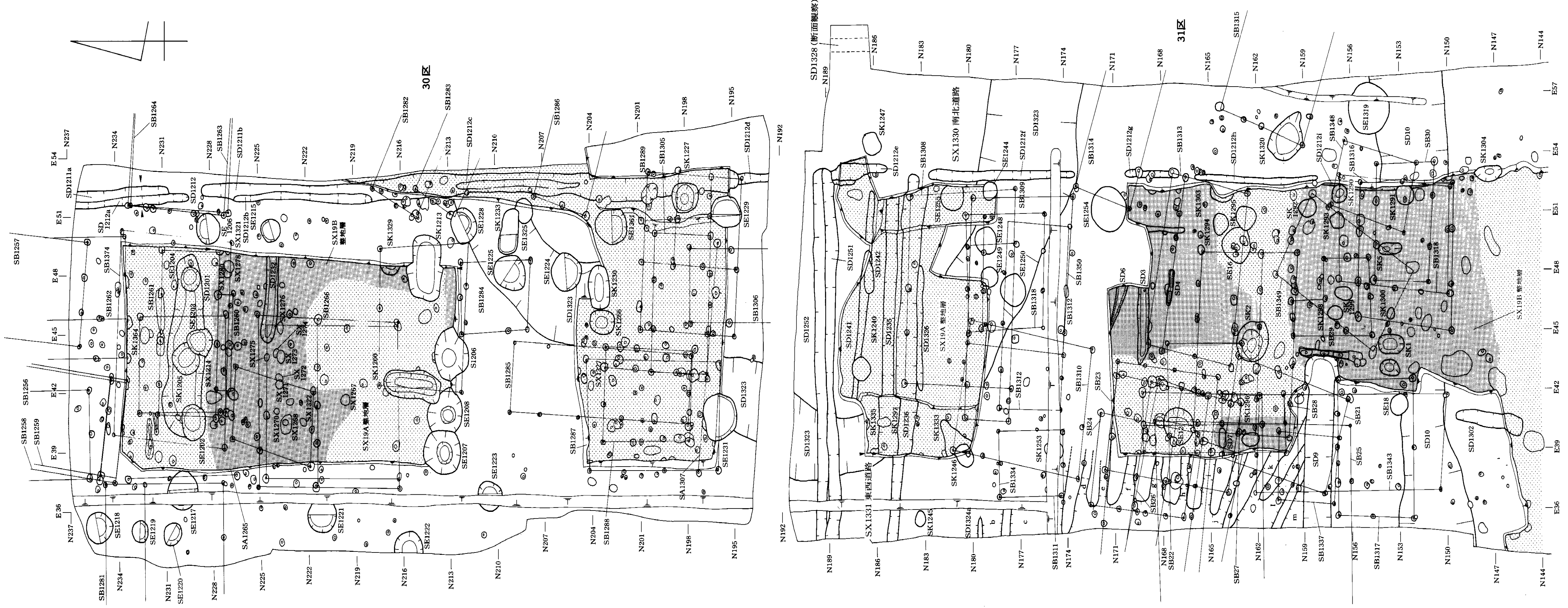
ＳＸ19Ａ整地層は基本層位Ⅳ－3 層の灰白色火山灰層の上、または灰白色火山灰層上に部分的に認められる旧表土上に盛土をして平担面を形成しており、高まり①～④の全面に認められる。また、層厚は西側の方が厚い傾向があり、最も厚い部分で約 30 ㎝である。

ＳＸ19Ｂ整地層はＳＸ19Ａ整地層の上にさらに盛土をして形成されている。後世の削平のためか全体的に残りが悪く、部分的に認められる程度である。層厚は最も厚い部分でも約 10 ㎝である。

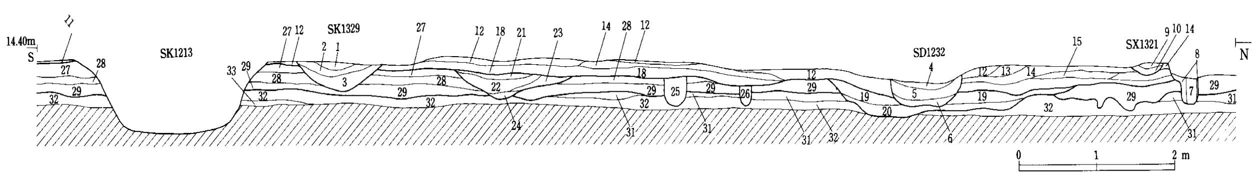
掘立柱建物跡

調査区全域で 55 棟の建物が確認された。これらはＳＸ19Ａ・ＳＸ19Ｂ整地層上面で確認されたものである。ただし、ＳＸ19Ｂ整地層の残りが悪いため、本来はＳＸ19Ｂ整地層上面で検出されるべきものがＳＸ19Ａ上面で確認されたものもあると思われる。

建物の全容がわかるものはこのうち 21 棟だが、構造は長方形やそれに廂または張り出しが付いた程度の単純なものが多い。規模は桁行が 7～9m、梁行 5m程度のものが多いが、ＳＢ28 のように桁行 11m、梁行 7mで東・南・西に廂が付くものや、ＳＢ1309 のように桁行 14m、梁行 6mで南・西に廂が付くものなど大規模な建物もある。建物の方向は、真北方向に対して東へ数度振れるものと十数度振れるものに大別される。また、柱穴の規模を見てみると、前者は径が 40 ㎝前後であるのに対して、後者は 60～80 ㎝と比較的大きくなる傾向がある。

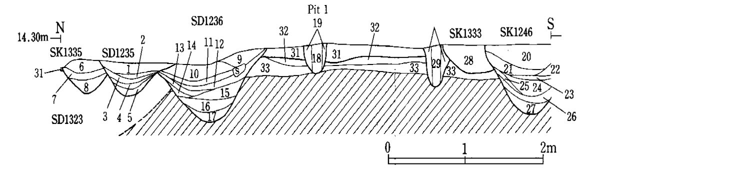


第4図　30・31区遺構平面図



層	No	土色		土性	備考
SK	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	灰白色火山灰粒を少量含む。
	2	2.5Y6/3	にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰ブロックを多量に含む。同色の砂質シルトブロック・10YR3/2黒褐色シルトを含む。
	3	10YR4/4	褐色	シルト	炭化物を多量に含む。
SD1232	4	10YR4/4	褐色	砂質シルト	炭化物を多量に含む。10YR4/2灰黄褐色シルトを含む。
	5	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	炭化物・2.5Y6/3にぶい黄褐色を少量含む。
	6	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	地山粒・焼土を少量含む。
SB1260	7	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	柱痕跡。炭化物・焼土を少量含む。10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトを含む。
	8	10YR4/4	褐色	シルト	掘り方埋土。炭化物・焼土を少量含む。10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトを含む。
SX1321	9	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	焼け面跡。炭化物・焼土を多量に含む。
	10	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	焼け面跡。炭化物・焼土を多量に含む。
SX19B	11	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	整地層。地山ブロック・炭化物を多量に含む。10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトを含む。
	12	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト	整地層。炭化物・焼土・灰白色火山灰を含む。10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトを多量に含む。
	13	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	整地層。炭化物を多量に含む。小礫を含む。
	14	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	整地層。炭化物・焼土・灰白色火山灰を多量に含む。
	15	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	整地層。炭化物・焼土・灰白色火山灰を多量に含む。
	16	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	整地層。炭化物・焼土・灰白色火山灰を多量に含む。
	17	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	整地層。炭化物を少量含む。
	18	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	整地層。灰白色火山灰を含む。炭化物を少量含む。
SK	19	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰を多量に含む。
	20	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰・10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトを多量に含む。
SD	21	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	灰白色火山灰を含む。炭化物・焼土を少量含む。
	22	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰・10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量含む。
	23	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	地山粒・炭化物を多量に含む。灰白色火山灰を少量含む。
	24	10YR3/2	黒褐色	シルト	地山ブロック・炭化物・焼土を多量に含む。
Pit	25	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む。
Pit	26	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む。
SX19A	27	10YR4/6	褐色	砂質シルト	整地層。炭化物を少量含む。
	28	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	整地層。灰白色火山灰・10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量含む。
	29	10YR3/3	暗褐色	シルト	整地層。炭化物・灰白色火山灰を含む。
	30	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	旧表土（基本層序Ⅲ－1？）
	31	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	基本層位Ⅳ－1。
	32	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	基本層位Ⅳ－2。10YR3/3暗褐色シルトを含む。
	33	10YR7/1		灰白色火山灰	基本層位Ⅳ－3。

第5図　30区高まり①東壁断面図



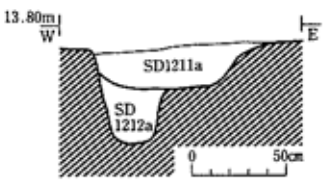
層	No	土色		土性	備考
SD1235	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	灰白色火山灰を多量に含む。炭化物・焼土を含む。
	2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	灰白色火山灰を含む。炭化物・焼土を少量含む。
	3	10YR3/2	黒褐色	シルト	炭化物・焼土を少量含む。
	4	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	地山ブロックを少量含む。
	5	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	炭化物・地山ブロックを少量含む。
SK1335	6	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	地山粒・焼土を少量含む。
	7	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	炭化物を少量含む。
	8	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	炭化物を多量に含む。
SD1236	9	2.5Y6/3	にぶい黄褐色	シルト	礫を含む。
	10	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	炭化物を少量含む。
	11	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰を含む。炭化物を少量含む。
	12	10YR3/2	黒褐色	シルト	
	13	10YR3/2	黒褐色	シルト	炭化物を少量含む。
	14	10YR2/3	黒褐色	シルト	炭化物を少量含む。
	15	10YR3/2	黒褐色	シルト	炭化物・焼土を多量に含む。
	16	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	地山粒・炭化物を少量含む。
	17	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	
Pit1	18	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰を含む。炭化物を少量含む。
	19	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰を多量に含む。
SK1246	20	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	地山粒・炭化物・灰白色火山灰を少量含む。
	21	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	地山粒・炭化物・灰白色火山灰を少量含む。
	22	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	灰白色火山灰を含む。炭化物・焼土を少量含む。
	23	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	地山粒・炭化物を多量に含む。灰白色火山灰を少量含む。
	24	10YR3/2	黒褐色	シルト	地山ブロック・炭化物・焼土を多量に含む。
	25	10YR3/3	暗褐色	シルト	地山粒・炭化物・灰白色火山灰を少量含む。
	26	2.5Y5/1	黄褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。
	27	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	
SK1333	28	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	地山粒・炭化物を多量に含む。
Pit 2	29	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	地山粒・炭化物・灰白色火山灰を含む。
	30	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	炭化物・灰白色火山灰を含む。
SX19B	31	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	SX19B整地層。地山粒・炭化物・灰白色火山灰を多量に含む。
SX19A	32	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	SX19A整地層。灰白色火山灰を多量に含む。
SX19A	33	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	SX19A整地層。灰白色火山灰を多量に含む。

第6図　31区高まり③西壁断面図

塀跡

3 列確認された。柱穴掘り方が布掘によるものと、柱穴が等間隔に並ぶものがある。

道路跡



第 7 図　SD1211a・1212a
道路側溝

【ＳＸ1330 道路跡】調査区東端でＥ－55 ラインとＥ－60 ライン（断面観察）に平行して断続的に延びる一連の溝跡が認められた。これらは、全容は不明だが、部分的に途切れ取水・排水溝としては機能しないこと、両溝間に遺構がほとんど認められないこと、西側に認められる掘立柱建物跡の柱筋と方向を揃えることなどから、東西に素彫りの側溝をもつ南北道賂跡と考えられ、ほぼ同位置で重複している溝跡の新旧関係から 2 段階の変遷が認められた。古い時期の道路をＳＸ1330Ａ、新しい時期の道路をＳＸ1330Ｂとする。これらに伴う側溝は次の通りである。

SX1330A東側溝：SD1328	SX1330B東側溝：不明
西側溝：SD1212a～i	西側溝：1211a～b

遺構確認面はＳＸ19Ａ・Ｂ整地層上面およびその周辺の灰白色火山灰層上面とさまざまであるが、重複関係で最も古いＳＤ1212ｉがＳＸ19Ｂ整地層上面で確認されていることから、これらの側溝はいずれもＳＸ19Ｂ整地層上面から掘り込まれたものと言える。

長さはＳＸ1330Ａ・Ｂとも 80m以上、路幅は、ＳＸ1330Ａしか分からないが、東西側溝の心心で 6.2mを計る。方向は真北から東へ数度振れる。

【ＳＸ1331 道路跡】調査区中央Ｎ－183、Ｎ－189 付近のＳＸ19Ａ整地層上面で、平行する東西方向の溝跡が認められた。これらは、全容は不明だが、部分的に途切れ取水・排水溝としては機能しないこと、両溝間に遺構がほとんど認められないこと、南北に認められる掘立柱建物跡の柱筋と方向を揃えることなどから、南北に素掘りの側溝をもつ東西道路跡と考えられる。側溝となる溝跡はほぼ同位置で重複し、溝跡の新旧関係や方向、規模などから 3 段階の変遷が認められた。道路は古いほうからＳＸ1331Ａ、ＳＸ1331Ｂ、ＳＸ1331Ｃとする。これらに伴う側溝は次の通りである

SX1331A 北側溝：SD1241	SX1331B 北側溝：SD1252	SX1331C 北側溝：SD1251
南側溝：SD1326	南側溝：SD1236	南側溝：SD1235

長さはＳＸ1331Ａが 10m以上、ＳＸ1331Ｂ・Ｃが 18m以上、路幅は南北側溝の心心でＳＸ1331Ａが 3.7m、ＳＸ1331Ｂが 5.5m、ＳＸ1331Ｃが 3.8mである。方向はいずれもほぼ東西方向である。

溝跡

39 条確認された。確認面または堀込み面が、①ＳＸ19Ａ整地層以前のもの、②ＳＸ19Ａ整地層上面のもの、③ＳＸ19Ｂ整地層上面のものがある。ただし、掘立柱建物跡と同様、本来はＳＸ19Ｂ整地層上面で検出されるべきものがＳＸ19Ａ上面で確認されたものもあると思われる。①にはＳＤ10・1323 溝跡、ＳＤ1324ａ～1 小溝状遺構がある。ＳＤ10 は幅約 4mの東西大溝である。ＳＤ1323 溝跡は幅約 4mで、Ｎ－

210 から南西に延び、Ｎ－177 付近からほぼ直角に方向を変え南東方向に延びる大溝である。
ＳD1324ａ～1 小溝状遺構は 31 区西端のＮ－159～174 に見られる。②③には幅 1.5m以下の小溝と幅 2.5～3.0mの溝があるが、ほとんどが前者で前記の道路側溝となるものである。

井戸跡

32 基確認された。確認面が、各高まり周辺の灰白色火山灰層（基本層位Ⅳ－3 層）上面のもの（10 基）、ＳX19Ａ整地層上面のもの（17 基）、ＳX19Ｂ整地層上面のもの（2 基）がある。これらは北側の 30 区に比較的多く分布し、また、近接して作られる傾向にある。平面形は円形を基調とし、規模は直径が①1m前後のもの（6 基）、②1.5～2.0m前後のもの（17 墓）、③2.5m前後のもの（6 基）があり、②が最も多い。

土壙

31 基確認された。確認面は、高まり周辺の灰白色火山灰層（基本層位Ⅳ－3 層）上面のもの（3 基）、ＳX19Ａ整地層上面のもの（17 基）、ＳX19Ｂ整地層上面のもの（11 基）がある。これらは 31 区のＮ－150～165 付近に比較的多く認められる。平面形は円形、楕円形を基調とし、前者には直径 1m前後・1．5～2．0m前後のもの、後者には長径 1m前後・1.5～2.0m前後・3.0～3.5mのものがある。

焼け面跡

14 基確認された。確認面はＳX19Ａ整地層上面のもの（1 基）、ＳX19Ｂ整地層上面のもの（11 基）があり、30 区のＮ－220～228 付近に集中している。平面形は円形、権円形を基調とし、長軸は 50～60 ㎝前後である。全体的に残りが悪く、軟質な焼土が痕跡的に残存しているものがほとんどである。

2．　発見された遺物

今回の調査で陶器（瀬戸・美濃産、唐津産の皿や天目茶碗）、磁器（中国産の皿）、木製品（漆器の椀、皿、手水入れ、曲げ物、鉢）、鉄製品（釘）、土製品（鞴の羽口）、石製品（石臼、石鉢、砥石、硯）、古銭（洪武通宝、永楽通宝、宣徳通宝）などが出土している。

	掘立柱建物跡	塀跡	土壙	井戸跡	溝跡	焼け面跡	道路跡	整地層
30区	27	2	7	21	10	17	}2	}2
31区	28	1	24	11	29	0		
計	55	3	31	32	39	17	2	2

第 2 表　確認された遺構の数

遺構№	区	位置	長さ(m)	幅(m)	方向	時期	重複・備考
SD 1201	30	E43 N230	9.2	2.5	東－西	Ⅲ	[illegible]
1211a	〃	E55 N236	(5.4)	1.0	南－北	〃	SX1330B 道路側溝
〃 b	〃	E55 N228	(33.0)	1.0	〃	〃	〃
1212a	〃	E55 N236	(6.3)	0.5	〃	〃	SX1330A 道路側溝
〃 b	〃	E55 N226	11.0	0.7	〃	〃	〃
〃 c	〃	E55 N213	(8.1)	0.6	〃	〃	〃
〃 d	〃	E55 N202	(8.5)	0.6	〃	〃	〃
〃 e	31	E56 N188	(3.0)	0.6	〃	〃	〃
〃 f	〃	E56 N183	9.6	0.6	〃	〃	〃
〃 g	〃	E56 N170	(3.0)	0.3	〃	〃	〃
〃 h	〃	E56 N166	8.0	0.4	〃	〃	〃
〃 i	〃	E55 N156	8.0	(0.4)	〃	〃	〃
1235	〃	E42 N185	(12.8)	1.5	東－西	〃	SX1331C 道路側溝
1236	〃	E38 N185	(17.8)	1.4	〃	〃	SX1331B 道路側溝
1241	〃	E45 N187	(10.6)	0.5	〃	〃	SX1331A 道路側溝
1242	〃	E50 N186	1.5	0.5	〃	〃	SD1241 より新しい
1251	〃	E38 N180	(17.7)	1.0	〃	〃	SX1331C 道路側溝
1252	〃	〃	〃	1.3	〃	〃	SX1331B 道路側溝
1323	30・31	E54 N213	(59.4)	6.0	[illegible]	Ⅰ	直角に曲がる大溝
1324a	31	E39 N180	(0.8)	0.4	東－西	〃	小溝状遺構
1324b	31	E38 N178	(1.2)	0.6	東－西	Ⅰ	小溝状遺構
〃 c	〃	E38 N173	(3.0)	0.7	〃	〃	〃
〃 d	〃	E39 N172	(1.0)	0.6	〃	〃	〃
〃 e	〃	E39 N171	(2.5)	1.5	〃	〃	〃
〃 f	〃	E38 N170	(2.3)	1.0	〃	〃	〃
〃 g	〃	E39 N168	(2.5)	1.3	〃	〃	〃
〃 h	〃	E39 N166	(2.8)	1.0	〃	〃	〃
〃 i	〃	E39 N165	(3.3)	1.0	〃	〃	〃
〃 j	〃	E39 N164	(4.5)	1.2	〃	〃	〃
〃 k	〃	E39 N162	(5.0)	0.7	〃	〃	〃
〃 l	〃	E38 N161	(3.8)	0.5	〃	〃	〃
1326	〃	E45 N183	6.3	0.5	〃	Ⅲ	SX1331A 道路側溝
1328	30・31	E62 N188	(2.5)	0.6	南－北	〃	SX1330A 道路側溝（[illegible]）
1332	30	E48 N224	(4.4)	0.9	東－西	Ⅲ	SB1268 より新しい
1302	31	E43 N150	4.4	1.0	南－北	Ⅱ	
3	〃	E46 N170	(4.6)	0.9	東－西	Ⅲ	SB1313 より新しい
4	〃	E49 N167	2.4	0.4	〃	〃	〃
9	〃	E39 N158	(9.2)	3.0	〃	〃	SB21・25・1317 より古い
10	〃	E38 N152	(21.4)	4.0	〃	Ⅰ	SB1317・30・SX1330 より古い

第 3 表　溝跡（SD）属性表

遺構№	区	位置	規模（桁・梁）	柱間寸法（桁・梁）	方向	時期	重複	備考
SB 21	31	E42 N165	3間×2間	2.4m・2.4m	南－北	Ⅱ	SD9・1324・SB22・25・27・SK2より新しい、SB24・28との関係不明	
22	〃	E46 N168	2間以上×2間	1.8m・2.2m	東－西	〃	SD1324より新しく、SB24より古い、SB28・SE12との関係不明	
23	〃	E46 N171	4間以上×3間	2.0~2.2m・1.8m	〃	〃	SD1324より新しい、SB22・24・28との関係不明	南に廂
24	〃	E45 N168	4間以上×1間	1.8m・4.6m	南－北	〃	SD1324・SE12・SB22より新しい、SB21との関係不明	
25	〃	E43 N173	6間以上×1間以上	1.8~4.0m・2.0~3.0	南－北	Ⅲ	SE12・SB21~24・27・28・SD9との関係不明	
27	〃	E47 N168	4間以上×1間	2.2m・4.8m	東－西	〃	SK2・SE12・SD1324より新しい、SB21~25・28・29との関係不明	
28	〃	E43 N166	6間×2間	1.8~2.0m・1.6~2.7m	〃	〃	SE12・16・SK2より新しくSB25・SK1292より古い、SB21~24・27~29・1303との関係不明	四面廂
29	〃	E48 N158	2間×2間	2.0m・1.5m	〃	〃	SB28・1306・1317・SA1318・SK1298・1299との関係不明	
30	〃	E50 N155	3間×1間	1.8m~2.2m・3.5m	〃	〃	SD10より新しい、SB29・1306・SA1318との関係不明	
1256	30	E41 N236	2間×1間以上	2.2m・－	東－西	Ⅲ	SB1258・1259との関係不明	
1257	〃	E44 N236	3間×1間以上	1.7m・－	〃	Ⅱ	SB1262との関係不明	
1258	〃	E40 N234	2間×1間以上	2.5m・－	〃	〃	SB1259より新しい（1259同位置で建て替え）	南に廂
1259	〃	〃 〃	〃	〃	〃	〃	SB1258より古い	〃
1260	〃	E42 N231	4間×1間	1.5~2.2m・3.5m	〃	Ⅲ	SD1201・SE1202~1204・SK1205・SB1261との関係不明	南に張り出し
1261	〃	E44 N233	2間×1間以上	2.0~2.5m・5.3m	南－北	〃	SD1201・SE1202~1204・SK1205・SB1260との関係不明	
1262	〃	E47 N234	〃	2.1m・1.8m	〃	〃	SB1257との関係不明	西に廂
1263	〃	E55 N233	4間×1間以上	1.2~1.5m・－	南－北？	Ⅱ	SB1264より新しい（1264同位置で建て替え）、SX1330より古い	
1264	〃	〃	〃	〃	〃	〃	SB1263より古い、 〃	
1266	〃	E40 N225	4間×1間	1.8~2.5m・3.8m	東－西	Ⅲ	SD1232より古い、SX1268・1270~1276・1322との関係不明	
1281	〃	E40 N235	3間×1間以上	2.4m・2.7m	南－北？	〃	SE1217・1218より古い、SE1219・1220との関係不明	
1282	〃	E55 N218	2間×1間以上	1.6m・1.6m	東－西？	Ⅱ	SX1330より古い、SB1283との関係不明	
1283	〃	E55 N215	〃	1.4m・－	〃	〃	SE1228・SX1330より古い、SB1282との関係不明	
1284	〃	E48 N212	3間×2間	1.3m・1.8m	南－北	Ⅲ	SD1323より新しく、SX1275より古い	
1285	〃	E44 N209	5間×2間	2.0~2.5m・1.7m	〃	〃	SB1287・1288・SX1327との関係不明	
1286	〃	E55 N207	2間×1間以上	1.6~1.8m・－	東－西？	Ⅱ	SX1330より古い	
1287	〃	E42 N204	3間×2間	1.8m・1.6m~2.0m	南－北	Ⅲ	SB1285・1288・SX1327との関係不明	東と北に廂
1288	〃	E43 N203	〃	1.9m・1.9m	〃	〃	SB1305より新しい、SB1285・1287との関係不明	東に廂
1289	〃	E48 N201	3間×3間	1.7~2.7m・1.9m	東－西	〃	SX1330より古い、SB1306との関係不明	西に廂
1305	〃	E46 N200	3間×2間	2.2~2.4m・1.7m	〃	〃	SB1288・SA1307より古い、SB1285・1287~1289との関係不明	
1306	〃	E48 N198	1間×1間以上	2.4m・3.8m	南－北	〃	SB1289・1305・SA1307との関係不明	
1308	31	E48 N179	3間×2間	1.7~2.0m・1.7~2.0m	東－西	〃	SE1248・SD1323より新しい、SB1309・1312・SE1249・1250との関係不明	
1309	〃	E44 N184	4間×6間	0.9~1.5m・2.7m	〃	〃	SX1330・SD1323より新しい、SE1244・1249~1250・1255・SB1308・1310・1312・SA1334との関係不明	西に廂、間仕切あり
1310	〃	E42 N183	2間×1間以上	2.1~2.7m・－	南－北？	Ⅱ	SK1246・SD1324a・bより新しい、SB1311との関係不明	
1311	〃	E40 N179	3間×3間	1.4m・1.5m	南－北	Ⅲ	SB1309・1312との関係不明	
1312	〃	E43 N178	4間×1間	2.4~2.5m・4.0m	東－西	Ⅲ	SD1324より新しい、SE1250・SB1308・1309との関係不明	西に廂
1313	〃	E47 N168	3間×2間	2.0m・2.0m	〃	Ⅲ	SE16より新しくSD3・4・SX1330より古い、SB27・28・SK1294・1295・1303との関係不明	北に廂
1314	〃	E55 N173	1間×1間以上	3.6m・1.8m	東－西？	Ⅱ	SE17・SX1330より古い	
1315	〃	E59 N164	3間×1間以上	1.3~1.8m・1.5m	南－北？	〃	SK1329より新しい	
1316	〃	E48 N156	3間×3間	1.8~2.6m・1.8~2.4m	東－西	Ⅲ	SD10より新しい、SB29・30・SA1318・SK1291との関係不明	
1317	〃	E39 N157	4間×2間	1.5~2.4m・2.1~2.5m	東－西	〃	SD9・10・SB21より新しい、SE18・SK1291との関係不明	
1318	〃	E48 N155	3間×3間	1.8~2.6m	〃	Ⅲ	SB29・30・1316・1348・1349との関係不明	
1334	〃	E39 N180	2間×1間	1.5~2.5m・1.5~1.8m	南－北	Ⅲ	SB1310との関係不明	
1336	30	E43 N203	3間×1間	1.5m・2.4m	〃	Ⅲ	SB1285・1287・1288・1289との関係不明	
1337	31	E42 N160	1間以上×1間	1.5~2m・3m	〃	Ⅱ	SD1324より新しくSD9より古い、SB21との関係不明	
1338	30	E42 N222	2間×2間	3.6m・2.2m	〃	Ⅲ	SB1266より古い、SX1268との関係不明	
1340	31	E51 N159	2間×1間	1.8m・3.2m	〃	Ⅲ	SK1290より古い、SB28・29・1330、SA1318、SK1293との関係不明	
1341	〃	E56 N170	2間以上×3間	2.6~3.2m・1.3m	〃	Ⅱ	SE17より古い、SB28・1313・1314・1315との関係不明	南に廂
1343	〃	E40 N162	4間×1間	2.3~2.5m・4.6m	南－北	Ⅲ	SD9・10より新しく、SE18より古い、SB21・25・1340・1337との関係不明	
1345	30	E42 N222	2間×2間	1.8~3.5m・1.2m	〃	Ⅲ	SB1260より古い、SB1346・1348・SX1293との関係不明	
1346	〃	E41 N224	3間×2間	2.8~3.4m・2.8m	〃	Ⅲ	SX1273・SE1296より古い、SB1345・1346・1348・SX1268・1322との関係不明	
1347	〃	E41 N222	2間×1間	1.8~4.0m・5.5m	東－西	Ⅲ	SD1323より新しい、SE1225・SB1347との関係不明	
1348	31	E54 N157	2間×1間	1.0~3.6m・3.6m	〃	Ⅲ	SD10より新しい、SK1290・SB30・1316・1349との関係不明	
1349	〃	E56 N161	3間×2間	1.2~2.6m・2.0~3.0m	南－北	Ⅲ	SB29・30・1318・1349・SK1298・1299との関係不明	
1350	〃	E48 N190	3間×1間	2.5m・6.0m	東－西	Ⅲ	SB1308・1309・1311・1312・SE1248~1250との関係不明	
1374	30	E43 N234	4間×2間	1.9~3.1m・2.0~5.0m	〃	Ⅲ	SB1260・1262より新しい、SB1261・1258・1259・SD1201・SE1202~1204との関係不明	
SA 14	31	E47 N159	3間	1.0~1.1m	南－北	〃		布掘りの掘り方
1265	30	E41 N234	3間	2.0~2.6m	〃	〃	SE1217より新しい	
1307	〃	E41 N197	5間	2.4m	東－西	〃	SB1305より新しくSE1231より古い、SE1287、1289、1306との関係不明	

第4表　掘立柱建物跡（SB）・塀跡（SA）属性表

遺構№	区	位置	平面形	上端径(m)	重複・備考	時期
SE 12	31	E43 N167	円形	2.0	SB21より新しく、SB24より古い	Ⅱ
16	〃	E56 N163	不整円形	2.0	SK1295より古い	Ⅱ
17	〃	E54 N170	円形	2.4		Ⅱ
18	〃	E40 N153	〃	1.1	SD10より新しい	Ⅰ
1202	30	E43 N229	〃	1.9	SD1201より古い、SB1260・1261との関係不明	Ⅱ
1203	〃	E48 N229	〃	1.5	SD1201より古い、SB1260・1261との関係不明、SK1205より新しい	〃
1204	〃	E51 N229	〃	1.5	SD1201より古い、SB1260との関係不明	〃
1206	〃	E46 N213	〃	2.7		〃
1207	〃	E42 N213	〃	2.4	SE1208より新しい	〃
1208	〃	E44 N213	〃	2.3	SE1206・1207より古い	〃
1215	〃	E53 N224	〃	1.2		不明
1216	〃	E53 N228	〃	1.5	SB1263・1264との関係不明	〃
1217	〃	E49 N230	〃	2.0	SA1265より古い、SB1281との関係不明	〃
1218	〃	E38 N236	〃	1.3	SB1281との関係不明	〃
1219	〃	E38 N233	〃	1.1	〃	〃
1220	〃	E38 N231	〃	1.2	〃	〃
SE 1221	30	E39 N236	円形	1.8		〃
1222	〃	E37 N236	〃	1.6		〃
1223	〃	E39 N231	〃	1.6		〃
1224	〃	E34 N206	〃	1.9	SD1323より新しい	Ⅲ
1225	30	E34 N209	楕円形	(長)2.1	SB1284・SD1323より新しい	Ⅲ
1228	〃	E53 N212	〃	(長)1.9	SB1283・SD1323より新しい	Ⅲ
1229	〃	E54 N195	〃	(長)2.0	SB1289との関係不明	Ⅲ
1230	〃	E43 N196	円形	2.5	SB1287・SA1307・SD1323より新しい	Ⅲ
1244	31	E55 N179	〃	1.0	SD1323より新しい	Ⅱ
1248	〃	E52 N179	〃	1.6	SB1309・SD1323より新しい	不明
1249	〃	E51 N179	〃	1.2	〃　SB1309との関係不明	Ⅱ
1250	〃	E50 N178	〃	1.2	SB1309・SD1323より新しい、SB1312との関係不明	Ⅲ
1255	〃	E55 N181	不整円形	1.6		Ⅱ
1319	〃	E59 N154	円形	2.6	SD10より新しい	不明
1325	30	E54 N208	〃	1.2	SD1323より新しく、SK1233より古い	Ⅲ

第5表　井戸跡（SE）属性表

遺構№	区	位置	平面形	長径(m)	短径(m)	重複・備考	時期
SK 1	31	E46 N154	不整楕円形	1.2	0.9		Ⅲ
2	〃	E47 N162	円形	2.2	2.1		〃
1205	30	E47 N230	円形	1.6	1.6	SD1201・SE1203より古い	不明
1213	〃	E51 N214	楕円形	3.3	2.3		Ⅱ
1226	〃	E48 N202	〃	1.5	1.2		Ⅲ
1227	〃	E55 N198	円形	1.7	1.5	SX1330・SB1289より新しい	〃
1230	〃	E50 N203	楕円形	2.2	1.3		Ⅱ
1233	〃	E53 N209	不整形	2.2	1.2	SD1323・SE1325より新しい	〃
1243	31	E46 N167	円形	1.3	1.3	SX1331より新しい	Ⅲ
1245	〃	E39 N184	楕円形	0.9	0.6		不明
1246	〃	E42 N180	〃	1.4	1.0	SB1310より古い	Ⅱ
1247	〃	E57 N186	不整円形	1.3	1.1		不明
1290	〃	E56 N152	円形	1.0	1.0	SX1330より新しい	Ⅲ
1291	〃	E55 N153	〃	1.1	1.1	SD10より新しい	Ⅲ
1292	〃	E54 N159	楕円形	1.2	0.9		〃
1293	〃	E53 N157	不整円形	0.9	0.9		〃
1294	〃	E53 N164	円形	0.9	0.9		〃
1295	〃	E53 N163	不整円形	1.3	1.1	SE16より新しい	〃
1297	〃	E43 N186	不整楕円形	0.9	0.6	SX1331より新しい	Ⅲ
1298	〃	E43 N157	楕円形	1.0	0.7		Ⅲ
1299	〃	E50 N156	〃	1.0	0.7		〃
1300	〃	E49 N153	〃	1.7	1.4		〃
SK 1301	31	E56 N167	不整楕円形	1.8	0.8		Ⅱ
1303	〃	E55 N164	楕円形	1.5	1.0	SX1330より古い	〃
1320	〃	E57 N160	不整楕円形	2.3	1.8		不明
1329	30	E51 N176	円形	1.4	－		Ⅲ
1332	31	E55 N203	不整楕円形	1.0	0.4	SX1330より新しい	〃
1333	〃	E42 N180	不整形	2.1	1.2	SK1246・SB1310より古い	Ⅱ
1335	〃	E42 N186	不明	－	－	SX1331より古い	〃
SX 1267	30	E44 N220	円形	0.6	0.6		Ⅲ
1268	〃	E43 N222	不整円形	0.6	0.4	SB1266との関係不明	〃
1269	〃						〃
1270	〃	E44 N226	円形	0.4	0.4	〃	〃
1271	〃	E45 N226	〃	0.5	0.5	〃　、SX1272より新しい	〃
1272	〃	E46 N228	〃	0.5	0.5	〃　、SX1271より古い	〃
1273	〃	E47 N228	楕円形	0.7	0.5	〃　、SX1274より新しい	〃
1274	〃	E47 N228	〃	0.4	－	〃　、SX1273より古い	〃
1275	〃	E47 N225	円形	0.4	0.4	〃　、	〃
1276	〃	E48 N226	楕円形	0.7	0.5	SB1266との関係不明	〃
1277	〃	E51 N223	円形	0.4	0.4		〃
1278	〃	E51 N225	楕円形	0.7	0.5		〃
1321	〃	E52 N227	不明		－	[illegible]のため詳細不明	〃
1322	〃	E43 N222	楕円形	0.5	0.4	SB1266との関係不明	〃
1327	〃	E45 N204	〃	0.5	0.4	SB1285・1287との関係不明	Ⅲ

第6表　土壙（SK）・焼け面跡（SX）属性表

第四章　考　　察

今回の調査では、整地層 2 枚、掘立柱建物跡 55 棟、塀跡 3 列、道路跡 2 条、溝跡 39 条、井戸跡 32 基、土壙 31 基、焼け面跡 17 基が確認された。これらは高まり①～④に認められるＳＸ19Ａ・Ｂ整地層と高まり周辺の灰白色火山灰層上面で確認されたものである。ここでは、調査の性格上、今回確認された遺構に限定し、主な遺構の特徴や変遷、そして遺構の年代について若干の考察を行なうこととする。

Ⅰ　遺構の特徴

主な遺構の特徴をまとめると次のようになる。

【整地層】新旧二時期の整地層が確認されたが、いずれも盛土による整地層である。古い段階のＳＸ19Ａ整地層は高まり①～④いずれにも認められるが、新しいＳＸ19Ｂ整地層は残存状況が悪く、高まり①・④にのみ部分的に薄く認められる程度であった。このため、本来、ＳＸ19Ｂ整地層上面で確認されるべき遺構がＳＸ19Ｂ整地層上面で確認されているものもあると思われる。この整地層は本遺跡が沖積地に立地していることから、他の調査区同様、水害対策のための地盤のかさ上げが目的であったと考えられる。

【道路跡】南北道路跡 1 条、東西道路跡 1 条が確認された。さらに前者は二段階、後者は三段階の変遷が認められた。側溝となる溝跡の検出状況から、Ｎ－183～186、Ｅ－57～60 付近が交差点になるものと思われる。また、これらは直交して認められることなどから、ほぼ同時期に機能していたものと考えられるが、南北道路は 1330Ａ・Ｂの二段階、東西道路は 1331Ａ・Ｂ・Ｃの三段階の変遷が認められるように、同時期に機能した道路跡の組合せが不明確である。そこで側溝の規模や断面形から道路の変遷を検討してみたい。

まず、南北道路 1330Ａに伴うＳＤ1212ａ～ｉ側溝は長さ 10m前後、断面形は、上部は壊されて不明だが底面から比較的急角度で立ち上がる。一方、1330Ｂに伴うＳＤ1212ａ～ｂ側溝は長さ 30m以上、断面形は底面から緩やかに立ち上がる。つぎに東西道路ＳＸ1331 に伴う側溝をみてみると、ＳＸ1331ＡはＳＸ1330Ａの特徴を、ＳＸ1331Ｂ・ＣはＳＸ1330Ｂの特徴をもつ側溝を伴っていることがわかる。

このことから、大きくＳＸ1330ＡとＳＸ1331Ａが、ＳＸ1330ＢとＳＸ1331Ｂ・Ｃが同時に機能していたと考えられ、また、ＳＸ1330Ｂの時期にはＳＸ1331 は作り替えなのかＳＸ1331Ｂ→Ｃと変遷していたと思われる。

【溝跡】39 本確認された。ＳＸ19Ａ・Ｂ整地層上面で確認されたものと、高まり周辺の灰白色火山灰層上面で確認されたものがある。前者はほとんどが上記の道路跡に伴う溝跡であり、その他の溝跡については性格が不明である。後者にはＳＤ10・1323 溝跡・1324ａ～1 小溝状遺構があり、いずれも断面観察から年代はおおまかに灰白色火山灰降下以降で、中世まで降りる可能性も示されている（須田：1992）。ＳＤ10 溝跡は性格が不明である。ＳＤ1323 溝跡は幅 6mと規模が大きく、直角に曲がっていることから区画溝の可能性が高いが、その規模などの詳細は不明である。ＳＤ1324ａ～1 小溝状遺構は一般に畑跡と考えられている。

【掘立柱建物跡】41 棟の建物跡が確認された。建物の構造は長方形を基調とし、それに廂や張り出しが付く単純なものである。規模は桁行 7～9m前後、梁行 5m前後のものが多いが、ＳＢ28（桁行 11m、梁行 7m）やＳＢ1309（桁行 14m、梁行 6m）のように大規模なものも見られる。また建物跡は建物の方向から、①真北から十数度東に振れるもの、②真北から数度東に振れるものに大別される。

ところで、須田（1992）は平成 3 年度の確認調査で、真北から十数度東に振れる建物はＳＸ19Ａ整地層上面で確認されたもの、そして、真北から数度東に振れる建物はＳＸ19Ｂ整地層上面で確認されたものとし、建物の方向によって時期を限定できるとしている。今回も建物跡は建物の方向によって 2 つに大別されたが、ＳＸ19Ｂ整地層の残存状況が悪いため、ほとんどＳＸ19Ａ整地層上面で確認されている。しかし、上記の理由で、今回確認された建物は、真北から十数度東に振れるものＳＸ19Ｂ整地層上面で確認されるべきもの、同様に、真北から数度東に振れるものは、本来はＳＸ19Ｂ整地層上面で確認されるべきものである可能性が高い。

また、新しい段階と考えられる真北から数度東に振れる建物は、ＳＸ1330 南北道路跡とＳＸ1331 東西道路跡と柱筋を揃えることからこれらと同時期のものと考えられるが、両道路跡の側溝は古い段階のＳＸ19Ａ整地層上面で確認されている。しかし、前述したようにＳＸ19Ｂ整地層は残存状況が悪いため、これらの道路側溝がＳＢ19Ａ整地層上面で確認されたにすぎず、本来は両道路跡と同時期にＳＸ19Ｂ整地層上面で確認されるべきものであったと考えられる。

Ⅱ　遺構の変遷

以上のことから、本調査区では 2 枚の整地層を境に、Ⅰ期：ＳＸ19Ａ整地層構築以前の時期、Ⅱ期：ＳＸ19Ａ整地層構築後からＳＸ19Ｂ整地層構築以前の時期、Ⅲ期：ＳＸ19Ｂ整地層構築以後の時期の三時期に大別されることがわかる。各遺構の所属する時期は次のようになる。

Ⅲ期	ＳＢ	25 26 27 28 29 30 1256 1260 1261 1262 1266 1281 1284 1285 1287 1288 1289 1305 1306 1308 1309 1311 1312 1313 1316 1317 1336 1338
	ＳＡ	14 1265 1307
	ＳＤ	3 4 6 7 8 9 1211 1212 1232 1235 1236 1241 1242 1251 1252 1326 1338
	ＳＥ	1206 1225 1231 1250 1325
	ＳＫ	1 2 5 11 1227 1233 1240 1290 1297 1298 1299 1300 1303 1329 1332
	ＳＸ	1267 1268 1270 1271 1272 1273 1274 1275 1276 1277 1278 1321 1322
ＳＸ19Ｂ整地層		
Ⅱ期	ＳＢ	21 22 23 24 1257 1258 1259 1263 1264 1282 1283 1286 1310 1314 1315 1337 1341
	ＳＤ	1201 1302
	ＳＥ	12 16 17 1202 1203 1204 1207 1208 1224 1228 1229 1244 1249 1255
	ＳＫ	1200 1213 1226 1230 1246 1247 1291 1292 1293 1294 1295 1304
	ＳＸ	1327 1330 1331
ＳＸ19Ａ整地層		
Ⅰ期	ＳＤ	10 1323 1324a～l
不明	ＳＥ	18 1215 1216 1217 1218 1219 1220 1221 1222 1223 1248 1319
	ＳＫ	1205 1245 1320

第 8 図　各遺構の所属時期

※アミの部分は SX19A 整地層上面で確認されたもの（II期）であるが、他の遺構との新旧関係や建物の方向からIII期に所属すると考えられるものである。

Ⅲ　遺構と遺物の年代

今回の調査で確認された遺構は大きく三時期に分けられ、細かく見ると 10 段階以上の変遷が明らかとなり、長期に渡りこの面が利用されていたことがわかった。遺構の時期は確認調査（須田：1992）では両整地層から 16 世紀紀中頃から 17 世紀初頭の遺物が出土していることや、今回もほぼ同時期と考えられる遺物が出土していることから、おおまかにこの時期に位置づけられるものと思われる。ただし、各遺構の具体的な年代や存続期間については不明である。

Ⅳ　まとめ

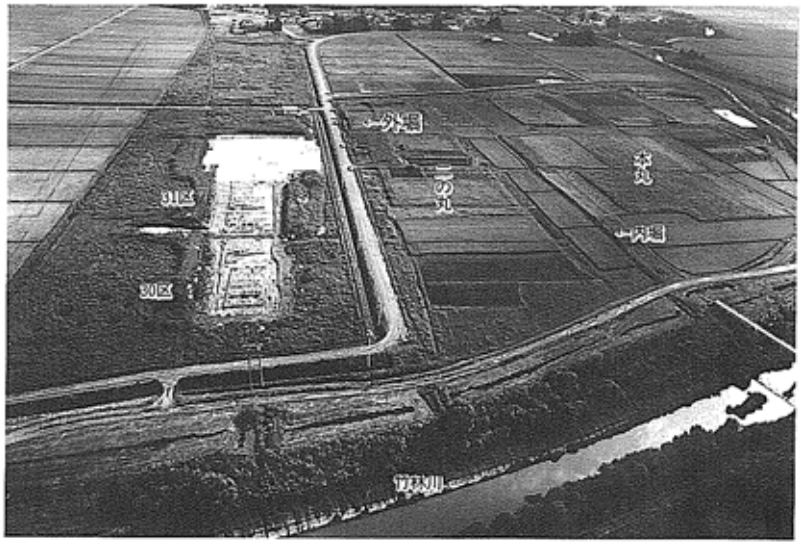
この報告は遺構確認までの限られた内容であったが、遺跡の北東部にあたる 30・31 区で多数の遺構が検出され、大きく三時期、細かく見ると 10 段階以上の変遷が認められた。また、東西・南北道路跡が確認され道路を基準とした区画が行なわれていたことがわかっれこれにより遺跡のほぼ全域で道路による区画が行なわれていたことが明らかとなった。

これらの遺構はこれまで報告してきたように、文献に記された数年たらずに残されたものではなく、宗清が居城した 17 世紀初頭を中心として比較的長期に渡り存続していたことは確定的で、下草古城跡北東地域でもそれが立証されたこととなる。しかし、遺物が全体的に少ないことなどから、各遺構の年代や存続期間を決定するには至っていないことや、調査区が限られていることもあるが、区画の範囲や規模、および基準などを見出せなかったことなど引き続き課題が残る。

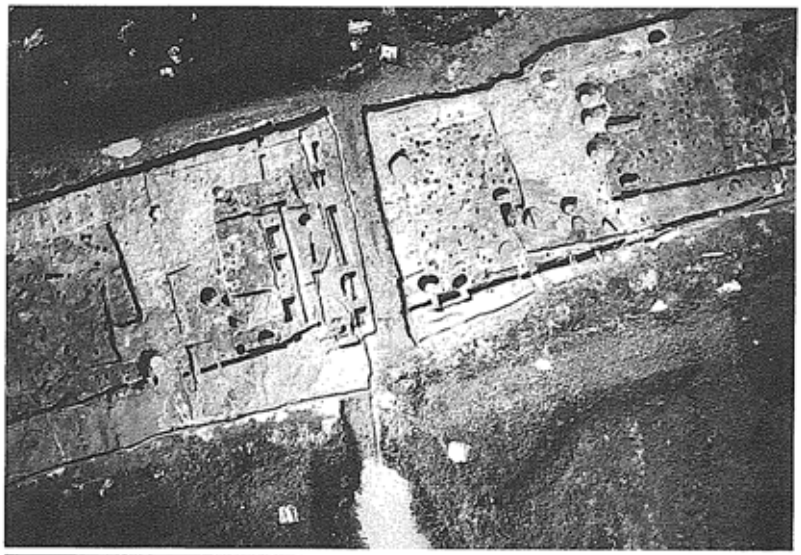
参考・引用文献

天野順陽（1994）：「下草古城跡」宮城県文化財調査報告書第 160 集
天野順陽（1995）：「下草古城跡」宮城県文化財調査報告書第 166 集
天野順陽（1996）：「下草古城跡」宮城県文化財調査報告書第 169 集
遠藤巌・伊藤信ほか（1975）：「大和町史上巻」
佐野養吉（1980）：「黒川氏の氏實」『仙臺郷土研究』p641～646、仙台郷土研究会
須田良平（1992）：「下草古城跡」宮城県文化財調査報告書第 146 集
須田良平（1993）：「下草古城跡」宮城県文化財調査報告書第 154 集
平　重道（1973）：「伊達治家記録二」宝文堂
渡辺信夫・大藤修ほか（1977）：「大和町史下巻」

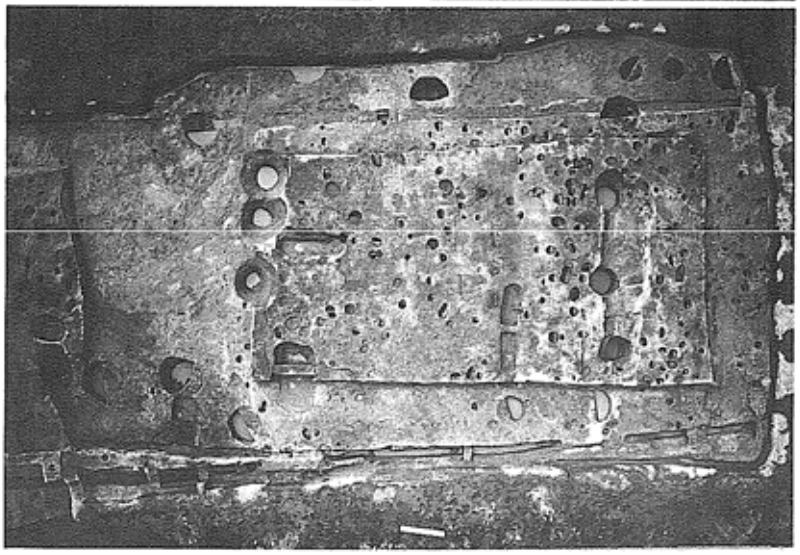
遺跡全景
（北東から）



調査区全景
（右上が北）

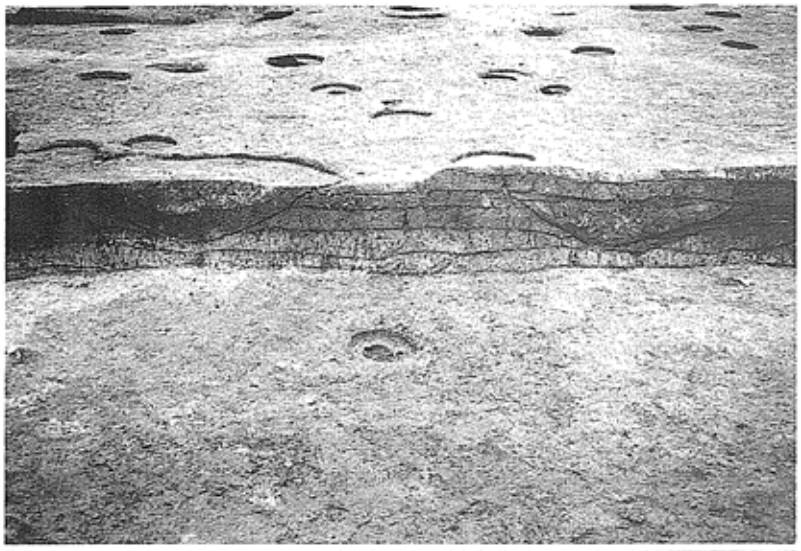


30区高まり①
（右が北）



写真図版１（航空写真は平成８年９月５日撮影　大和町教育委員会提供）

30区高まり①・②
（右が北）



30区高まり①東壁断面
SX19A・B整地層
（東から）

31区高まり④
遺構確認状況
（南東から）

写真図版 2

宮崎北部地区圃場整備事業関連遺跡

（岩見壇・壇の越・片吹遺跡）

目　　次

第Ⅰ章　はじめに 145
第Ⅱ章　発掘調査の成果..... 146
　1. 調査の方法と経過..... 146
　2. 旧地形と遺構・遺物の概要..... 146
　3. 遺跡の広がりと性格について..... 149
引用文献 150

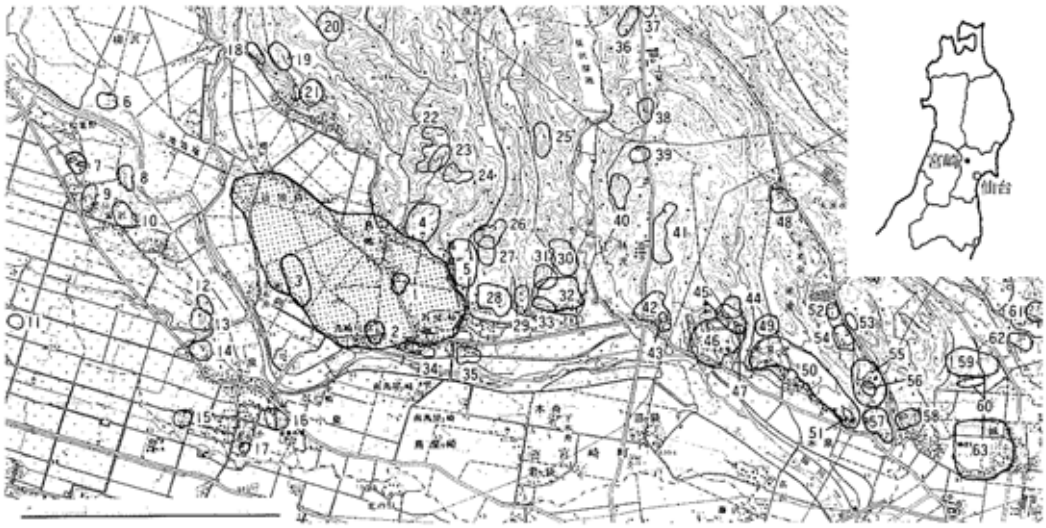
調　査　要　項

遺　　跡　　名：岩見壇遺跡（いわみだんいせき）・壇の越遺跡（だんのこしいせき）・
　　片吹遺跡（かたぶきいせき）
宮城県遺跡地名表登載番号：30040・30039・30094（上記の順）
遺　跡　記　号：ＰＮ（3 遺跡統一）
遺　跡　所　在　地：加美群宮崎町鳥嶋・鳥屋ヶ崎
調　査　対　象　面　積：約 1,278,000 ㎡
調　査　面　積：約 12,000 ㎡
調　査　期　間：1996 年（平成 8 年）11 月 13 日～12 月 11 日
調　査　主　体：宮城県教育委員会
調　査　担　当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　協　力：宮崎町教育委員会
調　査　員：後藤秀一・高橋栄一・三好秀樹・柬理浩明・
　　八嶋伸明・藤村博之・佐藤貴志（宮城県教育庁文化財保護課）
　　斉藤　篤（宮崎町教育委員会）

第Ⅰ章　はじめに（第１図）

岩見壇・壇の越・片吹遺跡は加美郡宮崎町鳥嶋字館前・若宮・若宮西に所在する。これらの遺跡は宮崎町役場の南東約 3．5㎞、大崎平野の西端に位置し、奥羽山脈から分岐して南東に延びる丘陵群の末端部と鳴瀬川の支流である田川の間に形成された河岸段丘上に立地している。鳥嶋・鳥屋ヶ崎地区近辺では、田川が蛇行しながら南下し、鳥嶋地区の西端付近から東流する。その北岸には河道に沿って東西約 2.0㎞、南北 1.5㎞の範囲に平担な段丘面が広がる。標高 48～65mの段丘面は大きくみると、北東部と南西部の上下 2 段に分かれ、その比高差は 2m程である。

段丘上には土師器・須恵器を中心に縄文時代から古代にかけての遺物が散布していて、その採集地点を中心に岩見壇・壇の越・片吹の 3 遺跡が包含地として宮城県遺跡地図に登録されている。なかでも壇の越遺跡では大量の墨書土器が発見されており、遺跡の性格が注目されてきた。また、壇の越遺



№	遺跡名	立地	種別	時代
1	岩見壇遺跡	段丘	集落跡	縄文晩、弥生、平安
2	壇の越遺跡	段丘	集落跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安
3	片吹遺跡	段丘	集落跡	縄文、弥生、平安
4	前山遺跡	丘陵端	窯跡	古墳後、奈良、平安、中世
5	平成遺跡	丘陵斜面	集落跡	縄文中・晩、古墳、奈良、平安
6	壇の越遺跡	沖積平野	包含地	縄文、弥生、古代
7	浜田遺跡	段丘	包含地	縄文晩、平安
8	青生遺跡	段丘	包含地	古代
9	浜田前遺跡	段丘	包含地	縄文、弥生
10	福沢遺跡	段丘	包含地	縄文晩、弥生、古代
11	堂遺跡	段丘	包含地	古代(小倉田町)
12	弘ヶ館古墳群	段丘	円墳	古墳後
13	東館遺跡	段丘	包含地	縄文中、古代
14	小泉古墳群	段丘	円墳・方墳	古墳後
15	加賀塚遺跡	段丘	包含地	縄文、古代
16	天神堂遺跡	段丘	包含地	縄文中・晩、弥生、古代
17	円満館遺跡	段丘	包含地	縄文中・後、弥生、古代
18	前丸木遺跡	丘陵端	包含地	古代
19	上館遺跡	丘陵	包含地	縄文前・中・晩、古代
20	狐塚遺跡	丘陵	包含地	縄文、弥生、古墳、奈良、平安
21	天王森遺跡	丘陵	包含地	縄文、弥生、古墳、奈良、平安
22	鳥屋ヶ崎古墳群	丘陵端	方墳	古墳後
23	古館遺跡	丘陵端	包含地	縄文、古墳、奈良、平安
24	西前ヶ崎遺跡	丘陵端	包含地	縄文、古代
25	張沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
26	うこのもこの遺跡	丘陵端	包含地	縄文
27	堂前古墳群	丘陵中腹	円墳	古墳後
28	上の山遺跡	丘陵中腹	包含地	古墳、奈良
29	壇だれ山遺跡	丘陵中腹	包含地	縄文前・中、古代
30	多武士の旦遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生後～古代
31	上ノ原下遺跡	丘陵中腹	包含地	縄文、弥生、古墳、奈良、平安
32	張沢城跡	丘陵中腹	包含地、城館	縄文、中世
33	張沢古墳群	丘陵端	円墳・方墳	古墳後
34	道祖神遺跡	段丘	包含地	縄文中・晩、奈良、平安
35	北の門遺跡	段丘	包含地	縄文中・晩、古代
36	三ツ堀遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文中、古代
37	三ツ塚古墳群	丘陵	円墳・方墳	古墳後
38	大道ヶ館遺跡	丘陵端	包含地	縄文中、古墳後、平安
39	張沢谷遺跡	丘陵	包含地	縄文、古代
40	大清水遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
41	前屋敷遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、弥生、古墳、奈良、平安
42	地蔵前遺跡	丘陵	円墳、城館	古墳?、中世
43	地蔵前遺跡	丘陵端	包含地	縄文、古墳、奈良、平安
44	古城遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文早・前、古代
45	北山古館跡	丘陵	円墳・館跡	古墳後
46	米泉館跡	丘陵	墓地、城館	古墳後、中世
47	前館館跡館跡	丘陵斜面	横穴墓	古墳後
48	中野遺跡	丘陵	包含地	縄文中・晩、古墳、古代
49	古屋敷遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文後・中・晩、弥生、古代
50	米泉古墳群	丘陵斜面	墳墓	古墳中・後
51	大荒森古墳	丘陵頂	円墳	古墳中
52	新野火葬墓	丘陵	墳墓	平安
53	黒松古墳群	丘陵	古墳	古墳後(小倉田町)
54	三吉平遺跡	丘陵	包含地	縄文、弥生、古墳、奈良、平安
55	小笹森遺跡	丘陵	包含地	縄文、弥生、古墳、奈良、平安
56	大塚森古墳群	丘陵	円墳	古墳前
57	米泉遺跡	丘陵	包含地	古代
58	羽場遺跡	丘陵	包含地	古代(小倉田町)
59	ヘッド平館跡館跡	丘陵	円墳、包含地	古墳後、古代(小倉田町)
60	屋敷A遺跡	丘陵裾	包含地	古代(小倉田町)
61	大塚遺跡	丘陵	包含地	古代(小倉田町)
62	古屋敷B遺跡	段丘	包含地	古代(小倉田町)
63	城生館跡	丘陵	城館、墓地、城館	縄文、古代、中世(小倉田町)

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

跡の西南端は行人塚古墳群としても登録されており、墳丘は残存しないものの、近辺で円筒埴輪の破片が見つかっている（宮崎町：1973）。

周辺には旧石器時代から近世にかけて多くの遺跡が分布しているが、特に古墳時代、奈良・平安時代のものが多い。

古墳時代の遺跡としては、直径約 46．7m、高さ約 7．8mの大規模な円墳である大塚森（夷森）古墳（辻ほか：1995）をはじめ、鳥屋ヶ森古墳群・孫沢古墳群・念仏山古墳群などの群集墳、横穴墓である米泉館山横穴古墳群、土壙墓が検出された米泉館跡（藤村：1996）など、墳墓跡が田川北岸の丘陵上を中心に認められるが、集落跡はあまり知られていない。

奈良・平安時代になると、本遺跡のある段丘の北東部と接する標高約 80m、東西約 300m、南北約 250mの台地上に、8 世紀前半から 10 世紀中頃まで存続した陸奥国賀美郡衙と考えられている東山遺跡が広がる（宮城県多賀城跡調査研究所：1987・1988 ほか）。また、この台地の東側の丘陵上には掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出された早風遺跡（森：1980）もある。他にも段丘北側の丘陵上には、天王裏遺跡・上の山遺跡などの包含地が多く認められる。

第Ⅱ章　発掘調査の成果

1．調査の方法と経過（第 2 図）

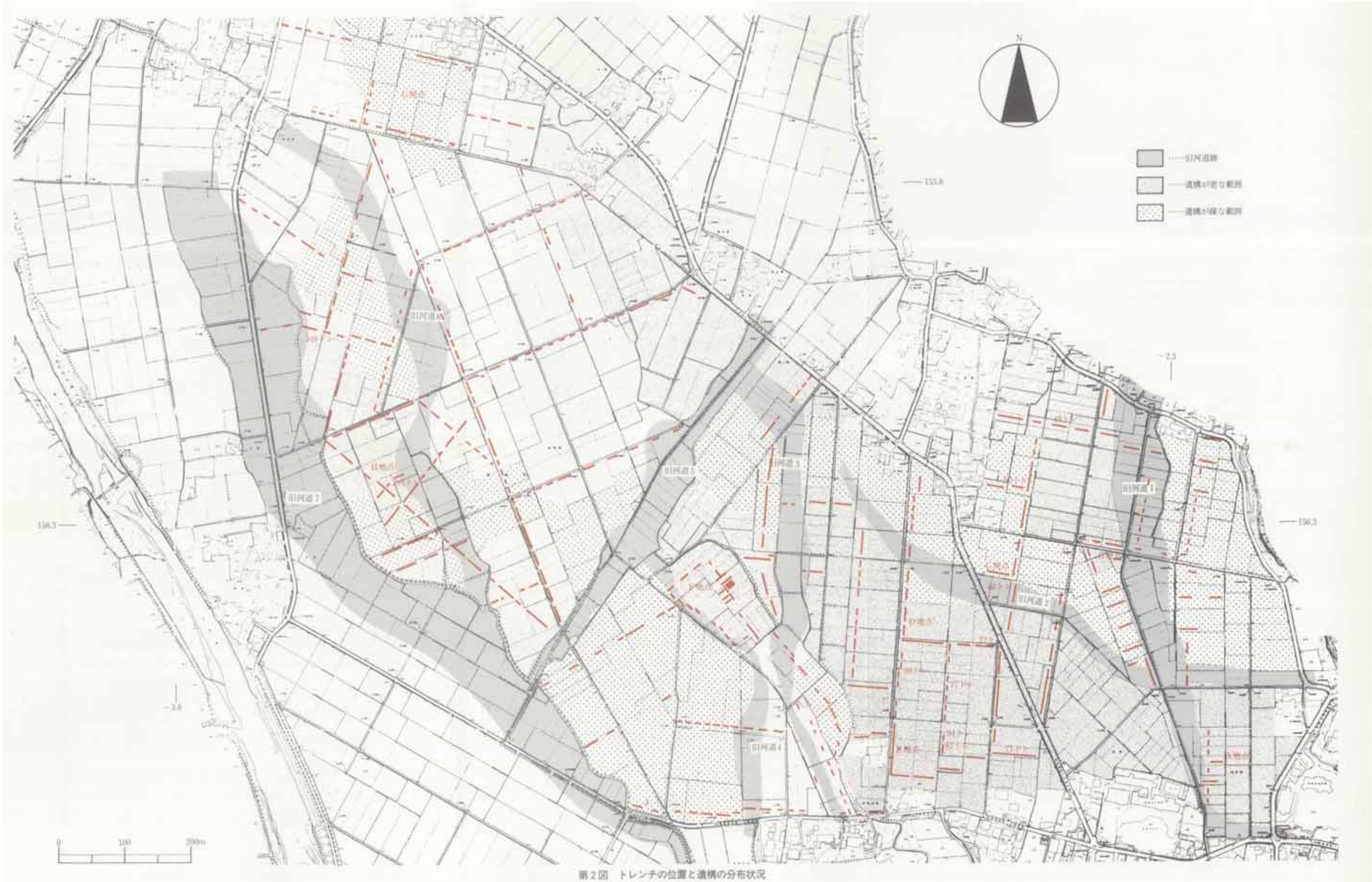
岩見壇・壇の越・片吹遺跡の調査は、宮崎北部地区圃場整備事業に係わるものである。

宮崎町の北部地区では平成 8 年度から大規模な圃場整備事業に取り掛かっており、これらの遺跡が所在する地域も平成 9・10 年度の圃場整備対象地区になっている。また、この地域では圃場整備と並行して県道鳥屋ヶ崎・小野田線、柳沢・中新田線の改修と移設も計画されている。このような状況の中で、関係者が遺跡の保存と事業について協議するためには、3 遺跡の範囲を明確にしその内容をある程度把握する必要が生じた。そこで、宮城県文化財保護課では遺跡を含む平成 9・10 年度圃場整備事業予定地域約 1,278,000 ㎡を対象に、平成 8 年 11 月 13 日から 12 月 11 日にかけ任意に設定したトレンチによる確認調査を行なった。トレンチの総数は 409 本で、調査面積は約 12,000 ㎡である。調査範囲は鳥嶋・鳥屋ヶ崎地区の河岸段丘上ほぼ全面に及び、現況は水田・荒地である。

調査範囲の基本層序は 6 層に別れる。1 層は黒色のシルトで現在の耕作土、2 層は黒褐色のシルトである。3 層は黒色の砂質シルトで、上面に部分的ではあるが灰白色火山灰が認められることから古代以前の旧表土とみられる。4 層はにぶい黄褐色の砂質シルトで漸移層、5 層は黄褐色の砂質シルトでローム層、6 層は礫層となる。しかし、段丘面は旧河道によって複雑に開析されており、堆積状況が異なる部分もみられる。

2．旧地形と遺構・遺物の概要（第 2・3 図）

第 2 図に示したトレンチ調査によって対象地区内の旧地形と遺構の分布範囲や状況をある程度把



第2図　トレンチの位置と遺構の分布状況

握することができた。ここではその内容を簡単にまとめておく。

まず旧地形をみると、段丘面は北東部と南西部の上下2段に大別され、面上には南もしくは南東方向へ延びる旧河道が7本認められる。このうち旧河道2・4は河川堆積層の上部に灰白色火出灰が水平堆積していることから、古代には湿地状であったと考えられる。また、旧河道5の一部は現在も水路として利用されており、旧河道7は田川に沿ってそのすぐ東側に流路を取っていることから、いずれも比較的新しい河川跡と推測される。旧河道6・7の分岐点付近では広範囲に湿地が認められ、旧河道5･6の間の北半には河川氾濫原が残るが、いつ頃のものかは不明である。これら以外は河川の影響が少ない場所で、基本層序に基づく段丘面である。しかし、旧河道6･7に挟まれた部分では旧表土層（3･4層）が認められず、ローム層土にはにぶい黄褐色のシルト（細分可）が堆積しており、他の場所とは異なった層序を示す。

遺構は疎密の差があるものの、調査範囲のほぼ全域で確認されている。全く遺構が認められなかったのは、河川氾濫原と旧河道6・7の分岐点付近の湿地、旧河道7の右岸（南西部分）に限られる。確認された遺構には掘立柱建物跡・竪穴住居跡・材木列・溝跡・土壙・遺物包含層などがあり、確認面やその上層からは縄文土器・土師器・須恵器・近世陶磁器・瓦・塼・鉄製品・石器などが出土している。なお、古代の遺構は旧表土層よりも上部から掘り込まれているが、明確に認識できるのはローム層上面である。

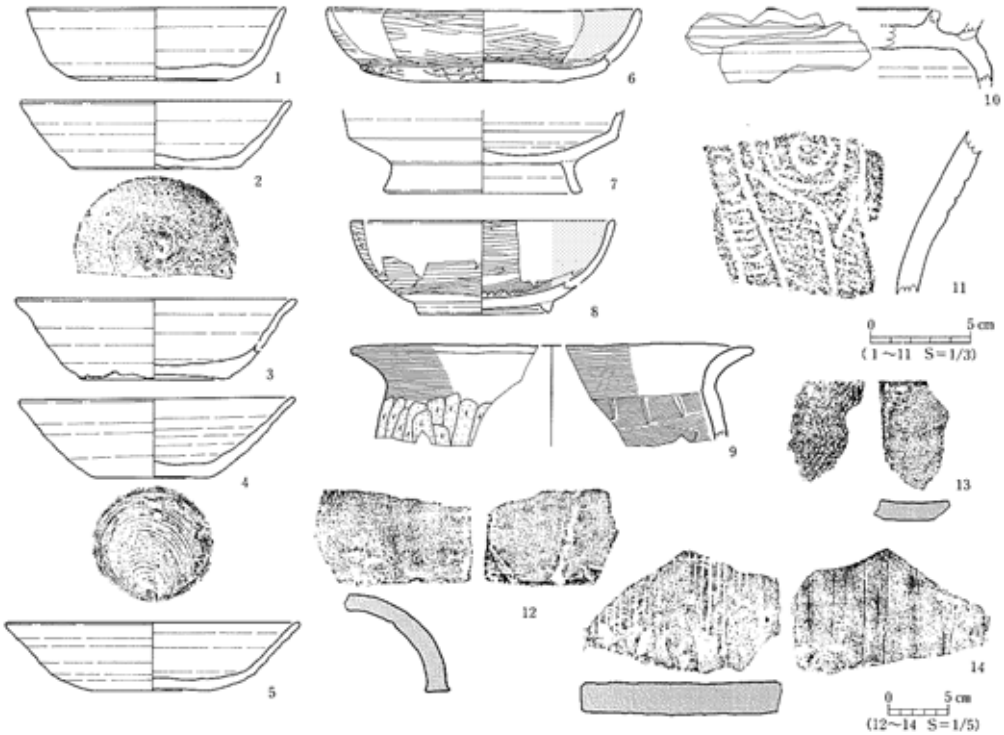
遺構の状況をみると、第2図のスクリーントーンで示したように遺構の密度の濃い範囲が段丘上を東西に横切る形で帯状に2列認められる。この範囲では建物跡や住居跡などが集中して検出されており、遺物の出土量も多い。なかでも、C・D地点では5m程の間隔で平行して東西・南北方向へ延びる溝跡が確認されており、道路跡となる可能性がある。また、E地点では灰白色火山灰が上位に堆積する溝跡によって区画されていたとみられる大型の建物群、F地点では東西もしくは南北に延びる数条の材木列が検出されている。さらに、B地点では遺物包含層も確認されている。

出土遺物の大半は8世紀後半から9世紀を中心とした奈良・平安時代のものとみられ、大部分の遺構の年代もほぼ同時期の範疇に納まるものと考えられる。この他、A地点では古墳時代前～中期の土師器坏、G地点では近世陶磁器片、H地点では縄文時代中期の深鉢の破片が少量ながら出土しており、同時期の遺構の存在も予想される。図示できる遺物については第3図に示した。

3．遺跡の広がりと性格について（第1・2図）

岩見壇・壇の越・片吹の3遺跡は、これまで個別の遺跡として認識されていた。しかし今回の調査結果から、これらの遺跡を含む鳥嶋･鳥屋ヶ崎地区の河岸段丘上には途切れること無くほぼ同時期の遺構が展開することが判明した。よって、少なくとも第1図にスクリーントーンで示した範囲に広がる1つの遺跡(壇の越遺跡)として捉えることができると思われる。

遺跡の性格については、本遺跡が賀美郡衙の推定地である東山遺跡の南面に展開する同時期の遺跡であることや、大型の建物群が存在すること、墨書土器や瓦が採集されていることなどから考えると、東山遺跡に関連する大規模な集落の可能性が強い。また、遺構の集中する範囲が段丘上を東西に横切



No.	器種	トレンチ番号	調整	口径	底径	器高	残存率
1	須恵器坏	77	外面：ロクロナデ→体下部～底部に回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ	(13.0)	7.6	3.9	1/3
2	須恵器坏	72	外面：ロクロナデ→ヘラ切り→ナデ　内面：ロクロナデ　内外面に火ダスキ	(13.6)	8.4	3.7	1/2
3	須恵器坏	60	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	(14.2)	7.5	4.4	2/3
4	須恵器坏	81	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ　灰白色	13.9	6.0	4.3	2/3
5	須恵器坏	82	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	(14.8)	6.0	3.7	1/3
6	土師器坏	349	外面：体下端に沈み凸，頂1/3上～ヘラ1ボキ　頂2/3下ヘラケズリ　内面：体下端に膨み凸，ヘラミガキ→黒色処理	(15.9)	－	4.0	1/2
7	須恵器横瓶	66	外面：ロクロナデ→体下部～底部に回転ヘラケズリ→高台貼付後ロクロナデ　内面：ロクロナデ　底部にヘラ書き「＋」　内面に火ダスキ	－	9.4	－	1/4
8	土師器底白椀	71	外面：ロクロナデ→体下部～底部に回転ヘラケズリ→ヘラミガキ→高台貼付後ロクロナデ　内面：ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理，体下部に幅広の放射状ミガキ	(13.3)	7.0	－	1/2
9	土師器甕	41	外面：口ヨコナデ　体ヘラケズリ　内面：口ヨコナデ　体ヘラナデ	(20.3)	－	－	口縁部1/4
No.	器種	トレンチ番号	特徴				
10	円面硯	349	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　内面に自然釉				
11	縄文土器深鉢	299	渦巻文　地文は縦位に回転施文された LR 縄文　大木8b式				
12	丸　瓦	72	凸面：ナデ　凹面：布目				
13	平　瓦	49	凸面：格子叩き→ナデ　凹面：布目				
14	塼	99	A面：平行叩き？→ナデ　B面：ナデ				

第３図　トレンチ出土遺物

る形で帯状に 2 列認められる状況は、当時の陸奥・出羽を結ぶ連絡路がこの周辺を通っていたとする説（村上：1931、宮崎町：1973 など）を検討する上で注目される。

引　用　文　献

辻　秀人ほか（1995）:「大塚森（夷森）古墳」　『平成 7 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
藤村博之　　（1996）:『米泉館跡』　宮崎町文化財調査報告書第 5 集
宮城県多賀城跡調査研究所（1987）:『東山遺跡』　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 12 冊
宮城県多賀城跡調査研究所（1988）:『東山遺跡』　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 13 冊
宮 崎 町　　（1973）:『宮崎町史』
村山貞之助　（1931）:「色麻柵について（上）」　『仙台郷土研究』昭和 6 年 9 月号
森　貢喜　　（1980）:『早風遺跡発掘調査報告書』　宮崎町文化財調査報告書第 3 集

彦右エ門橋窯跡（ひこうえもんばしかまあと）

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境 153
第Ⅱ章　発掘調査の成果 155
　1　調査の方法と経過 155
　2　発見された遺構と遺物 155
写真図版 ..... **エラー！ ブックマークが定義されていません。**

調　査　要　項

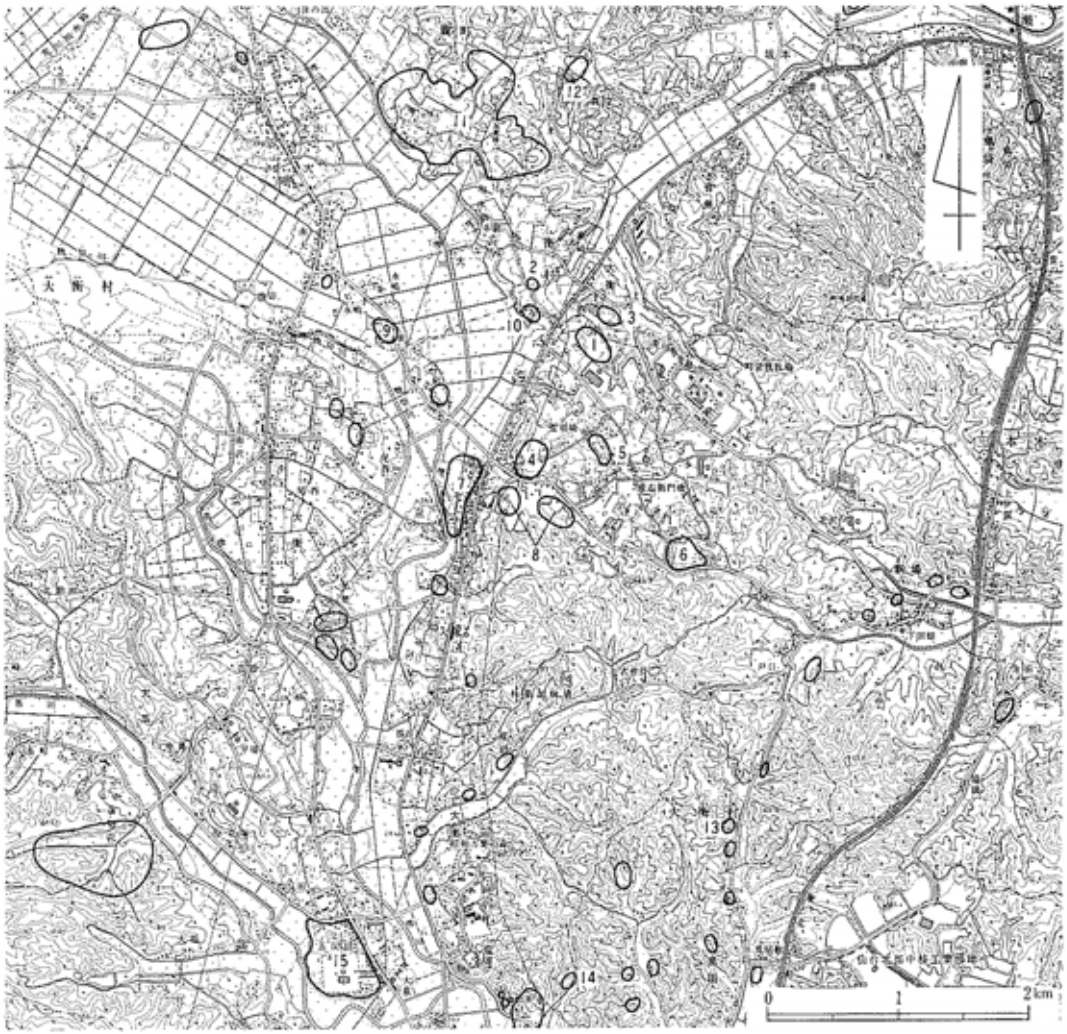
遺跡名：彦右エ門橋窯跡（ひこうえもんばしかまあと）
　　宮城県遺跡地名表登載番号：26010
遺跡記号：ＫＯ
遺跡所在地：黒川郡大衡村駒場字彦右エ門橋
調査主体：大衡村教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調査期間：1996 年（平成 8 年）5 月 20 日
調査面積：約 220 ㎡
調査員：加藤道男・古川一明・佐藤憲幸
調査協力：宮城県大衡村、宮城県仙台農林事務所、松川土木

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

彦右エ門橋窯跡は黒川郡大衡村駒場字彦右エ門橋に所在し、大衡村役場から北約５㎞に位置している（第１図）。遺跡周辺は、西の船形山麓から東の鹿島台に延びる大松沢丘陵と埋川の堆積作用によって形成された谷底平野からなる。大松沢丘陵は埋川によって東西に二分される形となっており、本窯跡は東丘陵部の西縁部に立地している。

彦右エ門橋窯跡周辺には各時代の遺跡が多数存在している。ここではそれらの中でも本窯跡と関連する古代の遺跡、特に窯跡を中心に述べることとする。

須恵器や瓦の窯跡は本窯跡周辺に数多く認められる。北西約２㎞の色麻町日の出山窯跡群は陸奥国



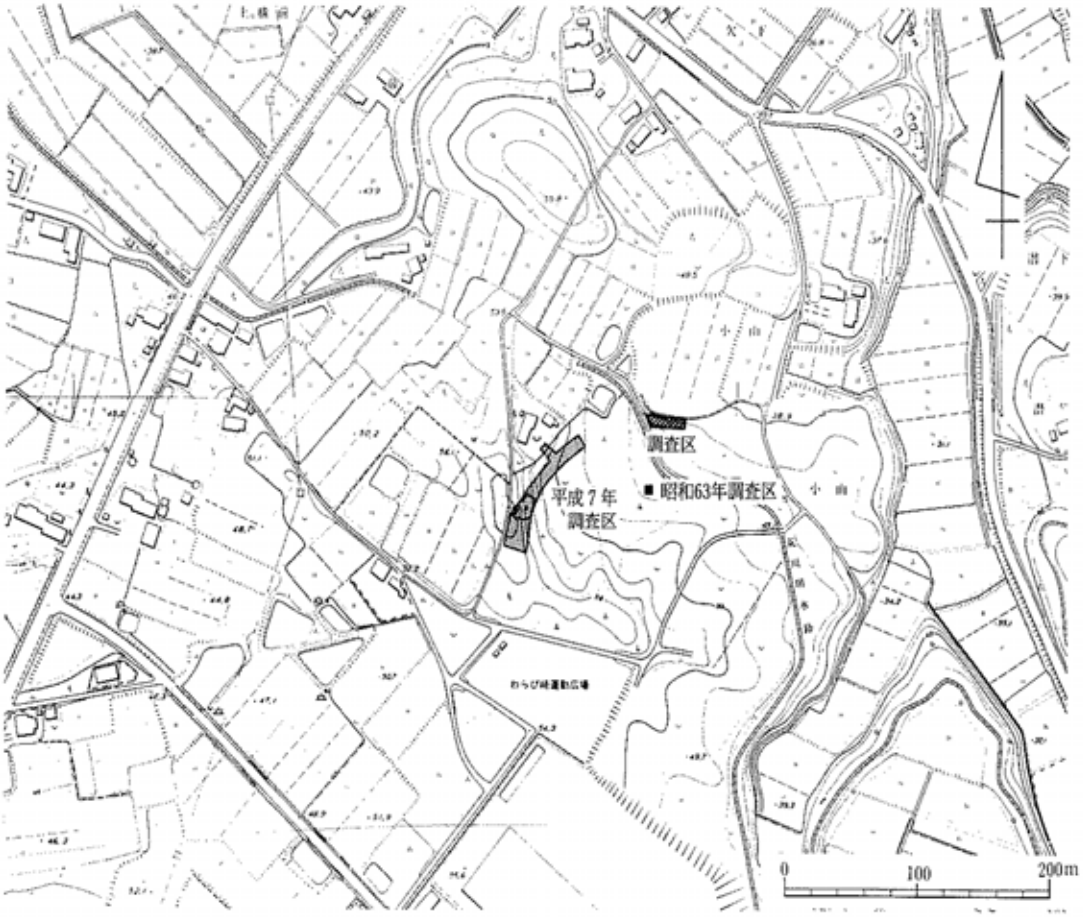
№	遺跡名	種別	出土遺物	時期	№	遺跡名	種別	出土遺物	時期
1	彦右エ門橋窯跡	窯跡	須恵器・土師器	８世紀後半～９世紀初頭	9	兵嶋遺跡	窯跡・集落跡	須恵器・土師器・瓦	８世紀後半～９世紀初頭
2	横田窯跡	窯跡	須恵器・土師器	８世紀後半～９世紀初頭	10	吹付Ｂ遺跡	集落跡	須恵器・土師器	８世紀後半～９世紀初頭
3	吹付窯跡	窯跡	須恵器・瓦	８世紀後半～９世紀初頭	11	日の出山窯跡群	窯跡群	須恵器・土師器・瓦	８世紀前半
4	富刈場窯跡Ａ地点	窯跡	須恵器・土師器	８世紀中頃～９世紀後半	12	斎田野山窯跡	窯跡	須恵器・土師器	奈良・平安時代
5	富刈場窯跡Ｂ地点	窯跡	須恵器	９世紀後半	13	梅木遺跡	集落跡	須恵器・土師器	平安時代
6	富刈場窯跡Ｃ地点	窯跡	須恵器		14	寺沢遺跡	集落跡	須恵器・土師器	奈良・平安時代
7	河原窯跡	窯跡・集落跡	須恵器・土師器	９世紀後半	15	亀岡遺跡	集落跡	須恵器・土師器・金属製品	９世紀初頭
8	待井沢窯跡	窯跡	須恵器	９世紀後半					

第１図　遺跡の位置と周辺の古代の遺跡

府多賀城の創建期の瓦を生産した遺跡として広く知られており、範囲が東西１㎞以上、南北500mに及ぶ8世紀前半を中心とする窯跡群で、これまでにＡ～Ｆの6地点が確認されている。また本窯跡を含む大衡村大衡から駒場にかけての地域には古代の窯跡が分布しており、「大衡窯跡群」と総称されている。大衡窯跡群では、現在まで大衡村横前・吹付・彦右エ門橋・萱刈場Ａ・Ｂ・Ｃ地点・待井沢・河原と色麻町長嶋の9地点で窯跡が確認され、8世紀中頃から9世紀後半にかけて須恵器（一部瓦）を継続的に生産した窯跡群であることが明らかにされている（村田：1988）。このうち萱刈場窯跡Ａ地点で発掘調査が行われており、8世紀中頃の地下式窖窯が3基発見されている（村田：1995Ａ）。

彦右エ門橋窯跡は以前から多量の須恵器が採取されており、発掘調査は昭和63年度と平成7年度に行われている（真山：1989、高橋：1996）。平成7年度の調査では土壙4基が確認され、8世紀後半～9世紀初頭頃の須恵器が出土している。

その他の遺跡としては、南約5㎞の大衡村亀岡遺跡で掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土器焼成遺構が発見され、須恵器、円面硯、銅製巡方などが出土している。年代は9世紀初頭頃に位置付けられている（村田：1995Ｂ）。北西約6㎞の上新田遺跡では竪穴住居跡や土器焼成遺構が発見されており、年代は9世紀初頭頃に位置付けられている（小井川：1981）。



第2図　調査区位置図

第Ⅱ章　発掘調査の成果

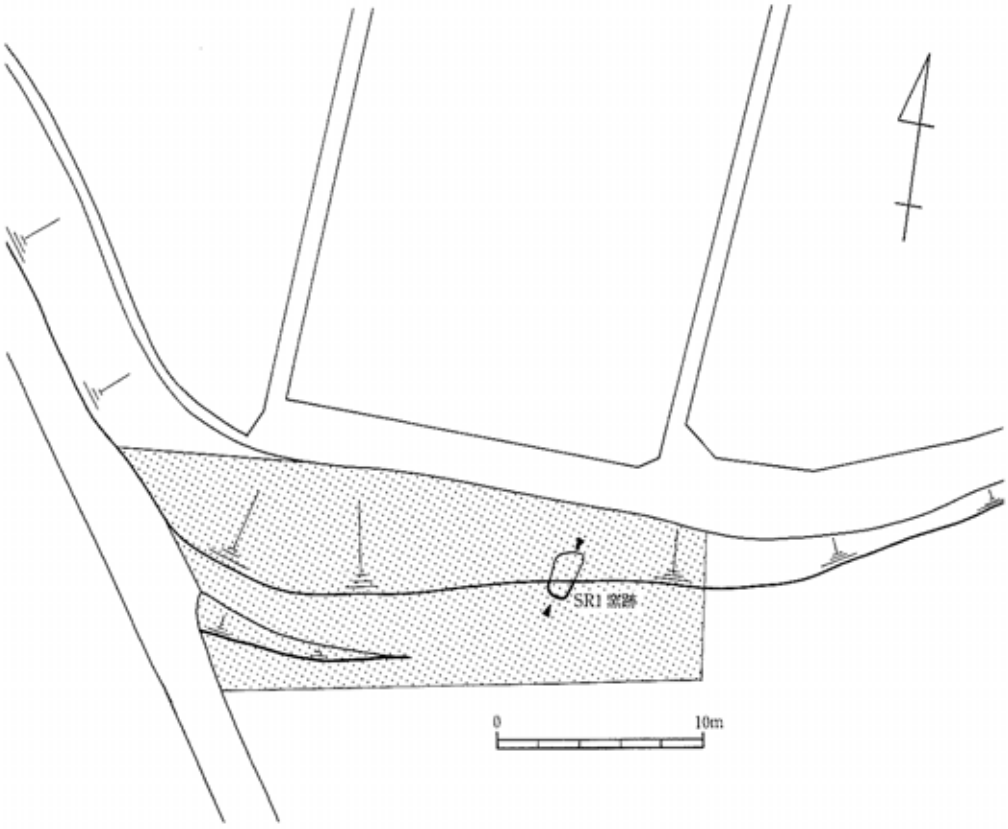
1　調査の方法と経過

今回の調査は、開拓地整備事業の開拓道路改良工事に係るものである（第 2 図)。平成 7 年度に本遺跡を南北に横切る道路部分約1100㎡を対象として約200㎡の事前調査を行った。その後、工事に際し、平成 7 年度調査区の約 60m北東側の北斜面で新たに窯跡が発見されたため、この部分の事前調査を行うこととした。調査面積は約 220 ㎡である。

発掘調査は表土・黒ボク土を除去し、地山面（にぶい黄橙色土）で精査を行い、窯跡 1 基を検出した。調査の状況に応じて、遺構の平面図・断面図の作成、カラースライド・白黒の写真撮影を行った。

2　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、窯跡 1 基のみである（第 3 図)。窯跡からは須恵器坏・蓋・甕・壷が出土しており、遺物量は整理用コンテナで約 1 箱ある。また、窯跡発見の際、発見者である色麻町

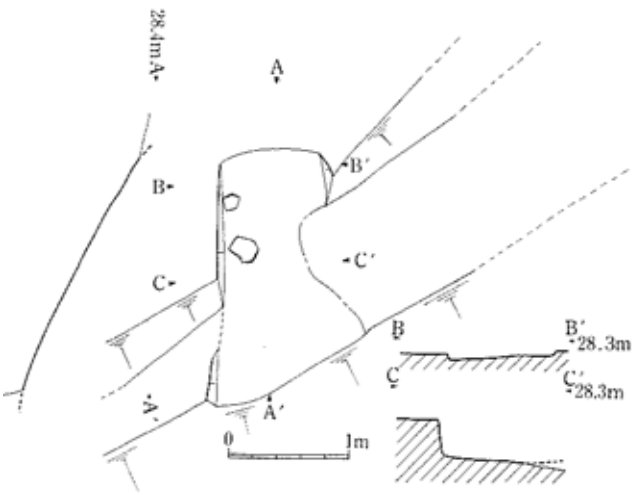


第 3 図　調査区全体図

在住の藤原二郎氏により整理用コンテナで約 0. 5 箱の遺物が採集されている（第 5 図 2・3・7、第 6 図 11・14・15、第 7 図 1〜3)。

【ＳＲ1 窯跡】（第 4 図）

調査区ほぼ中央の北斜面に位置する。焼成部の先端のみが調査区にかかっており、燃焼部・前庭部は調査区外に延びている。崩落や削平により窯壁がほとんど残存していないため、窯構造の詳細は不明であるが、天井部の崩落土にはスサ入り粘土が認められるなど、半地下式窯の可能性が考えられる。



第 4 図　1 号窯跡

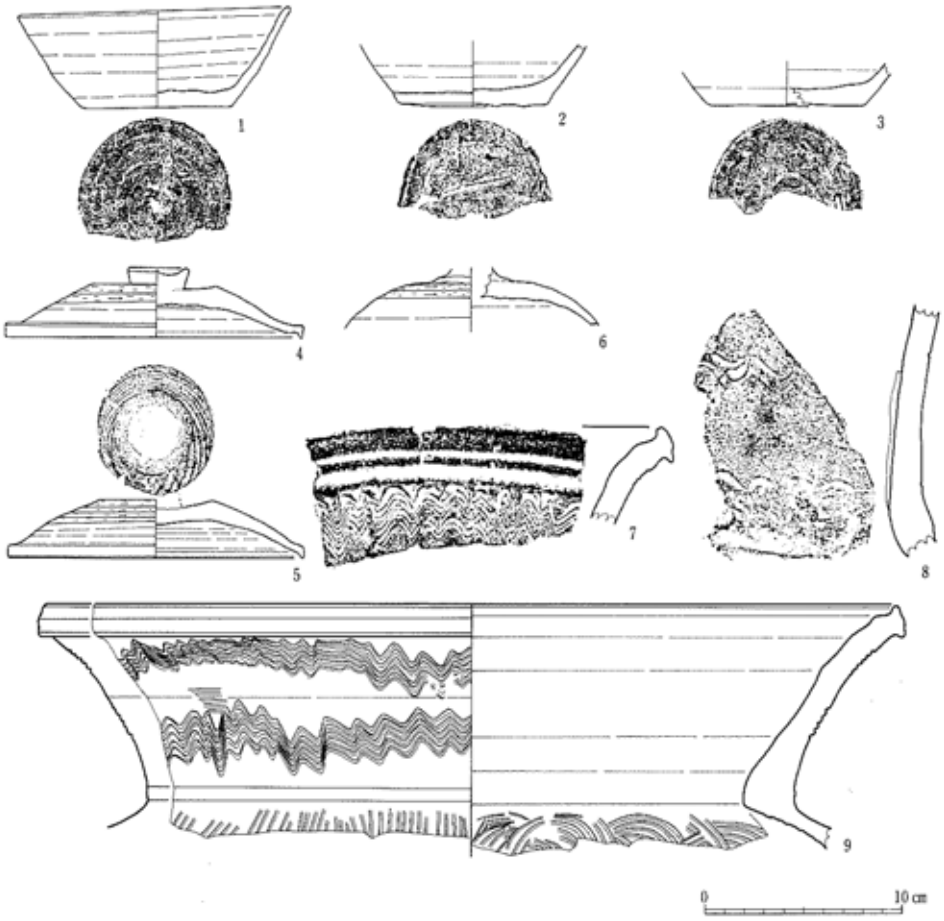
［焼成部］平面形は斜面下方にいくにしたがって幅広になっており、胴張り形を呈していたものと考えられる。奥壁は残存していないものの、地山が受熱により赤色に変化しており、その状況から直線的で両端が角張った形態を呈していたと推定される。床面は単調な斜面で、床面土には焼成品や焼き台に転用された須恵器が残存していたが、これらの多くは天井部の崩落や斜面上方からの滑落により、窯詰めの原位置を保っていないものであった。

床面・側壁とも地山の黄褐色土からなる。表面は還元状態であるが、床面は硬化しておらず脆弱で、壁面は硬化しているものの脆く崩れやすい状態で、壁の基底部をわずかに残し、大半が崩落している。

［出土遺物］須恵器坏・蓋・甕・壷が出土している。坏はヘラ切り無調整で、底部から直線的に外傾して立ち上がっている。また、底部にヘラ書きされたものもある（第 5 図 2・3)。蓋は天井部が丸みを持つもの（第 5 図 6）と平坦なもの（第 5 図 4・5）とがあり、後者の天井部には回転糸切り痕跡が認められる。甕は焼き台として転用された体部破片が多く、全体の器形を知り得るものはない。外面調整はすべて平行タタキで、更にハケメや櫛描波状文が施されるものがある（第 6 図 11・13・14)。また、波状にヘラ書きされたものもみられる（第 6 図 11)。内面のオサエには円弧状（第 6 図 10)、同心円状（第 6 図 14)、平行（第 6 図 12・15)、羽状（第 6 図 13・14）とがあり、ハケメ調整されるものも認められる（第 6 図 11)。特に第 6 図 14 には同心円状と羽状のオサエとが共に認められる。第 5 図 7〜9 は口縁部から頸部にかけての破片で頸部には 2 段の櫛描波状文が認められる。口縁端部は上・下端を軽く引き出して口縁帯をつくり出している。壷は体部の小破片のため図示できなかった。

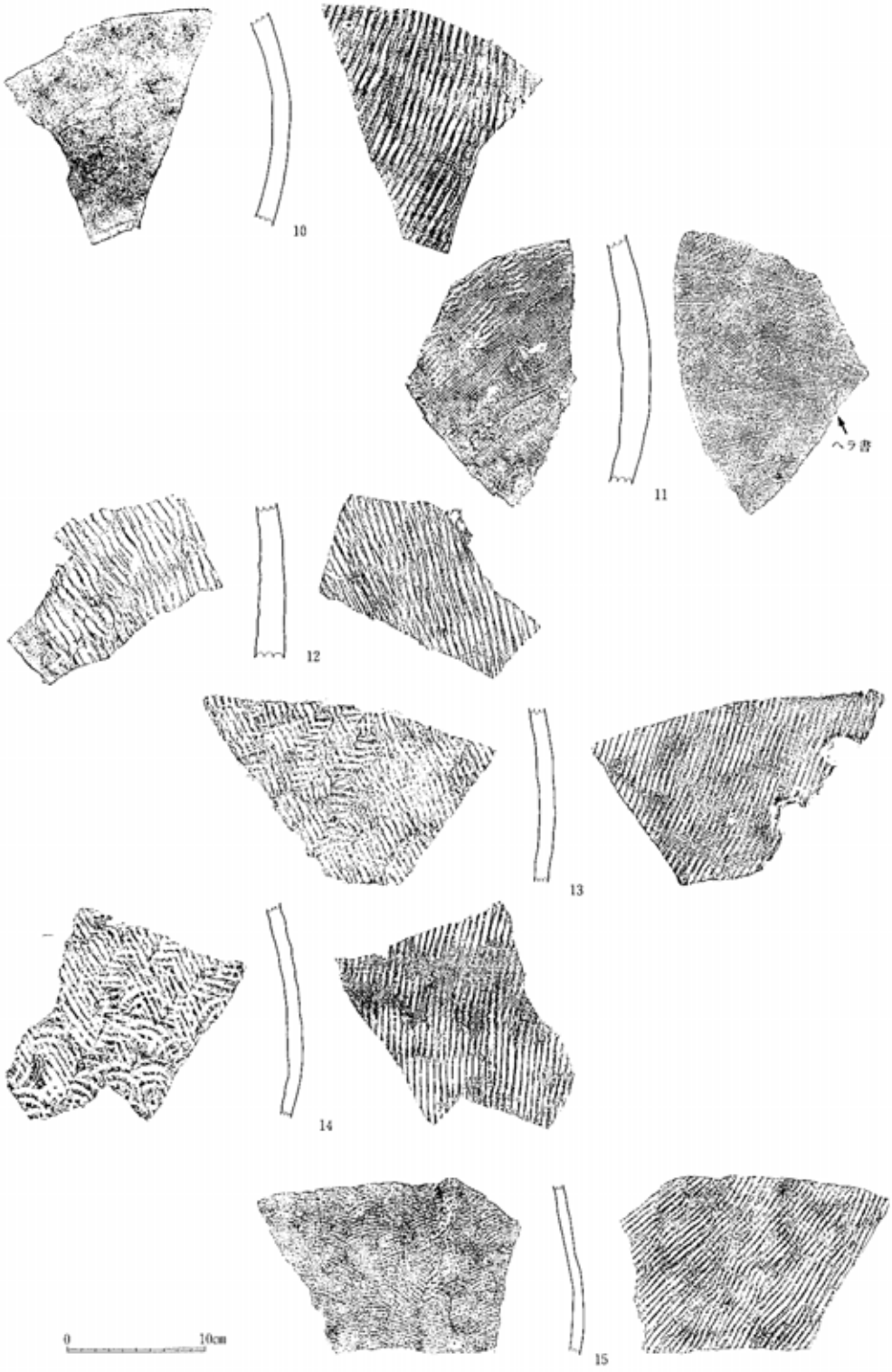
［年代について］

今回出土した須恵器と平成 7 年度に出土したＳK1 土壙出土土器（高橋：1996）とを比較してみると、甕には口縁部形態、頸部の波状文の有無など細部に相違は認められるものの、坏・蓋については蓋のつまみの形態に違いが認められる以外は法量・器形・調整ともにほぼ同様の特徴を有している。よって、ＳR1 窯跡出土土器の年代は 8 世紀後半から 9 世紀初頭頃としたＳK1 出土土器の年代と大きく隔たらないものと考えられる。但し、甕の頸部に施されている櫛描波状文は若干のくずれはある



No	種　類	層　位	特　徴	口径	底径	器高	残存	備　考	写真図版	登録番号
1	須恵器・坏	床　面	内外：ロクロナデ　底面：ヘラ切り	13.8	7.5	4.4	2/3		1	2
2	須恵器・坏	確認面	内外：ロクロナデ　底面：ヘラ切り	－	7.4	－	－	底部にヘラ書き「－」		14
3	須恵器・坏	確認面	内外：ロクロナデ　底面：ヘラ切り	－	7.6	－	－	底部にヘラ書き「－」?		13
4	須恵器・蓋	床　面	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ	15.1	－	3.1	1/2弱	天井部に回転糸切り痕	4	9
5	須恵器・蓋	床　面	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ	－	－	－	－	天井部に回転糸切り痕	5	12
6	須恵器・蓋	床　面	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ	－	－	－	1/4			10
7	須恵器・甕	確認面	外：ロクロナデ→櫛描波状文　内：ロクロナデ	－	－	－	－	№3と同一個体か?		20
8	須恵器・甕	床　面	外：ロクロナデ→櫛描波状文　内：ロクロナデ	－	－	－	－			8
9	須恵器・甕	床　面	(体) 外：平行タタキメ　内：同心円状オサエメ (頸) 外：ロクロナデ→櫛描波状文　内：ロクロナデ	(43.4)	－	－	－		6	11
10	須恵器・甕	床　面	外：平行タタキメ　内：円弧状オサエメ	－	－	－	－			7
11	須恵器・甕	床　面	外：平行タタキメ→ハケメ　内：平行オサエメ→ハケメ	－	－	－	－	外面に波状のヘラ書き		6
12	須恵器・甕	床　面	外：平行タタキメ　内：平行オサエメ	－	－	－	－			5
13	須恵器・甕	確認面	外：平行タタキメ→櫛描波状文　内：羽状オサエメ	－	－	－	－			19
14	須恵器・甕	確認面	外：平行タタキメ→ハケメ・櫛描波状文 内：羽状オサエメ→同心円状オサエメ	－	－	－	－			18
15	須恵器・甕	確認面	外：平行タタキメ　内：平行オサエメ	－	－	－	－			16

第5図　SR1 竈跡出土遺物（1）

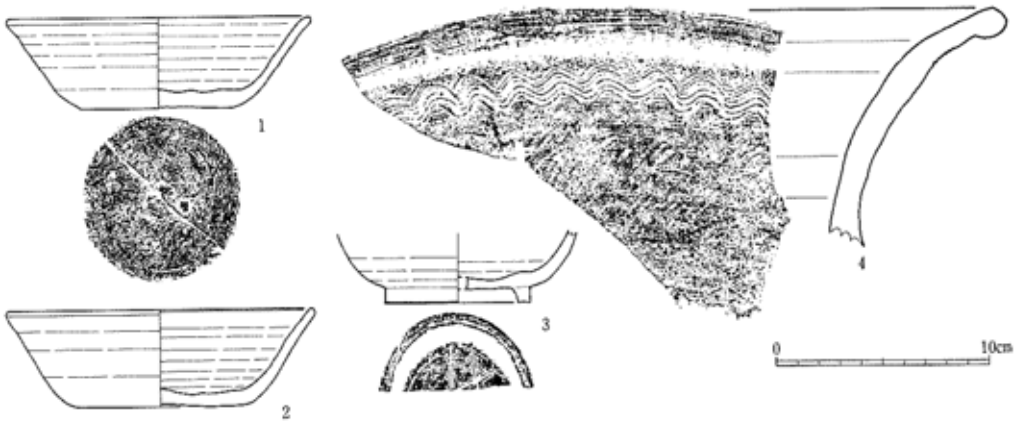


第6図　SR1 竈跡出土遺物（2）

ものの、比較的丁寧に施されており、こうした類例は、近隣の窯跡では色麻町日ノ出山窯跡（古川：1993）や松山町次橋窯跡（東北学院大学考古学研究部：1983）など 8 世紀代の窯跡に求められるものである。したがってＳＲ1 出土土器については、概ね 9 世紀後半頃に位置づけられるものと考えられる。

［その他の出土遺物］（第 7 図）

1・2 は平成 7 年度の調査区付近から採集した須恵器坏である。底部はヘラ切り後、軽くナデ調整されており、底部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がっている。3・4 はＳＲ1 窯跡の東側で確認された浅い窪みの堆積土から出土したものである。3 は高台坏で底部にはヘラ書きが認められる。4 は甕の口縁部から頸部にかけての破片で 1 段の櫛描波状文と、その下には第 6 図 11 と同様の波状のヘラ書きが認められる。口縁端部は上・下端を引き出さず丸く仕上げており、上面は面取りされている。



No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	備考	写真図版	登録番号
1	須恵器・坏	表土	内外：ロクロナデ　底面：ヘラ切り→ナデ	(14.4)	(7.2)	4	1/2		3	22
2	須恵器・坏	表土	内外：ロクロナデ　底面：ヘラ切り→ナデ	(14.6)	(8.2)	4.3	1/3		2	21
3	須恵器・高台坏	堆積層	内外：ロクロナデ	－	(6.8)	—	－	底部にヘラ書き		23
4	須恵器・甕	堆積層	外：ロクロナデ→櫛描波状文　内：ロクロナデ	－	－	－	－	波状文の下に波状のヘラ書		3

第 7 図　その他の出土遺物

引用・参考文献

真山　悟　（1989）：「彦右エ門橋窯跡」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 131 集

岡田茂弘他（1970）：『日の出山窯跡群』宮城県文化財調査報告書第 22 集

小井川和夫（1981）：「上新田遺跡」『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第 78 集

高橋栄一　（1996）：「彦右エ門橋窯跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 169 集

東北学院大学考古学研究部（1983）：『宮城県志田群松山町次橋窯跡発掘調査報告』松山町文化財調査報告書第 1 集

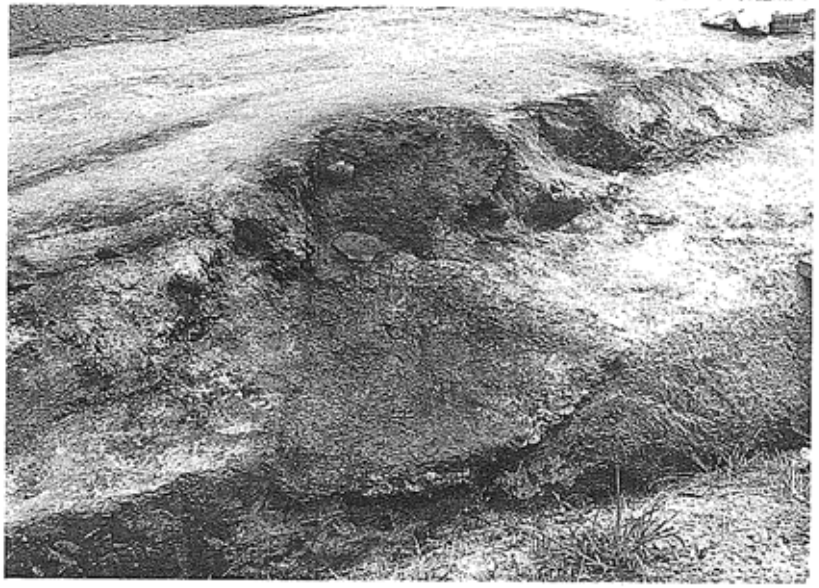
古川一明　（1993）：『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第 1 集

村田晃一　（1988）：「宮城県黒川郡大衡窯跡群」『研究紀要』第 14 巻　東北歴史資料館

（1995Ａ）：「萱刈場窯跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 166 集

（1995Ｂ）：『亀岡遺跡』大衡村文化財調査報告書第 1 集

調査区全景



SR1 窯跡

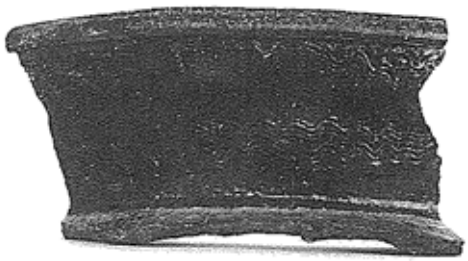
1

2

3

4

5



6

写真図版

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふなばいせきほか
書名	舟場遺跡ほか
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	173集
編著者名	佐久間光平、菅原弘樹、天野順陽、三好秀樹、佐藤憲幸
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8の1　TEL 022-211-3685
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふなばいせき 舟場遺跡	みやぎけんしだぐんさんぼんぎまち 宮城県志田郡三本木町 にいぬまあざふなば　わかみや 新沼字舟場、若宮ほか	044628	33023	38度 31分 30秒	140度 54分 50秒	19960415 ～ 19960930	5,100	ほ場整備に伴う事前調査
わだいいせき 上代遺跡	みやぎけんふるかわしおおさき 宮城県古川市大崎 あざふしみようがい　ふしみわだい 字伏見要害、伏見上代ほか	042048	27142	38度 35分 57秒	140度 53分 58秒	19961022 ～ 19961206	900	ほ場整備に伴う事前調査
しもくさこじょうあと 下草古城跡	みやぎけんくろかわぐんたいわまち 宮城県黒川郡大和町 つるすしもくさ 鶴巣下草	044211	23068	38度 25分	140度 52分 40秒	19960415 ～ 19960621	1,900	ほ場整備に伴う事前調査
だんのこしいせき 壇の越遺跡ほか	みやぎけんかみぐんみやざきまち 宮城県加美郡宮崎町 とりしま　とやがさき 鳥嶋、鳥屋ケ崎	044431	30039	38度 35分 33秒	140度 48分 20秒	19961113 ～ 19961211	12,000	ほ場整備に伴う確認調査
ひこえもんばしかまあと 彦右エ門橋窯跡	みやぎけんくろかわぐんおおひらむら 宮城県黒川郡大衡村 こまばあざひこえもんばし 駒場字彦右エ門橋	044245	26010	38度 29分 56秒	141度 53分 41秒	19960520	220	道路改良に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
舟場遺跡	包含地	古墳		土師器	
	集落跡	奈良・平安時代	竪穴遺構3軒、井戸跡1基、土壙12基、溝跡7条、小溝状遺構220条、自然流路4条	土師器、須恵器	
	屋敷跡	中世	掘立柱建物跡19棟、柱穴列2列、井戸跡29基、土壙28基、池状遺構1基、溝跡84条	陶磁器、木簡、木製品(曲物)、石製品(板碑・茶臼・石鉢・砥石)、金属製品(小刀・銭貨)、動植物遺体	「閤城寺」跡？
上代遺跡	水田跡	平安時代	基礎地業1、水田跡3面、水路跡2条、溝跡5条、河川跡4条	土師器、須恵器、瓦、木製品(樽・櫛)、弥生土器、植物遺体	玉造郡家隣接地における新田開発(9世紀前半頃)
下草古城跡	城　跡	中近世	掘立柱建物跡55棟、塀跡3列、井戸跡32基、溝跡39条、土壙31基、焼け面跡17基、道路跡2条、整地層2枚	陶磁器、木製品、土製品、石製品、金属製品	下草古城の城下町(17世紀初頭頃)
壇の越遺跡ほか	集落跡	奈良・平安時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、材木列跡、土壙、溝跡、包含層	土師器、須恵器、瓦、鉄製品	賀美郡家の隣接地
彦右エ門橋窯跡	窯　跡	奈良時代	窯跡1基	須恵器	